

Oracle® Application Server

Standard Edition One インストールおよび
スタート・ガイド

10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (32 Bit)

部品番号 : B19167-01

2005 年 8 月

Oracle Application Server Standard Edition One インストール・ガイド、10g リリース 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (32 Bit)

部品番号 : B19167-01

原本名 : Oracle Application Server Installing and Getting Started with Standard Edition One 10g Release 2 (10.1.2) for Microsoft Windows (32 Bit)

原本部品番号 : B15881-02

原著者 : Kevin Y. Hwang

Copyright © 2004, 2005 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (**redundancy**)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Retek は米国 **Oracle Corporation** およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性ががあります。

このプログラムは、第三者の **Web** サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の **Web** サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	xi
対象読者	xi
ドキュメントのアクセシビリティについて	xi
このマニュアルの構成	xi
関連ドキュメント	xiv
表記規則	xiv
サポートおよびサービス	xiv
第 I 部 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール	
1 製品およびインストールの概要	
1.1 製品の概要	1-1
1.2 新機能	1-1
1.3 インストールの概要	1-2
1.3.1 Oracle J2EE and Web Services	1-3
1.3.2 OracleAS Portal	1-3
1.3.2.1 新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal	1-3
1.3.2.2 既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal	1-3
1.3.3 基本インストールと拡張インストール	1-4
1.3.4 一般的なインストール手順	1-5
1.4 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあること	1-5
1.4.1 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所	1-6
1.4.2 Oracle ホーム・ディレクトリ	1-6
1.4.2.1 Oracle ホームの名前の指定	1-6
1.4.2.2 空ではない Oracle ホームへのインストール	1-7
1.4.3 Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名	1-7
1.4.4 ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限	1-8
1.4.5 グローバル・データベース名とそのパスワードの制限	1-9
1.4.6 言語およびロケールの設定	1-10
1.4.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の追加の言語のインストール	1-10
1.4.6.2 Portal ユーザー・インタフェース・メッセージのインストール	1-10
1.4.6.3 Oracle Unicode フォントのインストール要件	1-11
1.4.7 ポート	1-11
1.4.7.1 エフェメラル・ポートの概要	1-11
1.4.7.2 ポートが使用中かどうかの確認	1-13

1.4.7.3	ポート番号のリストの取得	1-13
1.4.7.4	デフォルトのポート番号の使用	1-13
1.4.7.5	カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）	1-14
1.4.8	ポート 1521 がすでに使用されている場合	1-17
1.4.8.1	ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合	1-17
1.4.8.2	ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合	1-19
1.4.9	インストーラがファイルを書き込む場所	1-20

2 システムおよびインストール要件

2.1	システム要件	2-1
2.1.1	メモリ使用量を削減するためのヒント	2-4
2.2	Windows システム・ファイル (wsf.exe)	2-5
2.3	オペレーティング・システム・ユーザー	2-5
2.4	環境変数	2-6
2.4.1	環境変数の設定方法	2-6
2.4.2	環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID	2-7
2.4.3	環境変数 PATH	2-7
2.4.4	環境変数 TNS_ADMIN	2-7
2.4.5	環境変数 TEMP	2-7
2.5	%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル	2-7
2.5.1	デフォルトの Identity Management レルムの場所	2-7
2.5.2	Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名	2-8
2.6	ネットワーク関連項目	2-8
2.6.1	DHCP 接続のコンピュータへのインストール	2-9
2.6.1.1	DHCP 接続のコンピュータで Oracle Application Server Standard Edition One を 実行する場合の制限	2-9
2.6.1.2	プライマリ・ネットワーク・アダプタの決定方法	2-9
2.6.2	複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール	2-10
2.6.3	複数の別名を持つコンピュータへのインストール	2-10
2.6.4	ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール	2-11
2.6.5	後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール	2-11
2.6.6	ループバック・アダプタのインストール	2-12
2.6.6.1	コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認 ..	2-12
2.6.6.2	Windows 2000 へのループバック・アダプタのインストール	2-13
2.6.6.3	Windows 2003 または Windows XP へのループバック・アダプタのインストール	2-16
2.6.6.4	ホスト名の確認	2-17
2.6.6.5	Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの 削除	2-18
2.6.7	CD-ROM または DVD-ROM からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからの インストール	2-18
2.6.8	リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール	2-20
2.6.9	リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール	2-21
2.6.9.1	ハード・ドライブからのインストール	2-22
2.6.9.2	リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからの インストール	2-22
2.7	インストーラにより実行される前提条件チェック	2-22

3 J2EE and Web Services のインストール

3.1	J2EE and Web Services コンポーネント	3-1
-----	-------------------------------------	-----

3.2	J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加	3-1
3.3	J2EE and Web Services のインストール	3-2
3.3.1	インストール前の作業	3-2
3.3.2	基本インストールの概要	3-2
3.3.3	拡張インストールの概要	3-3
3.4	次の作業	3-4

4 OracleAS Portal のインストール

4.1	OracleAS Portal コンポーネント	4-1
4.2	Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用	4-1
4.3	OracleAS Portal のインストール	4-2
4.3.1	インストール前の作業	4-2
4.3.2	基本インストールの概要	4-2
4.3.3	新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要	4-3
4.3.4	既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要	4-4
4.4	次の作業	4-5

5 インストール画面

5.1	Oracle Universal Installer の起動	5-1
5.2	「ようこそ」画面	5-2
5.2.1	J2EE and Web Services の基本インストールの実行	5-3
5.2.2	Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールの実行	5-3
5.3	インストールする製品の選択	5-4
5.4	言語の選択	5-5
5.5	ポート構成オプションの指定	5-6
5.6	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 (J2EE and Web Services のインストールの場合)	5-7
5.7	Internet Directory のネームスペースの指定	5-8
5.8	データベース構成オプションの指定	5-9
5.9	データベース・スキーマのパスワードの指定	5-11
5.10	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 (OracleAS Portal のインストールの場合)	5-12
5.11	リポジトリの指定	5-13
5.12	サマリー	5-14
5.13	インストール (進捗状況)	5-15
5.14	Configuration Assistant	5-15
5.15	インストールの終了	5-17
5.15.1	インストール後の作業	5-17
5.15.2	トラブルシューティング情報	5-18

6 インストール後の作業

6.1	インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態	6-1
6.2	インストール後のコンピュータの再起動	6-1
6.3	Oracle Application Server コンポーネントのパスワード	6-2
6.4	バックアップおよびリカバリ	6-2
6.5	SSL の有効化	6-2
6.6	地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ	6-2
6.7	インストール後のコンポーネントの構成	6-2

6.7.1	mod_osso の構成 (Oracle Delegated Administration Services に必要)	6-2
6.8	インストール後の作業を必要とするコンポーネント	6-4
6.9	次の作業	6-4

第 II 部 Oracle Application Server Standard Edition One で始めに行うこと

7 始めに行うこと

7.1	環境変数の設定	7-1
7.2	Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用方法	7-2
7.2.1	「ようこそ」ページへのアクセス	7-2
7.2.2	「ようこそ」ページの内容	7-3
7.3	ポート番号の確認	7-3
7.4	コンポーネントの管理で始めに行うこと	7-4
7.4.1	Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)	7-4
7.4.2	Distributed Configuration Management (DCM)	7-4
7.4.3	Oracle HTTP Server	7-5
7.4.4	Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)	7-5
7.5	ias_admin パスワードの変更	7-5
7.5.1	Application Server Control コンソールの使用	7-5
7.5.2	emctl コマンドライン・ツールの使用	7-5

8 管理ツールの使用

8.1	Oracle Enterprise Manager Application Server Control の理解	8-1
8.2	Application Server Control コンソールの理解	8-1
8.2.1	Application Server Control ホーム・ページ	8-2
8.2.2	Application Server Control コンソールの表示	8-2
8.2.3	Application Server ホーム・ページの使用	8-3
8.2.4	Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用	8-4
8.2.5	Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用	8-5
8.2.6	Application Server Control コンソールによる監視および診断	8-5
8.2.6.1	アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認	8-6
8.2.6.2	一般情報およびリソース使用状況の確認	8-7
8.2.6.3	アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認	8-7
8.2.6.4	アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視	8-7
8.2.6.5	J2EE アプリケーションの監視	8-7
8.3	基礎となるソフトウェア・テクノロジーの理解	8-8
8.3.1	使用可能なテクノロジー	8-8
8.3.2	コマンドライン・ツール	8-8
8.4	Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理	8-9

9 起動と停止

9.1	すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止	9-1
9.2	OracleAS Infrastructure の起動と停止	9-2
9.2.1	「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の起動	9-2
9.2.2	OracleAS Infrastructure の手動での起動	9-3
9.2.2.1	OracleAS Metadata Repository の手動での起動	9-3
9.2.2.2	Oracle Identity Management の手動での起動	9-3

9.2.3	「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の停止	9-4
9.2.4	OracleAS Infrastructure の手動での停止	9-4
9.2.4.1	OracleAS Metadata Repository の手動での停止	9-4
9.2.4.2	Oracle Identity Management の手動での停止	9-4
9.3	中間層の起動と停止	9-5
9.3.1	「スタート」メニューからの中間層の起動	9-5
9.3.2	中間層の手動での起動	9-6
9.3.3	「スタート」メニューからの中間層の停止	9-6
9.3.4	中間層の手動での停止	9-6
9.4	コンポーネントの起動と停止	9-6
9.4.1	opmnctl による起動と停止	9-7
9.4.2	Application Server Control コンソールによる起動と停止	9-7
9.5	コンポーネントの有効化と無効化	9-7
9.6	Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止	9-8
9.6.1	Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動	9-8
9.6.2	Oracle Application Server 環境の停止	9-8

10 HTTP ポートおよびリスナー設定の変更

10.1	中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更	10-1
10.2	Identity Management での HTTP (SSO) ポートの変更	10-4

11 ログ・ファイルの表示

11.1	Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要	11-1
11.1.1	ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解	11-1
11.1.1.1	コンポーネント別のログ・ファイル・メッセージ	11-1
11.1.2	ログ・リポジトリの使用	11-2
11.1.3	コンポーネント・ロギング・オプションの構成	11-2
11.2	Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示	11-3
11.2.1	ログ・ファイルのリスト	11-3
11.2.2	選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト	11-4
11.2.3	Oracle Application Server Standard Edition One のコンポーネント・ページからの ログ・ファイルのリスト	11-4
11.2.4	ログ・ファイルの拡張検索の使用	11-5
11.2.5	ログ・ファイルの詳細および内容の表示	11-5
11.3	Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用	11-5
11.3.1	Log Loader の起動と停止	11-6
11.3.2	Log Loader の有効化と無効化	11-6
11.3.3	ログ構成の更新	11-6
11.3.4	Log Loader プロパティの設定	11-6
11.3.5	Log Loader 診断メッセージの理解	11-7

12 ネットワーク構成の変更

12.1	ネットワーク構成を変更する手順の概要	12-1
12.2	ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更	12-1
12.2.1	J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更	12-2
12.2.2	メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更	12-5

12.2.3	ホスト名またはドメイン名の変更に関するその他の設定	12-7
12.2.3.1	chgiphost のログ・レベルの設定	12-7
12.2.3.2	chgiphost スクリプトのカスタマイズ	12-8
12.2.3.3	Windows 2000 から Windows 2003 へのアップグレード後のホスト名の変更	12-8
12.2.3.4	ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ	12-9
12.3	ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行	12-9
12.3.1	ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (静的 IP アドレス)	12-10
12.3.2	ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (DHCP)	12-10
12.3.3	ネットワークに接続された状態から接続されていない状態への移行 (静的 IP アドレス)	12-10
12.3.4	ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (DHCP)	12-10
12.4	静的 IP アドレスと DHCP 間の変更	12-10
12.4.1	静的 IP アドレスから DHCP への変更	12-11
12.4.2	DHCP から静的 IP アドレスへの変更	12-11

13 SSL の有効化

13.1	インフラストラクチャにおける SSL の通信経路	13-1
13.2	インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク	13-3
13.2.1	OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services の SSL の構成	13-3
13.2.2	Oracle Internet Directory の SSL の構成	13-3
13.2.3	Identity Management データベースの SSL の構成	13-3
13.3	中間層の SSL 通信経路	13-3
13.4	中間層の一般的な SSL 構成タスク	13-4
13.4.1	OracleAS Web Cache における SSL の有効化	13-4
13.4.2	Oracle HTTP Server における SSL の有効化	13-5
13.4.3	OracleAS Portal における SSL の有効化	13-5
13.4.4	Application Server Control の SSL の構成	13-5

14 バックアップおよびリカバリ

14.1	バックアップおよびリカバリ・サービスの比較	14-1
14.2	Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ	14-2
14.2.1	バックアップ / リカバリ設定の構成	14-2
14.2.2	バックアップの実行	14-3
14.2.3	リカバリの実行	14-4
14.3	OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ	14-4
14.3.1	OracleAS Backup and Recovery Tool の取得	14-5
14.3.2	OracleAS Backup and Recovery Tool の構成	14-6
14.3.3	使用している構成ファイル用の OracleAS Backup and Recovery Tool のカスタマイズ	14-8
14.3.4	OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要	14-9
14.3.4.1	ツールを実行するための前提条件	14-9
14.3.4.2	構文	14-9
14.3.4.3	使用例	14-18
14.4	バックアップの手順	14-20
14.4.1	ブロック変更トラッキングの有効化	14-20
14.4.2	ARCHIVELOG モードの有効化	14-20
14.4.3	現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成	14-22

14.4.4	インスタンスのバックアップの実行	14-23
14.4.5	環境全体のバックアップの実行	14-23
14.4.6	構成およびメタデータのバックアップ	14-27

第 III 部 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール

15 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要および要件

15.1	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要	15-2
15.1.1	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の入手先	15-2
15.1.2	各種データベース記憶域のサポート	15-2
15.1.3	ローカルおよびリモート・データベースのサポート	15-2
15.2	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行手順	15-2
15.3	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件	15-3
15.4	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール	15-4
15.5	データベースの要件	15-5
15.5.1	前提条件チェック・ツールの実行	15-6
15.5.2	サポートされるデータベースのバージョン	15-7
15.5.3	Standard Edition のデータベースに関する注意	15-7
15.5.4	スワップ領域の要件	15-7
15.5.5	SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域	15-7
15.5.6	OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域	15-7
15.5.7	SSL モードでの Oracle Internet Directory への登録に必要なパッチ	15-7
15.5.8	Windows XP 上の OracleAS Metadata Repository はサポート対象外	15-8
15.5.9	初期化パラメータ	15-8
15.5.10	データベース・オプション	15-11
15.5.11	PL/SQL パッケージ	15-11
15.5.12	DBMS_LDAP パッケージ	15-12
15.5.13	必須のナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ)	15-13
15.5.14	パスワード・ファイル認証	15-14
15.5.15	スキーマおよび表領域	15-16
15.5.15.1	スキーマおよび表領域のリスト	15-16
15.5.15.2	すでに使用されているスキーマ名	15-17
15.5.15.3	すでに使用されている表領域名	15-17
15.5.15.4	表領域のサイズ	15-18
15.5.16	Oracle Internet Directory への登録	15-20
15.6	Oracle Internet Directory の要件	15-21
15.7	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動	15-22
15.8	次に読む必要のある項	15-23

16 OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード

16.1	ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール	16-1
16.2	RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール	16-3
16.3	Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール	16-6
16.4	ログ・ファイル内の無視できるエラー	16-7

16.4.1	SP2-0332 エラー	16-7
16.4.2	SP2-0606 エラー	16-8
16.5	インストール後の手順	16-8
16.5.1	sqlnet.ora ファイルの更新	16-8
16.5.2	データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー	16-8
16.5.3	DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定	16-9
16.5.4	Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成	16-9
16.6	ロードに失敗した場合の対処方法	16-9
16.7	OracleAS Metadata Repository の同一データベースへの再インストール	16-10

17 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

17.1	Oracle Internet Directory への登録	17-1
17.2	登録後の手順	17-3
17.3	登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法	17-3

第 IV 部 付録

A 削除と再インストール

A.1	Oracle Application Server Standard Edition One の削除	A-1
A.2	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の削除	A-3
A.3	構成解除ツール	A-3
A.3.1	構成解除ツールの実行	A-4
A.3.2	構成解除ツールによる中間層の構成解除	A-4
A.3.3	構成解除ツールによる OracleAS Infrastructure の構成解除	A-5
A.4	ログ・ファイル内の無視できるエラー	A-5
A.5	手動による全 Oracle 製品の削除	A-6
A.6	再インストール	A-7
A.7	トラブルシューティング	A-7

B OracleAS Metadata Repository の登録取り消しと削除

B.1	Oracle Internet Directory データベースの登録取り消し	B-1
B.2	中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認	B-2
B.3	ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取り消しおよび削除	B-2
B.4	OracleAS Metadata Repository の削除	B-5
B.5	OracleAS Metadata Repository の登録取り消し	B-7
B.6	cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除	B-10
B.7	OracleAS Metadata Repository オブジェクトの削除	B-12
B.8	登録取り消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ	B-13

C デフォルトのポート番号

C.1	デフォルトのポート番号の割当て方	C-1
C.2	デフォルトのポート番号	C-1

D 開放が必要なファイアウォールのポート

E OracleAS Metadata Repository スキーマ

E.1	OracleAS Metadata Repository スキーマの説明	E-1
-----	--	-----

E.1.1	Oracle Identity Management スキーマ	E-1
E.1.2	製品メタデータ・スキーマ	E-2
E.1.3	管理スキーマ	E-3
E.2	OracleAS Metadata Repository のスキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル	E-3

F Java Access Bridge のインストール

F.1	概要	F-1
F.2	JRE 1.4.2 用のセットアップ	F-1
F.3	インストールされている Oracle コンポーネント用のセットアップ	F-1
F.3.1	Java Access Bridge のインストール	F-2
F.3.2	Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成	F-2
F.3.2.1	Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 での構成方法	F-2

G Configuration Assistant

G.1	Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant	G-1
G.2	Configuration Assistant に関するトラブルシューティング	G-5

H トラブルシューティング

H.1	ログ・ファイル	H-1
H.2	トラブルシューティング全般についてのヒント	H-1
H.3	インストールに関する問題とその解決策	H-2
H.3.1	ログ・ファイルの場所	H-2
H.3.2	「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される	H-3
H.3.3	インストーラが表示されない	H-3
H.3.4	失敗したインストールをクリーン・アップできない	H-3
H.3.5	cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した	H-3
H.3.6	cn=orcladmin アカウントがロックされた	H-4
H.3.7	ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない	H-4
H.3.8	ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない	H-4
H.3.9	Configuration Assistant の失敗（全般）	H-5
H.3.10	OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗した	H-5
H.3.11	Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した	H-5
H.3.12	Database Configuration Assistant (DBCA) の無視できるエラー・メッセージ	H-6
H.3.13	Application Server Control Configuration Assistant が失敗した	H-6
H.3.14	OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server が失敗した	H-8
H.3.15	OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance が失敗した	H-8
H.4	削除に関する問題とその解決策	H-8
H.4.1	現在使用されていないパートナー・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている	H-8
H.4.2	削除したインスタンスの名前を再使用できない	H-9
H.4.3	データベース名を再使用できない	H-10
H.4.4	削除を行う際、無視できるエラー・メッセージ	H-11
H.4.5	削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス	H-11
H.5	バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策	H-11
H.5.1	リストアに一度失敗した後のリストア	H-11

H.6	Configuration Assistant に関する問題とその解決策	H-11
H.6.1	全般についてのヒント	H-11
H.6.2	Configuration Assistant の結果コード	H-13
H.7	OracleAS Portal に関する問題とその解決策	H-13
H.7.1	OracleAS Portal のパスワードの取得	H-13
H.7.2	SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない	H-13
H.8	OracleAS Metadata Repository Creation Assistant に関する問題とその解決策	H-14
H.8.1	データベースに接続できない	H-14
H.8.2	SYS ユーザーとして接続できない	H-15
H.8.3	手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の 登録を取り消す	H-15
H.8.4	ORA-01403: データが見つかりません	H-17
H.9	データベースに関する問題とその解決策	H-17
H.10	その他の情報が必要な場合	H-18

索引

はじめに

Standard Edition One インストールおよびスタート・ガイドでは、インストールとシステムの要件、**Oracle Universal Installer** の新機能、インストールに影響する **Oracle Application Server** の概念、インストール手順、管理、構成、管理のヒントおよびトラブルシューティングのヒントについて説明します。

対象読者

このマニュアルは、ユーザーおよびグループの作成、ユーザーのグループへの追加といった、ある一定レベルのシステム管理作業を問題なく行えるユーザーを対象としています。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。**HTML** 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、**Oracle Accessibility Program** の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次の章と付録で構成されています。

第 I 部「Oracle Application Server Standard Edition One のインストール」

第 I 部では、Oracle Application Server Standard Edition One の概要と、インストール手順およびインストール後の手順について説明します。

第 1 章「製品およびインストールの概要」

この章では、インストール手順の概要と、Oracle Application Server Standard Edition One およびそのコンポーネントの概要を示します。

第2章「システムおよびインストール要件」

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールおよび実行に関する要件を示します。

第3章「J2EE and Web Services のインストール」

この章では、J2EE and Web Services によって提供されるサービスをインストールする方法について説明します。

第4章「OracleAS Portal のインストール」

この章では、OracleAS Portal によって提供されるサービスをインストールする方法について説明します。

第5章「インストール画面」

この章では、Oracle Universal Installer の各画面例を示し、それらについて説明します。

第6章「インストール後の作業」

この章では、インストール後に実行する必要がある設定作業について説明します。

第II部「Oracle Application Server Standard Edition One で始めに行うこと」

第II部では、正常にインストールされた Oracle Application Server Standard Edition One の使用および構成を開始する方法について説明します。

第7章「始めに行うこと」

この章では、インストールした Oracle Application Server Standard Edition One の使用を開始するための作業を示します。

第8章「管理ツールの使用」

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One を管理するための Web ベースおよびコマンドラインの管理ツールについて説明します。

第9章「起動と停止」

この章では、環境、インスタンス、コンポーネントおよびクラスタを起動および停止する方法について説明します。

第10章「HTTP ポートおよびリスナー設定の変更」

この章では、ポート番号を表示および変更する方法について説明します。

第11章「ログ・ファイルの表示」

この章では、ログ・ファイルを表示および管理する方法について説明します。

第12章「ネットワーク構成の変更」

この章では、ホストのホスト名および IP アドレスを変更する方法について説明します。

第13章「SSL の有効化」

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One で Secure Sockets Layer (SSL) を有効にする方法について説明します。

第14章「バックアップおよびリカバリ」

この章では、Backup and Recovery Tool をインストール、構成および使用する方法について説明します。

第III部「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール」

第III部では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の概要およびインストールに関する情報を示します。

第 15 章「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要および要件」

この章では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の概要を示し、このツールを使用するためのシステム要件について概説します。

第 16 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード」

この章では、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストール（ロード）する方法について説明します。

第 17 章「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録」

この章では、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する方法について説明します。

第 IV 部「付録」

第 IV 部は付録です。

付録 A「削除と再インストール」

この付録では、Oracle Application Server Standard Edition One をコンピュータから削除する方法について説明します。

付録 B「OracleAS Metadata Repository の登録取り消しと削除」

この付録では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除し、OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録を解除する方法について説明します。

付録 C「デフォルトのポート番号」

この付録では、インストーラによって各コンポーネントに割り当てられるポート番号を示します。

付録 D「開放が必要なファイアウォールのポート」

この付録では、ファイアウォールが存在する環境に Oracle Application Server をインストールして実行する場合に、ファイアウォールで開く必要のあるポートを示します。

付録 E「OracleAS Metadata Repository スキーマ」

この付録では、OracleAS Metadata Repository のスキーマについて説明し、その表領域およびデータファイルを示します。

付録 F「Java Access Bridge のインストール」

この付録では、Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge は、Windows プラットフォームで実行される Java ベースのインタフェース（インストーラなど）を読み上げるアシスティブ・テクノロジーを使用可能にするための仕組みです。

付録 G「Configuration Assistant」

この付録では、インストーラによって実行される Configuration Assistant について説明します。

付録 H「トラブルシューティング」

この付録では、インストール中および削除中に発生する可能性のある問題の解決方法について説明します。

関連ドキュメント

追加情報は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 概要』
- 『Oracle Instant Portal スタート・ガイド』
- 『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』
- 『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』

表記規則

このマニュアルでは、次の表記規則を使用します。

表記規則	意味
太字	本文中の太字は、画面上のオブジェクト（ボタンやフィールドなど）を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントのテキストは、ファイル名、コマンドまたは構成ファイルの内容を示します。
<i>固定幅フォントのイタリック</i>	固定幅フォントのイタリックは、適切な値で置き換える必要のあるプレースホルダ・テキストを示します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目が任意選択であることを示します。
...	省略記号は、直接関係しない情報が省略されていることを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

オラクル社カスタマ・サポート・センター

オラクル製品サポートの購入方法、およびオラクル社カスタマ・サポート・センターへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、**Oracle Corporation** が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

第I部

Oracle Application Server Standard Edition One のインストール

第I部では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールについて説明します。内容は次のとおりです。

- 第1章「製品およびインストールの概要」
- 第2章「システムおよびインストール要件」
- 第3章「J2EE and Web Services のインストール」
- 第4章「OracleAS Portal のインストール」
- 第5章「インストール画面」
- 第6章「インストール後の作業」

製品およびインストールの概要

Oracle Application Server Standard Edition One は、強力な統合製品です。その機能を最大限活用するには、このマニュアルをよく読んで製品を正しく使用する必要があります。

この章の内容は次のとおりです。

- [製品の概要](#)
- [新機能](#)
- [インストールの概要](#)
- [Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要があること](#)

1.1 製品の概要

Oracle Application Server Standard Edition One は、中小企業や大規模な組織内の部門別ユーザーのニーズに対応する、完全な Web インフラストラクチャを提供します。

Oracle Application Server Standard Edition One には、次のものが含まれています。

- Web サイトを構築する PHP および Perl スクリプティング機能を備えた Web サーバー
- Java/J2EE で Web サイトおよびインターネット・アプリケーションを構築する J2EE 準拠のアプリケーション・サーバーおよび開発ツール
- グループ内で情報を迅速かつ安全に共有するために簡単に使用できる Enterprise Portal

1.2 新機能

Oracle Application Server Standard Edition One には、次の新機能があります。

- **Oracle Instant Portal (Q42)**

このコンポーネントには、WYSIWYG コンテンツ編集、事前構築済のホーム・ページや部門別ページ、セキュアな公開およびコンテンツ共有用のカスタマイズ可能なコンテンツ・ポートレットといった特徴があります。操作を選択してクリックすると、ページの内容およびスタイルの管理や、ページ管理を実行できます。

関連項目：『Oracle Instant Portal スタート・ガイド』を参照してください。

- **基本 (ワンクリック) インストール**

新しい基本インストールでは、単一のインストール画面でいくつかの質問に回答することによって、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできます。構成は自動的に行われます。また、起動およびシャットダウンに必要なスクリプトも、インストール中に自動的に作成されます。

関連項目： 1.3.3 項「基本インストールと拡張インストール」を参照してください。

- ワンクリック起動および停止機能

追加された新しい機能によって、「スタート」メニューから、**Oracle Enterprise Manager Application Server Control**、中間層インスタンス、インフラストラクチャ・インスタンス、およびすべての **Oracle Application Server Standard Edition One** コンポーネントの起動と停止を実行できます。

また、管理者は、**Application Server Control** コンソールからコンポーネントの起動、停止、有効化または無効化を行うこともできます。

注意： ワンクリック起動および停止機能では、次のプロセスを起動または停止できません。

DB 制御

Cluster Ready Services (CRS)

Cluster Synchronization Services (CSS)

これらのプロセスは、ワンクリック起動および停止機能の実行後、手動で停止または起動する必要があります。

関連項目： 第 9 章「起動と停止」を参照してください。

- **Application Server Control** コンソールの「バックアップ/リカバリ」タブ
「バックアップ/リカバリ」タブをクリックすることによって、**Application Server Control** コンソールから構成情報およびデータを直接バックアップできます。

関連項目： 第 14 章「バックアップおよびリカバリ」を参照してください。

- **Oracle Directory Integration and Provisioning (DIP)** アシスタント (loaddata コマンド) を介した **Oracle Internet Directory** ユーザーのバルク・ロード

関連項目： 『Oracle Application Server Standard Edition One リリース・ノート』を参照してください。

- ユーザーにパスワードを再設定する機能を提供する **OracleAS Single Sign-On** ログイン

1.3 インストールの概要

Oracle Application Server Standard Edition One で使用できるサービスには、次の 2 つの主要なグループがあります。

- **Oracle J2EE and Web Services**
- **OracleAS Portal**

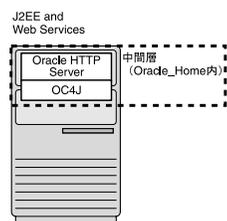
これらのサービスのグループはいずれも、**Oracle Application Server** 中間層と呼ばれます。**OracleAS Portal** をインストールすると、**Oracle Application Server Infrastructure** もインストールされます。**OracleAS Portal** 中間層では、**OracleAS Infrastructure** が機能している必要があります。**J2EE and Web Services** 中間層では必要ありません。

以降の項では、これらのサービスの詳細を説明します。

1.3.1 Oracle J2EE and Web Services

Oracle J2EE and Web Services には、Oracle HTTP Server や Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) などのアプリケーションの配置に使用するコンポーネントが含まれています。図 1-1 に、インストール構成を示します。

図 1-1 J2EE and Web Services の構成



1.3.2 OracleAS Portal

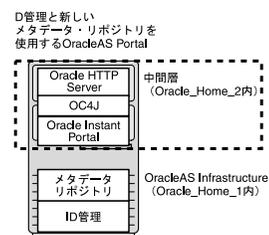
OracleAS Portal サービスには、J2EE and Web Services のすべてのコンポーネントに加えて、Identity Management と Metadata Repository を使用する Oracle Instant Portal が含まれています。製品に含まれる Metadata Repository を使用するかわりに、既存のデータベースを Metadata Repository として使用することもできます。

使用可能ないずれかの OracleAS Portal サービスをインストールするように選択すると、Oracle Universal Installer は連鎖インストールを実行します。この場合、まず該当するすべてのインフラストラクチャ・コンポーネントがインストールおよび構成され、次に中間層コンポーネントがインストールおよび構成されます。

1.3.2.1 新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal

新しいメタデータ・リポジトリを使用する場合、図 1-2 に示すように、Oracle Application Server Standard Edition One Infrastructure (Identity Management および Metadata Repository) がインストールされます。

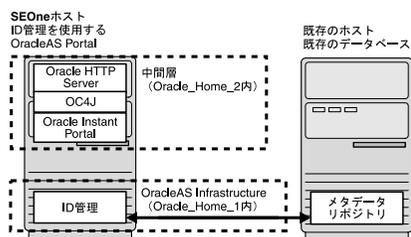
図 1-2 新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の構成



1.3.2.2 既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal

既存のメタデータ・リポジトリを使用する場合、図 1-3 に示すように、Oracle Application Server Standard Edition One Infrastructure (Identity Management のみ) がインストールされます。

図 1-3 既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の構成



この構成では、OracleAS Portal および Identity Management をインストールする前に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、既存のデータベースに Metadata Repository を作成する必要があります。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は別の CD に収録されています。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の詳細は、第 III 部を参照してください。

1.3.3 基本インストールと拡張インストール

表 1-1 に、各インストール・タイプで使用可能なサービスのグループの概要を示します。

表 1-1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール・タイプ

インストール・タイプ	使用可能なサービス
基本	<ul style="list-style-type: none"> J2EE and Web Services Identity Management と新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal
拡張	<ul style="list-style-type: none"> J2EE and Web Services Identity Management と新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal Identity Management と既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal

基本（ワンクリック）インストールでは、ユーザーは最初のインストール画面で質問に回答するように求められます。その後は、ユーザーとの対話なしに製品のインストールに進みます。インストーラは、情報が取得できない場所では適切なデフォルト値または算出値を使用して、コンポーネントを構成します。

拡張インストールでは、高度なカスタマイズと柔軟性によって、追加の言語のインストール、ポート構成オプションの指定、Metadata Repository としての既存のデータベースの使用（OracleAS Portal のインストールの場合のみ）、およびデータベース構成（OracleAS Portal のインストールの場合のみ）が可能になります。

表 1-2 に、基本インストールと拡張インストールのカスタマイズ・オプションの相違の概要を示します。

表 1-2 基本インストールと拡張インストールの機能

操作またはオプション	基本	拡張
Oracle ホームの指定	あり	あり ¹
インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	あり	あり
データベース名とパスワードの指定（OracleAS Portal のみ）	あり	あり
追加の言語の選択	なし	あり
ポート構成の指定（自動または手動）	なし	あり

表 1-2 基本インストールと拡張インストールの機能 (続き)

操作またはオプション	基本	拡張
Oracle Internet Directory のネームスペースの指定 (OracleAS Portal のみ)	なし	あり
データベース構成オプションの指定 (OracleAS Portal のみ)	なし	あり
スキーマ・パスワードの指定 (OracleAS Portal のみ)	あり	あり ²
データベースとして使用する既存のリポジトリの指定 (OracleAS Portal のみ)	なし	あり
Configuration Assistant	あり	あり

- ¹ OracleAS Portal のインストールでは、インストール・ディレクトリを指定するように求められます。このディレクトリが Oracle ホーム・ディレクトリの一部になります。詳細は、1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照してください。
- ² 基本インストール画面では、データベース・アカウントと、SYS、SYSTEM、DBSNMP および SYSMAN アカウントで使用されるパスワードを 1 つのみ指定できます。拡張インストールでは、各アカウントに対して同じパスワードを指定することも、異なるパスワードを指定することもできます。

注意： Oracle Application Server Standard Edition One でサポートされるインストール・タイプは、基本インストールと拡張インストールのみです。サイレント・インストールまたは非対話型インストールはサポートされていません。

1.3.4 一般的なインストール手順

Oracle Application Server Standard Edition One のインストール手順は次のとおりです。

- 『Oracle Application Server Standard Edition One リリース・ノート』を確認します。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。
- 第 2 章を読んで、Oracle Application Server Standard Edition One を実行するコンピュータが要件を満たしていることを確認します。この章では、インストーラで自動的に実行されるチェックの概要についても説明します。
- 第 3 章「J2EE and Web Services のインストール」または第 4 章「OracleAS Portal のインストール」を読んで、インストール手順の詳細を理解します。
- 第 6 章「インストール後の作業」を読んで、製品のインストールが正常に完了した直後に実行する必要がある作業について確認します。
- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたら、「ようこそ」ページにアクセスしてデモをいくつか実行し、インストールが成功したことを確認します。

1.4 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあること

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に知っておく必要のあることについて説明します。この章の内容は次のとおりです。

- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所
- Oracle ホーム・ディレクトリ
- Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名
- ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限
- グローバル・データベース名とそのパスワードの制限
- 言語およびロケールの設定
- ポート

- ポート 1521 がすでに使用されている場合
- インストーラがファイルを書き込む場所

1.4.1 Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所

Oracle Application Server Standard Edition One は、単一のコンピュータにインストールする必要があります。

1.4.2 Oracle ホーム・ディレクトリ

インストール中、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするディレクトリのフルパスを入力するように求められます。インストール・タイプに応じて、このディレクトリが Oracle ホーム・ディレクトリになる場合とならない場合があります。

注意：

- インストール・ディレクトリへのパスには空白を使用できません。たとえば、「C:¥Program Files¥oracle」では「Program Files」に空白が含まれているため、このディレクトリにインストールできません。インストーラでは、このパスの入力後にいくつかの画面が進むまで、これがチェックされません。
 - ドライブを割り当てても、別のコンピュータにはインストールできません。別のコンピュータへのインストールは、リモート・コントロール・ソフトウェアを介して実行できます。詳細は、[2.6.9 項「リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール」](#)を参照してください。
-
-

J2EE and Web Services のみをインストールする場合、インストール中に指定したディレクトリのみが作成され、Oracle ホーム・ディレクトリになります。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、次の 2 つの Oracle ホーム・ディレクトリが作成されます。1 つは OracleAS Infrastructure 用、もう 1 つは OracleAS Portal 用です。

- `<user-specified-dir>¥infra`
- `<user-specified-dir>¥portal`

`<user-specified-dir>` 変数は、インストール中に指定するディレクトリです。

ヒント： 使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、各インスタンス（OracleAS Infrastructure および OracleAS Portal）の環境を設定するスクリプトを作成する必要があります。これによって、バイナリが適切な Oracle ホームから実行されるようになります。設定する必要がある環境変数には、ORACLE_HOME や PATH が含まれます。

1.4.2.1 Oracle ホームの名前の指定

各 Oracle ホーム・ディレクトリには、自動的に名前が付けられます。

J2EE and Web Services のみをインストールする場合、Oracle ホームの名前は `oraclean1` になります。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、Oracle ホームの名前は次のようになります。

- `<user-specified-dir>¥infra` ディレクトリ名は `oraclean1` になります。
- `<user-specified-dir>¥portal` ディレクトリ名は `oraclean2` になります。

Oracle Application Server Standard Edition One の一部のコンポーネントは、Windows サービスとして実行されます。インストーラは、これらのサービスに名前を付ける場合、次の書式でサービス名に Oracle ホームの名前を含めます。

```
Oracle<OracleHomeName><ComponentName>
```

たとえば、ORACLE_HOME_NAME が oracleas1 として導出された場合、プロセス管理サービス（コンポーネント名は ProcessManager）の名前は Oracleoracleas1ProcessManager になります。この名前は、ORACLE_HOME_NAME によって異なる場合があります。

中間層（OracleAS Portal など）は OracleAS Infrastructure（OracleAS Metadata Repository など）のサービスに依存しているため、OracleAS Infrastructure のサービスを開始した後に中間層のサービスが開始されます。

1.4.2.2 空ではない Oracle ホームへのインストール

Oracle Application Server Standard Edition One は、いくつかのファイルがすでに含まれているディレクトリにはインストールできません。たとえば、インストールを取り消した場合やインストールに失敗した場合は、ディレクトリをクリーンアップしてから、そのディレクトリに Oracle Application Server Standard Edition One を再インストールする必要があります。また、インストーラはインストールを修復することもできません。空ではないディレクトリのクリーンアップ方法の手順は、[H.3.2 項](#)を参照してください。

1.4.3 Oracle Application Server インスタンスとインスタンス名

J2EE and Web Services のみをインストールする場合、マシン上に 1 つの中間層インスタンスが作成されます。インストール中、このインスタンスの名前を指定するように求められます。Oracle ホームとは異なる名前を指定できます（たとえば、seone というインスタンス名を指定できます）。

使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、マシン上には 2 つのインスタンスが作成されます。1 つは OracleAS Infrastructure 用、もう 1 つは中間層用です。基本インストールを実行する場合は、中間層のインスタンス名のみを指定します。

OracleAS Infrastructure のインスタンス名は自動的に生成されます（詳細は、[5.2 項](#)「[「ようこそ」画面](#)」を参照）。拡張インストールを実行する場合は、OracleAS Infrastructure と中間層（OracleAS Portal）のインスタンス名を個別に指定するように求められます（詳細は、[5.10 項](#)「[インスタンス名と ias_admin パスワードの指定（OracleAS Portal のインストールの場合）](#)」を参照）。

インストール後に、インスタンス名を変更することはできません。

Oracle Application Server では、指定されたインスタンス名にホスト名とドメイン名を追加し、完全なインスタンス名にします。たとえば、c1 という名前のコンピュータにインスタンスをインストールする場合、インスタンスの名前を seone にすると、ドメイン名が mydomain.com であれば、インスタンスのフルネームは seone.c1.mydomain.com になります。

インスタンス名に使用できる文字

インスタンス名には、英数字（A-Z、a-z、0-9）および _（アンダースコア）文字のみを使用できます。

インスタンス名は最大 30 文字です。

Oracle Application Server インスタンス名での制限

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの名前には、コンピュータのホスト名を使用しないでください。

Oracle Application Server でのインスタンス名の使用

インスタンス名が重要なのは、Oracle Application Server Standard Edition One でインスタンスを一意に識別するのに使用されるためです。そのため、使用可能な 2 つの OracleAS Portal サービスのいずれかを拡張インストールする場合、OracleAS Infrastructure インスタンスと OracleAS Portal インスタンスに異なる名前を指定する必要があります。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control (または略して Application Server Control) を使用して Oracle Application Server Standard Edition One を管理する場合、画面にインスタンス名が表示されます。インスタンス名をクリックして、そのインスタンスにインストールされているコンポーネント、コンポーネントの稼働/停止状態、コンポーネントのログ・ファイルなどのインスタンスの詳細を表示できます。Application Server Control は、Oracle Application Server Standard Edition One のためのブラウザベースの管理ツールです。このツールの詳細は、8.1 項または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

また、一部の dcmctl コマンドには、パラメータとしてインスタンス名が必要なものもあります。dcmctl は、Oracle Application Server インスタンスを管理するためのコマンドライン・ツールです。dcmctl の詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

1.4.4 ias_admin ユーザーとそのパスワードの制限

インストーラにより、ias_admin ユーザーのパスワードを指定するように求められます。ias_admin ユーザーは、Oracle Application Server Standard Edition One の管理ユーザーです。

Oracle Application Server Standard Edition One では、最初のインストール画面で指定した ias_admin パスワードが、次の場合にも使用されます。

- Oracle Application Server Standard Edition One を管理するために、Application Server Control コンソールに ias_admin ユーザーとしてログインする場合。
- Oracle Instant Portal を監視および管理するために、Oracle Instant Portal に portal ユーザーとしてログインする場合。
- アプリケーションへのユーザー・アクセスを管理するために、OracleAS Single Sign-On に orcladmin ユーザーとしてログインする場合。

ias_admin パスワードの制限

ias_admin ユーザーのパスワードは、Oracle Internet Directory のパスワード・ポリシーに準拠している必要があります。

- 5 文字以上の英数字を指定します。
- 1 文字以上は数字にします。

Oracle Internet Directory に定義されたパスワード・ポリシーに加え、ias_admin ユーザーのパスワードには次の制限もあります。

- パスワードは 30 文字より短くします。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) およびシャープ記号 (#) のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) またはシャープ記号 (#) から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、OTN (Oracle Technology Network) のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。または、単に予約語のような形式の語の使用を避ける方法もあります。

注意： パスワードを入力する際には、[Caps Lock] キーが適切な状態になっていることを確認します。パスワードでは、大/小文字が区別されます。

Oracle Application Server を管理するために Application Server Control にログインするときには、ias_admin ユーザーとしてログインするため、パスワードを覚えておく必要があります。

パスワードを忘れた場合は、リセットできます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

1.4.5 グローバル・データベース名とそのパスワードの制限

データベースは、そのグローバル・データベース名によって識別されます。グローバル・データベース名は、次の 2 つの部分で構成されます。

database_name.database_domain

例: sales.us.yourcompany.com

この例では、sales がデータベース名、us.yourcompany.com がデータベース・ドメインです。

グローバル・データベース名を指定する際には、次のガイドラインに従ってください。

- データベースの使用目的を反映したデータベース名を選択します (sales など)。データベース名にソフトウェア・バージョンへの参照を含めないでください。
- 分散環境で、このデータベースを他のデータベースと区別できるデータベース・ドメインを選択します。たとえば、us.yourcompany.com および jp.yourcompany.com という 2 つの異なるドメインを選択すると、日本と米国の両方の営業部門が sales というデータベースを持つことができます。
- 指定するデータベース・ドメインは、システムのネットワーク・ドメインと同じである必要はありませんが、必要に応じて同じドメインを指定できます。
- データベース名とデータベース・ドメインの両方に、英数字、アンダースコア (_)、ハイフン (-) およびシャープ記号 (#) を使用できます。
- ピリオドはデータベース・ドメインでのみ使用できます。
- データベース名は最大 8 文字です。
- データベース名は、英数字 (A-Z、0-9) で始める必要があります。
- データベース・ドメインは、ピリオドを含めて最大 128 文字です。

指定した値は、最初のピリオドまでが DB_NAME 初期化パラメータの値になります。最初のピリオドの後ろに指定した値は、DB_DOMAIN 初期化パラメータの値になります。

DB_NAME パラメータの値は、自動的に環境変数 ORACLE_SID にも割り当てられます。この環境変数によって、Oracle データベース・インスタンスの名前が定義されます。

データベース・パスワードの制限

通常、Oracle データベースには、SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP データベース管理アカウント (スキーマ) のパスワードが必要です。Oracle Application Server Standard Edition One の基本インストールの場合、最初のインストール画面で指定したグローバル・データベース・パスワードが、これらのすべてのアカウントで使用されます。

データベース・パスワードの制限は、次のとおりです。

- パスワードは 4 ~ 30 文字で指定します。
- ユーザー名と同じパスワードを指定することはできません。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットを使用します。アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) およびシャープ記号 (#) も使用できます。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。

データベース・パスワードの推奨事項

データベース・パスワードを選択する際のいくつかの推奨事項を次に示します。

- パスワードには、英字、数字および記号をそれぞれ 1 つ以上含めます。

- パスワードには、単純な語やわかりやすい語 (welcome、account、database、user など) を使用しないようにします。

1.4.6 言語およびロケールの設定

基本インストールを実行すると、AL32UTF8 キャラクタ・セットでリポジトリ・データベースが作成され、英語および Oracle Universal Installer を実行しているロケールのメッセージで Oracle Application Server Standard Edition One がインストールされます。追加の言語が必要な場合、拡張インストールを実行して、「言語の選択」画面で必要な言語を選択する必要があります。この画面の詳細は、5.4 項を参照してください。

インストールする追加の言語を選択すると、それらの言語の表示に必要なフォントとともに、選択した言語でメッセージがインストールされます。

1.4.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の追加の言語のインストール

インストール後により多くの言語をサポートする必要性が生じた場合は、Portal Language Assistant ツールを実行して、それらの言語用の翻訳をロードする必要があります。また、OracleAS Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM から中間層ディレクトリに必要なフォント・ファイルをコピーする必要があります。

1.4.6.2 Portal ユーザー・インタフェース・メッセージのインストール

Portal の翻訳済リソース・ファイルは、次のディレクトリにあります。

```
ORACLE_HOME\portal\admin\pls\sql\nlsres\ctl
```

追加の言語をサポートするには、これらのファイルをリポジトリ・データベースにロードする必要があります。

翻訳をロードするには、次のコマンドを使用します (詳細は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』を参照)。

```
ptllang -lang lang_code [-i install_type]
                        [-s portal_schema]
                        [-sp portal_schema_password]
                        [-c portal_db_connect_string]
```

表 1-3 に、このコマンドのオプションの構成パラメータを示します。

表 1-3 ptllang コマンドの構成パラメータ

パラメータ	説明
-lang	インストールする言語の略称。サポートされているすべての略称のリストについては、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の OracleAS Portal の言語および言語の略称に関する表を参照してください。
-i	インストール・タイプ。 このパラメータには typical または custom を設定できます。typical モードでは、スクリプトは自動的に登録済の OracleAS Metadata Repository に接続します。カスタム・データベースの OracleAS Portal スキーマの場合は、custom モードを使用します。 デフォルト: typical
-s	OracleAS Portal スキーマ名。 デフォルト: portal
-sp	OracleAS Portal スキーマ・パスワード。パスワードは OID から取得するか、または SQLPlus を使用して変更できます。 詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

表 1-3 ptllang コマンドの構成パラメータ (続き)

パラメータ	説明
-c	OracleAS Metadata Repository がインストールされているデータベースへの接続文字列。書式は次のとおりです。 DbHostName:DbPortNumber:DbServiceName

ptllang コマンドの例を次に示します。

```
ptllang -lang ja -i custom -s portal -sp welcome1 -c host:1521:orasid
```

1.4.6.3 Oracle Unicode フォントのインストール要件

インストールされるフォントは、インストール中に選択した言語の Application Server Control コンソールおよびヘルプに必要なフォント (Albany フォントの ALBANWTJ.TTF、ALBANWTK.TTF など) のみです。そのため、一部のテキストが、インストール中に選択していない言語の制御文字として表示される場合があります。

追加に必要なフォントは、Oracle Application Server Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM の `¥utilities¥fonts` フォルダに収録されています。

サポートが必要になる可能性のある言語のフォントのリストを次に示します。

- ALBANWTJ - 英語以外および日本語
- ALBANWTK - 韓国語
- ALBANWTS - 簡体字中国語
- ALBANWTT - 繁体字中国語

これらのフォントをインストールするには、中間層のインストール後に次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Upgrade Assistant and Utilities CD-ROM の `¥utilities¥fonts` フォルダに移動します。
2. `¥utilities¥fonts` ディレクトリの内容を、中間層マシンの次のフォルダにコピーします。

```
ORACLE_HOME¥jdk¥jre¥lib¥fonts
```

1.4.7 ポート

Oracle HTTP Server、Oracle Enterprise Manager Application Server Control など、多くの Oracle Application Server コンポーネントでポートを使用します。インストーラにデフォルトのポート番号を割り当ててもらっても、ユーザーが指定したポート番号を使用することもできます。

この項では、ポートに関する次の項目について説明します。

- エフェメラル・ポートの概要
- ポートが使用中かどうかの確認
- ポート番号のリストの取得
- デフォルトのポート番号の使用
- カスタムのポート番号の使用 (「静的ポート」機能)

1.4.7.1 エフェメラル・ポートの概要

まれに、必要なポートが使用不可なために Oracle Application Server プロセスを起動できない場合があります。プロセスの起動が失敗するか、またはポートにバインドできないことがレポートされる場合があります。この問題は一時的な場合があります、影響を受けたプロセスを後で再起動すると、正常に起動する場合があります。

この問題の原因は、**Oracle Application Server** がデフォルトでエフェメラル・ポートの範囲内のポート番号を使用することです。エフェメラル・ポートは通常、クライアント/サーバーの **TCP/IP** 接続のクライアント側で使用されます。通常、クライアント・プロセスは接続のクライアント側で使用されるポートの値と関係ないため、すべての **TCP/IP** 実装では、クライアント側で使用されるポート値の選択をオペレーティング・システムに依存させることができます。オペレーティング・システムは、このタイプの各クライアント接続用のエフェメラル・ポートの範囲から 1 つのポートを選択します。

一方、サーバー・プロセス（たとえば、**Oracle Application Server** プロセス）はエフェメラル・ポートを使用できません。サーバー・プロセスでは、クライアントが常に同じサーバー・ポートに接続してサーバーと通信できるように、固定のポート値を使用する必要があります。

エフェメラル・ポートとのポートの競合は、**Oracle Application Server** プロセスがエフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用するように構成されている場合に発生します。**Oracle Application Server** プロセスが起動しようとする、必要なポートがクライアント・プロセス（オペレーティング・システムからエフェメラル・ポートを割り当てられたクライアント）によって使用されていることを検出します。このクライアントは、**TCP/IP** を介して通信可能なコンピュータ上の任意のプロセスである可能性があります。**Oracle Application Server** プロセスは、必要なポートが使用不可である場合、起動に失敗します。

この問題は、他のオペレーティング・システムと比較して **Microsoft Windows** で頻繁に発生します。これは、**Windows** で使用されるエフェメラル・クライアント接続用のポートの範囲が狭いためです。

エフェメラル・ポートの範囲

Microsoft Windows でのエフェメラル・ポートの範囲は、**1024 ~ 5000** です。

Windows では、この範囲の上限値のみ調整できます。他のほとんどのオペレーティング・システムでは、エフェメラル・ポートのデフォルトの範囲が広く、範囲の上限と下限の両方を調整できます。

Oracle HTTP Server、**OracleAS Web Cache**、**Oracle Enterprise Manager Application Server Control**、**OC4J** などの **Oracle Application Server** の一部のプロセスは、エフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用します。これらのプロセスは、必要なポートがクライアントで使用されている場合に起動できません。

エフェメラル・ポートとの競合を回避する方法

エフェメラル・ポートとの競合を回避するには、次の方法があります。

- **staticports.ini** ファイルを使用して **Oracle Application Server Standard Edition One** をインストールします。これによって、**Oracle Application Server Standard Edition One** コンポーネントがエフェメラル・ポートの範囲内のポートを使用しなくなります。**staticports.ini** ファイルでは、**1024** より小さいポート番号または **5000** より大きいポート番号を使用します。

関連項目： 1.4.7.5 項「カスタムのポート番号の使用（「静的ポート」機能）」を参照してください。

- **Oracle Application Server Standard Edition One** をインストール済の場合、**1024** より小さいポートまたは **5000** より大きいポートを使用するようにコンポーネントを再構成できます。**Application Server** プロセスが使用している現行のポートを変更する方法については、『**Oracle Application Server 管理者ガイド**』を参照してください。
- （この方法はインストール後に実行できます。）コンピュータでエフェメラル・ポートの範囲を変更します。この方法は、前述の 2 つの方法がいずれも実行できない場合に実行してください。この方法では **Windows** のレジストリが変更され、コンピュータで実行するすべての製品が影響を受けるため、この方法の優先順位は最も低くなります。

この方法を実行すると、エフェメラル・ポートの範囲が新しい範囲に変更されます。変更を行う前に、コンピュータで使用しているいずれの製品（**Oracle** 製品および **Oracle** 以外の製品）も、エフェメラル・ポートの範囲内の非エフェメラル・ポートを使用していないことを確認する必要があります。使用している場合、その製品を新しい **ReservedPorts** の範

囲内（後述を参照）のポートに再配置する必要があります。このポートは、新しいエフェメラル・ポートの範囲の上限より大きいか、またはポート **1024** より小さくなります。

このオプションを実施するには、次の手順を実行します。

- エフェメラル・ポートの範囲の上限値を大きくして、範囲のサイズを拡張します。

レジストリの **MaxUserPort** 値を **13000** ～ **65534** に設定します。**MaxUserPort** は、エフェメラル・ポートの範囲の上限です。

設定手順については、**Microsoft Knowledge Base** のアーティクル **196271** ([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb; \[LN\] ;196271](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];196271)) を参照してください。

- 新しく拡張したエフェメラル・ポートの範囲の一部を **Oracle Application Server** で使用するために予約します。

レジストリの **ReservedPorts** 値を変更し、ポート **1024** ～ **8000** を **Oracle Application Server** 用に予約します。予約した範囲は、**Oracle Application Server** によって通常使用されるポートの範囲に組み込まれます。

設定手順については、**Microsoft Knowledge Base** のアーティクル **812873** ([http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb; \[LN\] ;812873](http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;[LN];812873)) を参照してください。

- コンピュータを再起動して、変更を有効にします。

これらの手順を実行すると、**1024** ～ **8000** のポートは **Oracle Application Server** 用に予約され、**8001** ～ **13000** のポートが新しいエフェメラル・ポートの範囲（**MaxUserPort** を **13000** に設定した場合）になります。予約した範囲は **Oracle Application Server** によって通常使用されるポートの範囲に組み込まれ、エフェメラル・ポートの範囲は元のサイズと同じになります。

1.4.7.2 ポートが使用中かどうかの確認

ポートが使用されているかどうかを確認するには、**netstat** コマンドを次のように実行します。

```
C:¥> netstat -an | find "portnum"
```

ポート番号は、二重引用符で囲む必要があることに注意してください。

1.4.7.3 ポート番号のリストの取得

ポート番号のリストは、次の方法で取得できます。

- **Oracle Enterprise Manager Application Server Control** を使用します。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control ホーム・ページ上の「ポート」リンクをクリックします。これにより、使用されているすべてのポートと様々なコンポーネントの推奨されるポート範囲を示すページが表示されます。

- **ORACLE_HOME¥install¥portlist.ini** ファイルを確認します。**ORACLE_HOME** は、**Oracle Application Server Standard Edition One** インストールが格納されているディレクトリです。

インストール後にコンポーネントのポート番号を変更しても、**portlist.ini** ファイルは更新されません。**portlist.ini** ファイルは、インストール後は更新されません。

1.4.7.4 デフォルトのポート番号の使用

コンポーネントでデフォルトのポート番号を使用する場合は、特に何もする必要はありません。デフォルトのポート番号および範囲のリストについては、**付録 C** を参照してください。各コンポーネントに対し、ポート範囲内で **1** つ以上のポートが使用できることを確認します。インストーラが空きポートを範囲内で検出できない場合、そのインストールは失敗します。

次の点に注意してください。

- インストーラは、デフォルト・ポートが他のアプリケーションによって使用されていない場合にのみ、そのデフォルト・ポートをコンポーネントに割り当てます。デフォルト・ポートが使用中である場合、インストーラは、そのコンポーネントに対してポート番号範囲内の別のポートの割当てを試行します。たとえば、中間層の **Oracle HTTP Server** のデフォルトの非 **SSL** ポートはポート **80** です。このポートが別のアプリケーションによって使用されている場合、インストーラは **7777 ~ 7877** の範囲内のポートを割り当てます。
- **Oracle HTTP Server** のデフォルト・ポートは、インストール・タイプに応じて異なります (表 1-4)。中間層は、アプリケーションが配置されるポートである、ポート **80** および **443** を取得します。ユーザーは、中間層の **Oracle HTTP Server** にリクエストを送信して、アプリケーションにアクセスします。

表 1-4 に、デフォルト・ポートが使用中である場合に、インストーラが **Oracle HTTP Server** への割当てを試行する値 (カッコ内の値) を示します。

表 1-4 Oracle HTTP Server のデフォルト・ポート

インストール・タイプ	デフォルトの非 SSL ポート	デフォルトの SSL ポート
OracleAS Portal	80 または 7777 (7777 ~ 7877) ¹	4443 (4443 ~ 4543)
J2EE and Web Services	80 (7777 ~ 7877)	443 (4443 ~ 4543)

¹ 使用可能な場合、OracleAS Infrastructure ではポート 7777、OracleAS Portal ではポート 80 がデフォルトで使用されます。

1.4.7.5 カスタムのポート番号の使用 (「静的ポート」機能)

インストーラがコンポーネントにカスタムのポート番号を割り当てようとするには、次の手順を実行します。

1. コンポーネント名とポート番号の入ったファイルを作成します。ファイルの書式は、次の項を参照してください。このファイルは通常 `staticports.ini` ファイルという名前ですが、任意の名前を付けることができます。
2. インストーラの「ポート構成オプションの指定」画面で、「**手動**」を選択し、`staticports.ini` ファイルにフルパスを入力します。

ファイルへのフルパスを指定しないと、インストーラはファイルを見つけることができません。この場合、インストーラはすべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てますが、警告は一切表示されません。

staticports.ini ファイルの書式

`staticports.ini` ファイルの書式は次のとおりです。 `port_num` は、コンポーネントに使用するポート番号に置き換えます。

```
# staticports.ini Template File

# This file is a template for specifying port numbers at installation time.
# To specify a port number, uncomment the appropriate line (remove #) and
# replace "port_num" with the desired port number.
#
# Please refer to Oracle Application Server 10g Standard Edition one
# Installation Guide for instructions on how to use this file.
# This file cannot be specified on the command line when launching OUI

[Infrastructure]
#Oracle Internet Directory port = port_num
#Oracle Internet Directory (SSL) port = port_num
#Oracle Certificate Authority SSL Server Authentication port = port_num
#Oracle Certificate Authority SSL Mutual Authentication port = port_num
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = 80
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
```

```
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
#Oracle Management Agent port = port_num
#Log Loader port = port_num
```

[Portal]

```
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
#Oracle Management Agent port = port_num
#Web Cache HTTP Listen port = port_num
#Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
#Web Cache Administration port = port_num
#Web Cache Invalidation port = port_num
#Web Cache Statistics port = port_num
#Log Loader port = port_num
#Discoverer OSAgent port = port_num
```

[j2ee]

```
#Ultra Search HTTP port number = port_num
#Oracle HTTP Server port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen port = port_num
#Oracle HTTP Server SSL port = port_num
#Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = port_num
#Oracle HTTP Server Diagnostic port = port_num
#Java Object Cache port = port_num
#DCM Java Object Cache port = port_num
#DCM Discovery port = port_num
#Oracle Notification Server Request port = port_num
#Oracle Notification Server Local port = port_num
#Oracle Notification Server Remote port = port_num
#Application Server Control port = port_num
#Application Server Control RMI port = port_num
#Oracle Management Agent port = port_num
#Web Cache HTTP Listen port = port_num
#Web Cache HTTP Listen (SSL) port = port_num
#Web Cache Administration port = port_num
#Web Cache Invalidation port = port_num
#Web Cache Statistics port = port_num
#Log Loader port = port_num
```

このファイルを作成する最も簡単な方法は、CD-ROM (Disk 1) または DVD-ROM にある `staticports.ini` ファイルをテンプレートとして使用することです。

1. `staticports.ini` ファイルを CD-ROM または DVD-ROM からハード・ディスクにコピーします。

表 1-5 CD-ROM および DVD-ROM 内の `staticports.ini` ファイルの場所

メディア	<code>staticports.ini</code> ファイルの場所 (E: が CD-ROM または DVD-ROM ドライブであると想定)
CD-ROM	Disk 1: E:\stage\Response\staticports.ini
DVD-ROM	E:\application_server\stage\Response\staticports.ini

2. ローカル・コピー (ハード・ディスク上にあるファイル) を編集して必要なポート番号を含めます。

`staticports.ini` ファイルですべてのコンポーネントのポート番号を指定する必要はありません。ファイルにないコンポーネントでは、インストーラによりデフォルトのポート番号が使用されます。

インストール中に **OracleAS Metadata Repository** で使用されるポート (ポート 1521) の変更はできませんが、インストール後に変更できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

次の例では、**Application Server Control** のポートといくつかの **OracleAS Web Cache** のポートを設定します。指定されていないコンポーネントには、インストーラによってデフォルトのポート番号が割り当てられます。

```
Application Server Control port = 2000
Web Cache Administration port = 2001
Web Cache Invalidation port = 2002
Web Cache Statistics port = 2003
```

インストールが完了したら、`ORACLE_HOME\install\portlist.ini` ファイルで、割り当てられたポートを確認できます。

注意： ポート番号は 65535 を超えることはできません。

インストーラでは、メモリーをチェックすることにより、ファイルに指定されたポートが使用可能であることが確認されます。つまり、インストーラが検出できるのは、実行中のプロセスで使用されているポートのみです。アプリケーションで使用されているポートを調べるために構成ファイルが確認されることはありません。

指定されたポートが使用できないことが検出されると、インストーラにより警告が表示されます。インストーラでは、使用できないポートの割当ては行われません。この問題を解決するには、次の手順を実行します。

1. `staticports.ini` ファイルを編集して別のポートを指定するか、そのポートを使用しているアプリケーションをシャットダウンします。
2. 「再試行」をクリックします。インストーラは `staticports.ini` ファイルの再読み取りを行い、ファイル内のエントリを再確認します。

staticports.ini ファイルとしての portlist.ini ファイルの使用

`staticports.ini` ファイルは、インストール後に作成される `ORACLE_HOME\install\portlist.ini` ファイルと同じ書式を使用しています。Oracle Application Server Standard Edition One をすでにインストールしている場合で、同じポート番号を別のインストールでも使用するには、最初のインストールの `portlist.ini` ファイルを、それ以降のインストールの `staticports.ini` ファイルとして使用できます。

ただし、staticports.ini では「Oracle Management Agent port」の行は、portlist.ini の「Enterprise Manager Agent port」に相当するという違いに注意してください。

インストーラがカスタム・ポートではなくデフォルトのポートを使用する原因となるエラー条件
staticports.ini ファイルは念入りに確認してください。間違いがあると、インストーラでは警告を表示せずにデフォルトのポートを使用します。

次のような点を確認します。

- 複数のコンポーネントに対して同じポートを指定すると、インストーラでは最初のコンポーネントに指定されたポートを使用し、それ以外のコンポーネントにはそれぞれのデフォルトのポートを使用します。インストーラは複数のコンポーネントに同じポートが指定されていることに対する警告を發しません。
- staticports.ini ファイルに構文エラーがある場合 (= が抜けている行があるなど)、インストーラはその行を無視します。インストーラは、このような行で指定されているコンポーネントにはデフォルトのポートを割り当てます。インストーラは構文エラーのある行に対する警告を發しません。
- コンポーネント名のスペルを間違えると、インストーラはそのコンポーネントに対してデフォルトのポートを割り当てます。ファイル内のコンポーネント名では大文字と小文字が区別されます。インストーラは認識できない名前が指定された行に対する警告を發しません。
- ポート番号に数値以外の値を指定すると、インストーラはその行を無視し、そのコンポーネントにはデフォルトのポート番号を割り当てます。これも警告を表示せずに行われます。
- staticports.ini ファイルへの相対パス (.¥staticports.ini または単に staticports.ini など) を指定すると、インストーラではファイルを見つけることができません。インストーラは警告を表示せずに続行し、すべてのコンポーネントにデフォルトのポートを割り当てます。staticports.ini ファイルはフルパスで指定する必要があります。

1.4.8 ポート 1521 がすでに使用されている場合

インストーラはポート 1521 を OracleAS Metadata Repository のリスナー (リリース 10.1.0.3) 用に構成します。このポートは staticports.ini ファイルでは変更できません。

注意: コンピュータに、EXTPROC キーで IPC プロトコルを使用するリスナーがある場合、そのキーが別の値を持つように変更する必要があります。これは、OracleAS Metadata Repository のリスナーが EXTPROC キーを使用するためです。

Oracle データベース・リスナーなどの既存のアプリケーションがポート 1521 をすでに使用している場合、インストーラを実行する前になんらかの措置が必要になることがあります。詳細は次の項を参照してください。

1.4.8.1 ポート 1521 が既存の Oracle データベースで使用されている場合

Oracle データベースをすでに実行しているコンピュータに OracleAS Metadata Repository 用の新規のデータベースをインストールする場合は、両方のデータベースのリスナーが競合しないことを確認してください。

既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository のデータベースの両方で同じリスナーが使用できる場合があります。これには、既存のリスナーとポート番号を考慮する必要があります。表 1-6 に、各種シナリオとその結果を示します。

インストール後、OracleAS Metadata Repository のリスナーが別のポートを使用するように変更できます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

表 1-6 OracleAS Metadata Repository をインストールするコンピュータに既存のデータベースがある場合のシナリオとその結果

既存のリスナーのリリース	既存のリスナーがポート 1521 を使用	既存のリスナーがポート 1521 以外を使用
10.1.0.2 より前	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。 シナリオ 1: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 より前であることを参照してください。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。 シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用を参照してください。
10.1.0.2 以上	既存のリスナーは、既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository の両方をサポートします。 シナリオ 2: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 以上であることを参照してください。	既存データベース用と OracleAS Metadata Repository 用の 2 つのリスナーが必要です。 シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用を参照してください。

リスナーのリリースを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
C:\> cd ORACLE_HOME\bin
C:\> lsnrctl version
```

ここで ORACLE_HOME は、データベースのホーム・ディレクトリです。

同じコマンドを使用して、リスナーのポートを確認することもできます。

コマンドの出力例を次に示します。

```
C:\OraHome_1\BIN>lsnrctl VERSION
LSNRCTL for 32-bit Windows: Version 10.1.0.3.0 - Production on 17-MAY-2005 18:42:10
Copyright (c) 1991, 2004, Oracle. All rights reserved.
Connecting to
 (DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=seone-pc.oracle.com) (PORT=1521)))
TNSLSNR for 32-bit Windows: Version 10.1.0.3.0 - Production
  TNS for 32-bit Windows: Version 10.1.0.3.0 - Production
    Oracle Bequeath NT Protocol Adapter for 32-bit Windows: Version 10.1.0.3.0 -
    Production
      Windows NT Named Pipes NT Protocol Adapter for 32-bit Windows: Version
    10.1.0.3.0 - Production
        Windows NT TCP/IP NT Protocol Adapter for 32-bit Windows: Version 10.1.0.3.0 -
    Production,,
The command completed successfully
```

シナリオ 1: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 より前である

リリース 10.1.0.2 より前のリスナーには、この Oracle Application Server リリース 2 (10.1.2) の OracleAS Metadata Repository と互換性がありません。リリース 10.1.0.3 のリスナーがインストールされる OracleAS Metadata Repository をインストールする必要があります。この後で、この新しいリスナーを使用して、既存のデータベースおよび OracleAS Metadata Repository データベースに対しサービスを提供することができます。

1. OracleAS Metadata Repository をインストールする前に、既存のリスナーを停止します。

```
C:\> cd ORACLE_HOME\bin
C:\> lsnrctl stop
```

ORACLE_HOME は、既存のデータベースのホーム・ディレクトリです。

既存のリスナーを停止しない場合、インストールに失敗します。

2. OracleAS Metadata Repository をインストールします。

第4章「OracleAS Portal のインストール」にある OracleAS Metadata Repository の任意のインストール手順を参照してください。

3. 必要に応じて、新しいリスナーの構成ファイルを更新します。リスナーの構成ファイルの名前は listener.ora で、ORACLE_HOME¥network¥admin ディレクトリにあります。
 - a. 既存のリスナーの構成ファイルのネットワーク・アドレスのエントリを確認します。

既存のリスナーの構成ファイルに次のネットワーク・アドレスしかない場合は、それらのネットワーク・アドレス用に OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルを編集する必要はありません。

 - * TCP Port 1521
 - * IPC key EXTPROC

構成ファイルに他のネットワーク・アドレスがある場合は、それらを OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルに追加する必要があります。
 - b. 既存のリスナーの構成ファイルの SID_DESC エントリを確認します。

既存のリスナーの構成ファイルに、既存のデータベースの SID_DESC エントリがある場合は、それらのエントリを OracleAS Metadata Repository のリスナーの構成ファイルに追加する必要があります。
 - c. 既存のリスナー（リリース 10.1.0.2 より前のもの）は起動しないでください。新しいリスナーが両方のデータベースをサポートできるようになったため、既存のリスナーを実行する必要はなくなりました。

注意： 前述の手順 c は非常に重要です。1 つのリスナー（新しいリスナー）を実行するだけで、両方のデータベースをサポートできます。

シナリオ 2: 既存のリスナーがポート 1521 を使用し、リスナーのリリースは 10.1.0.2 以上である
 既存のリスナーは、既存のデータベースと OracleAS Metadata Repository の両方をサポートします。インストーラでは、この構成を自動的に行います。

インストール中、リスナーを実行しておくことができます。

シナリオ 3: 既存のリスナーがポート 1521 以外を使用

リスナーを 2 つ実行します。既存のリスナーのリリースには関係なく、1 つは既存のデータベース用で、もう 1 つは OracleAS Metadata Repository 用になります。

既存のリスナーはポート 1521 を使用しないため、インストール中に実行していてもかまいません。

1.4.8.2 ポート 1521 が他のアプリケーションで使用されている場合

ポート 1521 でリスニングしているアプリケーションが他にある場合、それらが別のポートでリスニングするように再構成する必要があります。それが可能ではない場合は、OracleAS Metadata Repository のインストール中はそのアプリケーションをシャットダウンしてください。インストール後、OracleAS Metadata Repository が 1521 以外のポートを使用するように再構成できます。手順については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

1.4.9 インストーラがファイルを書き込む場所

表 1-7 に、インストーラがファイルを書き込む場所の概要を示します。

表 1-7 インストーラがファイルを書き込むディレクトリ

ディレクトリ	説明
Oracle ホーム・ディレクトリ	このディレクトリには Oracle Application Server Standard Edition One のファイルが入っています。このディレクトリは、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール時に指定します。詳細は、 1.4.2 項 を参照してください。
インベントリ・ディレクトリ (<code>system_drive:\Program Files\Oracle\Inventory</code>)	インストーラは、インベントリ・ディレクトリを使用して、コンピュータにインストールされた Oracle 製品の履歴を取ります。インベントリ・ディレクトリは、コンピュータに Oracle 製品を初めてインストールするときに作成されます。それ以降のインストールでも、インストーラは同じインベントリ・ディレクトリを使用します。
TEMP ディレクトリ	インストーラは、インストール時のみに必要なファイルを一時ディレクトリに書き込みます。一時ディレクトリは、環境変数 TEMP によって指定されます。詳細は、 2.4.5 項 を参照してください。

また、インストーラは Windows レジストリにエントリを作成します。

システムおよびインストール要件

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に、使用するコンピュータがこの章で説明している要件を満たしていることを確認してください。

この章の内容は次のとおりです。

- システム要件
- Windows システム・ファイル (wsf.exe)
- オペレーティング・システム・ユーザー
- 環境変数
- %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル
- ネットワーク関連項目
- インストーラにより実行される前提条件チェック

2.1 システム要件

表 2-1 に、Oracle Application Server Standard Edition One を実行するためのシステム要件を示します。インストーラにより、この要件の多くがインストール・プロセス開始時 (Oracle Universal Installer の GUI の起動前) にチェックされ、満たされていない要件がある場合には警告されます。この場合、インストールを停止することも、問題を修正して続行することもできます。

ユーザーはインストーラによってチェックされない要件のみを確認して時間を節約できます。インストーラによりチェックされない要件については、表 2-1 を参照してください。

また、次に示す `setup.exe` コマンドを実行すると、実際にインストールを行わずに、インストーラによるシステム・チェックのみを実行することもできます。`setup.exe` コマンドは、Oracle Application Server CD-ROM (Disk 1) または DVD-ROM (application_server ディレクトリ) にあります。

CD-ROM の場合 (E: が CD-ROM ドライブであると想定します) :

```
E:¥> setup.exe -executeSysPrereqs
```

DVD-ROM の場合 (E: が DVD-ROM ドライブであると想定します) :

```
E:¥> cd application_server
E:\application_server> setup.exe -executeSysPrereqs
```

結果はログ・ファイルに書き込まれると同時に、画面にも表示されます。インストーラにより実行されるチェックの種類の詳細は、2.7 項を参照してください。

表 2-1 システム要件

項目	要件
オペレーティング・システム	<p>Oracle Application Server Standard Edition One は、Microsoft Windows オペレーティング・システムのいくつかのバージョンでサポートされています。サポートされるオペレーティング・システムの最新のリストと Windows ターミナル・サービス・サポートについては、Oracle MetaLink のサイト (http://metalink.oracle.com) を参照してください。</p> <p>インストーラによるチェック：あり</p>
ネットワーク	<p>Oracle Application Server Standard Edition One は、ネットワークに接続されているコンピュータまたは接続されていないコンピュータ（スタンドアロン・コンピュータ）にインストールできます。</p> <p>Oracle Application Server Standard Edition One をスタンドアロン・コンピュータにインストールする場合、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続できます。コンピュータをネットワークに接続する際、いくつかの構成作業を実行する必要があります（詳細は『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照）。</p> <p>インストーラによるチェック：なし</p>
IP	<p>Oracle Application Server Standard Edition One は、静的 IP または DHCP ベースの IP を使用するコンピュータにインストールできます。</p> <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ DHCP 接続のコンピュータにインストールする場合の追加の要件については、2.6.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」を参照してください。 ■ 静的 IP を持つコンピュータにインストールして、Oracle Application Server をオンラインまたはオフラインで実行可能にする場合の追加の要件については、2.6.5 項「後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール」を参照してください。 <p>インストーラによるチェック：なし</p>
ホスト名	<p>ホスト名は 255 文字以下にする必要があります。</p>
プロセッサ速度	<p>300 MHz 以上の Intel Pentium プロセッサを推奨</p> <p>インストーラによるチェック：あり</p>
メモリー	<p>J2EE and Web Services: 512 MB</p> <p>OracleAS Portal:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Metadata Repository を使用する場合：1 GB ■ 既存の Metadata Repository を使用する場合：1 GB <p>注意：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ インストーラによってコンピュータのメモリーの容量がチェックされ、コンピュータが最小メモリー要件を満たしていない場合は、続行できなくなります。 ■ これらは、Oracle Application Server をインストールおよび実行するのに必要な最小値です。ほとんどの本番サイトでは 1 GB 以上の物理メモリー構成が必要です。通信量の多いサイトでは、メモリーをさらに増やすことによってパフォーマンスを向上させることができます。Java アプリケーションで増量したメモリーを活用するには、OC4J プロセスに割り当てられた最大ヒープを増やすか、OC4J プロセスを追加構成する必要があります。詳細は、『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。 ■ 実際のインストールに最適なメモリーの容量を決定するには、サイトの負荷テストを行うのが最善です。アプリケーションや利用パターンによって、リソースの要件は大幅に異なることがあります。また、メモリーを監視するオペレーティング・システムのユーティリティでは、共有メモリーを示すなどの理由で、メモリー使用を実際より多く報告するものもあります。メモリー要件を決定するには、負荷テストの際に、物理メモリーの追加によるパフォーマンスの向上を監視することをお勧めします。メモリーおよびプロセッサ・リソースをテスト用に構成する方法は、各プラットフォーム・ベンダーのドキュメントを参照してください。 <p>インストーラによるチェック：あり</p>

表 2-1 システム要件 (続き)

項目	要件
ファイル・システム・タイプ	NTFS にはファイルに対する権限の制限を設定するなどのセキュリティ機能が含まれているため、FAT32 または FAT ファイル・システム・タイプよりも NTFS の使用をお勧めします。 インストーラによるチェック: なし
ディスク領域	J2EE and Web Services: 450 MB OracleAS Portal: <ul style="list-style-type: none">■ Metadata Repository を使用する場合: 3.4 GB■ 既存の Metadata Repository を使用する場合: 2.5 GB インストーラによるチェック: あり。
TEMP ディレクトリ内の領域	インストーラの実行には 55 MB、インストールには 256 MB が必要です。 TEMP ディレクトリに十分な空き領域がない場合は、環境変数 TMP を設定することにより、別のディレクトリを指定できます。詳細は、 2.4.5 項「環境変数 TEMP」 を参照してください。 インストーラによるチェック: あり

表 2-1 システム要件 (続き)

項目	要件
総ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー)	<p>ここに示す値は概算です。コンピュータのメモリー容量に基づいた Windows の推奨値を使用する必要があります。</p> <p>J2EE and Web Services: 1.5 GB</p> <p>OracleAS Portal:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Metadata Repository を使用する場合 : 1.5 GB ■ 既存の Metadata Repository を使用する場合 : 1.5 GB <p>本番環境では、仮想メモリーを 1.5 GB 以上に設定することをお勧めします。</p> <p>総ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー) を表示および変更するには、次の手順を実行します。</p> <p>Windows 2000 の場合 :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 2. 「詳細」タブを選択します。 3. 「パフォーマンス オプション」をクリックします。 4. 「変更」をクリックして、仮想メモリーの設定を表示および変更します。 <p>Windows XP/Windows 2003 の場合 :</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。 Windows XP の場合 : 「スタート」→「コントロールパネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。 Windows 2003 の場合 : 「スタート」→「コントロールパネル」→「システム」を選択します。 2. 「詳細」タブを選択します。 3. 「パフォーマンス」セクションの「設定」をクリックします。 4. 「詳細」タブを選択します。 5. 「変更」をクリックして、仮想メモリーの設定を表示および変更します。 <p>インストーラによるチェック :あり。このチェックで最初に問題が検出された場合、インストーラは一時停止し、続行するかどうかを尋ねられます。仮想メモリー・サイズは前述の手順で変更できます。「y」と答えてインストーラを続行してください。</p>
モニター	<p>256 色表示機能。</p> <p>インストーラによるチェック :あり</p>
サポートされているブラウザ	<p>Oracle Enterprise Manager Application Server Control および Oracle Instant Portal には、様々なブラウザ・サポート要件があります。サポートされるブラウザの最新のリストは、Oracle MetaLink のサイト (http://metalink.oracle.com) を参照してください。</p> <p>インストーラによるチェック :なし。ただし、サポートされていないブラウザで Oracle Enterprise Manager Application Server Control または Oracle Instant Portal にアクセスすると、警告メッセージが表示されます。</p>

2.1.1 メモリー使用量を削減するためのヒント

メモリー使用量を削減する必要がある場合は、次の手順を実行します。

- 必要なコンポーネントのみを構成します。
- インストール後、必要なコンポーネントのみを起動します。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- インスタンスを管理する必要がある場合にのみ Application Server Control を実行します。ほとんどの場合、Application Server Control を実行する必要はありません。

2.2 Windows システム・ファイル (wsf.exe)

注意: この手順はインストーラによって求められた場合にのみ実行します。

Oracle Application Server Standard Edition One では、Windows システム・ディレクトリ（通常、C:\Windows\system32 または C:\Winnt\system32）の一部のシステム・ファイルに最低限のバージョンが必要です。インストーラを実行する際に、コンピュータの Windows システム・ファイルがチェックされます。これらの古いバージョンのファイルが検出され、そのファイルを他のプロセスが使用している場合は、インストーラを終了して wsf.exe を実行し、最新の Windows システム・ファイルをインストールするように求められます（古いバージョンのファイルが検出されても、そのファイルを他のプロセスが使用していない場合は、インストーラによってファイルが置き換えられるため、wsf.exe を実行する必要はありません）。

wsf.exe は、インストーラと同じディレクトリにあります。

wsf.exe を実行するには（インストーラによって要求された場合のみ）、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを使用して wsf.exe を実行します。Oracle Universal Installer が起動され、Windows システム・ファイルがインストールされます。

CD-ROM の場合（E: が CD-ROM ドライブであると想定します）：

```
E:¥> wsf.exe
```

DVD-ROM の場合（E: が DVD-ROM ドライブであると想定します）：

```
E:¥> cd application_server
```

```
E:¥> wsf.exe
```

2. インストーラの画面に従います。

表 2-2 Windows システム・ファイルのインストール画面

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. ファイルの場所の指定	名前: wsf の Oracle ホームの名前を入力します。 パス: 任意のフルパスを入力します。インストーラは、このフィールドに入力された値に関係なく、適切なシステム・ディレクトリにファイルをインストールします。 「次へ」をクリックします。
3. 警告: システムを再起動してください	この画面が表示された場合、インストーラはこのインストールの終わりにコンピュータを自動的に再起動して、Windows システム・ファイルのインストールを完了させます。コンピュータで実行しているアプリケーション（インストーラ以外）を保存して閉じます。 「次へ」をクリックします。
4. サマリー	「次へ」をクリックして、Windows システム・ファイルのインストールを開始します。
5. インストールの終了	「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

3. 警告: システムを再起動してくださいという画面が表示されると、インストーラによってコンピュータが再起動されます。再起動されない場合は、続行する前にコンピュータを再起動します。

2.3 オペレーティング・システム・ユーザー

インストールを実行するオペレーティング・システム・ユーザーは、Administrators グループに所属している必要があります。

注意： ユーザーは **Administrators** グループに直接リストされている必要があります。ユーザーは間接的に **Administrators** グループに所属することはできません（たとえば、**Administrators** グループに属するグループのメンバーになるなど）。

自分が **Administrators** グループに所属しているかどうかを確認するには、次の手順を実行します。

1. 「コンピュータの管理」ダイアログ・ボックスを表示します。
Windows 2000 または Windows XP の場合：デスクトップ上で「**マイ コンピュータ**」を右クリックし、「**管理**」を選択します。
Windows 2003 の場合：デスクトップ上でローカル・コンピュータのアイコンを右クリックし、「**管理**」を選択します。
2. 左側のフレームで「**ローカル ユーザーとグループ**」を展開し、「**ユーザー**」を選択します。
3. 右側のフレームで、ユーザーを右クリックして「**プロパティ**」を選択します。そのプロパティ・ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. プロパティ・ダイアログ・ボックスで、「**所属するグループ**」タブをクリックします。

自分が **Administrators** グループのメンバーでない場合、自分を **Administrators** グループに追加するように管理者に依頼するか、または **Administrators** グループのメンバーであるユーザーでログオンします。

2.4 環境変数

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするオペレーティング・システム・ユーザーは、次の環境変数を設定（または設定解除）する必要があります。

表 2-3 に、環境変数の設定または設定解除の概要を示します。

表 2-3 環境変数の概要

環境変数	設定または設定解除
環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID	設定しないでください。
環境変数 PATH	最大 1023 文字です。
環境変数 TNS_ADMIN	設定しないでください。
環境変数 TEMP	任意です。設定解除した場合、デフォルトで C:\Temp に設定されます。

2.4.1 環境変数の設定方法

この項では、Windows で環境変数を設定する方法を説明します。

1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。
Windows 2000 の場合：「**スタート**」→「**設定**」→「**コントロール パネル**」→「**システム**」を選択します。
Windows 2003 の場合：「**スタート**」→「**コントロール パネル**」→「**システム**」を選択します。
Windows XP の場合：「**スタート**」→「**コントロール パネル**」を選択し、「**システム**」をダブルクリックします。
2. 「**詳細**」タブを選択します。
3. 「**環境変数**」をクリックします。

4. 変数の値を変更するには、変更する変数を選択し、「編集」をクリックします。

2.4.2 環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID

これらの環境変数は設定しないでください。

2.4.3 環境変数 PATH

インストール中、インストーラでは環境変数 PATH が更新されます。完了時、環境変数 PATH は最大 1023 文字です。これを超えると、警告が表示されるか、またはインストールが失敗します。警告が表示された場合は、その時点で環境変数 PATH を短くできます。

2.4.4 環境変数 TNS_ADMIN

インストーラの実行時に環境変数 TNS_ADMIN が設定されていないことを確認します。設定されている場合、インストール中にエラーが発生する可能性があります。このようなエラーについては、H.3.11 項「Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した」を参照してください。

2.4.5 環境変数 TEMP

インストール中、インストーラでは一時ファイルを一時ディレクトリに書き込む必要があります。デフォルトでは、一時ディレクトリは C:\temp です。

インストーラで C:\temp 以外のディレクトリを使用するには、環境変数 TEMP にかわりのディレクトリのフルパスを設定します。このディレクトリは、表 2-1 に示した要件を満たしている必要があります。

この環境変数を設定していないと、デフォルトのディレクトリの領域が十分でない場合に、環境変数が設定されていないことを示すエラー・メッセージが表示されます。異なるディレクトリを指すように環境変数を設定するか、またはデフォルトのディレクトリに十分な領域を確保する必要があります。いずれの場合でも、インストールをやり直す必要があります。

2.5 %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル

%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイルの内容は、次の項目に影響します。

- 2.5.1 項「デフォルトの Identity Management レルムの場所」
- 2.5.2 項「Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名」

ただし、hosts ファイルを編集せずに別の方法で必要な値を入力できます。詳細は、次の項を参照してください。

%WINDIR% は、Windows Operating System ディレクトリを示します。通常、Windows 2003 の場合は C:\WINDOWS で、Windows 2000 の場合は C:\WINNT です。

2.5.1 デフォルトの Identity Management レルムの場所

インストーラによって hosts ファイルが読み取られ、デフォルトの Identity Management レルムの場所が作成されます。「Internet Directory のネームスペースの指定」画面にこの場所が表示されます。

hosts ファイルは次のような書式になっている必要があります。

```
ip_address fully_qualified_hostname short_hostname
```

例：

```
123.45.67.89 primaryHost.mydomain.com primaryHost
```

この例では、デフォルトの Identity Management レルムの場所は、「dc=mydomain,dc=com」のようになります。

このファイルが別の書式を使用している場合は、インストーラは正しくない値を画面に表示します。たとえば、hosts ファイルに次の行が含まれていると想定します。

```
123.45.67.89 primaryHost primaryHost.mydomain.com <--- incorrect format
```

この場合、インストーラは、デフォルトの **Identity Management** レルムとして「dc=primaryHost,dc=com」を表示します。通常、これは、デフォルトの **Identity Management** レルムとして指定する値ではありません。

ヒント： hosts ファイルに別の書式を使用する必要がある場合は、必要な書式が使用できるようにファイルを編集し、インストールを実行してから、インストール後にファイルを元の書式に戻すことができます。

hosts ファイルを編集できない、または編集しない場合は、デフォルトの **Identity Management** レルムに設定する値を「**Internet Directory** のネームスペースの指定」画面の「カスタム・ネームスペース」フィールドに入力できます。

2.5.2 Oracle Application Server Single Sign-On のホスト名

Oracle Application Server Single Sign-On で、hosts ファイルにコンピュータのホスト名がなく、ドメイン名が含まれていない場合は、ホスト名（ドメイン名なし）を使用した **Single Sign-On Server** へのサインオンのみが可能になります。

Single Sign-On Server への接続にドメイン名が必要になるようにするには、hosts ファイルを編集し、ドメイン名を入れます。このファイルを編集しない場合は、インストーラのコマンドライン・パラメータ OUI_HOSTNAME を使用し、hosts の値を変更できます。たとえば、次のようになります。

```
E:¥> setup.exe OUI_HOSTNAME=myserver.mydomain.com
```

2.6 ネットワーク関連項目

通常、Oracle Application Server をインストールするコンピュータはネットワークに接続されており、Oracle Application Server インストールが入るだけのローカル記憶域があり、表示モニターと CD-ROM ドライブまたは DVD-ROM ドライブがあります。

この項では、このような典型的なシナリオとは異なるコンピュータに **Oracle Application Server** をインストールする方法について説明します。次のような場合を扱います。

- [2.6.1 項「DHCP 接続のコンピュータへのインストール」](#)
- [2.6.2 項「複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール」](#)
- [2.6.3 項「複数の別名を持つコンピュータへのインストール」](#)
- [2.6.4 項「ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール」](#)
- [2.6.5 項「後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール」](#)
- [2.6.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)
- [2.6.7 項「CD-ROM または DVD-ROM からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール」](#)
- [2.6.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」](#)
- [2.6.9 項「リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール」](#)

2.6.1 DHCP 接続のコンピュータへのインストール

この項では、DHCP 接続のコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする方法について説明します。

2.6.1.1 DHCP 接続のコンピュータで Oracle Application Server Standard Edition One を実行する場合の制限

DHCP 接続のコンピュータ上の Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスは、他のコンピュータで実行されている他のインスタンスと通信できません。たとえば、2 台のコンピュータのいずれか 1 台でも DHCP を使用している場合、Metadata Repository を 1 台のコンピュータで実行し、中間層をもう 1 台のコンピュータで実行することはできません。通信する必要があるすべてのインスタンスは、同じコンピュータで実行する必要があります。クライアントに制限はありません。クライアント・コンピュータがネットワーク上の DHCP 接続のコンピュータを解決できるかぎり、そのコンピュータのクライアントから DHCP 接続のコンピュータで実行されているインスタンスにアクセスできます。

DHCP 接続のコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に、次の手順を実行します。

1. DHCP 接続のコンピュータにループバック・アダプタをインストールします。

ループバック・アダプタをインストールすると、ループバック・アダプタによってコンピュータにローカル IP が割り当てられます。ループバック・アダプタをインストールしてローカル IP アドレスを取得すると、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後に (DHCP によって) IP アドレスが変更されるたびに chgiphost スクリプトを実行する必要がなくなります。

2. Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするコンピュータに ping します。

- ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自体に ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com    Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
```

注意： コンピュータからそのコンピュータ自体に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。コンピュータのネットワーク IP は戻されません。

- ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、ネットワーク上の他のコンピュータからループバック・アダプタをインストールしたコンピュータに ping します。

この場合、ping コマンドを実行するとコンピュータのネットワーク IP が戻されます。

```
prompt> ping mycomputer                Ping using the hostname.
Reply from 139.185.140.166             Returns network IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com    Ping using a fully qualified name.
Reply from 139.185.140.166             Returns network IP.
```

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に問い合せてください。

2.6.1.2 プライマリ・ネットワーク・アダプタの決定方法

Windows では、ループバック・アダプタがネットワーク・アダプタの一種としてみなされます。コンピュータにループバック・アダプタをインストールした後、コンピュータにはネット

ワーク・アダプタとループバック・アダプタの少なくとも2つのネットワーク・アダプタがインストールされています。

Windows には、ループバック・アダプタをプライマリ・アダプタとして使用させる必要があります。プライマリ・アダプタは、アダプタをインストールした順序によって決まります。

- Windows 2000 では、最後にインストールしたアダプタがプライマリ・アダプタになります。そのため、ループバック・アダプタをインストールするのみで済みます。ただし、ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合、ループバック・アダプタを削除して再インストールする必要があります。

様々な Windows プラットフォームにループバック・アダプタをインストールする方法については、[2.6.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

2.6.2 複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインストール

複数の IP アドレスを持つコンピュータは、通常、そのコンピュータに複数のネットワーク・カードを取り付けることによって構成されます。各 IP アドレスは1つのホスト名に関連付けられます。また、ホスト名に別名を設定することもできます。

複数の IP アドレスを持つコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールすると、インストーラによって、プライマリ・ネットワーク・アダプタのホスト名と IP アドレスを使用するように Oracle Application Server Standard Edition One が構成されます。

クライアントは、このホスト名（またはこのホスト名の別名）を使用して、そのコンピュータにアクセスする必要があります。これを確認するには、短縮名（ホスト名のみ）とフルネーム（ホスト名.ドメイン名）を使用して、クライアント・コンピュータからホスト名に ping します。いずれのコマンドも正常に実行される必要があります。

Windows でプライマリ・ネットワーク・アダプタが決定される方法については、[2.6.1.2 項](#)を参照してください。

プライマリ・アダプタでないネットワーク・アダプタを使用する場合は、OUI_HOSTNAME コマンドライン・パラメータを指定してインストーラを起動します。使用するホスト名をパラメータに指定します。たとえば、次のようになります。

CD-ROM の場合 (E: が CD-ROM ドライブであると想定します) :

```
E:¥> setup.exe OUI_HOSTNAME=myserver.mydomain.com
```

2.6.3 複数の別名を持つコンピュータへのインストール

複数の別名を持つコンピュータは、1つの IP（ただし複数の別名）でネーミング・サービスに登録されたコンピュータを参照します。ネーミング・サービスは、これらのすべての別名を同じコンピュータに解決します。

このようなコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする前に、次の操作を実行する必要があります。

- コンピュータへのループバック・アダプタのインストール
- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることの確認

ループバック・アダプタによって、Oracle Application Server Standard Edition One は、ホスト名を問い合わせた際に、（問合せがローカルで実行されるために）常に同じ名前を取得します。ループバック・アダプタがインストールされていない場合、（問合せ結果がネーミング・サービスから取得されるために）問合せでコンピュータのいずれかの別名が戻される可能性があります。

Windows でプライマリ・アダプタが決定される方法については、[2.6.1.2 項](#)を参照してください。

ループバック・アダプタをインストールする手順については、[2.6.6 項](#)を参照してください。

2.6.4 ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール

Oracle Application Server Standard Edition One は、ノート型コンピュータなどの、ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールできます。この場合でも、コンピュータにはネットワーク機能が必要です。ネットワークに接続されていないとは、コンピュータがネットワークに接続されていない状態を意味します。

ネットワークに接続されていないコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールし、インストール後もそのコンピュータをネットワークに接続しない場合、この時点でそのコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできます。

ただし、ネットワークに接続されていないコンピュータへのインストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する場合は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、2.6.6 項を参照してください。

ループバック・アダプタとローカル IP アドレスによって、仮想的にネットワークに接続されたコンピュータとして動作します。そのコンピュータをネットワークに接続した場合、Oracle Application Server Standard Edition One は同じローカル IP とホスト名を使用します。

2. ホスト名のみを使用して、また完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自体に ping します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com   Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
```

注意： コンピュータからそのコンピュータ自体に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。

ping が失敗した場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。

インストール後のネットワークへのコンピュータの接続

インストール後にコンピュータをネットワークに接続した場合、そのコンピュータ上の Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスは、ネットワーク上の他のインスタンスと連携して機能します。コンピュータにループバック・アダプタをインストールしている必要があることに注意してください。接続しているネットワークに応じて、コンピュータに静的 IP または DHCP を使用できます。

詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

2.6.5 後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコンピュータへのインストール

ネットワークに接続された静的 IP を持つコンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールして、そのコンピュータをネットワークから切断した後も Oracle Application Server Standard Edition One を実行可能にする場合、インストール前に次の手順を実行します。

1. コンピュータにループバック・アダプタをインストールします。詳細は、2.6.6 項を参照してください。

ループバック・アダプタをインストールしないと、ネットワークからコンピュータを切断した際に静的 IP が使用不可になるため、Oracle Application Server Standard Edition One が正常に機能しません。

- ループバック・アダプタがプライマリ・ネットワーク・アダプタであることを確認します。詳細は、2.6.1.2 項を参照してください。これを行うには、(1) ホスト名のみを使用して、また (2) 完全修飾名を使用して、コンピュータからそのコンピュータ自体に ping コマンドを実行します。

たとえば、mycomputer というコンピュータにループバック・アダプタをインストールした場合、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ping mycomputer                Ping itself using just the hostname.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
prompt> ping mycomputer.mydomain.com   Ping using a fully qualified name.
Reply from 10.10.10.10                  Returns loopback adapter IP.
```

コンピュータからそのコンピュータ自体に ping コマンドを実行すると、ループバック・アダプタの IP が戻されます。コンピュータのネットワーク IP は戻されません。

これらの手順は、コンピュータが静的 IP を使用するか DHCP を使用するかにかかわらず実行する必要があります。DHCP 接続のコンピュータにループバック・アダプタが必要であることについては、2.6.1 項を参照してください。

ネットワークからコンピュータを切断すると、そのコンピュータはすべてのネットワーク・リソースにアクセスできなくなります。コンピュータに必要なすべてのインスタンス (OracleAS Infrastructure や中間層など) がインストールされていることを確認します。

2.6.6 ループバック・アダプタのインストール

ループバック・アダプタは、次のすべてのシナリオで必要です。

- DHCP 接続のコンピュータにインストールする場合 (2.6.1 項を参照)。
- ネットワークに接続されていないコンピュータにインストールして、インストール後にそのコンピュータをネットワークに接続する場合 (2.6.4 項を参照)。
- 複数の別名を持つコンピュータにインストールする場合 (2.6.3 項を参照)。
- (静的 IP または DHCP を介して) ネットワークに接続されたコンピュータにインストールして、そのコンピュータをネットワークから切断した後でも Oracle Application Server Standard Edition One を実行可能にする場合。

ループバック・アダプタのインストール手順は、Windows のバージョンによって異なります。

- [2.6.6.1 項「コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認」](#)
- [2.6.6.2 項「Windows 2000 へのループバック・アダプタのインストール」](#)
- [2.6.6.3 項「Windows 2003 または Windows XP へのループバック・アダプタのインストール」](#)
- [2.6.6.4 項「ホスト名の確認」](#)
- [2.6.6.5 項「Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの削除」](#)

2.6.6.1 コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかの確認

コンピュータにループバック・アダプタがインストールされているかどうかを確認するには、ipconfig /all コマンドを実行します。

```
prompt> ipconfig /all
```

ループバック・アダプタがインストールされている場合、ループバック・アダプタの値が表示されます。たとえば、次のようになります。

```
Ethernet adapter Local Area Connection 2:  
  Connection-specific DNS Suffix . . . :  
  Description . . . . . : Microsoft Loopback Adapter  
  Physical Address. . . . . : 02-00-4C-4F-4F-50  
  DHCP Enabled. . . . . : Yes  
  Autoconfiguration Enabled . . . . : Yes  
  Autoconfiguration IP Address. . . : 169.254.25.129  
  Subnet Mask . . . . . : 255.255.0.0
```

2.6.6.2 Windows 2000 へのループバック・アダプタのインストール

Windows 2000 では、最後にインストールしたネットワーク・アダプタがレポートされます。そのため、ループバック・アダプタのインストール後に追加のネットワーク・アダプタをインストールした場合、ループバック・アダプタを削除して再インストールする必要があります。ループバック・アダプタは、コンピュータに最後にインストールしたネットワーク・アダプタである必要があります。

Windows 2000 にループバック・アダプタをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加と削除」をダブルクリックします。ハードウェアの追加と削除ウィザードが起動されます。
3. 「ハードウェアの追加と削除ウィザードの開始」ページ: 「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアに関する作業の選択」ページ: 「デバイスの追加 / トラブルシューティング」を選択して、「次へ」をクリックします。
5. 「ハードウェア デバイスの選択」ページ: 「新しいデバイスの追加」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「新しいハードウェアの検索」ページ: 「いいえ、一覧からハードウェアを選択します」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「ハードウェアの種類」ページ: 「ネットワーク アダプタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」ページ:
製造元: 「Microsoft」を選択します。
ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。
「次へ」をクリックします。
9. 「ハードウェアのインストールの開始」ページ: 「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加と削除ウィザードの完了」ページ: 「完了」をクリックします。
11. デスクトップ上で「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「ネットワークとダイヤルアップ接続」コントロール・パネルが表示されます。
12. 前述の手順で作成した接続を右クリックします。通常、これは「ローカルエリア接続 2」です。「プロパティ」を選択します。
13. 「全般」タブで、「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
14. 「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ・ボックス (図 2-1) で、次の値を入力します。
IP アドレス: ループバック・アダプタのプライベート IP を入力します。次のプライベート・アドレスを使用することをお勧めします。
 - 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の数字)
 - 10.10.10.10サブネット マスク: 255.255.255.0 と入力します。

他のフィールドは空白のままにします。

「OK」をクリックします。

図 2-1 ループバック・アダプタの値が表示された「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ・ボックス



15. 「ローカル エリア接続 2 のプロパティ」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。
16. コンピュータを再起動します。
17. C:\¥winnt¥system32¥drivers¥etc¥hosts ファイルに、次の書式の行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この行は、ファイルの localhost 行の下に追加する必要があります。

IP_address は、手順 14 で入力したプライベート IP アドレスに置き換えます。

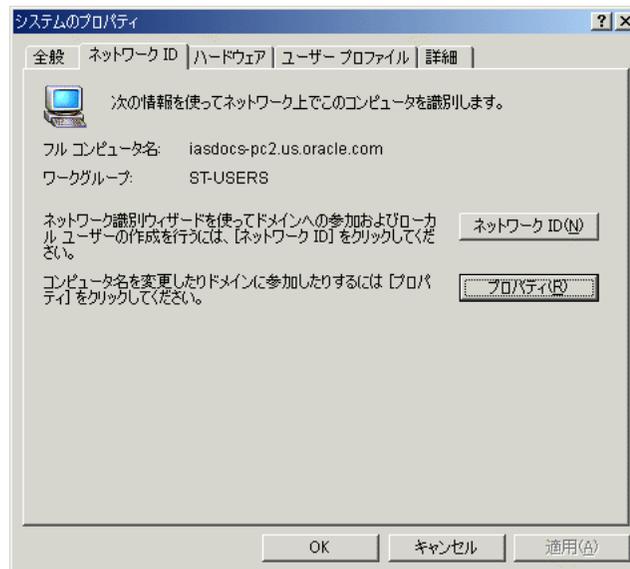
hostname と domainname は適切な値に置き換えます。

例：

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

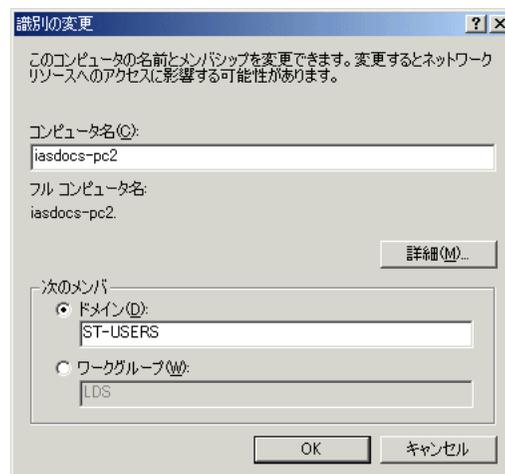
18. ネットワーク構成を確認します。
 - a. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを開き、「ネットワーク ID」タブを選択します。「フル コンピュータ名」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します (図 2-2)。

図 2-2 「システムのプロパティ」コントロール・パネルの「ネットワーク ID」タブ



- b. 「プロパティ」をクリックします。「コンピュータ名」にホスト名が表示され、「フルコンピュータ名」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します（図 2-3）。

図 2-3 「識別の変更」ダイアログ・ボックス



- c. 「詳細」をクリックします。「このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス」に、ドメイン名が表示されます（図 2-4）。

図 2-4 「DNS サフィックスと NetBIOS コンピュータ名」 ダイアログ・ボックス



2.6.6.3 Windows 2003 または Windows XP へのループバック・アダプタのインストール

Windows 2003 または Windows XP にループバック・アダプタをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 「スタート」 → 「コントロール パネル」を選択します。
2. 「ハードウェアの追加」をダブルクリックします。ハードウェアの追加ウィザードが起動されます。
3. 「ハードウェアの追加ウィザードの開始」 ページ: 「次へ」をクリックします。
4. 「ハードウェアは接続されていますか？」 ページ: 「はい、ハードウェアを接続しています」を選択して、「次へ」をクリックします。
5. 「次のハードウェアは既にコンピュータ上にインストールされています。」 ページ: 「新しいハードウェア デバイスの追加」を選択して、「次へ」をクリックします。
6. 「ウィザードで、ほかのハードウェアをインストールできます。」 ページ: 「一覧から選択したハードウェアをインストールする」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. 「次の一覧からインストールするハードウェアの種類を選択してください。」 ページ: 「ネットワーク アダプタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
8. 「ネットワーク アダプタの選択」 ページ:

製造元: 「Microsoft」を選択します。

ネットワーク アダプタ: 「Microsoft Loopback Adapter」を選択します。

「次へ」をクリックします。

9. 「ハードウェアをインストールする準備ができました。」 ページ: 「次へ」をクリックします。
10. 「ハードウェアの追加ウィザードの完了」 ページ: 「完了」をクリックします。
11. (Windows 2003 の場合) コンピュータを再起動します。
12. デスクトップ上で「マイ ネットワーク」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。「ネットワーク」コントロール・パネルが表示されます。
13. 前述の手順で作成した接続を右クリックします。通常、これは「ローカルエリア接続 2」です。「プロパティ」を選択します。
14. 「全般」タブで、「インターネット プロトコル (TCP/IP)」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
15. 「インターネット プロトコル (TCP/IP) のプロパティ」ダイアログ・ボックス (図 2-1) で、次の値を入力します。

IP アドレス: ループバック・アダプタのプライベート IP を入力します。次のプライベート・アドレスを使用することをお勧めします。

- 192.168.x.x (x は 1 ~ 255 の数字)

■ 10.10.10.10

サブネットマスク : 255.255.255.0 と入力します。

他のフィールドは空白のままにします。

「**OK**」をクリックします。

16. 「ローカルエリア接続 2 のプロパティ」ダイアログ・ボックスで「**OK**」をクリックします。

17. コンピュータを再起動します。

18. C:¥windows¥system32¥drivers¥etc¥hosts ファイルに、次の書式の行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この行は、ファイルの localhost 行の下に追加する必要があります。

IP_address は、手順 15 で入力したプライベート IP アドレスに置き換えます。

hostname と *domainname* は適切な値に置き換えます。

例 :

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

19. ネットワーク構成を確認します。

- a. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを開き、「**コンピュータ名**」タブを選択します。「**フル コンピュータ名**」に、ホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します。
- b. 「**変更**」をクリックします。「**コンピュータ名**」にホスト名が表示され、「**フル コンピュータ名**」にホスト名とドメイン名が表示されていることを確認します (図 2-3)。
- c. 「**詳細**」をクリックします。「**このコンピュータのプライマリ DNS サフィックス**」に、ドメイン名が表示されます (図 2-4)。

2.6.6.4 ホスト名の確認

DHCP サーバーによって (IP アドレスの割当て以外に) コンピュータのホスト名も割り当てられる場合、インストーラは、ユーザーがローカルに定義したホスト名のかわりにこのホスト名を使用する場合があります。

インストーラでローカルのホスト名を使用するには、2つの方法があります。

- 方法 1: OUI_HOSTNAME パラメータを指定してインストーラを起動します。このパラメータで、使用するホスト名を指定します。

```
E:¥> setup.exe OUI_HOSTNAME=myhostname.mydomain.com
```

- 方法 2: インストーラを実行する前に、C:¥winnt¥system32¥drivers¥etc¥hosts ファイルに次の書式で行を追加します。

```
IP_address hostname.domainname hostname
```

この行は、ファイルの localhost 行の下に追加する必要があります。

IP_address は、ループバック・アダプタの IP アドレスに置き換えます。これは、プライベート IP アドレスにする必要があります。

hostname と *domainname* は適切な値に置き換えます。

例 :

```
10.10.10.10 mycomputer.mydomain.com mycomputer
```

Oracle Application Server をインストール済である場合は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』に記載されている IP/ ホスト名の変更手順を使用して、インストール後にホスト名を変更できます。

2.6.6.5 Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からのループバック・アダプタの削除

Windows 2000、Windows 2003 または Windows XP からループバック・アダプタを削除するには、次の手順を実行します。

1. 「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。
Windows 2000 の場合：「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
Windows 2003 の場合：「スタート」→「コントロール パネル」→「システム」を選択します。
Windows XP の場合：「スタート」→「コントロール パネル」を選択し、「システム」をダブルクリックします。
2. 「ハードウェア」タブで、「デバイス マネージャ」をクリックします。
3. 「デバイス マネージャ」ウィンドウで、「ネットワーク アダプタ」を展開します。「Microsoft Loopback Adapter」が表示されます。
4. 「MS Loopback Adapter」を右クリックし、「削除」を選択します。

2.6.7 CD-ROM または DVD-ROM からハード・ドライブへのコピーとハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server の CD-ROM または DVD-ROM からインストールするかわりに、CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーし、そこからインストールを行うこともできます。これは、ネットワーク上に Oracle Application Server インスタンスを多数インストールする場合、または Oracle Application Server をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD-ROM ドライブがない場合に便利です。

(リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからもインストールできます。2.6.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」を参照してください。)

ハード・ドライブからインストールする場合、インストーラにより、CD-ROM を交換するように要求されません。ファイルが正しい場所にあれば、検出されます (図 2-5 を参照)。

他のコンピュータからのハード・ドライブへのアクセス

CD-ROM または DVD-ROM の内容をコピーしたハード・ドライブからリモート・コンピュータに Oracle Application Server をインストールするには、次の手順を実行します。

1. ローカル・コンピュータで、ハード・ドライブを共有化します。
2. Oracle Application Server をインストールするコンピュータで、共有化したハード・ドライブを割り当てます。
3. Oracle Application Server をインストールするリモート・コンピュータからインストーラを実行します。

インストーラにアクセスするには、割り当てたドライブのドライブ文字 (たとえば、H:\appserver10_1_2\setup.exe) を使用する必要があります。

汎用命名規則 (UNC) の構文 (\\hostname\sharename) を使用してインストーラにアクセスすることはできません。

領域の要件

ハード・ドライブに、CD-ROM の内容または DVD-ROM の application_server ディレクトリの内容が入るだけの十分な空き領域があることを確認してください。各 CD-ROM は、約

650 MB です。つまり、3 枚の CD-ROM をコピーする場合、約 1.9 GB のディスク領域を必要とします。

DVD-ROM の application_server ディレクトリは約 1.6 GB です。

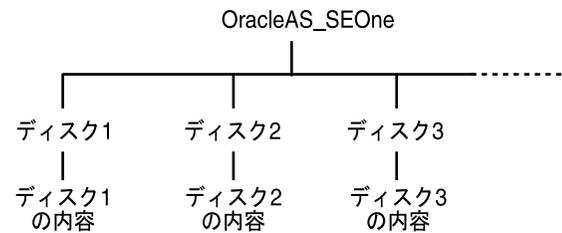
この領域を、Oracle Application Server のインストールに必要な領域 (表 2-1 を参照) に加えます。

CD-ROM の内容をコピーする方法

1. 図 2-5 に示すようなディレクトリ構造をハード・ドライブ上に作成します。

親ディレクトリ (この例では OracleAS_10g_10_1_2 になっていますが、任意の名前を付けることができます) を作成し、親ディレクトリの下に Disk1、Disk2 などのサブディレクトリを作成します。サブディレクトリの名前は DiskN にします。ここで N は CD-ROM の番号です。

図 2-5 CD-ROM をハード・ディスクにコピーするためのディレクトリ構造



2. 各 CD-ROM の内容を、対応するディレクトリにコピーします。

Windows のエクスプローラまたはコマンドラインを使用してファイルをコピーできます。コマンドラインを使用する場合、xcopy コマンドを使用します。

次の例では、E: が CD-ROM ドライブ、C:¥OracleAS_10g_10_1_2¥DiskN が CD-ROM の内容をコピーするディレクトリであると想定しています。

```

E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk1 C:¥OracleAS_SEOne¥Disk1
E:¥> xcopy /e /i E:¥1012disk2 C:¥OracleAS_SEOne¥Disk2
... Repeat for each CD-ROM.
  
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Disk1 ディレクトリから setup.exe 実行可能ファイルを実行します。Oracle Application Server Standard Edition One を実行するコンピュータから実行します。

```

C:¥> cd OracleAS_SEOne¥Disk1
C:¥OracleAS_SEOne¥Disk1> setup.exe
  
```

DVD-ROM の application_server ディレクトリの内容をコピーする方法

Windows のエクスプローラまたはコマンドラインを使用して application_server ディレクトリをコピーできます。コマンドラインを使用する場合、次の手順を実行します。

1. (オプション) application_server ディレクトリをコピーするディレクトリを作成します。
2. application_server ディレクトリを DVD-ROM からハード・ディスクにコピーします。

次の例では、E: が DVD-ROM ドライブ、C:¥application_server がコピー先のディレクトリであると想定しています。

```

E:¥> xcopy /e /i E:¥application_server C:¥application_server
  
```

コピーしたファイルからインストーラを実行するには、Oracle Application Server Standard Edition One を実行するコンピュータから setup.exe 実行可能ファイルを実行します。

```
C:\> cd application_server
C:\application_server> setup.exe
```

2.6.8 リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールするコンピュータに CD-ROM または DVD-ROM ドライブがない場合は、リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストールを実行することができます。次の手順は実行済であることを確認します。

リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブの共有化

使用するリモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブは、共有化する必要があります。これを行うには、リモート・コンピュータ（CD-ROM または DVD-ROM ドライブがあるコンピュータ）で次の手順を実行します。

1. 管理者ユーザーとしてログオンします。
2. Windows エクスプローラを起動します。
3. CD-ROM または DVD ドライブ文字を右クリックし、「共有」（Windows 2000 の場合）または「共有とセキュリティ」（Windows 2003 または Windows XP の場合）を選択します。
4. 「共有」タブ（図 2-6）：

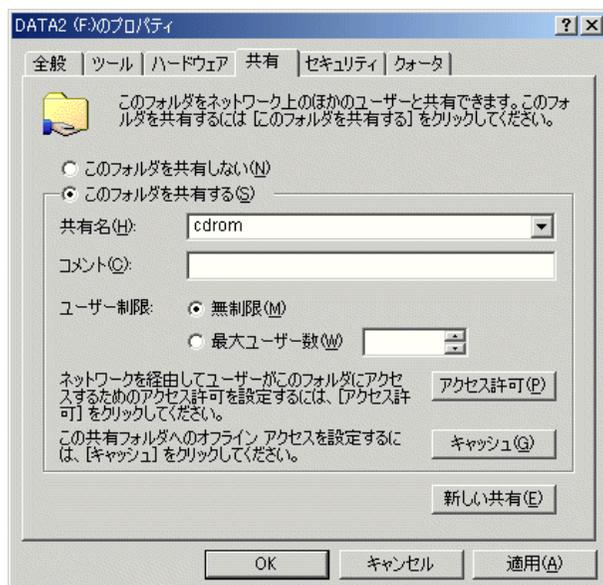
「このフォルダを共有する」を選択します。

共有名: cdrom や dvd などの共有名を指定します。ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD-ROM ドライブを割り当てる際にこの名前を使用します。2-21 ページの手順 d を参照してください。

「アクセス許可」をクリックします。CD-ROM または DVD ドライブにアクセスして Oracle Application Server をインストールするユーザーに、少なくとも「読取り」権限が必要です。

終了時に「OK」をクリックします。

図 2-6 CD-ROM ドライブの共有



5. CD-ROM の場合：Oracle Application Server Standard Edition One Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD-ROM の場合 : Oracle Application Server Standard Edition One DVD-ROM を DVD-ROM ドライブに挿入します。

ローカル・コンピュータでの CD-ROM または DVD-ROM ドライブの割当て

ローカル・コンピュータで CD-ROM または DVD-ROM ドライブを割り当てて、インストーラを実行するには、次の手順を実行します。

1. リモート・コンピュータの CD-ROM ドライブまたは DVD-ROM ドライブを割り当てます。
 - a. ローカル・コンピュータで Windows エクスプローラを起動します。
 - b. 「ツール」 → 「ネットワーク ドライブの割り当て」を選択します。「ネットワーク ドライブの割り当て」ダイアログ・ボックスが表示されます。
 - c. リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブに使用するドライブ文字を選択します。
 - d. 「フォルダ」に、次の書式を使用してリモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブの場所を入力します。
`\\remote_hostname\share_name`
`remote_hostname` は、CD-ROM または DVD-ROM ドライブがあるリモート・コンピュータの名前に置き換えます。
`share_name` は、2-20 ページの手順 4 で入力した共有名に置き換えます。
 例 : `\\computer2\cdrom`
 - e. 別のユーザーとしてリモート・コンピュータに接続する必要がある場合、次の操作を実行します。
 「異なるユーザー名」をクリックし、ユーザー名を入力します。
 - f. 「完了」をクリックします。
2. 割り当てた CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストーラを実行します。

インストーラによって CD-ROM を交換するように要求されたら、CD-ROM を取り出して、必要な CD-ROM を挿入します。

注意： CD-ROM を交換するときには、インストーラが実行中である必要があります。CD-ROM を交換するときインストーラを終了しないでください。インストーラを終了すると、中断したところから再開することができません。また、インストーラにより作成された部分的なインストールは使用できないため、手動で削除する必要があります。

2.6.9 リモート制御ソフトウェアを介したリモート・コンピュータへのインストール

リモート・コンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールして実行する（つまり、ハード・ドライブがあるリモート・コンピュータで Oracle Application Server コンポーネントを実行する）場合、そのコンピュータに物理的にアクセスできない場合でも、VNC や Symantec pcAnywhere などのリモート制御ソフトウェアを実行している場合は、そのリモート・コンピュータにインストールを実行できます。この場合、ローカル・コンピュータでもリモート制御ソフトウェアを実行している必要があります。

リモート・コンピュータには、次の 2 つの方法のいずれかで Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできます。

- Oracle Application Server Standard Edition One の CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。
- CD-ROM または DVD-ROM をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、その CD-ROM または DVD-ROM からインストールできます。

2.6.9.1 ハード・ドライブからのインストール

Oracle Application Server の CD-ROM または DVD-ROM の内容をハード・ドライブにコピーしている場合、ハード・ドライブからインストールできます。

これを行うには、次の手順を実行します。

1. リモート制御ソフトウェアがリモート・コンピュータとローカル・コンピュータにインストールされ、実行されていることを確認します。
2. Oracle Application Server の CD-ROM または DVD-ROM を含むハード・ドライブを共有化します。
3. リモート・コンピュータで、共有化したハード・ドライブにドライブ文字を割り当てます。リモート・コンピュータで、リモート制御ソフトウェアを使用してこの操作を実行します。
4. リモート制御ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有ハード・ドライブからインストーラを実行します。

2.6.9.2 リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール

CD-ROM または DVD-ROM をローカル・コンピュータのドライブに挿入して、その CD-ROM または DVD-ROM からインストールできます。これは、2.6.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」のシナリオに類似しています。

これを行うには、次の手順を実行します。

1. リモート制御ソフトウェアがリモート・コンピュータとローカル・コンピュータにインストールされ、実行されていることを確認します。
2. ローカル・コンピュータで、CD-ROM または DVD-ROM ドライブを共有化します。
リモート・コンピュータで、共有化した CD-ROM または DVD-ROM ドライブにドライブ文字を割り当てます。リモート・コンピュータで、リモート制御ソフトウェアを使用してこの操作を実行します。
これらの手順の詳細は、2.6.8 項「リモート・コンピュータの CD-ROM または DVD-ROM ドライブからのインストール」を参照してください。
3. リモート制御ソフトウェアを介して、リモート・コンピュータでインストーラを実行します。共有化した CD-ROM または DVD-ROM ドライブからインストーラを実行します。

2.7 インストーラにより実行される前提条件チェック

表 2-4 に、インストーラにより実行される前提条件チェックを示します。

表 2-4 インストーラにより実行される前提条件チェック

項目	説明
ユーザー	インストーラにより、ユーザーが管理権限を持っているかどうかチェックされます。
モニター	インストーラにより、モニターが 256 色以上を表示できるように構成されていることがチェックされます。
オペレーティング・システムのバージョン	サポートされているバージョンについては、表 2-1 を参照してください。
Windows の Service Pack	サポートされている Service Pack については、表 2-1 を参照してください。
プロセッサ速度	推奨値については、表 2-1 を参照してください。
メモリー	推奨値については、表 2-1 を参照してください。
総ページング・ファイル（仮想メモリー）・サイズ	推奨値については、表 2-1 を参照してください。
TEMP ディレクトリ内の領域	推奨値については、表 2-1 を参照してください。

表 2-4 インストーラにより実行される前提条件チェック（続き）

項目	説明
インスタンス名	インストーラにより、Oracle Application Server のインストール先のコンピュータに同じ名前のインスタンスがすでに存在しないことがチェックされます。インスタンス名の詳細は、1.4.3 項を参照してください。
Oracle ホーム・ディレクトリ名	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリ名に空白が含まれていないことがチェックされます。Oracle ホームの名前の詳細は、1.4.2.1 項を参照してください。
Oracle ホーム・ディレクトリへのパス	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリへのパスが 127 文字を超えていないことがチェックされます。
Oracle ホーム・ディレクトリの内容	インストーラにより、Oracle ホーム・ディレクトリにインストールの妨げとなるファイルがないことがチェックされます。Oracle Application Server は、新しいディレクトリにインストールすることをお勧めします。
ポート 1521	<p>ポート 1521 が、すべてのリリースのデータベース・リスナーを含む他のアプリケーションによって使用されている場合、インストーラにより警告が表示されます。ポート 1521 を使用しているアプリケーションを停止してから、警告ダイアログの「OK」をクリックします。</p> <p>データベース・リスナーがポート 1521 を使用している場合は、それをメタデータ・リポジトリ・データベースに使用できる可能性があります。詳細は、1.4.8 項を参照してください。</p> <p>他のアプリケーションがポート 1521 を使用している場合、そのアプリケーションを停止するか、別のポートを使用するように構成する必要があります。または、データベース・リスナーが 1521 以外のポートを使用するように変更することもできますが、これはインストール終了後に行います。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。</p>
静的ポートの競合	指定されている場合、インストーラにより、staticports.ini ファイルに一覧表示されているポートがチェックされます。staticports.ini ファイルおよびカスタムのポート番号の使用の詳細は、1.4.7 項を参照してください。

J2EE and Web Services のインストール

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の Oracle J2EE and Web Services をインストールする方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [J2EE and Web Services](#) コンポーネント
- [J2EE and Web Services](#) のインストール後の [OracleAS Portal](#) コンポーネントの追加
- [J2EE and Web Services](#) のインストール
- 次の作業

3.1 J2EE and Web Services コンポーネント

インストール・タイプが [Oracle J2EE and Web Services](#) の場合、次のコンポーネントがインストールされます。

- [Oracle HTTP Server](#)
[Oracle Application Server](#) の Web サーバー・コンポーネントです。
- [Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\)](#)
Java アプリケーション開発用の完全な [Java 2 Enterprise Edition \(J2EE\)](#) 環境を提供するコンポーネントです。
- [Oracle Enterprise Manager Application Server Control](#)
[Oracle Application Server](#) の Web ベースの管理に使用するコンポーネントです。

3.2 J2EE and Web Services のインストール後の OracleAS Portal コンポーネントの追加

[Oracle Application Server](#) のインストールでは、[J2EE and Web Services](#) のインストール後に [OracleAS Portal](#) および [Metadata Repository](#) を追加することはできません。インストールの実行前に、適切なインストール・タイプを判断する必要があります。

このような場合は、まず既存の [J2EE and Web Services](#) インストールを完全に削除してから、[OracleAS Portal](#) のいずれかのインストール・タイプを選択して新しいインストールを実行する必要があります。

3.3 J2EE and Web Services のインストール

この項では、J2EE and Web Services のインストール手順について説明します。

3.3.1 インストール前の作業

Oracle Application Server Standard Edition One の J2EE and Web Services のインストールを開始する前に、第 1 章「製品およびインストールの概要」と第 2 章「システムおよびインストール要件」の両方を読んでおく必要があります。これらの章には、インストールの開始前に理解しておく必要のある重要な情報が記載されています。これによって、インストール中に発生する可能性のある問題を回避することができます。

3.3.2 基本インストールの概要

表 3-1 に、J2EE and Web Services の基本インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、表 1-2 を参照）。

表 3-1 J2EE and Web Services の基本インストール

画面	操作
1	なし。 Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、5.1 項を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ Oracle ホームを指定して、「基本インストール」ボタンをクリックし、ドロップダウン・リストから「Oracle J2EE と Web サービス」を選択します。 インスタンス名と ias_admin パスワードを入力します。 このインストール画面の詳細は、5.2 項「「ようこそ」画面」を参照してください。
3	インストール なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 このインストール画面の詳細は、5.13 項を参照してください。
4	Configuration Assistant なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合があります。 このインストール画面の詳細は、5.14 項を参照してください。
5	インストールの終了 なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 このインストール画面の詳細は、5.15 項を参照してください。

3.3.3 拡張インストールの概要

表 3-2 に、J2EE and Web Services の拡張インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、表 1-2 を参照）。

表 3-2 J2EE and Web Services の拡張インストール

	画面	操作
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、5.1 項を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	「拡張インストール」ボタンを選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.2 項を参照してください。
3	インストールする製品の選択	「Oracle J2EE と Web サービス」を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.3 項を参照してください。
4	言語の選択	インストールする追加の言語を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.4 項を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定	ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 このインストール画面の詳細は、5.5 項を参照してください。
6	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	Oracle Application Server インスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。 このインストール画面の詳細は、5.6 項を参照してください。
7	サマリー	画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。 このインストール画面の詳細は、5.12 項を参照してください。
8	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、5.13 項を参照してください。
9	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合があります。 このインストール画面の詳細は、5.14 項を参照してください。
10	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 このインストール画面の詳細は、5.15 項を参照してください。

3.4 次の作業

インストールの完了後、**Oracle Universal Installer** を終了すると、ブラウザが起動して「ようこそ」ページが表示されます。「ようこそ」ページの詳細は、[7.2 項](#)を参照してください。

これ以降の作業は次のとおりです。

- 実行する必要があるインストール後の作業とその手順については、[第 6 章](#)を参照してください。
- インストールが正常に完了した後、**Oracle Application Server Standard Edition One** を構成および管理する方法については、[第 II 部](#)を参照してください。

[第 II 部](#)に記載された内容の詳細は、『**Oracle Application Server 管理者ガイド**』を参照してください。

OracleAS Portal のインストール

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の OracleAS Portal サービスをインストールする方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- OracleAS Portal コンポーネント
- Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用
- OracleAS Portal のインストール
- 次の作業

4.1 OracleAS Portal コンポーネント

OracleAS Portal をインストールすると、J2EE and Web Services のすべてのコンポーネントに加えて、次のコンポーネントがインストールされます。

- Oracle Instant Portal (Q42)
セキュアな公開およびコンテンツ共有用のポータルサイトの公開とカスタマイズに使用するコンポーネントです。
- Identity Management
ユーザーの作成、定義および管理に使用するコンポーネントです。
- Metadata Repository
Oracle Application Server Standard Edition One のデータベースとして機能するコンポーネントです。製品に含まれる Metadata Repository をインストールすることも、既存のデータベースを Metadata Repository として使用することもできます。
- OracleAS Web Cache
Oracle Application Server で実行する Web サイトのパフォーマンスおよび可用性を向上させるために、リバース・プロキシ・サーバーとして使用するコンポーネントです。

J2EE and Web Services のコンポーネントの詳細は、3.1 項を参照してください。

4.2 Metadata Repository に対する既存のデータベースの使用

OracleAS Metadata Repository を新規データベースまたは既存のデータベースにインストールできます。

既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、[第 III 部「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール」](#)を参照してください。既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal をインストールする場合、事前にこの手順を実行しておく必要があります。

4.3 OracleAS Portal のインストール

この項では、OracleAS Portal のインストール手順について説明します。

4.3.1 インストール前の作業

Oracle Application Server Standard Edition One の OracleAS Portal のインストールを開始する前に、第 1 章「製品およびインストールの概要」と第 2 章「システムおよびインストール要件」の両方を読んでおく必要があります。これらの章には、インストールの開始前に理解しておく必要のある重要な情報が記載されています。これによって、インストール中に発生する可能性のある問題を回避することができます。

4.3.2 基本インストールの概要

表 4-1 に、Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールに必要な手順の概要を示します。OracleAS Portal の 2 つのインストール・タイプのうち、基本インストールでは新しい Metadata Repository のみをインストールできます。Metadata Repository として既存のデータベースを使用する場合は、拡張インストールを実行する必要があります。

拡張インストールの手順については、4.3.4 項を参照してください。基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、表 1-2 を参照してください。

表 4-1 OracleAS Portal の基本インストール

手順	画面名	説明
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、5.1 項を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	Oracle ホームを指定して、「基本インストール」ボタンをクリックし、ドロップダウン・リストから「ID 管理とメタデータ・リポジトリを使用する Oracle Portal」を選択します。 インスタンス名と ias_admin パスワード、およびグローバル・データベース名とデータベース・パスワードを入力します。 このインストール画面の詳細は、5.2 項「「ようこそ」画面」を参照してください。
3	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 このインストール画面の詳細は、5.13 項を参照してください。
4	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合があります。 このインストール画面の詳細は、5.14 項を参照してください。
5	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 このインストール画面の詳細は、5.15 項を参照してください。

4.3.3 新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要

表 4-2 に、新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、表 1-2 を参照）。

表 4-2 OracleAS Portal の拡張インストール

	画面	操作
1	なし。	Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、5.1 項を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ	「拡張インストール」ボタンを選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.2 項を参照してください。
3	インストールする製品の選択	インストールする OracleAS Portal 製品を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.3 項を参照してください。
4	言語の選択	インストールする追加の言語を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.4 項を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定	ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 このインストール画面の詳細は、5.5 項を参照してください。
6	Internet Directory のネームスペースの指定	ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定する識別名 (DN) を指定します。 このインストール画面の詳細は、5.7 項を参照してください。
7	データベースの識別の指定	データベース名、キャラクタ・セットおよびファイルの場所を指定します。 詳細は、5.8 項を参照してください。
8	データベース・スキーマのパスワードの指定	権限付きデータベース・スキーマ (SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP) のパスワードを設定します。各スキーマに対して異なるパスワードを設定することも、すべてのスキーマに同じパスワードを設定することもできます。 このインストール画面の詳細は、5.9 項を参照してください。
9	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定	OracleAS Infrastructure および OracleAS Portal のインスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。 このインストール画面の詳細は、5.10 項を参照してください。
10	サマリー	画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。 このインストール画面の詳細は、5.12 項を参照してください。
11	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 詳細は、5.13 項を参照してください。
12	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する場合があります。 このインストール画面の詳細は、5.14 項を参照してください。
13	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示され、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 このインストール画面の詳細は、5.15 項を参照してください。

4.3.4 既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールの概要

表 4-3 に、既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の拡張インストールに必要な手順の概要を示します（基本インストールと拡張インストールの機能の概要については、表 1-2 を参照）。

注意： このインストールでは、OracleAS Portal をインストールする前に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、既存のデータベースに Metadata Repository を作成する必要があります。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は別の CD に収録されています。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の詳細は、第 III 部を参照してください。

表 4-3 OracleAS Portal の拡張インストール

画面	操作
1	なし。 Oracle Universal Installer を起動します。 詳細は、5.1 項を参照してください。
2	Oracle Application Server インストールへようこそ 「拡張インストール」ボタンを選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.2 項を参照してください。
3	インストールする製品の選択 インストールする OracleAS Portal 製品を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.3 項を参照してください。
4	言語の選択 インストールする追加の言語を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。 このインストール画面の詳細は、5.4 項を参照してください。
5	ポート構成オプションの指定 ポート構成ファイルの場所を指定することによって、ポートを自動で構成するか、手動で構成するかを選択します。 このインストール画面の詳細は、5.5 項を参照してください。
6	リポジトリの指定 既存の Metadata Repository の情報を指定します。 このインストール画面の詳細は、5.11 項を参照してください。
7	Internet Directory のネームスペースの指定 ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定する識別名 (DN) を指定します。 このインストール画面の詳細は、5.7 項を参照してください。
8	インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 OracleAS Infrastructure および OracleAS Portal のインスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。 このインストール画面の詳細は、5.10 項を参照してください。
9	サマリー 画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。 このインストール画面の詳細は、5.12 項を参照してください。

表 4-3 OracleAS Portal の拡張インストール (続き)

	画面	操作
10	インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。 このインストール画面の詳細は、 5.13 項 を参照してください。
11	Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールを停止する 場合を除きます。 このインストール画面の詳細は、 5.14 項 を参照してください。
12	インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかが表示さ れ、製品のリリース・ノートへのリンクが提供されます。 このインストール画面の詳細は、 5.15 項 を参照してください。

4.4 次の作業

インストールの完了後、**Oracle Universal Installer** を終了すると、ブラウザが起動して「ようこそ」ページが表示されます。「ようこそ」ページの詳細は、[7.2 項](#)を参照してください。

これ以降の作業は次のとおりです。

- **Oracle Instant Portal** を使用方法とその手順については、『**Oracle Instant Portal スタート・ガイド**』を参照してください。
- 実行する必要があるインストール後の作業とその手順については、[第 6 章](#)を参照してください。
- インストールが正常に完了した後、**Oracle Application Server Standard Edition One** を構成および管理する方法については、[第 II 部](#)を参照してください。

[第 II 部](#)に記載された内容の詳細は、『**Oracle Application Server 管理者ガイド**』を参照してください。

インストール画面

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の Oracle Universal Installer (OUI) の様々なインストール画面の例と、その説明を示します。

この章には、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール中の画面で入力を行う際に役立つ情報が記載されています。最初から最後まで読む必要はありません。J2EE and Web Services のインストール手順については、第 3 章を参照してください。OracleAS Portal のインストール手順については、第 4 章を参照してください。これらの章とともにこの章を使用して、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールを実行してください。

この章の概要は次のとおりです。

- Oracle Universal Installer の起動
- 「ようこそ」画面
- インストールする製品の選択
- 言語の選択
- ポート構成オプションの指定
- インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定 (J2EE and Web Services のインストールの場合)
- Internet Directory のネームスペースの指定
- データベース構成オプションの指定
- データベース・スキーマのパスワードの指定
- インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定 (OracleAS Portal のインストールの場合)
- リポジトリの指定
- サマリー
- インストール (進捗状況)
- Configuration Assistant
- インストールの終了

5.1 Oracle Universal Installer の起動

Oracle Universal Installer を起動するには、次の手順を実行します。

1. Windows の Administrators グループのメンバーであるユーザーとしてコンピュータにログオンします。

2. ディスクを挿入します。

CD-ROM ユーザーの場合 : Oracle Application Server Disk 1 を CD-ROM ドライブに挿入します。

DVD-ROM ユーザーの場合 : Oracle Application Server DVD-ROM を DVD-ROM ドライブに挿入します。

3. コンピュータで自動実行機能がサポートされている場合、インストーラが自動的に起動されます。

コンピュータで自動実行機能がサポートされていない場合は、次のとおりインストーラを手動で起動する必要があります。

注意： Oracle Database 10g がすでに実行されているコンピュータでインストーラを実行する場合は、次のオプションを指定してインストーラを起動する必要があります。

```
E:\> setup.exe -J-Dsun.java2d.noddraw=true -Dsun.awt.nopixfmt=true
```

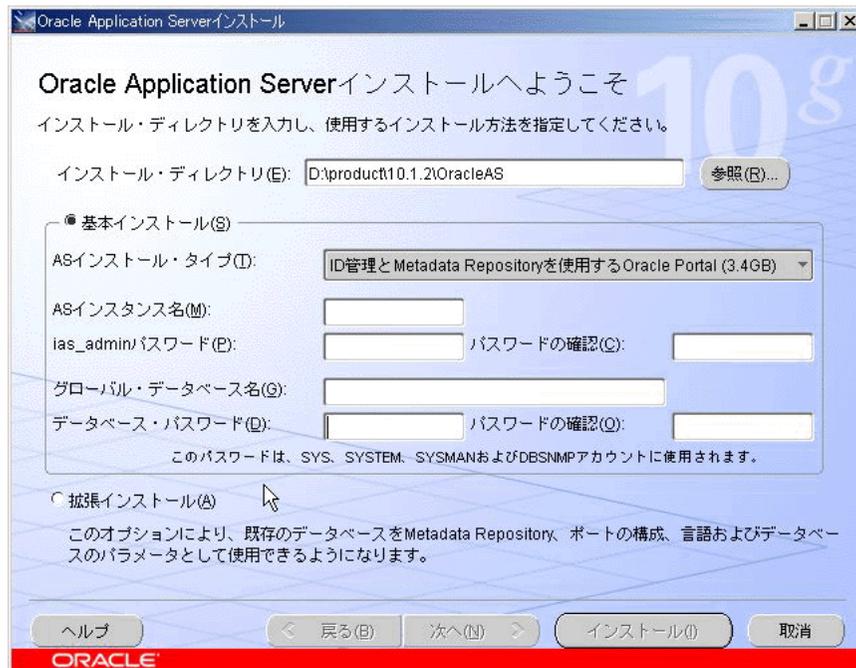
-J-Dsun.java2d.noddraw=true -Dsun.awt.nopixfmt=true オプションを指定しないでインストーラを起動すると、インストーラは表示されません。

CD-ROM ユーザーの場合 : setup.exe をダブルクリックします。

DVD-ROM ユーザーの場合 : application_server ディレクトリの setup.exe ファイルをダブルクリックします。

5.2 「ようこそ」画面

この画面は、インストール・プロセスの最初の画面です。ここでインストール・ディレクトリを入力し、基本インストールと拡張インストールのどちらを実行するかを選択します。



インストール・ディレクトリの指定

インストール・ディレクトリ（ソフトウェアのインストール先ディレクトリ）のフルパスを指定します。J2EE and Web Services のみをインストールする場合、このディレクトリが Oracle ホーム・ディレクトリになります。Oracle ホームの詳細は、1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照してください。

基本インストールまたは拡張インストールの選択

基本インストールと拡張インストールのどちらを実行するかを選択します。

基本インストールを選択する場合、この画面で情報を入力するように求められます。インストーラは、情報が取得できない場合は適切なデフォルト値を使用するか、または値を計算して、コンポーネントを構成します。基本インストールを実行する場合は、「基本インストール」ボタンをクリックします。インストールするサービスに応じて、5.2.1 項「J2EE and Web Services の基本インストールの実行」または 5.2.2 項「Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールの実行」に進んでください。

拡張インストールでは、高度なカスタマイズと柔軟性によって、追加の言語のインストール、ポート構成オプションの指定、Metadata Repository としての既存のデータベースの使用（Portal のインストールの場合のみ）、およびデータベース構成（Portal のインストールの場合のみ）が可能になります。デフォルト値を受け入れずにインストールをカスタマイズする場合は、「拡張インストール」ボタンを選択して、「次へ」ボタンをクリックします。5.3 項「インストールする製品の選択」に進んでください。

5.2.1 J2EE and Web Services の基本インストールの実行

J2EE and Web Services の基本インストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ドロップダウン・リストから「Oracle J2EE と Web サービス」を選択します。
2. J2EE and Web Services インスタンス名と ias_admin パスワードを入力します。インスタンス名の詳細は、1.4.3 項を参照してください。ias_admin ユーザーとパスワードの詳細は、1.4.4 項を参照してください。

インスタンス名と ias_admin パスワードを入力したら、ウィンドウ下部の「インストール」ボタンをクリックします。インストールが開始されます。

5.2.2 Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールの実行

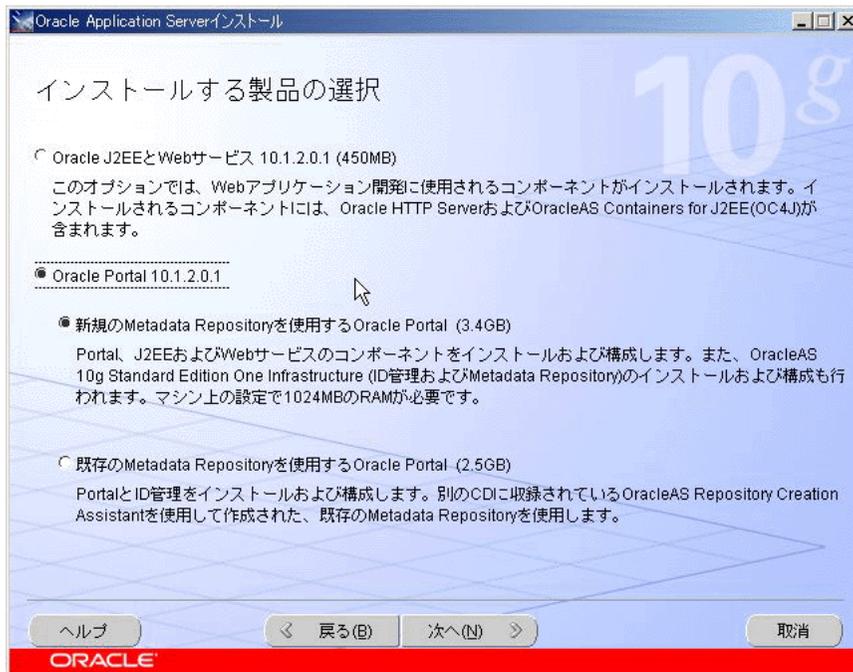
Identity Management および Metadata Repository を使用する OracleAS Portal の基本インストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ドロップダウン・リストから「ID 管理とメタデータ・リポジトリを使用する Oracle Portal」を選択します。
2. OracleAS Portal インスタンス名と ias_admin パスワードを入力します。インスタンス名の詳細は、1.4.3 項を参照してください。ias_admin ユーザーとパスワードの詳細は、1.4.4 項を参照してください。
3. グローバル・データベース名とパスワードを入力します。このパスワードは、SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP 権限付きデータベース管理アカウント（スキーマ）に使用されます。グローバル・データベース名とパスワードの詳細は、1.4.5 項を参照してください。

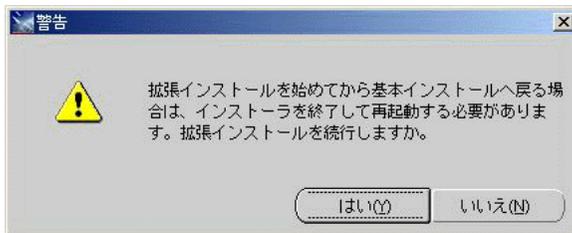
必要な情報を入力したら、ウィンドウ下部の「インストール」ボタンをクリックします。インストールが開始されます。

5.3 インストールする製品の選択

インストールする製品を選択して、「次へ」ボタンをクリックします。



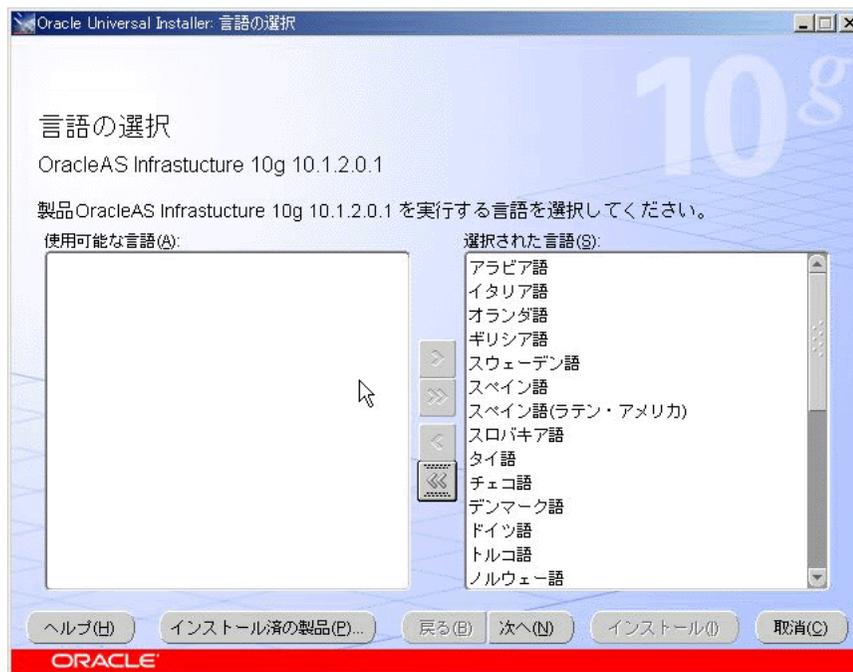
「次へ」ボタンをクリックすると、次の警告が表示されます。



「はい」をクリックして、拡張インストールを続行します。

5.4 言語の選択

インストールする追加の言語を選択します。

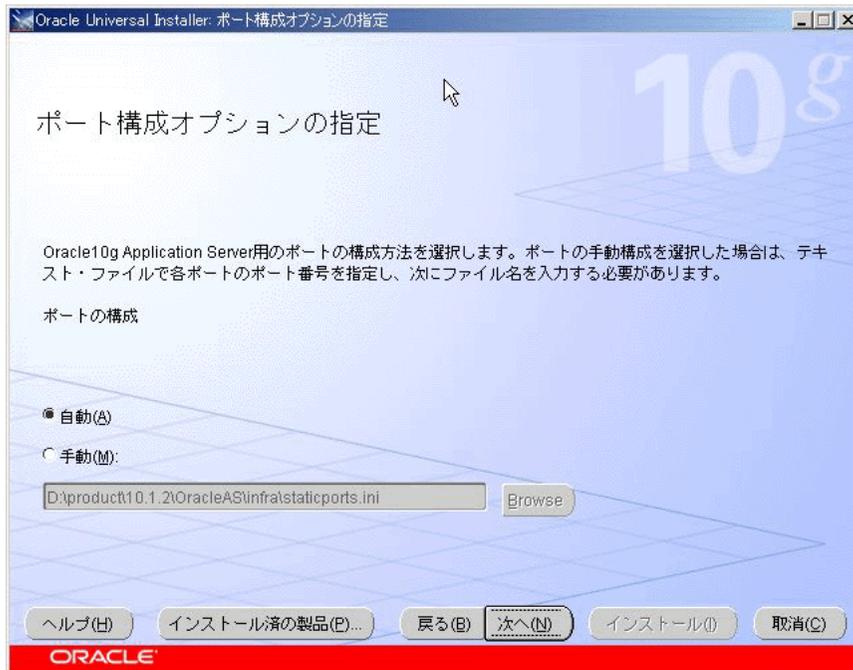


インストールの言語ではなく、インストールする製品の言語を選択することに注意してください。

選択したら、「次へ」ボタンをクリックします。

5.5 ポート構成オプションの指定

ポートの構成方法を選択します。

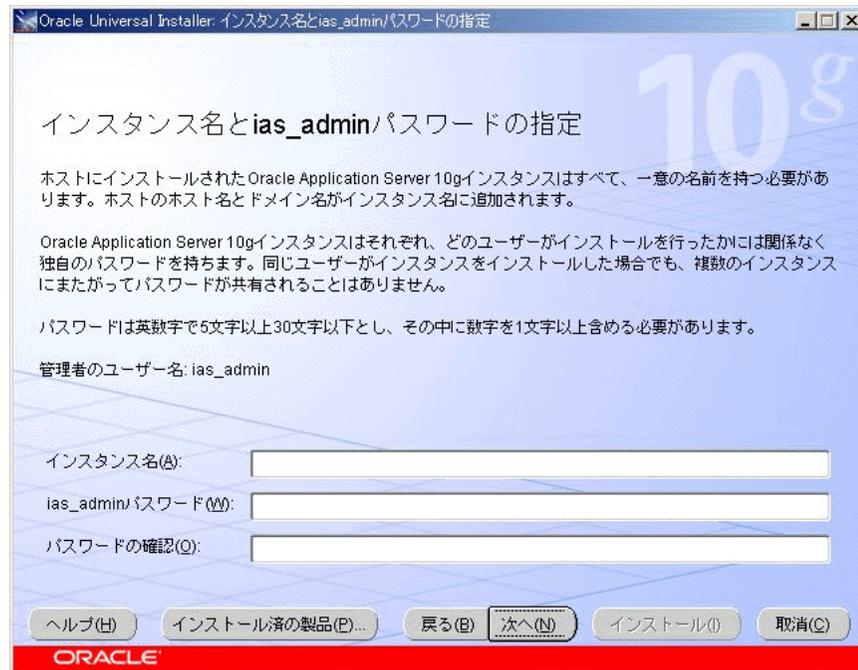


インストーラがポート番号を自動的に決定するように指定する場合は、「自動」をクリックします。デフォルトのすべてのポート番号および範囲のリストについては、[付録 C](#)を参照してください。

ポート番号をカスタマイズする場合は、「手動」をクリックします。各コンポーネントに使用するポート番号が含まれている既存のポート構成ファイルのフルパスおよびファイル名を指定する必要があります。通常、このポート構成ファイルは `staticports.ini` という名前ですが、ファイルの書式が正しければ任意の名前を使用できます。製品に付属している `staticports.ini` ファイルの詳細は、[1.4.7.5 項](#)を参照してください。

5.6 インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 (J2EE and Web Services のインストールの場合)

J2EE and Web Services インストールの Oracle Application Server インスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。



インスタンス名

インスタンス名によって、この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスが一意に識別されます。

インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項](#)を参照してください。

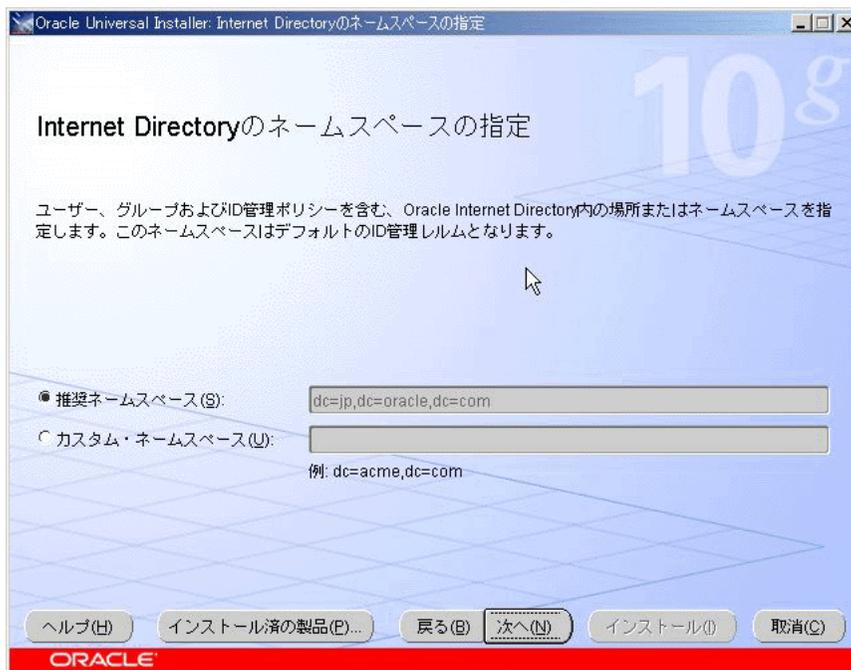
ias_admin パスワード

ias_admin ユーザーは、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの管理ユーザーです。Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用して Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを管理するには、ias_admin ユーザーとしてログインします。

ias_admin パスワードの詳細は、[1.4.4 項](#)を参照してください。

5.7 Internet Directory のネームスペースの指定

この画面で指定する識別名 (DN) は、ユーザーおよびグループを管理する Oracle Internet Directory 内のネームスペースに指定されます。

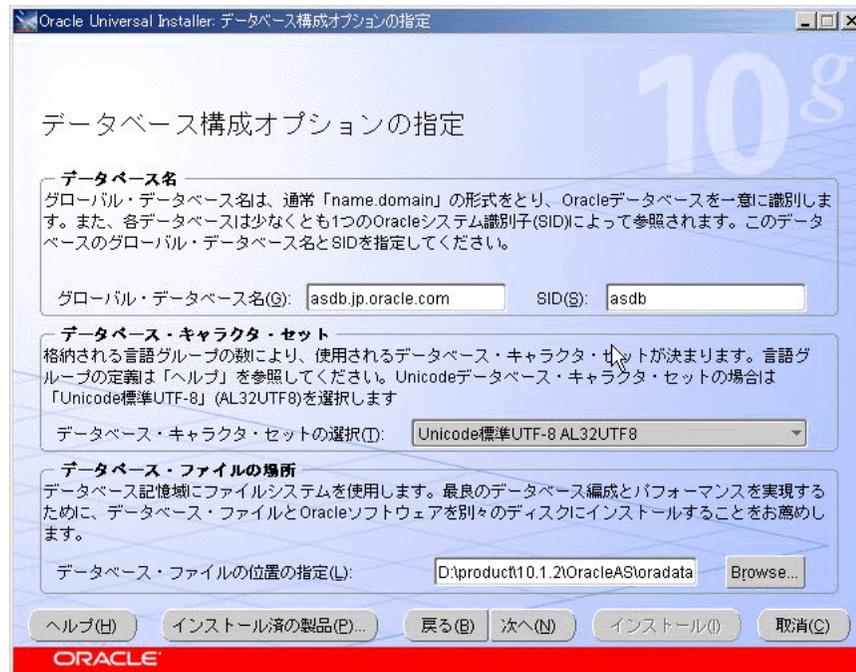


推奨されるネームスペースが配置要件を満たす場合は、そのネームスペースを選択します。そうでない場合は、「カスタム・ネームスペース:」フィールドに必要な DN を入力します。インストーラは、推奨されるネームスペースを %WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイルで確認します。2.5 項「%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル」を参照してください。

Identity Management コンポーネントをサード・パーティのディレクトリと統合する場合は、サード・パーティのディレクトリ内にあるデフォルトのネームスペースの DN に一致するネームスペースの DN を指定する必要があります。サード・パーティのディレクトリとの統合の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

5.8 データベース構成オプションの指定

グローバル・データベース名、キャラクタ・セットおよびデータ・ファイル・ディレクトリを指定します。



グローバル・データベース名

OracleAS Metadata Repository データベースの名前を入力します。ドメイン名をデータベース名に追加します。グローバル・データベース名でのこのドメイン名は、ご使用のネットワーク・ドメイン名とは異なる名前にすることができます。

グローバル・データベース名のドメイン名の部分には、次のネーミング制限があります。

- 英数字、アンダースコア (_) およびシャープ (#) 文字のみを使用できます。
- 最大 128 文字です。

グローバル・データベース名のデータベース名の部分には、次のネーミング制限があります。

- 英数字のみを使用できます。
- 最大 8 文字です。
- PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。

例: asdb.mydomain.com

注意: 2 つ以上のピリオドを一緒に入力しないでください (例: asdb..mydomain.com)。これに関してインストーラはチェックを行わないので、後で、これがインストール・プロセス中のエラーの原因になります。

SID

OracleAS Metadata Repository データベースのシステム識別子 (SID) を入力します。通常、これはグローバル・データベース名と同じですが、ドメイン名は含まれません。SID は、すべてのデータベースで一意である必要があります。

SID には、次のネーミング制限があります。

- 英数字のみを使用できます。
- 最大 8 文字です。

- PORT または HOST を大文字で使用することはできません。「host」または「port」を含む名前にする場合は、小文字を使用します。

例 : asdb

データベース・キャラクタ・セット

ドロップダウン・リストからキャラクタ・セットを選択します。

注意： NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットの文字を使用する場合は、データベースで **Unicode** キャラクタ・セット **AL32UTF8** を使用する必要があります。新しいデータベースをインストールする場合は、「データベース構成オプションの指定」画面で「**AL32UTF8**」を選択します。

これは、**Java** では NE8ISO8859P10 または CEL8ISO8859P14 キャラクタ・セットがサポートされていないためです。**Java** でサポートされていないキャラクタ・セットを使用するようにデータベースを構成すると、**OracleAS Portal** に「サポートされていない **IANA** キャラクタ・エンコーディング」エラーが表示されます。

データベース・ファイルの場所

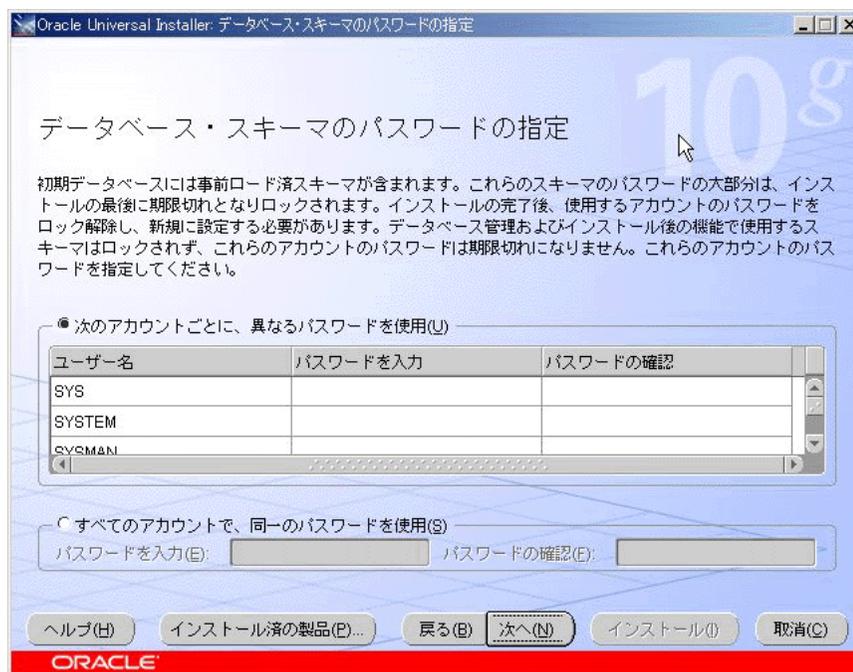
データ・ファイル・ディレクトリの親ディレクトリへのフルパスを入力します。この親ディレクトリはすでに存在している必要があり、このディレクトリへの書込み権限を所有している必要があります。

インストーラによって、この親ディレクトリにサブディレクトリが作成されます。サブディレクトリは **SID** と同じ名前になります。データ・ファイルは、このサブディレクトリに配置されます。

たとえば、**C:\oradata** と入力し、**SID** が **asdb** の場合、データ・ファイルは **C:\oradata\asdb** に配置されます。

5.9 データベース・スキーマのパスワードの指定

SYS、SYSTEM、SYSMAN および DBSNMP 権限付きデータベース管理アカウント（スキーマ）のパスワードを設定します。各アカウントに対して異なるパスワードを指定することも、すべてのアカウントに同じパスワードを使用することもできます。



各アカウントに対して異なるパスワードを指定する場合

「次のアカウントごとに、異なるパスワードを使用」を選択します。次に、表に一覧表示された各アカウントに対するパスワードを「パスワードを入力」列に入力し、「パスワードの確認」列に同じパスワードを再入力します。

すべてのアカウントに同じパスワードを指定する場合

「すべてのアカウントで、同一のパスワードを使用」を選択してから、パスワードを「パスワードを入力」フィールドに入力し、「パスワードの確認」フィールドに同じパスワードを再入力します。

パスワードの制限

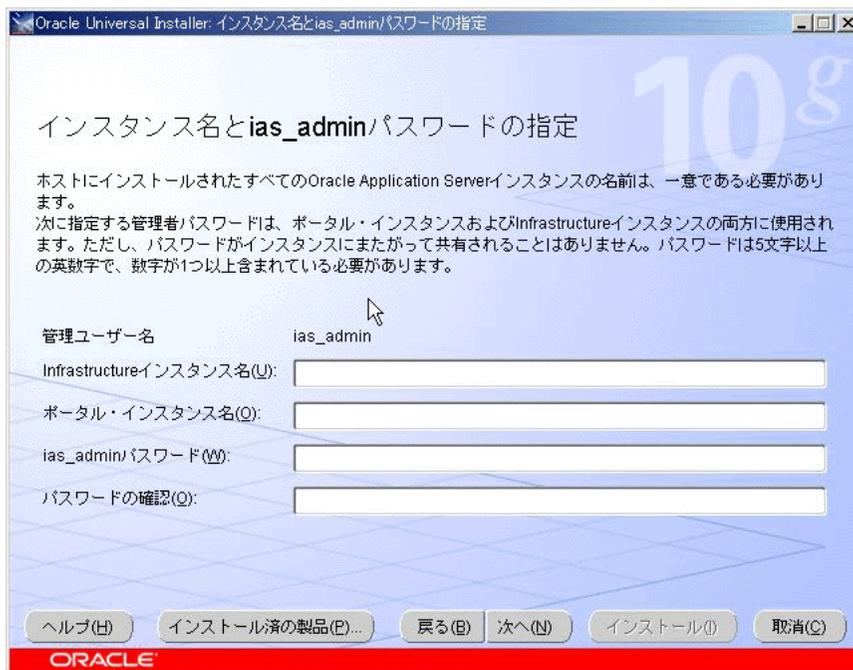
データベース・スキーマのパスワードには、次の制限があります。

- パスワードは 30 文字より短くします。
- パスワードには、データベース・キャラクタ・セットの英数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) およびシャープ記号 (#) のみを使用できます。
- パスワードは、アルファベット文字で始める必要があります。パスワードは、数字、アンダースコア (_)、ドル記号 (\$) またはシャープ記号 (#) から始めることはできません。
- パスワードに Oracle の予約語を使用することはできません。予約語については、『Oracle Database SQL リファレンス』のリストを参照してください。このマニュアルは、OTN (Oracle Technology Network) のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にあります。または、単に予約語のような形式の語の使用を避ける方法もあります。
- パスワードにデフォルトのパスワード (change_on_install および manager) を使用することはできません。

これらのスキーマ、およびそれ以外の使用可能なスキーマの詳細は、付録 E 「OracleAS Metadata Repository スキーマ」を参照してください。

5.10 インスタンス名と ias_admin パスワードの指定 (OracleAS Portal のインストールの場合)

OracleAS Infrastructure および OracleAS Portal のインスタンス名と ias_admin パスワードを指定します。



Infrastructure インスタンス名

このインスタンス名によって、OracleAS Infrastructure インスタンスが一意に識別されます。インスタンス名の詳細は、[1.4.3 項](#)を参照してください。

Portal のインスタンス名

このインスタンス名によって、OracleAS Portal インスタンスが一意に識別されます。OracleAS Portal インスタンス名の制限は、インフラストラクチャ・インスタンス名の要件と同じです。ただし、インフラストラクチャ・インスタンスと同じ名前を付けることはできません。

詳細は、[1.4.3 項](#)を参照してください。

ias_admin パスワード

ias_admin ユーザーは、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの管理ユーザーです。Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用して Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを管理するには、ias_admin ユーザーとしてログインします。

ias_admin パスワードの詳細は、[1.4.4 項](#)を参照してください。

5.11 リポジトリの指定

既存の Metadata Repository が含まれているデータベースの情報を指定します。

注意： インストーラにより、データベースに Metadata Repository が含まれていることがチェックされます。以前にインストーラを使用して Metadata Repository をインストールしているか、または Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して既存のデータベースに Metadata Repository をインストールしている場合があります。

この画面のすべてのフィールドは必須のフィールドで、有効なエントリを入力する必要があります。

ユーザー名

DBA ユーザーとしてログインします。

パスワード

DBA ユーザーのパスワードを入力します。

ホスト名とポート

データベースのホスト名およびポートを指定します。次の書式を使用します。

```
hostname:port
```

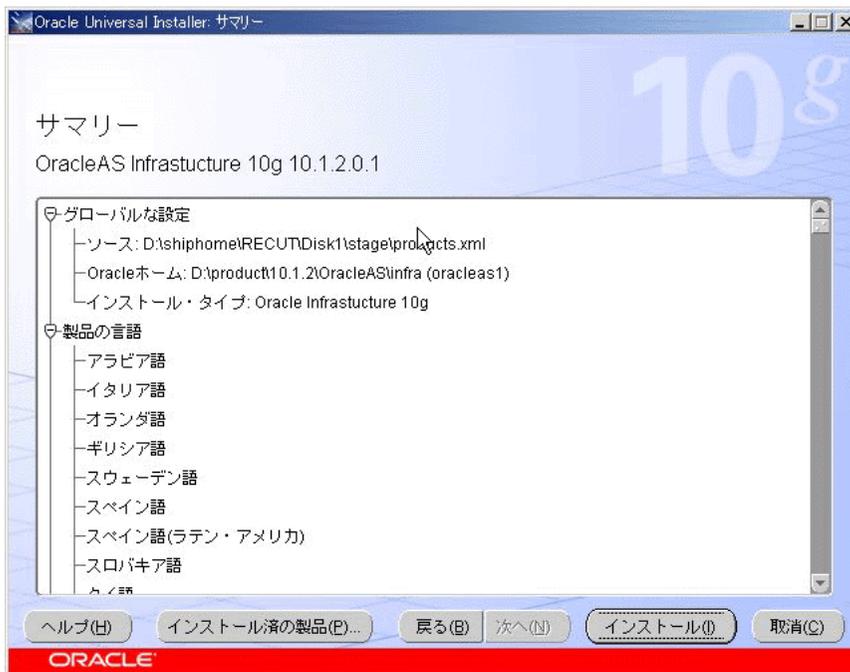
サービス名

Metadata Repository が含まれているデータベースのサービス名を指定します。通常、サービス名はグローバル・データベース名と同じです。

データベースのサービス名が不明な場合は、データベースの初期化パラメータ・ファイルの SERVICE_NAMES パラメータからサービス名を取得できます。初期化パラメータ・ファイルに SERVICE_NAMES パラメータがない場合、サービス名はグローバル・データベース名と同じです。グローバル・データベース名は、DB_NAME および DB_DOMAIN パラメータに指定されています。

5.12 サマリー

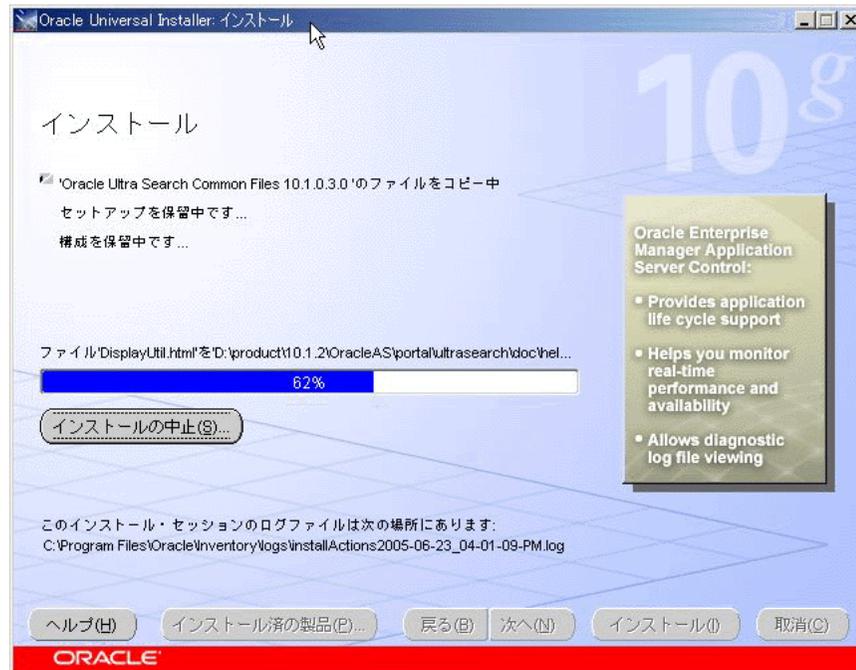
このウィンドウに表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認します。



「インストール」 ボタンをクリックして、インストールを開始します。

5.13 インストール（進捗状況）

この画面には、インストールの進捗状況が表示されます。



インストールを中断する場合は、「インストールの中止」をクリックします。インストールを中止するかどうかの確認が求められます。

この画面には、ログの内容を確認する場合に備えて、インストール・ログの場所も表示されます。

5.14 Configuration Assistant

この画面には、インストールの完了前に実行する推奨ツールと、任意で実行できるオプションの **Configuration Assistant** の名前、状態およびツール・タイプが表示されます。

注意： 最初に推奨ツールを実行してから、オプションのツールを実行します。推奨ツールは順番に実行する必要があります。推奨ツールを取り消した場合やその実行に失敗した場合、ユーザーは問題を修正し、そのツールを正常に実行してから、次のツールに進む必要があります。

注意： OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールする場合、インストール中に「**Configuration Assistant**」画面が 2 回表示されます。これは、**OracleAS Infrastructure** と中間層の両方がインストールされるためです。最初の「**Configuration Assistant**」画面はインフラストラクチャ・コンポーネント用、2 つ目は中間層コンポーネント用です。詳細は、**1.3 項「インストールの概要」**を参照してください。



「状態」列に示すように、ツールは次のいずれかの状態になっています。

- **成功しました**：ツールは正常に実行されました。
- **失敗しました**：ツールは実行されましたが、失敗しました。
- **保留中です**：ツールは実行を待機しています。
- **取り消されました**：ツールはユーザーが「停止」をクリックしたことによって取り消されました。
- **処理中です**：ツールは現在実行中です。
- **スキップしました**：このツールの前に実行していた **Configuration Assistant** が取り消されたか、または失敗しました。失敗または取り消されたツールの後のツールは、スキップされます。

ツールを選択すると、その詳細が「詳細」ボックスに表示されます。詳細はツールの実行中にも表示されます。実行中の **Configuration Assistant** を停止する場合は、「停止」をクリックしてください。

すべてのツールが最初の試行で正常に実行されると、**OUI** は自動的に次のページに進みます。そうでない場合は、すべてのツールが正常に実行されるまで、「**Configuration Assistant**」ページが表示されます。その後、「次へ」をクリックして、次のページに進むことができます。

ツールが 1 つでも失敗すると、**OUI** は次のページに進みません。その場合、失敗したツールの詳細を確認して問題を修正し、その **Configuration Assistant** を再度実行できます。ツールが失敗した場合の手順については、インストールする製品のインストール・ガイドも参照してください。**OUI** では、失敗またはスキップされたすべてのツールに対して、ツール名およびそのツールの実行に使用したコマンドのリストが生成されます。この情報をシェル・スクリプトまたはバッチ・ファイルに直接コピー / 貼付けして、インストールの完了後にこれらのツールを実行できます。

デフォルトでは、失敗またはスキップされたすべてのツールの「再試行」列のチェック・ボックスが選択されます。選択されたすべての **Configuration Assistant** を再試行するには、「再試行」をクリックします。

問題を修正せずに続行するには、「次へ」をクリックします。

注意： タイプ（推奨またはオプション）に関係なく、**Configuration Assistant** がすべて失敗した場合でも、インストールは正常に完了したとみなされます。ただし、すべての推奨ツールが正常に実行されないと、製品が適切に構成されず、機能しない場合があります。

5.15 インストールの終了

この画面には、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールが正常に完了したかどうかが表示され、インストールした製品に関する重要な情報が提供されます。たとえば、特定の Web アプリケーションの URL に関する情報などです。必要に応じて、この情報を書き留め、覚えておきます。

この情報は、`ORACLE_HOME\install\setupinfo.txt` ファイルでも確認できます。



インストールした製品のリリース・ノートを確認するには、「リリース情報」をクリックするか、または OTN のサイトのドキュメント・ページ (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) を参照してください。

「終了」をクリックして、**Oracle Universal Installer** を終了します。終了するかどうかの確認を求められます。**Oracle Universal Installer** を終了すると、ブラウザが起動して「ようこそ」ページが表示されます。「ようこそ」ページの詳細は、[7.2 項](#)を参照してください。

5.15.1 インストール後の作業

一部の Oracle 製品では、ソフトウェアのインストール後に追加の構成が必要になります。これらの **Configuration Assistant** は、インストールの完了時に自動的に実行される場合もありますが、「終了」をクリックした後、すぐにダイアログ・ボックスが表示され、この時点で **Configuration Assistant** を実行するかどうかを決定できる場合もあります。

インストールしたソフトウェアで追加の **Configuration Assistant** が必要な場合は、ダイアログ・ボックスが表示されます。ダイアログ・ボックスでは、必要な追加の **Configuration Assistant** を実行するように求められます。

インストール後の作業の詳細は、[第 6 章「インストール後の作業」](#)を参照してください。

5.15.2 トラブルシューティング情報

インストール、Configuration Assistant または製品全般に関する一般的な問題および解決策については、[付録 H「トラブルシューティング」](#)を参照してください。

インストール後の作業

この章の内容は次のとおりです。

- インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態
- インストール後のコンピュータの再起動
- Oracle Application Server コンポーネントのパスワード
- バックアップおよびリカバリ
- SSL の有効化
- 地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ
- インストール後のコンポーネントの構成
- インストール後の作業を必要とするコンポーネント
- 次の作業

6.1 インストール後の Oracle Application Server インスタンスの状態

インストール後、構成したコンポーネントが起動されます。

ブラウザに「ようこそ」ページおよび「Application Server Control」ページが表示されます。これらのページの URL は、インストーラの最後の画面に示されます。最後の画面の内容は、`ORACLE_HOME¥install¥setupinfo.txt` ファイルで確認できます。

Oracle Application Server の一部のコンポーネントは、Windows サービスとして実行されます。これらのコンポーネントは、「サービス」ダイアログ・ボックスで確認できます。「サービス」ダイアログ・ボックスを表示するには、次の手順を実行します。

Windows 2000 の場合：「スタート」→「プログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

Windows 2003 の場合：「スタート」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

Windows XP の場合：「スタート」→「すべてのプログラム」→「管理ツール」→「サービス」を選択します。

Oracle Application Server インスタンスを起動および停止するには、スクリプトまたは Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用します。詳細は、第 9 章または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

6.2 インストール後のコンピュータの再起動

インストール後にコンピュータを再起動する場合は、再起動時にすべてのコンポーネントが起動されるわけではありません。サービスのみが自動的に開始されます。サービスを使用していないコンポーネント（OracleAS Portal、Oracle Internet Directory など）は、手動で起動しないかぎりには停止したままです。プロセスの起動方法の手順と起動順序については、第 9 章または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

6.3 Oracle Application Server コンポーネントのパスワード

デフォルトでは、OracleAS Metadata Repository スキーマ・パスワードを除いて、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントのすべてのパスワードが、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンス・パスワード (ias_admin パスワード) と同じに設定されます。セキュリティ上の理由から、様々なコンポーネントのパスワードを異なる値に変更する必要があります。

インストールしたコンポーネントのパスワードを変更する方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』およびコンポーネントのマニュアルを参照してください。

6.4 バックアップおよびリカバリ

インストール後というのは、ファイルのバックアップを開始し、バックアップおよびリカバリの計画を立てるのによりタイミングです。バックアップおよびリカバリの詳細は、第 14 章または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

6.5 SSL の有効化

ほとんどのコンポーネントは、デフォルトでは SSL を使用するように構成されていません。SSL を有効にするには、第 13 章または『Oracle Application Server 管理者ガイド』の SSL に関する項を参照してください。

6.6 地域および言語オプションの設定および NLS_LANG パラメータ

アカウントの言語設定がシステムのデフォルト言語と一致することを確認します。NLS_LANG パラメータは、言語設定に基づいて Windows レジストリに自動的に定義されます。

インストール後、システムのデフォルト言語は変更しないでください。変更すると、NLS_LANG パラメータと言語設定で一貫性がなくなります。

言語およびロケールの設定の詳細は、1.4.6 項を参照してください。

6.7 インストール後のコンポーネントの構成

デフォルトでは、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール中に構成されないコンポーネントがあります。インストールの完了後に、これらのコンポーネントを構成できます。

6.7.1 mod_osso の構成 (Oracle Delegated Administration Services に必要)

Oracle Delegated Administration Services は、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を使用して構成できます。

Oracle Delegated Administration Services には Oracle Application Server Single Sign-On および mod_osso が必要です。mod_osso は、Single Sign-On server と通信する Oracle HTTP Server モジュールです。mod_osso が構成されていない場合は、それを構成してから、Oracle Delegated Administration Services を構成する必要があります。次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Single Sign-On が Oracle Internet Directory に対して構成されていることを確認します。これらの 2 つのコンポーネントをインストーラからインストールして構成した場合は、この処理は済んでいます。
2. Oracle Delegated Administration Services を構成する ORACLE_HOME で mod_osso が構成されているかどうか確認します。

ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥httpd.conf ファイル内の次の行を調べます。
ORACLE_HOME は、Oracle Delegated Administration Services を構成するディレクトリを指しています。

```
include "ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥mod_osso.conf"
```

その行が # で始まっている場合、その行はコメント・アウトされているため、mod_osso はこのインストールでは構成されていません。手順 3 を実行して mod_osso を構成します。

その行がコメント・アウトされていない場合、mod_osso は構成済みです。先に進み、Application Server Control を使用して Oracle Delegated Administration Services を構成できます。手順 5 に進みます。

3. mod_osso を手動で構成するには、次の手順を実行します。
 - a. 環境変数 ORACLE_HOME に Oracle Delegated Administration Services が構成されるディレクトリのフルパスを設定します。
 - b. 環境変数 PATH に %ORACLE_HOME%\lib が含まれるように設定します。
 - c. 次のコマンド（すべてを 1 行で）を実行します。**注意：**-classpath パラメータでは、セミコロン (;) の後に空白文字を入力しないでください (<no spaces> で示します)。

```
prompt> %ORACLE_HOME%\jdk\bin\java
-classpath .;%ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar;<no spaces>
%ORACLE_HOME%\lib\ojmisc.jar;<no spaces>
%ORACLE_HOME%\lib\repository.jar;<no spaces>
%ORACLE_HOME%\jee\home\jazn.jar;<no spaces>
%ORACLE_HOME%\jdk\lib\dt.jar;<no spaces>
%ORACLE_HOME%\jdk\lib\tools.jar;%ORACLE_HOME%\lib\inftratool.jar
oracle.ias.configtool.UseInfrastructure i
-f %ORACLE_HOME%\config\inftratool_mod_osso.properties
-h OIDhost -p OIDport -u OIDadminName -w OIDclearTextPassword
-o ORACLE_HOME -m ASinstanceName
-infra infraGlobalDBName -mh host -sso true
-sslp sslPort -sslf false
```

表 6-1 に、値を指定する必要があるパラメータを示します。

表 6-1 mod_osso を構成するためのパラメータ

パラメータ	説明
-h <i>OIDhost</i>	Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。この値は、 <i>ORACLE_HOME%\config\ias.properties</i> ファイルの <i>OIDhost</i> パラメータから判断できます。
-p <i>OIDport</i>	Oracle Internet Directory がリスニングしているポート番号を指定します。この値は、 <i>ORACLE_HOME%\config\ias.properties</i> ファイルの <i>OIDport</i> パラメータから判断できます。
-u <i>OIDadminName</i>	Oracle Internet Directory のログイン名を指定します。スーパーユーザー <i>cn=orcladmin</i> を使用します。
-w <i>OIDclearTextPassword</i>	Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードを指定します。
-o <i>ORACLE_HOME</i>	OracleAS Infrastructure がインストールされたディレクトリへのフルパスを指定します。
-m <i>ASinstanceName</i>	mod_osso を構成する OracleAS Infrastructure インスタンスの名前を指定します。この値は、 <i>ORACLE_HOME%\config\ias.properties</i> ファイルの <i>IASname</i> パラメータから判断できます。
-infra <i>infraGlobalDBName</i>	OracleAS Metadata Repository データベースの名前を指定します。この値は、 <i>ORACLE_HOME%\config\ias.properties</i> ファイルの <i>InfrastructureDBCommonName</i> パラメータから判断できます。
-mh <i>host</i>	Oracle Delegated Administration Services を構成するコンピュータの完全なホスト名（ドメイン名を含む）を指定します。

表 6-1 mod_osso を構成するためのパラメータ (続き)

パラメータ	説明
-sslp sslPort	Oracle Internet Directory の SSL ポートを指定します。この値は、 <code>ORACLE_HOME%\config\ias.properties</code> ファイルの <code>OIDsslport</code> パラメータから判断できます。

4. OC4J および Oracle HTTP Server を再起動します。これには、`opmnctl` コマンドを使用します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=OC4J
C:\> %ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=HTTP_Server
```

5. `mod_osso` が構成されたら、Application Server Control を使用して Oracle Delegated Administration Services を構成できます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

6.8 インストール後の作業を必要とするコンポーネント

Oracle Application Server Standard Edition One で Oracle Ultra Search を使用する予定の場合は、インストール後 (Oracle Ultra Search を使用する前) に、このコンポーネントに固有のいくつかの手順を実行する必要があります。詳細は、『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』を参照してください。

6.9 次の作業

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールした後で、[第 II 部](#)および『Oracle Application Server 管理者ガイド』を読む必要があります。特に、[第 II 部](#)と『Oracle Application Server 管理者ガイド』の両方の「始めに行うこと」という章を読む必要があります。

また、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後に環境の完全なバックアップを行う必要があります。これにより、万一何か異常が発生した場合に作業環境をリストアできます。環境の完全なバックアップの方法の詳細は、[第 14 章](#)または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

環境の完全なバックアップは、パッチセットのアップグレードが正常に行われた後や構成変更が正常に行われた後にも実行する必要があります。

第II部

Oracle Application Server Standard Edition One で始めに行うこと

第 II 部では、Oracle Application Server Standard Edition One の管理および構成について説明します。内容は次のとおりです。

- 第 7 章「始めに行うこと」
- 第 8 章「管理ツールの使用」
- 第 9 章「起動と停止」
- 第 10 章「HTTP ポートおよびリスナー設定の変更」
- 第 11 章「ログ・ファイルの表示」
- 第 12 章「ネットワーク構成の変更」
- 第 13 章「SSL の有効化」
- 第 14 章「バックアップおよびリカバリ」

始めに行うこと

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後に実行する必要がある作業について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 環境変数の設定
- Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用方法
- ポート番号の確認
- コンポーネントの管理で始めに行うこと
- `ias_admin` パスワードの変更

7.1 環境変数の設定

Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。Oracle Application Server Standard Edition One を使用するには、表 7-1 に示す環境変数を設定する必要があります。

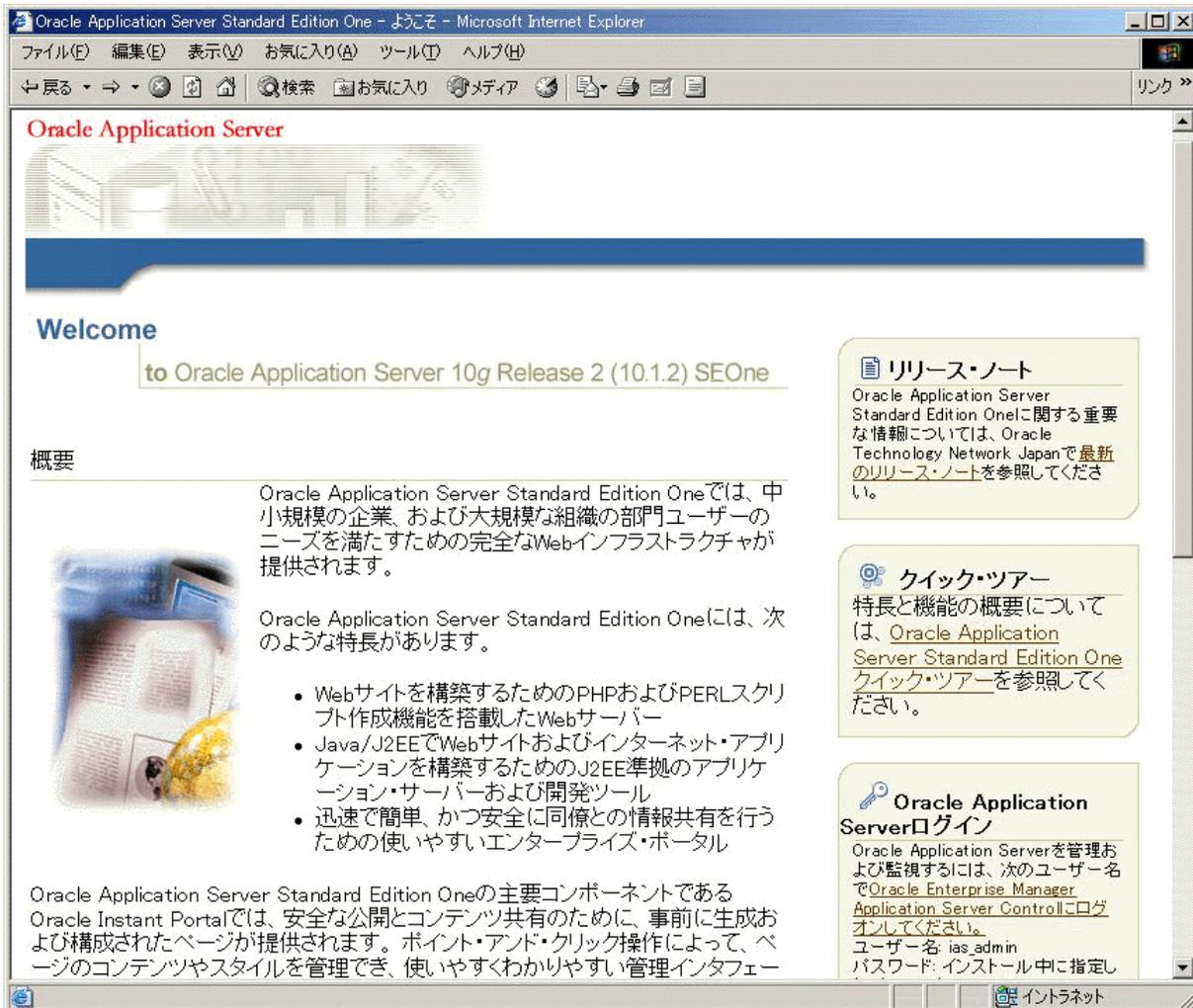
表 7-1 Windows の Oracle Application Server 環境変数

環境変数	値
ORACLE_HOME	インストールの Oracle ホームのフルパスを設定します。 この環境変数は Oracle Universal Installer によって自動的に設定されます。
ORACLE_SID (OracleAS Portal のインストールの場合のみ)	OracleAS Metadata Repository SID を設定します。デフォルトは <code>orcl</code> です。 この環境変数は Oracle Universal Installer によって自動的に設定されます。
TEMP	一時ディレクトリ (C:\temp など) を設定します。
TMP	一時ディレクトリ (C:\temp など) を設定します。

7.2 Oracle Application Server の「ようこそ」ページの使用方法

Oracle Application Server の「ようこそ」ページからは、[図 7-1](#) に示すようなアプリケーション・サーバーの管理を簡単に行うことができます。

図 7-1 Oracle Application Server の「ようこそ」ページ



7.2.1 「ようこそ」ページへのアクセス

「インストールの終了」画面に、「ようこそ」ページにアクセスする URL が表示されます。この URL は、`ORACLE_HOME¥install¥setupinfo.txt` ファイルでも確認できます。

「ようこそ」ページにアクセスできない場合は、次の手順を実行します。

1. `setupinfo.txt` で、正しい URL を使用していることを確認します。
2. 次のコマンドを実行して、Oracle HTTP Server を再起動します。

```
opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
opmnctl startproc ias-component=HTTP_Server
```

7.2.2 「ようこそ」 ページの内容

「ようこそ」 ページには、Oracle Application Server Standard Edition One の製品およびドキュメントの概要に加えて、次のリンクが表示されます。

- Oracle Technology Network のサイト
(<http://www.oracle.com/technology/documentation>) にある製品の最新のリリース・ノートへのリンク
- 使用可能な機能の概要を説明する Oracle Application Server Standard Edition One クイック・ツアーへのリンク
- Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを管理および監視できる Application Server Control コンソールへのリンクとログイン情報
- Oracle Instant Portal を管理および監視できる Oracle Instant Portal へのリンクとログイン情報
- アプリケーションへのユーザー・アクセスを管理できる Oracle Application Server Single Sign-On へのリンクとログイン情報

7.3 ポート番号の確認

インストール中、Oracle Application Server Standard Edition One では、様々なコンポーネントおよびサービスにポート番号が割り当てられます。これらのポート番号を確認して、Oracle Application Server Standard Edition One を管理し、ポート番号の割当てが Oracle Application Server 以外のプロセスと競合しないようにします。ポート番号の変更については、[第 10 章](#)を参照してください。

各コンポーネントおよびサービスには、ポートの範囲が割り当てられています。Oracle Application Server Standard Edition One は、最初にコンポーネントのポートの範囲内の最小のポート番号をチェックします。そのポート番号がすでに使用されている場合、Oracle Application Server Standard Edition One は、割り当てられたポートの範囲内で次に大きいポートに移動し、空きポートが検出されるまでチェックを続行します。

ポート番号の完全なリストは、`ORACLE_HOME\install\portlist.ini` ファイルで確認できます。[例 7-1](#)に、`portlist.ini` ファイルの例を示します。

例 7-1 portlist.ini ファイルの例

```
;OracleAS Components reserve the following ports at install time.
;As a post-installation step, you can reconfigure a component to
;use a different port.
;Those changes will not be visible in this file.
```

```
[System]
Host Name = seone-pc.us.oracle.com

[Ports]
Oracle HTTP Server port = 7777
Oracle HTTP Server Listen port = 7777
Oracle HTTP Server SSL port = 4443
Oracle HTTP Server Listen (SSL) port = 4443
Oracle Notification Server Request port = 6003
Oracle Notification Server Local port = 6100
Oracle Notification Server Remote port = 6200
Oracle HTTP Server Diagnostic port = 7200
Log Loader port = 44000
Java Object Cache port = 7000
DCM Discovery port = 7100
Enterprise Manager Agent Port = 1830
Application Server Control RMI port = 1850
Application Server Control port = 1810
Oracle Internet Directory port = 3060
```

Oracle Internet Directory (SSL) port = 3130
Enterprise Manager Console HTTP Port (seonedb) = 5500
Enterprise Manager Agent Port (seonedb) = 1831

portlist.ini ファイルには、インストールされていないコンポーネントのポート番号も含まれています。これは、構成されていないコンポーネントも含めて、インストール中に **Oracle Application Server Standard Edition One** によってすべてのコンポーネントのポートが予約されるためです。これらのポート番号は、インストール後にコンポーネントを構成すると、使用されます。

注意： portlist.ini ファイルは、インストール後にポート番号を変更しても、更新されません。アプリケーション・サーバーの管理の開始後は、**Application Server Control** コンソールの「ポート」ページを使用してポート番号を確認してください。このページには、現行のポート番号が表示されます。「ポート」ページを表示するには、**Application Server** ホーム・ページ上の「ポート」リンクをクリックします。このページには、ポート番号を変更できるページへのリンクも表示されます。

7.4 コンポーネントの管理で始めに行うこと

この項では、コンポーネントの管理の概要を示します。ここでは、コンポーネント管理ツールにアクセスする手順と、コンポーネントに関するインストール後の注意事項について説明します。コンポーネントは、選択したサービスに応じてインストールされます。

インストールされるコンポーネントの詳細は、[1.3 項](#)を参照してください。

どのインストールでもデフォルトでインストールされるコンポーネントがあります。たとえば、次のコンポーネントです。

- [Oracle Process Manager and Notification Server \(OPMN\)](#)
- [Distributed Configuration Management \(DCM\)](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\)](#)

7.4.1 Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)

OPMN では、ほとんどの **Oracle Application Server** コンポーネントを管理および監視できます。これは、**Oracle Application Server** の実行に不可欠なコンポーネントであるため、中間層およびインフラストラクチャのインストール時には常にインストールおよび構成されます。OPMN を使用して、アプリケーション・サーバーの起動と停止、コンポーネントの監視、およびイベント・スクリプトの構成を行うことができます。

OPMN の詳細は、『[Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド](#)』を参照してください。

7.4.2 Distributed Configuration Management (DCM)

DCM では、アプリケーション・サーバー・インスタンス、**OracleAS** クラスタ、**Oracle HTTP Server**、**Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)**、**Oracle Application Server Java Authentication and Authorization Service (JAAS) Provider (JAZN)** および **OPMN** の構成情報を管理できます。DCM を使用して、構成情報の保存とリストア、アプリケーションの配置、およびクラスタの管理を行うことができます。

DCM は、**Oracle Application Server Standard Edition One** とともに常にインストールおよび構成されます。DCM のすべてのインストールで、DCM リポジトリが使用されます。DCM リポジトリには、次の 2 つのタイプがあります。

- データベース：このリポジトリは、DCM スキーマの **OracleAS Metadata Repository** に格納されます。このリポジトリは **OracleAS Portal** インストールで使用されます。

- ファイルベース: このリポジトリは、Oracle ホームのファイル・システムに格納されます。インストール中、`dcmctl saveInstance` コマンドを実行すると、DCMによって初期構成のコピーが作成されます。初期構成に戻す場合は、`dcmctl restoreInstance` コマンドを実行します。
- DCM コマンドの詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

7.4.3 Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール時に常にインストールおよび構成されます。Oracle HTTP Server には、`http://hostname.domain:port` からアクセスできます。ここで、`port` は、`portlist.ini` ファイル内の Oracle HTTP Server リスナーのポート番号です。

7.4.4 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

OC4J は、完全な J2EE 環境です。選択するインストール・タイプに応じて、異なる OC4J インスタンスがインストールされます。

- J2EE and Web Services のみをインストールする場合、OC4J ホーム・インスタンスが中間層インスタンスにインストールされます。
- OracleAS Infrastructure とともに OracleAS Portal をインストールする場合、ホーム・インスタンスおよび `OC4J_Portal` インスタンスが中間層インスタンスに、`OC4J_SECURITY` インスタンスが OracleAS Infrastructure インスタンスにインストールされます。

詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

7.5 ias_admin パスワードの変更

`ias_admin` パスワードは、Oracle Application Server Control コンソールへのログイン時に使用します。`ias_admin` ユーザー・パスワードは、次の方法で変更できます。

- [Application Server Control コンソールの使用](#)
- [emctl コマンドライン・ツールの使用](#)

注意: OracleAS Infrastructure を使用する場合は、`ias_admin` パスワードの設定時に、Oracle Internet Directory パスワード・ポリシーに従う必要があります。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

7.5.1 Application Server Control コンソールの使用

`ias_admin` ユーザー・パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. Application Server ホーム・ページに移動して、「プリファレンス」を選択します。次に、「パスワードの変更」をクリックします。「パスワードの変更」ページが表示されます。
2. パスワードを変更して「OK」をクリックし、現行のインスタンスのパスワードを再設定します。

7.5.2 emctl コマンドライン・ツールの使用

`ias_admin` ユーザー・パスワードを変更するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Standard Edition One インストールの Oracle ホームで次のコマンドを入力します。

```
ORACLE_HOME%bin%emctl set password old_password new_password
```

2. Oracle Application Server Control コンソールを再起動します。

```
ORACLE_HOME%bin%emctl stop iasconsole  
ORACLE_HOME%bin%emctl start iasconsole
```

管理ツールの使用

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の管理に使用できる管理ツールについて説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Enterprise Manager Application Server Control の理解](#)
- [Application Server Control コンソールの理解](#)
- [基礎となるソフトウェア・テクノロジーの理解](#)
- [Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理](#)

8.1 Oracle Enterprise Manager Application Server Control の理解

Oracle Application Server Standard Edition One および Oracle 環境全体を管理する主要なツールは、Oracle Enterprise Manager Application Server Control です。Oracle Enterprise Manager Application Server Control の主要なコンポーネントは、Application Server Control コンソールです。このコンソールを使用すると、個々の Oracle Application Server インスタンスを管理できます。

Oracle Enterprise Manager Application Server Control の構成内容は次のとおりです。

- [Application Server Control コンソール](#)
詳細は、[8.2 項「Application Server Control コンソールの理解」](#)を参照してください。
- [基礎となるソフトウェア・テクノロジー](#)
詳細は、[8.3 項「基礎となるソフトウェア・テクノロジーの理解」](#)を参照してください。

8.2 Application Server Control コンソールの理解

Application Server Control コンソールは、様々なパフォーマンス・データおよび管理機能を編成して、各アプリケーション・サーバー・コンポーネントに対し、Web ベースのホーム・ページを個別に構成します。単一の Oracle Application Server インスタンス、アプリケーション・サーバー・インスタンスのファーム、または OracleAS クラスタを監視および管理できます。

Web ベースのホーム・ページは、Application Server Control ホーム・ページと呼ばれ、通常使用する管理機能に Web ブラウザからアクセスできます。Application Server Control ホーム・ページでは、Oracle Application Server Standard Edition One 環境の上位レベル・ビューが提供されます。

この項の内容は次のとおりです。

- [Application Server Control ホーム・ページ](#)
- [Application Server Control コンソールの表示](#)
- [Application Server ホーム・ページの使用](#)
- [Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用](#)

- [Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用](#)
- [Application Server Control コンソールによる監視および診断](#)

8.2.1 Application Server Control ホーム・ページ

Oracle Application Server Standard Edition One は、ビジネスのあらゆる側面の運営に役立つように設計された、様々なソフトウェア・ソリューションを提供します。そのため、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンス全体、特定のコンポーネントのみといった、様々な詳細レベルで Oracle Application Server Standard Edition One を管理できます。

このような複数のレベルの管理をサポートするには、Application Server Control ホーム・ページを使用します。各ホーム・ページでは、特定の管理の詳細レベルから Oracle Application Server Standard Edition One のパフォーマンスおよび可用性を監視するために必要な情報が提供されます。また、Application Server Control ホーム・ページでは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントの構成用のツールも提供されます。

Application Server Control コンソールで使用できるホーム・ページは、次のとおりです。

- **Application Server ホーム・ページ**: 個々のアプリケーション・サーバー・インスタンスのあらゆる側面を管理できます。
詳細は、[8.2.3 項](#)を参照してください。
- **OracleAS Farm ページ**: ネットワーク上の関連する一連のアプリケーション・サーバー・インスタンスを表示したり、Web アプリケーションの構成およびデプロイを高速化するクラスタを作成できます。
詳細は、[8.2.4 項](#)を参照してください。
- **コンポーネント・ホーム・ページ**: アプリケーション・サーバーの個々のコンポーネントを監視または構成できます。たとえば、Oracle HTTP Server ホーム・ページを使用すると、Web サーバーのパフォーマンスを監視できます。同様に、Oracle Containers for J2EE (OC4J) ホーム・ページを使用すると、Web ベースのカスタム・アプリケーションをデプロイできます。
詳細は、[8.2.5 項](#)を参照してください。

8.2.2 Application Server Control コンソールの表示

Application Server Control コンソールの URL は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール手順の最後に表示されるテキスト・ファイルに含まれています。このテキスト・ファイルは、インストールの完了後、次の場所に保存されます。

```
ORACLE_HOME¥install¥setupinfo.txt
```

Application Server Control コンソールの URL には、通常、ホスト・コンピュータ名と、インストール中に Application Server Control コンソールに割り当てられたポート番号が含まれます。たとえば、次のようになります。

```
http://mgmthost1.acme.com:1810
```

注意: Application Server Control コンソールのデフォルトのポートは、通常、1810 です。ただし、このポートがすでに使用されている場合、インストール手順では別のポートが割り当てられます。Oracle Application Server Standard Edition One インストールの正確なポートについては、setupinfo.txt ファイルを参照してください。

Application Server Control コンソールを初めて表示する場合、表示されるページは、実行したインストール・タイプによって異なります。表 8-1 に、Application Server Control コンソールへの初回アクセス時に開始点として使用されるホーム・ページを示します。

表 8-1 Oracle Application Server の管理用の Application Server Control ホーム・ページ

Application Server Control ホーム・ページ	説明
Application Server ホーム・ページ	単一のアプリケーション・サーバー・インスタンスを監視および構成できます。 詳細は、 8.2.3 項 を参照してください。 J2EE and Web Services のみをインストールしている場合、Application Server ホーム・ページが最初に表示されます。
OracleAS Farm ページ	共通の OracleAS Metadata Repository を使用するすべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスのリストを表示できます。 詳細は、 8.2.4 項 を参照してください。 使用可能な OracleAS Portal サービスのいずれかをインストールしている場合、Farm ホーム・ページが最初に表示されます。

8.2.3 Application Server ホーム・ページの使用

図 8-1 に示すように、Application Server ホーム・ページからは、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの起動と停止、サーバー全体のパフォーマンスの監視、およびサーバーのコンポーネントの確認を行うことができます。また、個々のコンポーネントの構成や、それらのパフォーマンスの確認も行うことができます。

図 8-1 Application Server ホーム・ページ

ページリフレッシュ 2005/08/01 16:20:55

一般

すべてを停止(D) すべてを再起動(R)

ステータス **稼働中**
 ホスト [wptgqa01.jp.oracle.com](#)
 インストールタイプ **Portal**
 Oracleホーム **D:\product\10.1.2\OracleAS\portal**
 ファーム [asclb.jp.oracle.com](#)

CPU使用率

Application Server (5%)
アイドル(68%)
その他(27%)

メモリー使用量

Application Server (41% 415MB)
空き(1% 15MB)
その他(58% 592MB)

システム・コンポーネント

コンポーネントの有効化/無効化(E) OC4Jインスタンスの作成(C)

起動(A) 停止(P) 再起動 OC4Jインスタンスの削除(D)

すべて選択 | 選択解除

選択	名前	ステータス	開始時間	CPU使用率(%)	メモリー使用量(MB)
<input type="checkbox"/>	home	↑	2005/08/01 16:08:44	0.34	28.47
<input type="checkbox"/>	HTTP_Server	↑	2005/08/01 16:08:44	0.26	59.82
<input type="checkbox"/>	OC4J_Portal	↑	2005/08/01 16:08:44	0.11	66.07
<input checked="" type="checkbox"/>	Portal_portal	↑	N/A	N/A	N/A
<input type="checkbox"/>	Web_Cache	↑	2005/08/01 16:08:44	0.00	49.28
<input checked="" type="checkbox"/>	管理	↑	2005/08/01 16:10:10	4.48	211.47

☑ ヒント この表には、アプリケーション・サーバーの有効コンポーネントのみが含まれます。チェックボックスが選択されているコンポーネントのみを起動または停止できます。

関連リンク

- プロセス管理
- すべてのリンク

ホーム J2EEアプリケーション ポータル Infrastructure バックアップ/リカバリ

このページには、アプリケーション・サーバーのコンポーネントがリストされた「システム・コンポーネント」表があります。この表から、各コンポーネントの実行状況のスナップショットを取得することもできます。また、アプリケーション・サーバーの各コンポーネントのホーム・ページを表示することもできます。

Application Server ホーム・ページから実行できる管理機能は、次のとおりです。

- ページ上部の「ログ」をクリックすると、様々な Oracle Application Server ログ・ファイルおよび Oracle Application Server ログ・リポジトリを検索できます。
詳細は、第 11 章「ログ・ファイルの表示」を参照してください。
- 「トポロジ」をクリックすると、トポロジ・ビューアを表示できます。このビューアでは、OPMN によって管理されるアプリケーション・サーバー・プロセスがグラフィカルに表示されます。
詳細は、8.2.6.1 項「アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認」を参照してください。
- 「プリファレンス」をクリックすると、パスワードを変更したり、トポロジ・ビューア (HTML または Java) の表示プリファレンスを設定できます。
- 「J2EE アプリケーション」をクリックすると、Oracle Application Server Standard Edition One のこのインスタンスでデプロイしたアプリケーションのリストを表示できます。
- 「ポート」をクリックすると、様々な Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントで現在使用されているすべてのポートのリストを表示できます。必要に応じて、ポートの割当ての多くを変更することもできます。
- 「インフラストラクチャ」をクリックすると、Identity Management、Central Management または Oracle Application Server のクラスタ機能を使用できます。
- 「コンポーネントの有効化/無効化」をクリックすると、選択したコンポーネントが自動的に起動されるか、「すべてを起動」や「すべてを再起動」などのサーバー全体の操作に影響されるかを制御できます。
- 「バックアップ/リカバリ」をクリックすると、Oracle Application Server Standard Edition One のデータおよび構成ファイルのバックアップまたはリカバリを実行できます。

詳細は、第 14 章「バックアップおよびリカバリ」を参照してください。

詳細は、Application Server ホーム・ページでオプションを選択した後、「ヘルプ」をクリックしてください。

8.2.4 Oracle Application Server Farm ホーム・ページの使用

アプリケーション・サーバー・インスタンスで OracleAS Metadata Repository を使用する場合、Application Server Control コンソールの開始ページは、図 8-2 に示す OracleAS Farm ページになります。

Oracle Application Server Farm ホーム・ページには、OracleAS Infrastructure に関連付けられたスタンドアロンのアプリケーション・サーバー・インスタンスおよび OracleAS クラスタのリストが表示されます。スタンドアロンのインスタンスとは、OracleAS クラスタに属さないアプリケーション・サーバー・インスタンスです。

Application Server ホーム・ページで「インフラストラクチャ」をクリックすることによって、OracleAS Infrastructure を使用できるように Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを構成できます。詳細は、Application Server Control のオンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Application Server Farm ホーム・ページを使用して、各インスタンスの Application Server ホーム・ページにドリルダウンできます。

図 8-2 OracleAS Farm ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control

トポロジ プリファレンス ヘルプ

ファーム: asdb.jp.oracle.com

スタンドアロン・インスタンスを共通のリポジトリで構成することにより、インスタンスをグループ化して一緒に管理できます。このインスタンスの集合は、Oracle Application Server ファームと呼ばれます。

リポジトリ・タイプ データベース
クラスタ

クラスタの作成(C)

選択 名前	ステータス	インスタンス
このファームにはクラスタがありません。		

スタンドアロン・インスタンス
これらのインスタンスはファームに属しますが、クラスタの一部ではありません。

(クラスタへの結合(J))

選択 名前	ホスト	Oracle ホーム
<input checked="" type="radio"/> WPTG1QA01_infra_asdb.wptgqa01.jp.oracle.com	wptgqa01.jp.oracle.com	D:\product\10.1.2\OracleAS\infra
<input type="radio"/> WPTG1QA01_wptgqa01.jp.oracle.com	wptgqa01.jp.oracle.com	D:\product\10.1.2\OracleAS\portal

トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control | バージョン情報

8.2.5 Oracle Application Server コンポーネント・ホーム・ページの使用

コンポーネント・ホーム・ページは、各コンポーネントが様々な監視要件および構成要件を持つため、コンポーネントによって異なります。ただし、ほとんどのコンポーネント・ホーム・ページには、次の共通の要素があります。

- 一般情報セクション。コンポーネントの現在の状態を示すアイコンと、コンポーネントの起動および停止を行うボタンが含まれます（該当する場合）。
- ステータス情報。CPU 使用率およびメモリー使用量の情報が含まれます。ここからコンポーネントの実行状況のスナップショットを取得できます。
- コンポーネント固有の情報。HTTP Server ホーム・ページでは「仮想ホスト」タブ、OC4J ホーム・ページではデプロイ済アプリケーションのリストなどが表示されます。
- 管理機能へのリンク（該当する場合）。ここから選択したコンポーネントの構成を変更できます。ほとんどの場合、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用して、複雑な構成ファイルを変更できます。

8.2.6 Application Server Control コンソールによる監視および診断

Application Server Control コンソールは、監視および診断アクティビティへのトップダウン・アプローチが行えるように設計されています。たとえば、Application Server ホーム・ページでアプリケーション・サーバーの基本特性を確認してからドリルダウンし、そのサーバーの個々のコンポーネントのパフォーマンスを調べることができます。

以降の項では、この監視方法の概要を説明します。

- アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認
- 一般情報およびリソース使用状況の確認
- アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認
- アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視
- J2EE アプリケーションの監視

8.2.6.1 アプリケーション・サーバー・コンポーネント・トポロジの確認

Application Server Control コンソールで、いずれかのページの上にある「トポロジ」をクリックすると、トポロジ・ビューアが表示されます（図 8-3 を参照）。トポロジ・ビューアでは、OPMN によって管理されるアプリケーション・サーバー・プロセスがリアルタイムでグラフィカルに表示されます。このビューアを使用すると、アプリケーション・サーバーのコンポーネントの関係の理解に役立ちます。

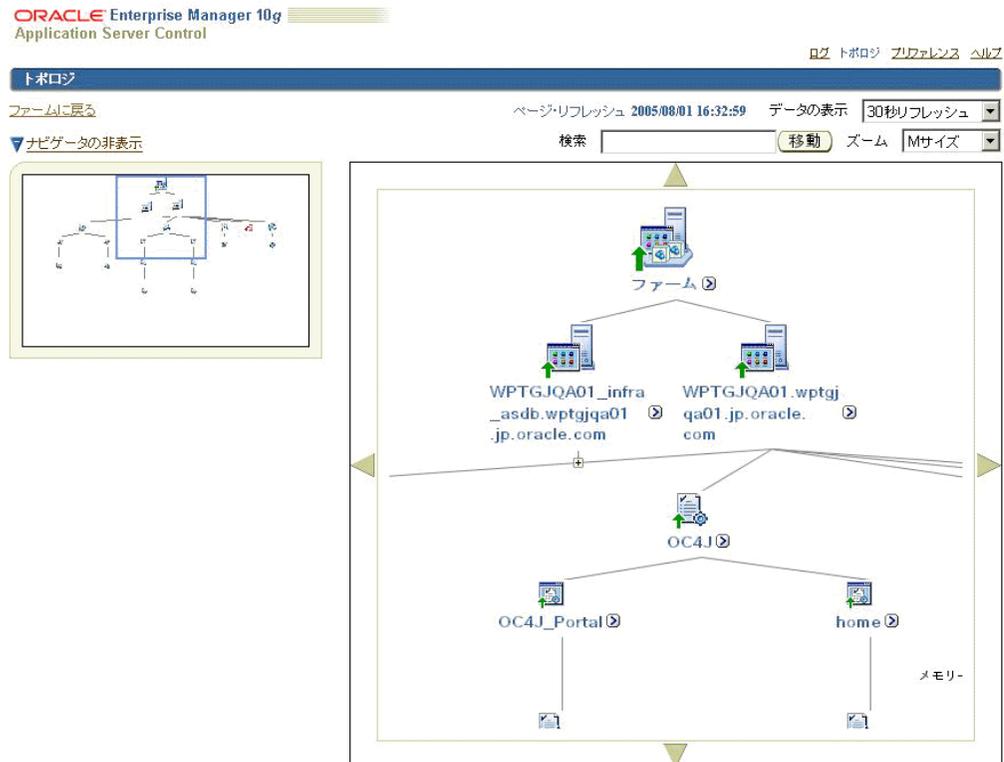
トポロジ・ビューアでは、アプリケーション・サーバーの各コンポーネントはアイコンで識別されます。ページ上の各アイコンの位置、およびアイコン間の連結が、各コンポーネント間の関係を表しています。トポロジ・ビューアの視覚的な表現によって、停止しているコンポーネントやパフォーマンスが低下しているコンポーネントを簡単に識別できます。

OracleAS Farm に属する複数のアプリケーション・サーバーを管理している場合でも、このビューアには、作成した OracleAS クラスタを含むアプリケーション・サーバー・インスタンス間の関係が表示されます。

トポロジ・ビューアからは、次の作業を実行できます。

- コンポーネントのステータスの表示
- プロセスの起動、停止または再起動
- アプリケーション・サーバー環境全体のパフォーマンスの監視
- コンポーネント・ホーム・ページへのドリルダウンによる詳細の確認

図 8-3 トポロジ・ビューア



関連項目： Application Server Control のオンライン・ヘルプのトポロジ・ビューアに関する項を参照してください。

8.2.6.2 一般情報およびリソース使用状況の確認

Application Server ホーム・ページには、サーバーのステータスに関する一般情報（名前、場所、アプリケーション・サーバー可用性など）が表示されます。また、CPU 使用率およびメモリー使用量に関する概要も表示されます。ホーム・ページを表示したら、「CPU 使用率」および「メモリー使用量」グラフで、アプリケーション・サーバーが過剰に CPU またはメモリーを使用していないかどうかを確認してください。

アプリケーション・サーバーがリソースを過剰に使用していると考えられる場合は、コンポーネントのリストを参照して、各コンポーネントが起動され実行されていること、およびそれらのコンポーネントのリソース使用状況を確認します。

このアプリケーション・サーバー・インスタンスの一部として現在使用していないコンポーネントを無効化することを考慮します。無効化したコンポーネントは、アプリケーション・サーバーの起動時に起動されないため、システム・リソースを消費しません。無効化したアプリケーション・サーバー・コンポーネントは、後でいつでも有効化できます。

関連項目： Application Server Control のオンライン・ヘルプのコンポーネントの無効化および有効化に関する項を参照してください。

8.2.6.3 アプリケーション・サーバー・ホストのリソースの確認

パフォーマンスまたは構成に関する問題の多くは、ホスト上の使用可能なリソースの不足に直接関連しています。ドリルダウンして個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネントのパフォーマンスおよびリソース使用状況を分析する前に、アプリケーション・サーバー・ホストのリソースおよび特性を確認してください。

Application Server ホーム・ページの「一般」セクションでホスト名をクリックすると、そのホストのホーム・ページが表示されます。ホストのホーム・ページには、オペレーティング・システム、メモリーおよびディスク容量の概要が表示されます。このページの「ロード」セクションには、CPU 使用率を使用状況別に分類した CPU グラフがあります。このグラフの下の「ロード・メトリック」に、システム・メモリー使用量の詳細が表示されます。

関連項目： Application Server Control による Oracle Application Server Standard Edition One のメモリー使用量の計算方法については、Application Server Control のオンライン・ヘルプのメモリー使用量に関する項を参照してください。

ページの下部までスクロールすると、リアルタイム・パフォーマンス・メトリックへの一連のリンクが表示されます。システムの CPU 使用率およびメモリー使用量に問題があると考えられる場合は、「すべてのメトリック」をクリックして、ホスト上のプロセスおよびそのリソース使用状況がリストされた表を表示します。

8.2.6.4 アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視

アプリケーション・サーバー・ホスト・コンピュータのパフォーマンス・メトリックの概要および使用可能なリソースを確認したら、個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネント内で問題が発生していないかどうかを確認します。

個々のアプリケーション・サーバー・コンポーネントの問題を診断するには、Application Server ホーム・ページの「システム・コンポーネント」表でコンポーネント名をクリックします。このドリルダウンによって詳細を得ることで、アプリケーション・サーバーの特定のコンポーネントまたは領域に絞り込んで問題を検出できます。

8.2.6.5 J2EE アプリケーションの監視

Oracle Application Server Standard Edition One による J2EE アプリケーションのデプロイおよびメンテナンスは、アプリケーション・サーバーのデプロイで最も重要な側面です。そのため、Application Server Control コンソールでは、J2EE アプリケーションのパフォーマンスの確認に使用できるショートカットも提供されます。Application Server ホーム・ページで「J2EE アプリケーション」をクリックすると、このアプリケーション・サーバー・インスタンスからデプロイしたアプリケーションのリストが表示されます。

この J2EE アプリケーションのリストから、OC4J インスタンスまたはアプリケーション・ページに素早く移動して、デプロイ済の各アプリケーションのパフォーマンスおよび可用性に関する情報を確認できます。

注意： 監視の詳細は、Application Server Control コンソールのオンライン・ヘルプおよび『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。

8.3 基礎となるソフトウェア・テクノロジーの理解

Application Server Control コンソールは、様々なテクノロジーに依存して Oracle Application Server Standard Edition One 環境を監視および管理しています。

8.3.1 使用可能なテクノロジー

表 8-2 に、Application Server Control コンソールで利用されている基礎となるテクノロジーの概要を示します。

表 8-2 Application Server Control の基礎となるテクノロジーの概要

テクノロジー	説明
Dynamic Monitoring Service (DMS)	Application Server Control コンソールは、DMS を使用して Oracle Application Server コンポーネントに関するパフォーマンス・データを収集します。 『Oracle Application Server パフォーマンス・ガイド』を参照してください。
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)	OPMN は、Oracle HTTP Server、OC4J およびその他の Oracle Application Server プロセスを管理します。また、様々なコンポーネント・インスタンスのすべてのイベントを、関連するすべてのコンポーネントに送信します。 詳細は、7.4.1 項を参照してください。
Distributed Configuration Management (DCM)	Application Server Control コンソールは、DCM を使用して構成変更を行い、クラスタ全体にそれらの変更およびデプロイ済アプリケーションを伝播します。 詳細は、7.4.2 項を参照してください。
Oracle 管理エージェント	アプリケーション・サーバー・コンポーネントの監視および管理用に特別に設計されたローカルの Oracle 管理エージェントです。
Oracle Management Watchdog Process	Management Watchdog Process は、管理エージェントおよび Application Server Control コンソールを監視して、両方のプロセスが実行され常に使用可能であるようにします。

8.3.2 コマンドライン・ツール

Oracle Application Server Standard Edition One では、いくつかの主要な管理テクノロジーに対してコマンドライン・インタフェースも提供されます。アプリケーション・サーバーのアーキテクチャおよびコンポーネントを理解してから、コマンドライン・ツールを使用すると、スクリプトおよびカスタム・ユーティリティによって管理手順を自動化することができます。

最も重要な管理コマンドライン・ツールは、次の 2 つです。

- **opmnctl: Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)** にコマンドライン・インタフェースを提供します。opmnctl を使用して、次の作業を実行できます。
 - コンポーネント、インスタンスおよび OracleAS クラスタの起動と停止
 - プロセスの監視
- **dcmctl: Distributed Configuration Management (DCM)** にコマンドライン・インタフェースを提供します。dcmctl を使用して、次の作業を実行できます。
 - OC4J インスタンスおよび OracleAS クラスタの作成と削除
 - OC4J アプリケーションのデプロイおよびアンデプロイ

- 構成情報のアーカイブおよびリストア
- 構成情報の取得

OPMN の詳細は、『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』を参照してください。

DCM の詳細は、『Distributed Configuration Management 管理者ガイド』を参照してください。

opmnctl および dcmctl 以外にも、Oracle Application Server Standard Edition One では、特定のタスクを実行するための多くのコマンドライン・ツールが提供されます。

注意： Oracle Application Server Standard Edition One では、Application Server Control コンソールを使用せずに、組込みパフォーマンス・メトリックを直接表示できる一連のコマンドライン・ツールおよびサブレットベースのツールも提供されます。これらの組込みパフォーマンス・メトリックは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントの実装に挿入されたパフォーマンス・インスツルメンテーションによって、継続的に測定されます。

8.4 Database Control による OracleAS Metadata Repository データベースの管理

Oracle Application Server Standard Edition One の機能の多くは OracleAS Metadata Repository に依存しており、OracleAS Metadata Repository の格納に Oracle データベースを使用しています。OracleAS Metadata Repository をインストールする際、OracleAS Metadata Repository 用に事前構成された Oracle Database 10g のインスタンスをインストールできます。

OracleAS Metadata Repository データベースには、Oracle Database 10g によって提供された Oracle Enterprise Manager 10g Database Control が含まれます。

Database Control は OracleAS Metadata Repository データベースの管理に使用できます。Database Control を表示するには、次の手順を実行します。

1. Web ブラウザから Database Control の URL にアクセスします。

```
http://hostname.domain:port/em
```

この例では、次のようになります。

- *hostname* は、Oracle データベースをインストールしたコンピュータの名前です。
- *port* は、インストール中に Database Control 用に予約したポート番号です。

使用する正しいポート番号がわからない場合は、OracleAS Metadata Repository の Oracle ホームの `install` ディレクトリに格納されている `portlist.ini` ファイルで次の行を確認します。

```
Enterprise Manager Console HTTP Port (db_name) = 5500
```

インストールでは、5500 ~ 5519 の範囲内で使用可能な最初のポートが予約されます。たとえば、ホスト `mgmt42` に Oracle データベースをインストールしており、Database Control でポート 5500 を使用している場合は、次の URL を入力します。

```
http://mgmt42.acme.com:5500/em
```

Oracle Application Server Control によって、Database Control のログイン・ページが表示されます。

2. ユーザー名 `SYS` を使用してデータベースにログインし、`SYSDBA` として接続します。
インストール中に `SYS` アカウントに対して指定したパスワードを使用します。
3. Application Server Control によって、データベース・ホーム・ページが表示されます。

データベース・ホーム・ページから、データベースの現在の状態を確認したり、様々な監視機能および管理機能にアクセスできます。

Database Control コンソールによるデータベース管理の概要および詳細は、**Oracle Database 10g Documentation Library** の『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

起動と停止

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One およびそのコンポーネントの起動と停止の様々な手順について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止](#)
- [OracleAS Infrastructure の起動と停止](#)
- [中間層の起動と停止](#)
- [コンポーネントの起動と停止](#)
- [コンポーネントの有効化と無効化](#)
- [Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止](#)

Oracle Application Server Standard Edition One は、要件に応じて、様々な方法で起動と停止を行うことができる柔軟性の高い製品です。

9.1 すべてのアプリケーション・サーバー・インスタンスの起動と停止

Oracle Application Server Standard Edition One のすべてのインスタンスを起動するには、次のように選択します。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「すべて起動」

図 9-1 に示す画面が表示されます。

注意： この場合、Application Server Control コンソールは起動されません。中間層と OracleAS Infrastructure (OracleAS Portal をインストールしている場合) の両方のインスタンスで Application Server Control コンソールを起動するには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「Application Server Control コンソールの起動」を選択する必要があります。

図 9-1 Oracle Application Server の起動



2つのプログレス・バーがあることに注意してください。1つは OracleAS Infrastructure 用、もう1つは中間層用です。この方法で Oracle Application Server Standard Edition One を起動した場合、OracleAS Infrastructure が自動的に起動され、その後、中間層が起動されます。

「詳細を表示」ボタンをクリックすると、起動されている各コンポーネントのステータス情報が表示されます。インスタンスの詳細の表示ボタンをクリックすると、起動されているインスタンスの Oracle ホーム、インスタンス名およびバージョン番号が表示されます。

9.2 OracleAS Infrastructure の起動と停止

この項では、OracleAS Infrastructure のすべてのプロセスを起動する方法について説明します。OracleAS Infrastructure には、次のコンポーネントがあります。

- OracleAS Metadata Repository
- Oracle Identity Management

インフラストラクチャには、これらのコンポーネントの両方またはいずれかを含めることができます。インフラストラクチャに両方のコンポーネントを含める場合、OracleAS Metadata Repository を最初に起動する必要があります。

この項では、次の項目について説明します。

- 「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の起動
- OracleAS Infrastructure の手動での起動
- 「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の停止
- OracleAS Infrastructure の手動での停止

9.2.1 「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の起動

「スタート」メニューから OracleAS Infrastructure を起動するには、次のように選択します。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「インフラストラクチャ」→「Infrastructure インスタンスの起動」

注意： この場合、OracleAS Infrastructure インスタンスで Application Server Control コンソールは起動されません。Application Server Control コンソールを起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「インフラストラクチャ」→「Application Server Control コンソールの起動」を選択する必要があります。

ヒント: このメニュー項目を Windows デスクトップにドラッグ・アンド・ドロップすると、より簡単に使用できます。

図 9-2 に示す画面が表示されます。

図 9-2 OracleAS Infrastructure の起動



この方法で OracleAS Infrastructure を起動した場合、OracleAS Metadata Repository が自動的に起動され、その後、Oracle Identity Management が起動されます。

「詳細を表示」ボタンをクリックすると、起動されている各コンポーネントのステータス情報が表示されます。インスタンスの詳細の表示ボタンをクリックすると、起動されているインスタンスの Oracle ホーム、インスタンス名およびバージョン番号が表示されます。

9.2.2 OracleAS Infrastructure の手動での起動

OracleAS Infrastructure を手動で起動するには、最初に OracleAS Metadata Repository を起動してから、Oracle Identity Management を起動する必要があります。

9.2.2.1 OracleAS Metadata Repository の手動での起動

OracleAS Metadata Repository を手動で起動するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE_HOME に OracleAS Infrastructure の Oracle ホームを設定します。
2. 環境変数 ORACLE_SID に OracleAS Metadata Repository の SID (デフォルトは asdb) を設定します。
3. Net リスナーを起動します。

```
ORACLE_HOME¥bin¥lsnrctl start
```

4. OracleAS Metadata Repository インスタンスを起動します。

```
ORACLE_HOME¥bin¥sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> startup
SQL> quit
```

9.2.2.2 Oracle Identity Management の手動での起動

Oracle Identity Management を手動で起動するには、次の手順を実行します。

1. コンポーネントを起動します。

```
ORACLE_HOME¥opmn¥bin¥opmnctl startall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス (DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、Oracle Internet Directory など) が起動されます。

- Application Server Control コンソールを起動します。

```
ORACLE_HOME%bin%emctl start iasconsole
```

9.2.3 「スタート」メニューからの OracleAS Infrastructure の停止

「スタート」メニューから OracleAS Infrastructure を停止するには、次のように選択します。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「インフラストラクチャ」 → 「Infrastructure インスタンスの停止」

注意： この場合、OracleAS Infrastructure インスタンスで Application Server Control コンソールは停止しません。Application Server Control コンソールを停止するには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「インフラストラクチャ」 → 「Application Server Control コンソールの停止」を選択する必要があります。

ヒント： このメニュー項目を Windows デスクトップにドラッグ・アンド・ドロップすると、より簡単に使用できます。

この方法で OracleAS Infrastructure を停止した場合、Oracle Identity Management が自動的に停止し、その後、OracleAS Metadata Repository が停止します。

9.2.4 OracleAS Infrastructure の手動での停止

OracleAS Infrastructure を手動で停止するには、最初に Oracle Identity Management を停止してから、OracleAS Infrastructure を停止する必要があります。

9.2.4.1 OracleAS Metadata Repository の手動での停止

OracleAS Metadata Repository を手動で停止するには、次の手順を実行します。

- 環境変数 ORACLE_HOME に OracleAS Infrastructure の Oracle ホームを設定します。
- 環境変数 ORACLE_SID に OracleAS Metadata Repository の SID (デフォルトは asdb) を設定します。
- OracleAS Metadata Repository インスタンスを停止します。

```
ORACLE_HOME%bin%sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> shutdown
SQL> quit
```

- Net リスナーを停止します。

```
ORACLE_HOME%bin%lsnrctl stop
```

9.2.4.2 Oracle Identity Management の手動での停止

Oracle Identity Management を手動で停止するには、次の手順を実行します。

- Application Server Control コンソールを停止します。

```
ORACLE_HOME%bin%emctl stop iasconsole
```

- コンポーネントを停止します。

```
ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl stopall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス (DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンス、Oracle Internet Directory など) が停止します。

9.3 中間層の起動と停止

この項では、中間層インスタンスのすべてのプロセスを起動する方法について説明します。Oracle Application Server Standard Edition One では、中間層に次のインスタンス・タイプがあります。

- J2EE and Web Services
- OracleAS Portal

この項では、次の項目について説明します。

- 「スタート」メニューからの中間層の起動
- 中間層の手動での起動
- 「スタート」メニューからの中間層の停止
- 中間層の手動での停止

9.3.1 「スタート」メニューからの中間層の起動

「スタート」メニューから中間層を起動するには、次のように選択します。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「中間層」→「中間層の起動」

注意： この場合、中間層インスタンスで Application Server Control コンソールは起動されません。Application Server Control コンソールを起動するには、「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「中間層」→「Application Server Control コンソールの起動」を選択する必要があります。

ヒント： このメニュー項目を Windows デスクトップにドラッグ・アンド・ドロップすると、より簡単に使用できます。

図 9-2 に示す画面が表示されます。

図 9-3 中間層の起動



「詳細を表示」ボタンをクリックすると、起動されている各コンポーネントのステータス情報が表示されます。インスタンスの詳細の表示ボタンをクリックすると、起動されているインスタンスの Oracle ホーム、インスタンス名およびバージョン番号が表示されます。

9.3.2 中間層の手動での起動

中間層インスタンスを手動で起動するには、次の手順を実行します。

1. 中間層インスタンスで OracleAS Infrastructure サービス (Oracle Identity Management、OracleAS Metadata Repository など) を使用している場合、これらの OracleAS Infrastructure サービスが起動されていることを確認します。

2. コンポーネントを起動します。

```
ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl startall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス (DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンスなど) が起動されます。

3. Application Server Control コンソールを起動します。

```
ORACLE_HOME%\bin\emctl start iasconsole
```

9.3.3 「スタート」メニューからの中間層の停止

「スタート」メニューから中間層を停止するには、次のように選択します。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「中間層」 → 「中間層の停止」

注意： この場合、中間層インスタンスで Application Server Control コンソールは停止しません。Application Server Control コンソールを停止するには、「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「中間層」 → 「Application Server Control コンソールの停止」を選択する必要があります。

ヒント： このメニュー項目を Windows デスクトップにドラッグ・アンド・ドロップすると、より簡単に使用できます。

9.3.4 中間層の手動での停止

中間層インスタンスを手動で停止するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールを停止します。

```
ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole
```

2. コンポーネントを停止します。

```
ORACLE_HOME%\opmn\bin\opmnctl stopall
```

このコマンドを実行すると、OPMN と OPMN が管理するすべてのプロセス (DCM、Oracle HTTP Server、OC4J インスタンスなど) が停止します。

9.4 コンポーネントの起動と停止

次のツールを使用して、コンポーネントを起動、停止および再起動したり、そのステータスを表示できます。

- opmnctl: コマンドライン・ツール
- Application Server Control コンソール: Web ベースのツール

これらのツールは、いずれもプロセス管理の基礎となるテクノロジーとして OPMN を使用しているため、完全な互換性があります。たとえば、opmnctl コマンドを使用して起動したコンポーネントを、Application Server Control コンソールを使用して停止できます。

これらの 2 つのツールは同じように使用できますが、提供される機能は異なります。opmnctl コマンドでは、コンポーネント全体と、コンポーネント内のサブプロセスの起動と停止を行うことができます。たとえば、OracleAS Web Cache を起動および停止することも、OracleAS Web Cache の管理サブプロセスのみを起動および停止することもできます。Application Server Control コンソールでは、起動または停止できないが、ステータスが他のコンポーネントに依存しているコンポーネントを表示できます。たとえば、HTTP_Server に依存している OracleAS Single Sign-On コンポーネントのステータスを表示できます。

9.4.1 opmnctl による起動と停止

コンポーネントを起動、停止または再起動するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=component
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl startproc ias-component=component
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc ias-component=component
```

コンポーネントのサブプロセスを起動、停止または再起動するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc process-type=process
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl startproc process-type=process
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl restartproc process-type=process
```

コンポーネントおよびプロセスのステータスを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl status
```

詳細は、『Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド』を参照してください。

9.4.2 Application Server Control コンソールによる起動と停止

Application Server ホーム・ページでコンポーネントを起動、停止および再起動したり、そのステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールから、Application Server ホーム・ページを開きます。「システム・コンポーネント」セクションまでスクロールします。
2. 起動、停止または再起動するコンポーネントの「選択」列でチェック・ボックスを選択します。
3. 「システム・コンポーネント」セクションの右上にある「起動」、「停止」または「再起動」ボタンをクリックします。

9.5 コンポーネントの有効化と無効化

アプリケーション・サーバー・インスタンスの起動時、常にコンポーネントが起動されるようにする場合、そのコンポーネントを有効にしておく必要があります。コンポーネントを無効にしておくと、アプリケーション・サーバー・インスタンスの起動時に、そのコンポーネントは起動されなくなります。

コンポーネントは、Application Server Control コンソールを使用して有効化および無効化できます。Application Server ホーム・ページで、「コンポーネントの有効化/無効化」をクリックします。互いに依存しているコンポーネントはグループ化され、同時に有効化または無効化されます。

注意： このマニュアルに記載しているバックアップおよびリカバリ手順を使用する場合は、コンポーネントを有効化または無効化した後、bkp_restore.pl -m config を実行して、コンポーネントを OracleAS Backup and Recovery Tool に登録する必要があります。

9.6 Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動と停止の手順について説明します。Oracle Application Server Standard Edition One 環境を完全に停止する必要がある場合（環境の完全なバックアップの実行やパッチの適用を準備する場合など）は、これらの手順に従う必要があります。

9.6.1 Oracle Application Server Standard Edition One 環境の起動

Oracle Application Server Standard Edition One 環境を起動するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Infrastructure を起動します。
詳細は、[9.2 項](#)を参照してください。
2. 中間層インスタンスを起動します。
詳細は、[9.3 項](#)を参照してください。

9.6.2 Oracle Application Server 環境の停止

Oracle Application Server Standard Edition One 環境のすべてのプロセスを停止するには、次の手順を実行します。

1. 中間層インスタンスを停止します。
2. OracleAS Infrastructure を停止します。

中間層インスタンスまたは OracleAS Infrastructure を停止する方法については、それぞれ [9.3 項](#)または [9.2 項](#)を参照してください。

HTTP ポートおよびリスナー設定の変更

この章では、Oracle HTTP Server のポート番号を変更する方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- 中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更
- Identity Management での HTTP (SSO) ポートの変更

ポート番号を確認する方法の詳細は、7.3 項を参照してください。

他の Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントのポート番号も変更できます。この手順の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 4 章「ポートの管理」を参照してください。

10.1 中間層インスタンスでの HTTP ポートの変更

この項では、中間層インスタンスでポート番号を変更し、影響を受けるその他のコンポーネントを更新する方法について説明します。ここでは、Oracle HTTP Server のリスニング・ポート (SSL または非 SSL) を変更する手順について説明します。

Oracle HTTP Server の Listen ディレクティブの変更では、多くの場合、依存関係も設定する必要があります。たとえば、OracleAS Web Cache を使用して Oracle Application Server インスタンスのパフォーマンスを向上させている場合に、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更した場合は、必ず OracleAS Web Cache のオリジナル・サーバー設定を変更する必要があります。

ポートの依存関係が正しく変更されるようにするには、単一の Java コマンドを使用して、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更します。この Java コマンドを実行すると、Oracle ホーム内の必要な構成ファイルが自動的に変更されます。Oracle ホーム内の必要なコンポーネントをオプションで再起動することもできます。

次の項では、portconfig コマンドを定義し、このコマンドを使用して Oracle HTTP Server のリスニング・ポート (SSL または非 SSL) を変更する方法について説明します。

portconfig コマンドによる Oracle HTTP Server のリスニング・ポート (SSL または非 SSL) の変更

Oracle HTTP Server の SSL または非 SSL ポートを変更するには、次の手順を実行します。

1. 環境変数 ORACLE_HOME に、Oracle HTTP Server が存在する Oracle Application Server インスタンスのホーム・ディレクトリを設定します。

たとえば、次のようになります。

```
set ORACLE_HOME=D:\oracle\appserv1\
```

2. portconfig コマンドを表す DOSKEY マクロを作成します。たとえば、次のようになります。

```
doskey portconfig=%ORACLE_HOME%\jdk\bin\java -cp  
%ORACLE_HOME%\sysman\webapps\emd\WEB-INF\lib\emd.jar;  
%ORACLE_HOME%\dcm\lib\dcm.jar;
```

```
%ORACLE_HOME%\sso\bin\ssoereg.bat
oracle.sysman.ias.sta.tools.PortConfigCmdLine $*
```

3. 新しく作成した portconfig コマンドを実行します。

```
portconfig -oracleHome ORACLE_HOME
-oldPort old_port
-newPort new_port
[-sso -url http://sso_host:port -user http_server_admin_user
 [-site name_of_sso_partner_application]
 [-admin mod_osso_admin_user]
 [-vHost path_to_mod_osso_configuration_file]]
[-webCache]
{-start | -restart}
```

たとえば、次のようになります。

```
portconfig -oracleHome %ORACLE_HOME% -oldPort 7777 -newPort 7778 -webCache
```

表 10-1 に、portconfig コマンドを使用して Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを自動的に変更する場合に使用できる引数を示します。

表 10-1 portconfig コマンドの引数

引数	説明
-oracleHome	Oracle Application Server インスタンスの Oracle ホームを指定します。portconfig コマンドでは、選択した Oracle ホーム内のコンポーネントのみが変更されます。環境変数を使用して Oracle ホームを表すことができます。
-oldPort	Oracle HTTP Server のリスニング・ポートの古い（現行の）値を指定します。
-newPort	Oracle HTTP Server のリスニング・ポートの新しい値を指定します。
-webCache	オプションの引数です。OracleAS Web Cache を使用して、Web サーバーのパフォーマンスおよび信頼性を向上させる場合に使用します。この引数がコマンドラインに含まれている場合、依存している OracleAS Web Cache のポート割当てが自動的に変更されます。 具体的には、オリジナル・サーバーのポート番号が自動的に更新され、Oracle HTTP Server の新しいリスニング・ポートを指すようになります。 注意: portconfig コマンドでは、OracleAS Web Cache インスタンスが現行の Oracle ホーム内に存在する場合にのみ、このインスタンスが更新されます。
-start	オプションの引数です。この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、構成変更の後、アプリケーション・サーバー・インスタンスが停止して起動されます。ポートの変更を有効にするには、Oracle Application Server インスタンスを停止して起動（または再起動）する必要があります。 起動中、アプリケーション・サーバーの有効なコンポーネントはすべて起動されます。portconfig コマンドを実行して Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する前に停止していたコンポーネントも起動されることに注意してください。 -restart 引数と比較してください。コマンドの実行時には、-restart または -start オプションを使用できますが、両方を使用することはできません。
-restart	オプションの引数です。この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、構成変更の後、アプリケーション・サーバー・インスタンスが再起動されます。ポートの変更を有効にするには、Oracle Application Server インスタンスを再起動（または停止して起動）する必要があります。 このオプションでは、構成変更の完了後、すでに実行されているコンポーネントのみが再起動されます。portconfig コマンドを実行して Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する前に停止していたコンポーネントは、停止したままです。 -start 引数と比較してください。コマンドの実行時には、-restart または -start オプションを使用できますが、両方を使用することはできません。

表 10-1 portconfig コマンドの引数 (続き)

引数	説明
-debug	オプションの引数です。コマンドの実行時にデバッグ情報を表示する場合に使用します。この引数は、問題をトラブルシューティングしたり、オラクル社カスタマ・サポート・センターに連絡する場合に役立ちます。
-sso	<p>オプションの引数です。変更するリスニング・ポートが OracleAS Single Sign-On によって保護されている場合に使用します。</p> <p>この引数を指定して portconfig コマンドを実行すると、mod_osso が Oracle HTTP Server の新しいリスニング・ポート値で再登録されます。</p> <p>-sso 引数を使用する場合は、-url および -user 引数を含める必要があります。オプションで、-site、-admin および -vHost 引数を指定することもできます。</p> <p>mod_osso の登録については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「パートナ・アプリケーションの構成および管理」を参照してください。</p>
-url	<p>-sso 引数を使用する場合に必須の引数です。</p> <p>この引数を使用して、Oracle HTTP Server の新しい URL を指定します。この URL は OracleAS Single Sign-On でも使用され、新しいリスニング・ポートが使用されます。</p> <p>たとえば、次のようになります。</p> <p>http://sso42.acme.com:7778</p> <p>この URL は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -mod_osso_url パラメータとして渡されます。</p>
-user	<p>-sso 引数を使用する場合に必須の引数です。</p> <p>この引数を使用して、Oracle HTTP Server の起動に使用するアカウント名を入力します。Windows の場合は、通常、SYSTEM を使用します。</p> <p>この引数で指定する値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -u パラメータとして渡されます。</p>
-site	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、OracleAS Single Sign-On パートナ・アプリケーションのサイト名を入力します。サイト名は、OracleAS Single Sign-On の管理ページに表示されます。</p> <p>この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -site_name パラメータとして渡されます。-site 引数を指定しない場合は、アプリケーション・サーバー・インスタンス名が、-site_name パラメータの値として ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトに渡されます。</p>
-admin	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、mod_osso 管理者のアカウント名を入力します。この値は、OracleAS Single Sign-On の管理ページに表示されます。ほとんどの場合、この値は、Oracle Application Server のインストールを実行したユーザーの識別名 (DN) と同じです。この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -admin_info パラメータとして渡されます。</p>
-vHost	<p>-sso 引数を使用する場合にのみ使用できる、オプションの引数です。</p> <p>この引数を使用して、構成する仮想ホストの osso.conf ファイルへのパスを入力します。たとえば、次のようになります。</p> <p>ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥conf¥osso¥vh_hane¥osso.conf</p> <p>この引数は、HTTP 仮想ホストを OracleAS Single Sign-On サーバーに登録する場合にのみ使用します。この引数の値は、ssoreg.sh および ssoreg.bat スクリプトの -config_file パラメータとして、-virtualhost パラメータとともに渡されます。</p>

4. アプリケーション・サーバー・インスタンスを再起動します。

```
ORACLE_HOME¥bin¥emctl stop iasconsole
ORACLE_HOME¥opmn¥bin¥opmnctl stopall
ORACLE_HOME¥opmn¥bin¥opmnctl startall
ORACLE_HOME¥bin¥emctl start iasconsole
```

10.2 Identity Management での HTTP (SSO) ポートの変更

インフラストラクチャ・ポートの変更は、Oracle Identity Management を含むインストール (Oracle Application Server Standard Edition One での OracleAS Portal のインストール) にのみ関連します。

この項では、Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更する方法について説明します。このポート番号を変更する場合は、Single Sign-On (SSO) ポート番号も事実上変更します。このため、Single Sign-On ポートを使用する中間層インスタンスを更新する必要があります。

手順 1: 中間層インスタンスの準備

Oracle Identity Management を使用する各中間層インスタンスで、中間層インスタンスを停止します。

1. Application Server Control コンソールの Application Server ホーム・ページで、「すべてを停止」をクリックします。
2. Application Server Control コンソールは実行したままにします。

この手順の実行中は、各中間層インスタンスで Application Server Control コンソールを実行したままにしてください。

手順 2: Infrastructure インスタンスの準備

1. Oracle Identity Management およびそれに関連付けられた OracleAS Metadata Repository が、ポート番号を変更するインフラストラクチャで起動され、実行されていることを確認します。
2. 中間層インスタンスで、製品メタデータと DCM リポジトリに対して異なる Metadata Repository を使用している場合は、それらが起動されていることを確認します。つまり、環境内のすべての Metadata Repository が起動されていることを確認します。

手順 3: Oracle HTTP Server の Listen および Port ディレクティブの変更

非 SSL の Listen ディレクティブと Port ディレクティブの両方を新しいポート番号に変更するには、次の手順を実行します。

1. Application Server ホーム・ページに移動して、「ポート」をクリックします。
2. 「ポート」ページで Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを検索し、「構成」列のアイコンをクリックします。
3. 「サーバー・プロパティ」ページで、次のように入力します。
 - * 「デフォルト・ポート」フィールドに、新しいポート番号を入力します。これは、Port ディレクティブ用です。
 - * 「リスニング・ポート」列に、新しいポート番号を入力します。これは、Listen ディレクティブ用です。複数のリスニング・ポートがリストされている場合もあります。非 SSL リスニング・ポートは、非 SSL リスニング・ポートの古い値を持つポートです。
4. ページの下部で、「適用」をクリックします。
5. すぐに再起動しない場合は、「確認」ページで「いいえ」をクリックします。

注意: httpd.conf ファイルのポート番号は、手動で更新できます。SSL 仮想ホスト・コンテナ外の非 SSL の Listen および Port ディレクティブを、同じ新しいポート番号で更新します。その後、ファイルを保存し、次のコマンドを実行します。

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

SSL の Listen ディレクティブと Port ディレクティブの両方を新しいポート番号に変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME%\Apache\Apache\conf\ssl.conf
```

2. SSL の Listen および Port ディレクティブを、新しいポート番号で更新します。Listen および Port の値は、同じポート番号である必要があります。
3. ファイルを保存して閉じます。
4. 次のコマンドを実行します。

```
dcmctl updateConfig -ct ohs
```

手順 5: Application Server Control コンソールの更新

Application Server Control コンソールを、新しいポート番号で更新します。

1. 次のファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME%\sysman\emd\targets.xml
```

2. Oracle HTTP Server の古いリスニング・ポート番号を、それぞれ新しいポート番号で更新します。
3. ファイルを保存して閉じます。
4. Application Server Control コンソールを再ロードします。

```
emctl reload
```

手順 6: Single Sign-On の更新

ポートを変更するインストールで、SSO が Oracle HTTP Server の SSL リスニング・ポートを使用するように構成されている場合、SSO の Oracle ホームで次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%\sso\bin\ssocfg.bat https hostname new_port_number
```

hostname は SSO を実行しているホスト、new_port_number は Oracle HTTP Server の新しい SSL リスニング・ポート番号です。

手順 7: mod_osso の再登録

mod_osso を再登録するには、次の手順を実行します。

1. PATH=%PATH%,%ORACLE_HOME%\bin,%ORACLE_HOME%\lib と設定します。
2. 非 SSL リスニング・ポートを変更する場合、Oracle Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行して、mod_osso を再登録し、デフォルトのパートナ・アプリケーションを処理します。

```
ORACLE_HOME%\jdk\bin\java -jar ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar
-oracle_home_path middle_tier_oracle_home
-site_name middle_tier_hostname:new_http_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-u user
```

注意： *user* は、Oracle HTTP Server を起動するユーザーです。デフォルトでは、これは Oracle Application Server Standard Edition One のインストールを実行したユーザーです。Oracle HTTP Server のリスニング・ポート番号を 1024 より小さい値に変更している場合、このユーザーは *root* になります。

たとえば、ホスト *myhost* で Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを 7779 に変更するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%jdk%bin%java -jar ORACLE_HOME%ssolib%ossoreg.jar
-oracle_home_path %disk1%oracleas
-site_name myhost:7779
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url http://myhost.mydomain:7779
-u oracle
```

3. SSL リスニング・ポートを変更する場合、Oracle Identity Management の Oracle ホームで次のコマンドを実行して、*mod_osso* を再登録し、デフォルトのパートナ・アプリケーションを処理します。

```
ORACLE_HOME%jdk%bin%java -jar ORACLE_HOME%ssolib%ossoreg.jar
-oracle_home_path middle_tier_oracle_home
-site_name middle_tier_hostname:new_https_port_number
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url mod_osso_url
-virtualhost -u user
```

注意： *user* は、Oracle HTTP Server を起動するユーザーです。デフォルトでは、これは Oracle Application Server Standard Edition One のインストールを実行したユーザーです。Oracle HTTP Server のリスニング・ポート番号を 1024 より小さい値に変更している場合、このユーザーは *root* になります。

たとえば、ホスト *myhost* で Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを 4445 に変更するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%jdk%bin%java -jar ORACLE_HOME%ssolib%ossoreg.jar
-oracle_home_path %disk1%oracleas
-site_name myhost:4445
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url https://myhost.mydomain:4445
-virtualhost -u oracle
```

4. 構成または変更した追加のパートナ・アプリケーションを再登録します。

mod_osso の登録については、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』を参照してください。

手順 8: DAS の更新

構成済の DAS で SSL および非 SSL ポート番号を使用している場合、次の手順に従って、Oracle Internet Directory の DAS URL エントリを更新します。

注意： DAS で使用しているポートは、次のコマンドで確認できます。

```
ldapsearch -h oid_host -p oid_port -D "cn=orcladmin"
-w "password" -b "cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext"
-s base "objectclass=*" orcldasurlbase
```

1. 次の内容を含むファイル `mod.ldif` を作成します (このファイルはどのディレクトリに作成してもかまいません)。

```
dn:cn=OperationURLs,cn=DAS,cn=Products,cn=OracleContext
changetype:modify
replace:orcldasurlbase
orcldasurlbase:http://hostname:new_http_port_number/
```

orcldasurlbase URL の末尾にスラッシュ (/) があることに注意してください。

2. 次のコマンドを実行します。

```
ldapmodify -D cn=orcladmin -w password -p oid_port -f mod.ldif
```

手順 10: Identity Management インスタンスの再起動

Identity Management インスタンスを再起動します。

```
emctl stop iasconsole
opmnctl stopall
opmnctl startall
emctl start iasconsole
```

手順 12: 新しいポート番号を使用するための中間層インスタンスの更新

Identity Management インストールで Oracle HTTP Server の非 SSL ポートを変更したら、新しいポート番号が使用されるようにすべての中間層インスタンスを更新する必要があります。

1. **Application Server Control** コンソールの ID 管理の変更ウィザードを使用して、各中間層インスタンスを更新します。

Identity Management を使用する各中間層インスタンスで、次の手順を実行します。

- a. **Application Server Control** コンソールを使用して、中間層インスタンスの **Application Server** ホーム・ページに移動します。
 - b. 「インフラストラクチャ」リンクをクリックします。
 - c. 「インフラストラクチャ」ページの「ID 管理」セクションで、「**変更**」をクリックします。
 - d. ウィザードの手順に従います。
 - e. ウィザードが終了したら、**Application Server** ホーム・ページに移動して「**すべてを起動**」をクリックし、中間層インスタンスを起動します。
2. アプリケーションの **Oracle Internet Directory** キャッシュをリフレッシュします。
 - a. **Portal** にログインします。
 - b. 「グローバル設定」リンクをクリックします。
 - c. 「**SSO/OID**」タブをクリックします。
 - d. **Oracle Internet Directory** キャッシュ設定のリフレッシュを選択して、「**適用**」をクリックします。

ログ・ファイルの表示

Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントでは、起動および停止情報、エラー、警告メッセージ、HTTP リクエストに関するアクセス情報など、あらゆるタイプのイベントを記録するメッセージが含まれたログ・ファイルが生成されます。

この章では、ログ・ファイルを表示および管理して、システム・アクティビティの監視とシステムの問題の診断を行う方法について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要](#)
- [Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示](#)
- [Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用](#)

11.1 Oracle Application Server Standard Edition One のロギングの概要

Application Server Control コンソールでは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネント間でログ・ファイルをリストおよび検索できます。Application Server Control コンソールのページでログ・ファイルを表示することも、ログ・ファイルをローカル・クライアントにダウンロードして、別のツールで表示することもできます。

この項では、次の項目について説明します。

- [ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解](#)
- [ログ・リポジトリの使用](#)
- [コンポーネント・ロギング・オプションの構成](#)

11.1.1 ログ・ファイルのデータおよびネーミングの理解

一部の Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントは、Oracle Diagnostic Logging (ODL) を使用しています。ODL によって、ログ・ファイルのネーミングおよび内容の書式が Oracle 標準に準拠するようになります。ODL では、診断メッセージは XML で書き込まれます。ODL を使用しないコンポーネントでは、診断メッセージはコンポーネント固有のテキスト形式で書き込まれます。

Application Server Control コンソールを使用すると、どの形式のログ・ファイルでも表示できます。ログ・ファイルをローカル・クライアントにダウンロードして、テキスト・エディタなどのファイル表示ユーティリティで表示することもできます。

11.1.1.1 コンポーネント別のログ・ファイル・メッセージ

表 11-1 に、Oracle Application Server Standard Edition One の各コンポーネントでサポートされているメッセージ形式を示します。

表 11-1 コンポーネント別の診断メッセージの形式

コンポーネント	デフォルト形式	ODL のサポート	場所
Oracle ADF (ADF)	ODL	あり	<code>ORACLE_HOME%\bc4j\logs\OC4J_Name</code>
DCM	ODL	あり	<code>ORACLE_HOME%\dcm\logs</code>
Application Server Control	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\sysman\log</code>
HTTP Server	テキスト	あり	<code>ORACLE_HOME%\Apache\Apache\logs\error_log.time</code>
Log Loader	ODL	あり	<code>ORACLE_HOME%\diagnostics\logs</code>
OC4J instance_name	テキスト	あり	<code>ORACLE_HOME%\j2ee\instance_name\log</code> <code>ORACLE_HOME%\j2ee\instance_name\application-deployments\application_name\application.log</code>
Oracle Internet Directory	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\ldap\log</code>
OPMN	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\opmn\logs</code> <code>ORACLE_HOME%\opmn\logs\component_type~...</code>
ポート・トンネリング	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\iaspt\logs</code>
Single Sign-On	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\sso\log</code>
Universal Installer	テキスト	なし	<code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\</code>

11.1.2 ログ・リポジトリの使用

Application Server Control コンソールは、ログ・リポジトリからの診断メッセージの表示をサポートしています。ログ・リポジトリとは、次のようなものです。

- エラー・ログを格納しますが、アクセス・ログは格納しません。
- コンポーネント間で複数のログ・ファイルから収集された診断メッセージを格納します。
- Oracle Application Server Standard Edition One のログ・ファイル・データを統合します。これによって、Application Server Control コンソールを使用して、複数のコンポーネントで生成されたログ・ファイル・データを簡単に検索および表示できます。
- 診断プロセスを高速化し、Oracle Application Server のサポートに必要なリソースを減らします。

ログ・リポジトリは、Log Loader コンポーネントによって更新されます。詳細は、11.3 項を参照してください。

11.1.3 コンポーネント・ロギング・オプションの構成

ロギング・オプションを構成して、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネントで生成および保存されるログ情報の管理と制限を行うことができます。

注意： Application Server Control コンソールでは、ロギング・オプションの構成は直接サポートされていません。多くの場合、コンポーネント・ロギング・オプションを構成するには、Application Server Control コンソールの「拡張サーバー・プロパティ」ページを使用して、構成ファイルの値を編集する必要があります。

次のようなロギング構成オプションがあります。

- ログ・ファイルの名前およびパス名の指定
- ログ・ファイル・サイズの制限

- ログ・ファイル・アーカイブの使用
- コンポーネント・ロギング・レベルの設定

ロギング構成オプションは、コンポーネント固有です。すべてのコンポーネントがロギング構成オプションをサポートしているわけではありません。ロギング構成オプションの設定の詳細は、**Oracle Application Server Standard Edition One** コンポーネントのドキュメントを参照してください。

11.2 Application Server Control によるログ・ファイルのリストおよび表示

Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control コンソールを使用して、ログ・ファイルをリストできます。Application Server Control コンソールで「**ログ**」リンクをクリックすると、「**ログの表示**」ページが表示されます。

この項では、次の項目について説明します。

- ログ・ファイルのリスト
- 選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト
- **Oracle Application Server Standard Edition One** のコンポーネント・ページからのログ・ファイルのリスト
- ログ・ファイルの拡張検索の使用
- ログ・ファイルの詳細および内容の表示

11.2.1 ログ・ファイルのリスト

ログ・ファイルをリストするには、次の手順を実行します。

1. 「**移動**」または「**すべて移動**」ボタンをクリックして、選択したコンポーネントまたは使用可能なすべてのコンポーネントを「**選択したコンポーネント**」ボックスに移動します。
2. 「**検索**」ボタンをクリックして、選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストします。
3. 検索が実行されると、「**結果**」セクションにログ・ファイル情報（ログ・ファイルに関連付けられたコンポーネントの名前、ログ・ファイルへのリンクなど）が表示されます。

図 11-1 に、検索後の Application Server Control コンソールの「**ログの表示**」ページを示します。

図 11-1 Application Server Control の「ログの表示」の検索結果

ログの表示

ページ・リフレッシュ 2005/08/01 17:04:03

ログ・ファイル ログ・リストの検索

「ログ・ファイル」タブのリストは、アプリケーション・サーバーのログ・ファイルです。検索結果のログ・ファイル名をクリックすると、ログ・ファイルが表示されます。

単統検索

使用可能なコンポーネント

- ADF Business Components
- Database
- Database Listener
- Enterprise Manager
- LogLoader
- OC4J_SECURITY
- OID
- Single Sign-On:orasso
- Universal Installer

移動

すべて移動

削除

すべて削除

選択したコンポーネント

- DCM
- HTTP_Server
- OPMN

拡張検索

検索

結果: 4ログ・エントリが取得されました

コンポーネント・タイプ	コンポーネント名	ログ・タイプ	ログ・ファイル	更新	サイズ(バイト)
DCM	コマンドライン・ユーティリティ	エラー	log.xml	2005/08/01 15:32:01 JST	3605
DCM	デーモン・プロセス	エラー	log.xml	2005/08/01 16:35:58 JST	7080
DCM	デーモン・プロセス	サーバー	リダイレクトされた出力/エラー	2005/08/01 17:02:49 JST	259
HTTP_Server		サーバー	リダイレクトされた出力/エラー	2005/08/01 17:03:09 JST	239

Application Server Control コンソールで「ログ」リンクをクリックすると、「ログの表示」ページが表示され、コンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。その後、「結果」セクションの「ログ・ファイル」リンクを選択して、ログ・ファイルを表示できます。

11.2.2 選択したコンポーネントのログ・ファイルのリスト

Application Server Control コンソールで「ログ」リンクを選択すると、「ログの表示」ページが表示されます。選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストするには、「ログの表示」ページで次の手順を実行します。

- 「使用可能なコンポーネント」リストから、ログ・ファイルを表示するコンポーネントを選択し、「移動」を使用して選択したコンポーネントを「選択したコンポーネント」リストに移動します（ダブルクリックによるリスト間のコンポーネントの移動をサポートしているブラウザもあります）。
- 「検索」をクリックして、選択したコンポーネントのログ・ファイルをリストします。
- 検索が実行されると、「結果」セクションにログ・ファイル情報（ログ・ファイルに関連付けられたコンポーネントの名前、ログ・ファイルへのリンクなど）が表示されます。

図 11-1 に、検索後の「ログの表示」ページの「結果」を示します。

11.2.3 Oracle Application Server Standard Edition One のコンポーネント・ページからのログ・ファイルのリスト

Application Server Control コンソールのメイン・ページで「システム・コンポーネント」のリンクを選択した後、「ログ」リンクを選択すると、そのコンポーネントのログ・ファイルを表示できます。Application Server Control コンソールでこのリンクを選択すると、「ログの表示」ページが表示され、コンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。コンポーネントに関連付けられたページの「ログ」リンクをクリックすると、そのコンポーネントのログ・ファイルの検索が実行されます。その後、「結果」セクションの「ログ・ファイル」リンクを選択して、ログ・ファイルを表示できます。

コンポーネント・ページから「ログ」リンクを選択すると、各ログ・ファイル・ページの下部に、戻るリンクが表示されます。戻るリンクを使用すると、「ログ」リンクを選択したコンポーネント・ページに戻ります。

11.2.4 ログ・ファイルの拡張検索の使用

「ログの表示」ページで「**拡張検索**」ボタンをクリックすると、「ログの表示」の「拡張検索」ページが表示されます。「拡張検索」ページでは、Oracle Application Server コンポーネントのログ・ファイルをリストして、特定のログ・ファイル属性でログ・ファイルの検索をフィルタ処理できます。

「ログの表示」の「拡張検索」ページで次の手順を実行すると、検索フィルタを使用して、ログ・ファイルをリストできます。

1. 「**移動**」または「**すべて移動**」ボタンをクリックして、選択したコンポーネントまたは使用可能なすべてのコンポーネントを「**選択したコンポーネント**」ボックスに移動します。
2. 「**ログ・ファイル属性**」リストからフィールドを選択します。
3. 「**行の追加**」ボタンを選択して、選択したログ・ファイル属性の行を追加します。
4. 「**値**」フィールドに、必要な検索値を入力します。
5. 追加のフィールドを選択して値を入力する場合は、「**行の追加**」ボタンを選択して追加の値を入力します。
6. 「**検索**」ボタンを選択して、検索を実行します。検索が実行されると、「**結果**」セクションに、一致したフィールドを持つログ・ファイルが表示されます。

ログ・ファイル属性を使用したフィルタ処理の詳細は、「ログ・ファイル属性」リストの横の情報アイコンをクリックしてください。

11.2.5 ログ・ファイルの詳細および内容の表示

「ログの表示」の「単純検索」または「拡張検索」ページのいずれかで「**検索**」をクリックすると、「ログの表示」ページの下部の「**結果**」セクションに検索出力が表示されます。列ヘッダーを選択して、出力をソートできます。たとえば、結果をサイズでソートするには、「**サイズ (バイト)**」列のヘッダーを選択します (列ヘッダーを複数回クリックすると、ソートの昇順と降順が切り替わります)。

ログ・ファイルの内容を表示するには、「**ログ・ファイル**」列のリンクを選択します。

ログ・ファイルのリンクを選択すると、「ログ・ファイル」ページに選択したログ・ファイルの内容が表示され、次の機能がサポートされます。

- 「リフレッシュ」リストによって、ファイル・ビューの更新が手動か、自動かが決定されます。一定の間隔でページをリフレッシュする場合は、「**自動**」を選択します。ページがリフレッシュされると、「ログ・ファイル」ページは下までスクロールされます。
- ページの上部または下部で、「**ページ・リフレッシュ**」の日付の隣のリフレッシュ・アイコンを選択すると、手動リフレッシュを実行できます。リフレッシュを行うと、最後のリフレッシュ以降に追加されたログ・エントリが表示されます。
- 「**ログ・ファイル**」リンクを選択すると、ブラウザ機能を使用して、ログ・ファイルを表示、印刷またはダウンロードできます。

11.3 Oracle Application Server Standard Edition One Log Loader の使用

Oracle Application Server Standard Edition One の **Log Loader** コンポーネントによって、ログ・リポジトリ内のメッセージが初期化および更新されます。ログ・リポジトリは、Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネント間で複数のログ・ファイルから収集された診断メッセージを格納します。**Log Loader** を起動すると、一定の間隔で、ログ・ファイルの内容が追加のみ読み込まれ、その内容がログ・リポジトリに格納されます。

この項では、次の項目について説明します。

- **Log Loader** の起動と停止
- **Log Loader** の有効化と無効化
- ログ構成の更新

- [Log Loader プロパティの設定](#)
- [Log Loader 診断メッセージの理解](#)

11.3.1 Log Loader の起動と停止

Log Loader の起動と停止は、Application Server Control コンソールの「ログ・ローダー」ページで制御します。

注意： デフォルトでは、Oracle Application Server がインストールされている場合、Log Loader は停止しています。

Log Loader を起動するには、次の手順を実行します。

1. Application Server Control コンソールページ上の「ログ」リンクをクリックします。
2. 「ログの表示」ページで、「ログ・リポジトリの検索」リンクをクリックします。
3. 「ログの表示」ページで、「ログ・ローダー」ボタンをクリックします。

「ログ・ローダー」ページで、「起動」をクリックします。確認のページが表示されます。

Log Loader がすでに実行されている場合は、「停止」ボタンをクリックして停止します。

「起動」または「起動と既存のログのロード」をクリックします。

「起動と既存のログのロード」ボタンを使用すると、既存のログ・メッセージでログ・リポジトリを起動および初期化できます。

11.3.2 Log Loader の有効化と無効化

「ログ・ローダー」ページで、「有効」ボタンをクリックすると、Log Loader を有効化できます。最初に Oracle Application Server Standard Edition One をインストールした際、Log Loader は有効化されています。Log Loader を無効化すると、「ログの表示」ページ上のコンポーネント・リストにログ・ファイルが表示されません。

11.3.3 ログ構成の更新

Log Loader を起動すると、コンポーネント・ログ・ファイルに関する構成情報がロードされ、診断メッセージのソースとして使用されます。これらのメッセージはログ・リポジトリに格納されます。これには、ログ・ファイルの場所および形式に関する情報が保持されます。Log Loader の起動後は、インスタンスが再構成されます。たとえば、新しいコンポーネントを追加したら、「ログ構成の更新」ボタンをクリックして Log Loader 構成を更新します。ログ構成を更新すると、Log Loader によって構成ファイルが再度読み込まれ、すべてのコンポーネント・ログ・ファイルが特定され、ログ・リポジトリにロードされます。

11.3.4 Log Loader プロパティの設定

「ログ・ローダー」ページから Log Loader のプロパティを設定できます。「ログ・ローダー」ページに移動するには、次の手順を実行します。

1. いずれかの Application Server Control コンソールページ上の「ログ」リンクを選択します。
2. 「ログの表示」ページで、「ログ・リポジトリの検索」リンクを選択します。
3. 「ログの表示」ページで、「ログ・ローダー」をクリックします。
4. 「管理」セクションの「ログ・ローダー・プロパティ」リンクを選択します。「ログ・ローダー・プロパティ」ページには、Log Loader プロパティの現行値を示すフィールドがあります。

Log Loader のプロパティを変更するには、次の手順を実行します。

1. 「ログ・ローダー・プロパティ」ページの適切なフィールドに更新した値を入力します。
2. 「適用」をクリックして、新しい値を適用します。

図 11-2 に、Application Server Control コンソールの「ログ・ローダー・プロパティ」ページを示します。

「ログ・ローダー・プロパティ」の各フィールドの詳細は、Application Server Control コンソールのオンライン・ヘルプを参照してください。

図 11-2 「ログ・ローダー・プロパティ」ページ

ORACLE Enterprise Manager 10g
Application Server Control

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

ホーム > Application Server: WPTGJOA01_infra_asdb.wptgja01.ip.oracle.com > ログの表示 > ログ・ローダー > ログ・ローダー・プロパティ

ページ・リフレッシュ 2005/08/01 17:06:55

これらのプロパティは、ログ・ローダーの動作、およびログ・ローダーが更新するログ・リポジトリのサイズの制御に使用できます。

ログ・リポジトリの場所	diagnostics/repository <small>(このプロパティは、ログ・リポジトリが存在するディレクトリを識別します。)</small>
ログ・リポジトリの最大サイズ(MB)	50 <small>(このプロパティは、ログ・リポジトリの合計サイズを制御します。)</small>
各セグメントのサイズ(MB)	5 <small>(ログ・リポジトリは、セグメントと呼ばれるファイルのセットです。セグメントはリポジトリサイズの制御に再利用されます。)</small>
ロードの間隔(分)	5 <small>(このプロパティは、ログ・ローダーが構成要素のログ・ファイルを読む頻度と、ログ・リポジトリの更新間隔を定義します。)</small>
最大ロード・サイズ(KB)	51200 <small>(ログ・ファイルが最後のロード以降に非常に大きくなった場合、ログ・ローダーは一部のログ・エンタリのロードをスキップする場合があります。このプロパティは、ローダー実行中にファイルまたはDDLファイルのセットからロードされる最大バイト数を制御します。)</small>
ログ・ローダー・ポート	44000 <small>(このプロパティは、ログ・ローダーで使用する通信ポートを識別します。)</small>

元に戻す(R) 適用(A)

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control バージョン情報

11.3.5 Log Loader 診断メッセージの理解

Log Loader は、エラーなど、診断メッセージのログをログ・ファイルに記録します。診断メッセージには、誤った構成が原因で発生したエラー、または、Log Loader がログ・ファイルからデータを読み込む際やログ・リポジトリにデータを書き込む際に発生したエラーが含まれる場合があります。

Log Loader の一般的な問題を次に示します。

- Log Loader 構成ファイル (ORACLE_HOME¥diagnostics¥config¥logloader.xml) 内のエラー。構成ファイル内にエラーがあると、Log Loader の実行が妨げられる場合があります。Log Loader が正常に機能するために、こうしたエラーを修正する必要があります。
- コンポーネントの登録ファイル (ORACLE_HOME¥diagnostics¥config¥registration¥*.xml) にエラーが含まれている場合に発生する構成エラー。登録ファイル内にエラーがあっても Log Loader の実行が妨げられることはありませんが、特定のログ・ファイルの内容がリポジトリにロードされなくなる可能性があります。通常、登録ファイルのエラーには、次の 2 つのタイプがあります。
 - XML 構文エラー。ファイルの解析が妨げられます。Log Loader は、このエラーに遭遇すると、ファイルの内容を完全に無視します。
 - 誤ったパスが構成ファイルに指定された場合。Log Loader は、指定されたパスでログ・ファイルを検出できないと、警告レベルの診断メッセージを発行します。これは常にエラーを示すものではありません。たとえば、Log Loader の起動時に、ログを生成するコンポーネントがアクティブではなく、ログ・ファイルがまだ作成されていなかったケースも考えられます。Log Loader はログ・ファイルの検索を継続し、ログ・ファイルが作成されると、メッセージの読み込みを開始します。
- Log Loader がログ・ファイルからメッセージを読み込む際にエラーが発生する場合があります。ログ・ファイルに、読み込みまたは解析ができない内容が含まれている場合、Log

Loader は、そのファイルの内容の一部が読み込めないことを示すログ・メッセージを発行します。この場合、**Log Loader** は、エラーからのリカバリを試み、ログ・ファイルの読み込みを続行します。

- リポジトリにメッセージを書き込む際にエラーが発生する場合があります（ディスク・エラーなど）。この種のエラーは、システム管理者が配慮して問題点を修正する必要があることを示している場合があります。
- 現在指定されている最大ロード・サイズをログ・ファイルが超過しているために、ログ・ファイルの読み込みを **Log Loader** がスキップする場合に、エラー・メッセージが生成されます。最大ロード・サイズは、「ログ・ローダー・プロパティ」ページで指定できます。

この場合、**Log Loader** は、次の形式でエラー・メッセージのログを記録します。

```
Size of data to be read from log /logfile exceeds threshold of x bytes. Skipping y_
skipped bytes and moving to end of log.
```

このメッセージは、読み込まれるデータのサイズが、指定されている最大ロード・サイズ x を超過しており、**Log Loader** がそのログ・ファイルの最後までスキップしたことを示しています。エラー・メッセージには、ログ・ファイルの名前 */logfile*、およびスキップされたバイト数 *y_skipped* に関する情報が含まれます。

ネットワーク構成の変更

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストのネットワーク構成を変更する手順を説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- ネットワーク構成を変更する手順の概要
- ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更
- ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行
- 静的 IP アドレスと DHCP 間の変更

12.1 ネットワーク構成を変更する手順の概要

この章では、ネットワーク構成を変更するための次の手順を示します。

- ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更

この項では、ホストのホスト名、ドメイン名または IP アドレスを変更する際に、Oracle Application Server Standard Edition One を更新する方法について説明します。

- ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストをネットワークに接続された状態と接続されていない状態間で移行する方法について説明します。ネットワークに接続する際は、DHCP または静的 IP アドレスを使用する場合があります。たとえば、ラップトップ・コンピュータに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしているが、別のネットワークに接続して使用する場合などに、これらの手順を使用できます。

- 静的 IP アドレスと DHCP 間の変更

この項では、静的 IP アドレスから DHCP に、および、DHCP から静的 IP アドレスに変更するための手順を説明します。静的 IP アドレス上にインストールしているが、より移動できるようにするため DHCP を使用する場合や、DHCP を使用しているが、静的 IP アドレスを使用してネットワークに接続する必要がある場合などに、これらの手順を使用できます。

12.2 ホスト名、ドメイン名または IP アドレスの変更

Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後に、ホストのホスト名、ドメイン名または IP アドレスを変更する必要がある場合があります。選択したインストール・タイプに応じて、これらの操作の一部またはすべてを実行できます。

表 12-1 に、ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの変更をサポートしているインストール・タイプと、適切な手順の指針を示します。

表 12-1 ホスト名、ドメイン名および IP アドレスの変更のサポートされた手順

インストール・タイプ	ホスト名またはドメイン名の変更	IP アドレスの変更
J2EE and Web Services	サポート。 12.2.1 項「J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更」 を参照してください。	サポート。 使用しているオペレーティング・システムのアドレスを変更するのみです。Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。
Identity Management と新しい Metadata Repository を使用する OracleAS Portal	未サポート。	サポート。 12.2.2 項「メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更」 を参照してください。
Identity Management と既存の Metadata Repository を使用する OracleAS Portal	サポート。 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。	サポート。 『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

12.2.1 J2EE and Web Services インストールのホスト名またはドメイン名の変更

この項では、J2EE and Web Services インストールが含まれるホストの、ホスト名、ドメイン名またはその両方を変更する方法について説明します。

次の手順について説明します。

- [開始する前に知っておく必要のあること](#)
- [タスク 1: ホストの準備](#)
- [タスク 2: ホスト名の変更](#)
- [タスク 3: chgiphost コマンドの実行](#)
- [タスク 4: 環境の再起動](#)
- [タスク 5: ファイルのホスト名の手動による更新](#)

開始する前に知っておく必要のあること

開始する前に、次の項目を確認してください。

- この中間層インスタンスが Oracle Internet Directory に登録されている場合、手順において、cn=orcladmin パスワードを指定する必要があります。
- より詳細な情報を確認できるようにするため、chgiphost コマンドを実行する前に、ログ・レベルの変更を検討します。ログ・レベルの変更の詳細は、[12.2.3.1 項](#)を参照してください。
- 古いホスト名が、構成ファイルに現れる可能性の高い文字列である場合、構成ファイルの更新を試行する際に、chgiphost スクリプトで問題が発生する可能性があります。この問題を回避する方法については、[12.2.3.2 項](#)を参照してください。
- 開始する前に、現在のホスト名および IP アドレスをメモしておきます。これらの値は、手順において求められます。
- この手順を開始する前に、現在の環境をバックアップしておくことをお勧めします。環境のバックアップの詳細は、[第 14 章](#)を参照してください。

タスク 1: ホストの準備

変更に合わせてホストを準備します。これには、インスタンスを削除して、すべてのプロセスを停止します。

1. ホストに、OracleAS ファイルベース・ファームで使用されるファイルベースのリポジトリを格納するインスタンスがある場合、そのファームからすべてのインスタンスを（他のホ

スト上にそのインスタンスがある場合でも) 削除する必要があります。これは、ホスト名を変更すると、リポジトリ ID が変わるためです。したがって、ファームからすべてのインスタンスを削除し、ホスト名を変更して (これによってリポジトリ ID が変更される)、この手順の最後で新しいリポジトリ ID を使用してファームにインスタンスを戻す必要があります。

OracleAS ファイルベース・ファームからインスタンスを削除するには、そのインスタンスの **Oracle** ホームで次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%\dcm%\bin\dcmctl leavefarm
```

2. **OracleAS** データベースベース・ファームまたは別のホスト上のリポジトリを使用する **OracleAS** ファイルベース・ファームの一部である **J2EE and Web Cache** インスタンスがホストに含まれる場合、そのファームからそのインスタンスを削除します。

```
ORACLE_HOME%\dcm%\bin\dcmctl leavefarm
```

手順の最後で、ファームにインスタンスを追加して戻すことができます。

3. **OracleAS Web Cache** クラスタの一部である中間層インスタンスがホストに含まれる場合、そのキャッシュ・クラスタからそのインスタンスを削除します。手順の最後で、クラスタにインスタンスを追加して戻すことができます。キャッシュ・クラスタからキャッシュを削除する手順については、『**Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド**』を参照してください。
4. ホスト上の中間層インスタンスを停止します。これには、使用している **Oracle** ホーム・ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%\bin\emctl stop iasconsole
ORACLE_HOME%\opmn%\bin\opmnctl stopall
```

5. 中間層インスタンスが **OracleAS** ファイルベース・ファームの一部であった場合、**DCM** デーモンがファイルベースのリポジトリ・インスタンスで実行されていることを確認します。これは、リポジトリ・インスタンスが同じホスト上にある場合もない場合も適用されます。

DCM デーモンが実行されているかどうかを確認するには、ファイルベースのリポジトリの **Oracle** ホームで次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%\opmn%\bin\opmnctl status
```

DCM デーモンを起動するには、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%\opmn%\bin\opmnctl startproc ias-component=dcm-daemon
```

6. ホストの再起動後に、**Oracle Application Server** プロセスが自動的に開始されないようにします。これには、設定した自動化された起動スクリプトをすべて無効化します (設定した場合)。
7. 中間層で使用されている **Oracle Internet Directory** が実行されていることを確認します。

タスク 2: ホスト名の変更

新しいホスト名、ドメイン名またはその両方を使用して、オペレーティング・システムを更新します。次の手順を実行する方法の詳細は、使用しているオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。必要に応じて、**IP** アドレスも変更できます。

1. オペレーティング・システムを更新して、ホスト名、ドメイン名またはその両方を適切に変更します。
2. 使用しているオペレーティング・システムが必要な場合は、ホストを再起動します。
3. ネットワーク上の別のホストから、現在のホストに対して **ping** できることを確認します。必ず新しいホスト名を使用して **ping** を実行し、何も問題がないことを確認します。

タスク 3: chgiphost コマンドの実行

ホスト上の各中間層インスタンスに対して、次の手順を実行します。次の手順に進む前に、1つの中間層インスタンスに対してすべての手順が完全に完了していることを確認してください。

1. 中間層インスタンスをインストールしたユーザーとして、ホストにログインします。
2. 環境変数 ORACLE_HOME が、中間層の Oracle ホームに設定されていることを確認します。
3. 中間層の Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd ORACLE_HOME%chgip%scripts
chgiphost.bat -mid
```

chgiphost コマンドでは、表 12-2 に示す情報を入力するように求められます。このプロンプトでは、カッコで囲まれた値が示される場合がありますが、それとは異なる値を入力したり、[Enter] キーを押して、示された値を受け入れることもできます。

表 12-2 chgiphost -mid のプロンプトと操作

プロンプト	操作
Enter fully qualified hostname (hostname.domainname) of destination	完全修飾された新しいホスト名を入力します。これは、新しいホスト名、ドメイン名またはその両方の場合があります。
Enter valid IP Address of destination	ホストの IP アドレスを変更した場合、新しい IP アドレスを入力します。 変更していない場合は、現在の IP アドレスを入力します。
Enter valid IP Address of source	ホストの IP アドレスを変更した場合、古い IP アドレスを入力します。 変更していない場合は、現在の IP アドレスを入力します。
OIDAdmin Password:	この中間層インスタンスが登録されている Oracle Internet Directory の cn=orcladmin パスワードを入力します。

4. 次のディレクトリにあるファイルでエラーを確認して、ツールが正常に実行されたことを確認します。

```
ORACLE_HOME%chgip%log
```

タスク 4: 環境の再起動

中間層インスタンスを再起動し、手順を開始する前の状態に構成をリストアします。

1. ホスト上の中間層インスタンスを起動します。これには、Oracle ホーム・ディレクトリで次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%opmn%bin%opmnctl startall
ORACLE_HOME%bin%emctl start iasconsole
```

または、「スタート」メニューから中間層インスタンスを起動できます。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「中間層」 → 「中間層の起動」

2. この手順の最初で、OracleAS Web Cache クラスタからインスタンスを削除した場合、それらをキャッシュ・クラスタに追加して戻します。キャッシュ・クラスタにキャッシュを追加する手順については、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』を参照してください。
3. OracleAS ファイルベース・ファームで使用されるファイルベースのリポジトリを格納しているインスタンスがホストにあった場合は、次の手順を実行します。
 - a. 新しいファームの新しいリポジトリ ID を取得します。これには、そのインスタンスの Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME%dcm%bin%dcmctl getRepositoryID%
```

- b. OracleAS ファイルベース・ファームを再作成します。これには、前述の手順で取得した新しいリポジトリ ID を使用して、そのインスタンスを新しいファームに追加します。repository_ID の形式は、hostname:port です。

```
ORACLE_HOME¥dcm¥bin¥dcmctl joinfarm -r repository_ID
```

- c. 前述の手順のコマンドを使用して、他のホスト上のすべてのインスタンスを新しいファームに追加して戻します。

4. この手順の最初で、別のホスト上のリポジトリを使用する OracleAS ファイルベース・ファームから J2EE and Web Cache インスタンスを削除した場合、それらを次のようにして追加して戻します。

```
ORACLE_HOME¥dcm¥bin¥dcmctl joinfarm -r repository_ID
```

このコマンドの repository_ID は、ファイルベース・リポジトリの Oracle ホームで次のコマンドを実行することによって戻される hostname:port 値です。

```
ORACLE_HOME¥dcm¥bin¥dcmctl getRepositoryID
```

5. この手順の最初で、OracleAS データベースベース・ファームから J2EE and Web Cache インスタンスを削除した場合、それらを次のようにして追加して戻します。

```
ORACLE_HOME¥dcm¥bin¥dcmctl joinfarm
```

6. この手順の最初で、Oracle Application Server Standard Edition One を自動的に起動するためのいずれかのプロセスを無効化した場合、それらを有効化します。

タスク 5: ファイルのホスト名の手動による更新

ファイルを編集して、Oracle ホームのパスなどのユーザー定義のパラメータの一部としてホスト名を入力した場合、chgiphost.sh スクリプトを実行しても、そのホスト名は自動的に更新されません。このようなケースでホスト名を更新するには、ファイルを手動で編集する必要があります。たとえば、plsq1.conf ファイルが、¥net¥dsun1¥private¥... など、ホスト名が含まれた NFS パスを持つ場合などです。

chgiphost.sh スクリプトでは、ドキュメント・ファイル内のホスト名の参照も編集できません。ホスト名を更新するには、これらのファイルを手動で編集する必要があります。このようなファイルの例として、ORACLE_HOME¥Apache¥Apache¥htdocs ディレクトリの次のファイルがあります。

- index.html.de
- index.html.es_ES
- index.html.fr
- index.html.it
- index.html.ja
- index.html.ko
- index.html.pt_BR
- index.html.zh_CN
- index.html.zh_TW

12.2.2 メタデータ・リポジトリを使用するインフラストラクチャの IP アドレスの変更

この項では、Identity Management および新しい Metadata Repository を使用した OracleAS Portal インストールが含まれるホストの IP アドレスを変更する方法について説明します。次の手順について説明します。

- 開始する前に知っておく必要のあること

- [タスク 1: 中間層インスタンスの停止](#)
- [タスク 2: ホストの準備](#)
- [タスク 3: IP アドレスの変更](#)
- [タスク 4: インフラストラクチャの更新](#)
- [タスク 5: 環境の再起動](#)

開始する前に知っておく必要のあること

この手順を開始する前に、次の項目を確認してください。

- 開始する前に、現在の IP アドレスをメモしておきます。この値は、手順において求められます。
- この手順を開始する前に、現在の環境をバックアップしておくことをお勧めします。環境のバックアップの詳細は、[第 14 章](#)を参照してください。

タスク 1: 中間層インスタンスの停止

インフラストラクチャのインストールを使用する中間層インスタンスをすべて停止します。

「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「中間層」→「中間層の停止」

タスク 2: ホストの準備

変更に合わせてホストを準備します。これには、すべてのプロセスを停止します。

1. 環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID を設定します。
2. 次のようにして、インフラストラクチャを停止します。

```
emctl stop iasconsole
opmnctl stopall
lsnrctl stop

sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> shutdown
SQL> quit
```

3. すべての Oracle Application Server Standard Edition One プロセスが停止したことを確認します。
4. ホストの再起動後に、Oracle Application Server Standard Edition One プロセスが自動的に開始されないようにします。これには、設定した自動化された起動スクリプトをすべて無効化します（設定した場合）。

タスク 3: IP アドレスの変更

新しい IP アドレスを使用してオペレーティング・システムを更新し、ホストを再起動してから、そのホストがネットワーク上で正常に稼働していることを確認します。この方法の詳細は、使用しているオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

1. オペレーティング・システムを更新して、IP アドレスを適切に変更します。
2. 使用しているオペレーティング・システムが必要な場合は、ホストを再起動します。
3. ネットワーク上の別のホストから、現在のホストに対して ping できることを確認します。必ず新しい IP アドレスを使用して ping を実行し、何も問題がないことを確認します。

タスク 4: インフラストラクチャの更新

新しい IP アドレスを使用して、ホスト上のインフラストラクチャを更新します。

1. インフラストラクチャをインストールしたユーザーとして、ホストにログインします。
2. 環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID を設定します。

3. データベースを起動します。

```
sqlplus /nolog
SQL> connect SYS as SYSDBA
SQL> startup
SQL> quit
```

4. OPMN を起動します。

```
opmnctl start
```

5. Oracle Internet Directory を起動します。

```
opmnctl startproc ias-component=OID process-type=OID
```

6. インフラストラクチャの Oracle ホームで、次のコマンドを実行します。

```
cd ORACLE_HOME%chgip%scripts
chgiphost.bat -infra
```

chgiphost コマンドでは、古い IP アドレスと新しい IP アドレスを入力するように求められます。

7. 次のディレクトリにあるファイルでエラーを確認して、ツールが正常に実行されたことを確認します。

```
ORACLE_HOME%chgip%log
```

タスク 5: 環境の再起動

インフラストラクチャの起動を完了し、インフラストラクチャを使用する中間層インスタンスをすべて起動します。

1. インフラストラクチャの起動を完了します。

```
opmnctl startall
emctl start iasconsole
```

2. 中間層インスタンスが、インフラストラクチャと同じホスト上にある場合、中間層プロセスを再起動する前に、中間層インスタンスで chgiphost スクリプトを実行する必要があります。
3. この手順の最初で、Oracle Application Server Standard Edition One を自動的に起動するためのいずれかのプロセスを無効化した場合、それらを有効化します。

12.2.3 ホスト名またはドメイン名の変更に関するその他の設定

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストのホスト名またはドメイン名の変更に適用できる、次のその他の設定について説明します。

- [chgiphost のログ・レベルの設定](#)
- [chgiphost スクリプトのカスタマイズ](#)
- [Windows 2000 から Windows 2003 へのアップグレード後のホスト名の変更](#)
- [ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ](#)

12.2.3.1 chgiphost のログ・レベルの設定

デフォルトでは、chgiphost コマンドのコンソール・ログ・レベルは、SEVERE です。このログ・レベルでは、chgiphost の実行の際に、重要な情報のみが出力されます。詳細な進捗状況を確認する場合は、次のようにコンソール・ログ・レベルを CONFIG に設定します。

1. 次のファイルを編集します。

```
ORACLE_HOME%chgip%config%chgip.log.properties
```

2. `java.util.logging.ConsoleHandler.level` パラメータを `CONFIG` に変更します。

```
java.util.logging.ConsoleHandler.level = CONFIG
```

12.2.3.2 chgiphost スクリプトのカスタマイズ

デフォルトでは、`chgiphost` スクリプトは、新しいホスト名を使用して **Oracle** ホームの主要な構成ファイルを更新します。インストールにおいて、次のいずれかのケースが適用できる場合、`chgiphost` スクリプトの挙動のカスタマイズを検討できます。

- ホスト名が含まれる構成ファイルを追加で作成し、`chgiphost` スクリプトでこれらのファイルを更新する場合

これらのファイルを更新するには、`chgiphost` を実行する前に、それらのファイルのフルパス名を次のファイルに追加します。

```
ORACLE_HOME¥chgif¥config¥hostname.lst
```

- 古いホスト名が非常に短い (1 文字または 2 文字)、または構成ファイルに現れる可能性の高い文字列である場合

`chgiphost` を実行する前に、`hostname.lst` にリストされている各ファイルを調べ、それらのファイルの設定に古いホスト名が含まれていないかどうかを確認します。一致を見つけた場合、`chgiphost` を実行してからそれらの設定を修正します。

- **Oracle** ホームのフルパスにホスト名が含まれる場合

この場合、`chgiphost` スクリプトは、構成ファイルを適切に更新できない場合があります。この問題を回避するには、**FileFixer** と呼ばれる **Java** ユーティリティを使用します。**FileFixer** は、正規表現の一致を使用してファイル内の特定のテキスト文字列を検索し、一致した文字列を新しい値に更新します。**FileFixer** では一度に 1 つの行でパターンを検索します。行をまたいでパターンの照合を行うことはできません。

FileFixer を使用するには、次の手順を実行します。

1. 次のファイルのコピーを作成します。

```
ORACLE_HOME¥chgif¥config¥hostname_short_sample.lst.xml
```

2. コピー・ファイルを編集して、古いホスト名および新しいホスト名に必要な正規表現の一致を指定します。ファイルには、この方法の例が含まれています。

3. `chgiphost` スクリプトの実行時にそのファイルを指定します。

```
chgiphost option -hostnameShortXml full_path_to_your_xml_file
```

たとえば、ファイルを `¥mydir¥my_sample.lst.xml` と指定し、中間層インストールを更新している場合、次のように `chgiphost` を実行します。

```
chgiphost -mid -hostnameShortXml ¥mydir¥my_sample.lst.xml
```

12.2.3.3 Windows 2000 から Windows 2003 へのアップグレード後のホスト名の変更

Windows 2000 から **Windows 2003** にアップグレードすると、ホスト名の小文字が大文字に変更される場合があります。たとえば、アップグレード前のホスト名が「**myhost**」の場合、アップグレード後に「**MYHOST**」になる場合があります。これが発生した場合、**Oracle Application Server** の一部のプロセスが正常に機能しない可能性があります。

この問題を解決するために、`chgiphost` コマンドを実行して **Oracle Application Server** を更新する必要はありません。小文字のホスト名のエントリを `hosts` ファイルに追加するのみです。

```
OS_path¥system32¥drivers¥etc¥hosts
```

たとえば、アップグレード前の完全修飾されたホスト名が `myhost.mydomain` で、IP アドレスが `1.2.3.4` の場合、次の行を追加します。

1.2.3.4 myhost.mydomain myhost

12.2.3.4 ホスト名の変更時のエラーからのリカバリ

この項では、`chgiphost.sh` スクリプトの使用時に遭遇する可能性がある一般的なエラーからのリカバリ方法について説明します。次のケースを考えます。

- ケース 1: 目的の名前を誤って指定した場合
- ケース 2: `chgiphost.sh` の実行時にエラーが発生した場合

ケース 1: 目的の名前を誤って指定した場合

`chgiphost.sh` スクリプトを実行したが、目的の名前を誤って指定した場合を考えます。このケースでは、`chgiphost.sh` を再度実行することによって、エラーを修正できます。次に詳細を示します。

現在のソース・ホスト名が `loire985` で、誤って指定した目的のホスト名が `mqa985` で、正しい目的のホスト名が `sqb985` だった場合を考えます。最初は、`source = loire985` および `destination = mqa985` を指定して `chgiphost.sh` を実行したことになります。

このエラーからリカバリするには、次の手順を実行します。

1. `source = mqa985` および `destination = sqb985` を指定して `chgiphost.sh` を実行します。
2. `source = loire985` および `destination = sqb985` を指定して、`chgiphost.sh` を再度実行します。

ケース 2: `chgiphost.sh` の実行時にエラーが発生した場合

たとえば、Oracle Internet Directory で誤ったパスワードを入力すると、エラー・メッセージが示されます。この場合、前と同じソースおよび目的のホスト名を指定して `chgiphost.sh` を再度実行し、求められた際に確実に正しいパスワードを入力する必要があります。

`chgiphost.sh` の実行時にエラーが発生した場合、`chgiphost.sh` を再び実行する前にそのエラーを修正する必要があります。

12.3 ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間の移行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One ホストを、ネットワークに接続された状態と接続されていない状態間で移行する方法について説明します。次の仮定と制限が適用されるものとします。

- ホストには、インフラストラクチャおよび中間層のインスタンスが含まれている必要があります。つまり、Oracle Application Server Standard Edition One の環境全体がホスト上にある必要があります。
- DHCP は、ループバック・モードで使用されている必要があります。詳細は、第 2 章「システムおよびインストール要件」を参照してください。
- IP アドレスの変更のみがサポートされます。ホスト名は変更してはいけません。
- DHCP モードのホストは、デフォルトのホスト名 (`localhost.localdomain`) を使用できません。標準的なホスト名を使用するようにホストを構成する必要があり、ループバック IP はそのホスト名に変換できる必要があります。
- ネットワークに接続されていない状態のすべてのインストールでは、ループバック・アダプタが必要となります (DHCP または静的 IP)。詳細は、第 2 章「システムおよびインストール要件」を参照してください。

12.3.1 ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (静的 IP アドレス)

この手順では、標準的なホスト名 (localhost ではない) を使用してネットワークに接続されていないホストに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたが、ネットワークに接続された状態に移行して、静的 IP アドレスを使用すると仮定します。IP アドレスはデフォルトのループバック IP か、標準的な任意の IP アドレスとします。

ネットワークに接続された状態に移行するには、そのホストをネットワークに接続するのみです。Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。

12.3.2 ネットワークに接続されていない状態から接続されている状態への移行 (DHCP)

この手順では、標準的なホスト名 (localhost ではない) を使用してネットワークに接続されていないホストにインストールしたが、ネットワークに接続された状態に移行して、DHCP を使用すると仮定します。ホストの IP アドレスは任意の静的 IP アドレスか、ループバック IP アドレスとし、そのホスト名に設定する必要があります。

ネットワークに接続された状態に移行するには、DHCP を使用してホストをネットワークに接続し、そのホスト名をループバック IP アドレスのみに設定します。

12.3.3 ネットワークに接続された状態から接続されていない状態への移行 (静的 IP アドレス)

静的 IP を使用して、ホストがネットワークに接続されている状態から、ネットワークに接続されていない状態に移行する場合は、次の手順を実行します。

1. 次のファイルを構成して、IP アドレスおよびホスト名がローカルに解決されるようにします。
 - %SYSTEMDRIVE%\%WINNT%\system32\drivers\etc\hosts (Windows 2000)
 - %SYSTEMDRIVE%\%WINDOWS%\system32\drivers\etc\hosts (Windows XP)
2. ホストをネットワークから切断します。
3. ホスト名や IP アドレスを変更するためになんらかの手順を実行する必要はありません。

12.3.4 ネットワークに接続されている状態から接続されていない状態への移行 (DHCP)

ループバック・モードで DHCP を使用して、ホストがネットワークに接続されている状態から、ネットワークに接続されていない状態に移行する場合は、次の手順を実行します。

1. 次のファイルを構成して、IP アドレスおよびホスト名がローカルに解決されるようにします。
 - %SYSTEMDRIVE%\%WINNT%\system32\drivers\etc\hosts (Windows 2000)
 - %SYSTEMDRIVE%\%WINDOWS%\system32\drivers\etc\hosts (Windows XP)
2. ホストをネットワークから切断します。
3. ホスト名や IP アドレスを変更するためになんらかの手順を実行する必要はありません。

12.4 静的 IP アドレスと DHCP 間の変更

この項では、静的 IP アドレスと DHCP 間の変更方法について説明します。次の仮定と制限が適用されるものとします。

- ホストには、インフラストラクチャおよび中間層のインスタンスが含まれている必要があります。つまり、Oracle Application Server Standard Edition One の環境全体がホスト上にある必要があります。

- DHCP は、ループバック・モードで使用されている必要があります。詳細は、[第 2 章「システムおよびインストール要件」](#)を参照してください。
- IP アドレスの変更のみがサポートされます。ホスト名は変更してはいけません。
- DHCP モードのホストは、デフォルトのホスト名 (`localhost.localdomain`) を使用できません。標準的なホスト名を使用するようにホストを構成する必要があり、ループバック IP はそのホスト名に変換できる必要があります。

12.4.1 静的 IP アドレスから DHCP への変更

静的 IP アドレスから DHCP にホストを変更するには、次の手順を実行します。

1. ホストを DHCP に変換する前に、ループバック IP アドレスに関連付けられたホスト名を持つようにホストを構成します。
2. ホストを DHCP に変換します。Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。

12.4.2 DHCP から静的 IP アドレスへの変更

DHCP から静的 IP アドレスにホストを変更するには、次の手順を実行します。

1. 静的 IP アドレスを使用するようにホストを構成します。
2. Oracle Application Server Standard Edition One を更新する必要はありません。

SSL の有効化

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の Secure Sockets Layer (SSL) を有効化する手順について説明します。この章の内容は次のとおりです。

- インフラストラクチャにおける SSL の通信経路
- インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク
- 中間層の SSL 通信経路
- 中間層の一般的な SSL 構成タスク

13.1 インフラストラクチャにおける SSL の通信経路

この項では、Oracle Application Server Infrastructure で使用されるすべての SSL 通信経路を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

注意： SSL の構成を開始する前に、Oracle Internet Directory のモードを確認します。oidadmin ツールを起動し、Oracle Directory Manager の SSL モードを表示します。Directory Server に移動し、「プロパティの表示」を選択して、「SSL 設定」を選択します。

次の段落では、Oracle Application Server Infrastructure を介した通信経路をリストし、関連する SSL 構成手順について説明します。

- **Oracle HTTP Server から OC4J_SECURITY インスタンス**
SSL を介した AJP 通信を構成するには、mod_oc4j の iaspt デーモンとの通信方法を構成する必要があります。これを行うには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の、SSL を使用するための mod_oc4j の構成に関する項を参照してください。
- **Oracle HTTP Server から iaspt (ポート・トンネリング) を介して OC4J_SECURITY インスタンス**
SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の、ポート・トンネリングに関する項を参照してください。
- **OC4J_SECURITY インスタンスから Oracle Internet Directory**
SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の手順を実行してください。このマニュアルでは、次の SSL 通信の構成方法について説明しています。
 - ブラウザと OracleAS Single Sign-On サーバー間 (Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照)
 - OracleAS Single Sign-On サーバーと Oracle Internet Directory サーバー間 (Single Sign-On Server と Oracle Internet Directory 間の SSL の構成に関する項を参照)

Oracle Delegated Administration Services では、SSL 用に Oracle HTTP Server を構成した後では、SSL が有効化されます。Oracle Internet Directory への Oracle Delegated Administration Services の通信では、常に SSL が有効化されています。SSL を有効化するために実行すべき構成作業はありません。

- OC4J_SECURITY インスタンスからメタデータ・リポジトリ・データベース、および Oracle Internet Directory からメタデータ・リポジトリ・データベース

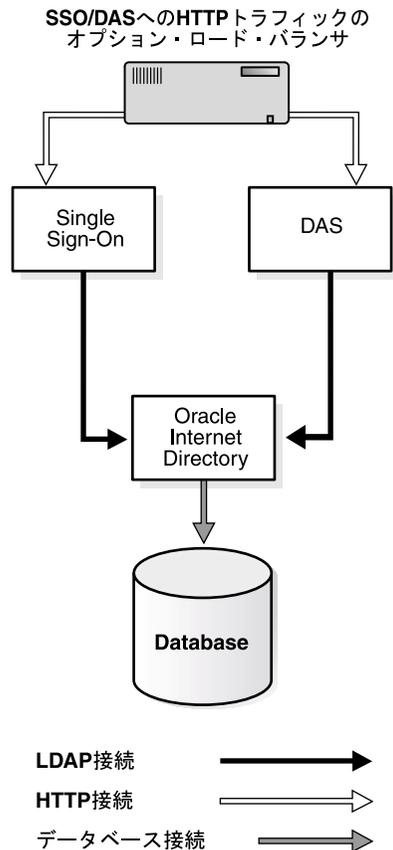
指定した SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されている場合、次のように SSL プロトコルおよび SSL ポートを JDBC URL に指定して、アプリケーションに要求することのみが必要となります。

```
ldaps://host:sslport/...
```

セキュアな接続を使用する場合、プロトコルの名前に「s」を追加する必要があります。たとえば、「ldap」ではなく「ldaps」を使用します。

SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されていない場合、その構成を変更する必要があります。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の、「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」を参照してください。

図 13-1 Identity Management コンポーネントと SSL 接続経路



13.2 インフラストラクチャの一般的な SSL 構成タスク

この項では、個々のコンポーネントで SSL を構成するための手順を示している Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルへの参照を提供します。

13.2.1 OracleAS Single Sign-On および Oracle Delegated Administration Services の SSL の構成

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の手順を実行して、次の SSL 通信を構成します。

- ブラウザと OracleAS Single Sign-On サーバー間 (Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照)
- OracleAS Single Sign-On サーバーと Oracle Internet Directory サーバー間 (Single Sign-On Server と Oracle Internet Directory 間の SSL の構成に関する項を参照)

Oracle Delegated Administration Services では、SSL 用に Oracle HTTP Server を構成した後では、SSL が有効化されます (Single Sign-On 中間層での SSL の有効化に関する項を参照)。Oracle Internet Directory への Oracle Delegated Administration Services の通信では、常に SSL が有効化されています。SSL を有効化するために実行すべき構成作業はありません。

13.2.2 Oracle Internet Directory の SSL の構成

Oracle Internet Directory での SSL 通信の構成手順は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』(「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」)
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』(「SSL パラメータの構成」)
- 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』(「10g リリース 2 (10.1.2) における SSL の使用制限に関する項」)

13.2.3 Identity Management データベースの SSL の構成

『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の「Identity Management インフラストラクチャ・データベースの再構成」の手順を実行して、Identity Management データベースの SSL を構成します。

13.3 中間層の SSL 通信経路

この項では、Oracle Application Server の中間層インストール・タイプで使用されるすべての SSL 通信経路を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

次に、Oracle Application Server 中間層を介した通信経路をリストし、関連する SSL 構成手順について説明します。

- **外部クライアントまたはロード・バランサから Oracle HTTP Server**
SSL 用に Oracle HTTP Server を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「SSL の有効化」の手順を実行してください。
- **外部クライアントまたはロード・バランサから OracleAS Web Cache**
SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。
- **OracleAS Web Cache から Oracle HTTP Server**
SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。

- **Oracle HTTP Server から OC4J アプリケーション (AJP)**
SSL を介した AJP 通信を構成するには、`mod_oc4j` の `iaspt` デーモンとの通信方法を構成する必要があります。これを行うには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の SSL を使用するための `mod_oc4j` の構成に関する項を参照してください。
- **Oracle HTTP Server から `iaspt` を介して OC4J**
SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』のポート・トンネリングに関する項を参照してください。
- **OC4J (JAAS Provider) から Oracle Internet Directory**
JAAS Provider を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の手順を実行します。SSL 用に JAAS Provider を構成するには、`SSL_ONLY_FLAG` を `true` に設定します。
- **OC4J からデータベース (ASO)**
指定した SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されている場合、次のように SSL プロトコルおよび SSL ポートを JDBC URL に指定して、アプリケーションに要求することのみが必要となります。

`ldaps://host:sslport/...`

セキュアな接続を使用する場合、プロトコルの名前に「s」を追加する必要があります。たとえば、「`ldap`」ではなく「`ldaps`」を使用します。

SSL ポート上で SSL 接続を受け入れるように Oracle Internet Directory が構成されていない場合、その構成を変更する必要があります。『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「Secure Sockets Layer (SSL) とディレクトリ」を参照してください。
- **HTTP を介した ORMI (Oracle Remote Method Invocation、カスタム・ワイヤ・プロトコル)、および SSL を介した HTTP**
SSL を介した ORMI はサポートされていません。同様の機能を構成するには、HTTP を介した ORMI を構成してから、SSL 用に HTTP を構成します。

ORMI または HTTP を構成する方法の手順は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』の「HTTP を介した ORMI トンネリングの構成」を参照してください。
- **スタンドアロン OC4J の SSL (HTTPS)**
SSL のこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の、クライアントと OC4J インスタンス間の通信をセキュアに保つための SSL の使用方法を説明している「OC4J の SSL 用構成手順」を実行してください。
- **OracleAS Portal Parallel Page Engine (OC4J_PORTAL インスタンスのサブレット) から OracleAS Web Cache (HTTPS)**
SSL 用にこの接続経路を構成するには、『Oracle Application Server Containers for J2EE セキュリティ・ガイド』の「OC4J の SSL 用構成手順」を実行してください。

13.4 中間層の一般的な SSL 構成タスク

この項では、Oracle Application Server の中間層インストール・タイプで一般的に使用される SSL 構成の一部を確認し、Oracle Application Server ドキュメント・ライブラリのコンポーネント・マニュアルの構成手順と相互参照できるようにします。

13.4.1 OracleAS Web Cache における SSL の有効化

OracleAS Web Cache は、すべての Oracle Application Server の中間層インストールの一部です。SSL 用に OracleAS Web Cache を構成するには、『Oracle Application Server Web Cache 管理者ガイド』の「HTTPS リクエストをサポートするための OracleAS Web Cache の設定」の手順を実行してください。

13.4.2 Oracle HTTP Server における SSL の有効化

Oracle HTTP Server は、すべての Oracle Application Server の中間層インストールの一部です。SSL 用に Oracle HTTP Server を構成するには、『Oracle HTTP Server 管理者ガイド』の「SSL の有効化」の手順を実行してください。

13.4.3 OracleAS Portal における SSL の有効化

OracleAS Portal は、HTTP 通信用にいくつかのコンポーネント（Parallel Page Engine、Oracle HTTP Server および OracleAS Web Cache など）を使用し、それぞれがクライアントまたはサーバーとして機能する場合があります。結果として、HTTP ではなく、HTTPS プロトコルを使用するように中間層の各コンポーネントを個々に構成できます。

これらのコンポーネントは、次の個別のネットワーク・ホップを介して OracleAS Portal と対話します。

- クライアントのブラウザと OracleAS Portal 環境のエントリ・ポイント間。エントリ・ポイントは、OracleAS Web Cache またはネットワーク末端のハードウェア・デバイス（リバース・プロキシや SSL アクセラレータなど）の場合があります。
- OracleAS Web Cache と Oracle Application Server 中間層の Oracle HTTP Server 間。
- クライアントのブラウザと OracleAS Single Sign-On または Oracle Internet Directory（またはインフラストラクチャ）層の Oracle HTTP Server 間。
- 中間層の Parallel Page Engine（PPE）と OracleAS Web Cache またはフロントエンドのリバース・プロキシ間のループバック接続。
- Parallel Page Engine（PPE）と、ポートレット・コンテンツを提供するリモート Web プロバイダ間。
- OracleAS Portal インフラストラクチャと Oracle Internet Directory サーバー間。

『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の次のセクションには、OracleAS Portal の最も一般的な SSL 構成の概要と、それらを実装するための手順が示されています。

- OracleAS Single Sign-On との SSL 接続：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Single Sign-On へのセキュアな接続を構成します。
- OracleAS Web Cache との SSL 接続：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Web Cache へのセキュアな接続を構成します。
- OracleAS Portal の全体にわたる SSL：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、OracleAS Portal 全体のセキュアな接続を構成します。
- Oracle Application Server 内での非 SSL による外部 SSL：『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の手順を実行して、非 SSL モードで Oracle Application Server を実行して、サイトが SSL URL を介して外部からアクセスできるように OracleAS Portal を構成します。

注意： OracleAS Portal の保護に関する全般的な情報は、『Oracle Application Server Portal 構成ガイド』の第 6 章「OracleAS Portal の保護」を参照してください。

13.4.4 Application Server Control の SSL の構成

Application Server Control の SSL を構成するには、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

バックアップおよびリカバリ

この章では、Oracle Application Server Standard Edition One の現在の環境、構成ファイル、Metadata Repository をバックアップおよびリカバリする方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- バックアップおよびリカバリ・サービスの比較
- Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ
- OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ
- バックアップの手順

14.1 バックアップおよびリカバリ・サービスの比較

バックアップおよびリカバリ・サービスは、Application Server Control コンソールから利用できます。ただし、このサービスでバックアップできるのは、構成ファイルと OracleAS Metadata Repository のみです。環境全体のバックアップを実行するには、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用する必要があります。表 14-1 に、バックアップおよびリカバリの 2 つの方法の違いを示します。

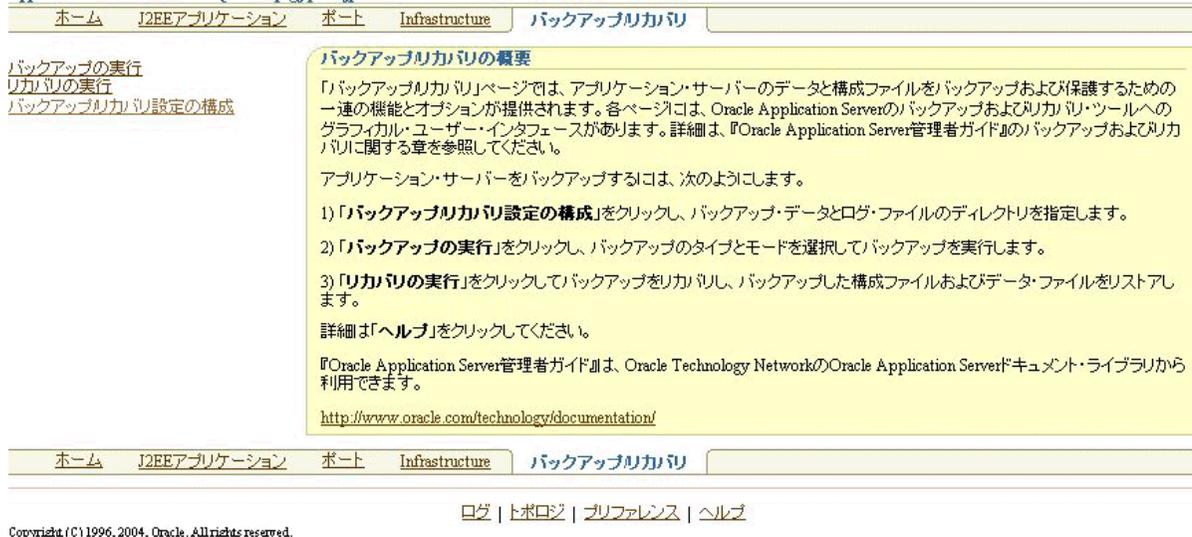
表 14-1 バックアップおよびリカバリ・サービスの比較

ファイル・タイプ/データ型	Application Server Control コンソールによるバックアップ	OracleAS Backup and Recovery Tool によるバックアップ
Oracle ソフトウェア・ファイル (ライブラリ・ファイルおよびバイナリ・ファイルなどの静的ファイル。これらのファイルは、中間層およびインフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、Oracle 製品のパッチを適用するか、ソフトウェアをインストールまたは再インストールした場合にのみ変更されます。)	不可	可
Oracle 構成ファイル (OracleAS Portal または J2EE などの様々なコンポーネントの構成ファイル。これらのファイルは、中間層およびインフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、通常、構成を変更した場合や、新しいアプリケーションをデプロイした場合に頻繁に変更されます。)	可	可
OracleAS Metadata Repository ファイル (Metadata Repository を構成しているデータファイルおよび制御ファイルです。これらのファイルは、インフラストラクチャの Oracle ホームにあります。これらのファイルは、Oracle Application Server Standard Edition One の通常の操作において頻繁に変更されます。)	可	可

14.2 Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ

Application Server Control コンソールから、「バックアップ/リカバリ」を選択して、「バックアップとリカバリ」ページ (図 14-1) にアクセスします。

図 14-1 「バックアップとリカバリ」ページ

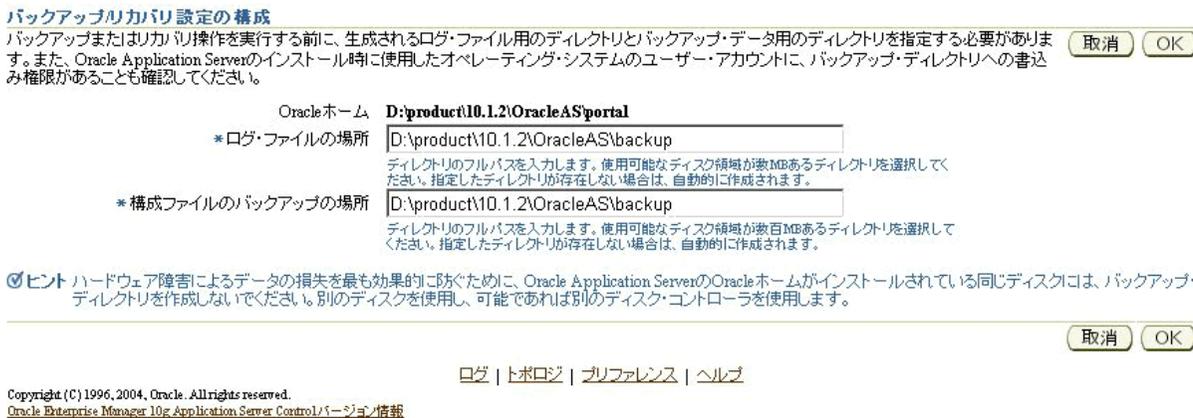


バックアップまたはリカバリを実行する前に、バックアップおよびリカバリの設定を構成する必要があります。この設定を行うのは、最初にこのページにアクセスしたときのみです。この構成設定は、その後のすべてのバックアップおよびリカバリ操作に保存されます。設定は、いつでもこのページにアクセスして変更できます。

14.2.1 バックアップ/リカバリ設定の構成

「バックアップとリカバリ」ページで、「バックアップ/リカバリ設定の構成」リンクをクリックして、「バックアップ/リカバリ設定の構成」ページ (図 14-2) を開きます。

図 14-2 バックアップ/リカバリ設定の構成



OracleAS Infrastructure および中間層の両方のインスタンスで、次の情報を入力するように求められます。

「ログ・ファイルの場所」

バックアップおよびリカバリの手順では、あらゆる種類のトラブルシューティングに有効なログが生成されます。「ログ・ファイルの場所」フィールドに、ログ・ファイルを保管するディレクトリのフルパスを指定します。指定したディレクトリが存在しない場合、自動的に作成されます。

「構成ファイルのバックアップの場所」

バックアップされたデータを保管するディレクトリのフルパスを入力します。現在の Oracle Application Server Standard Edition One ファイルが存在する場所からは影響を受けない場所を指定するか、バックアップ後にそうした場所にすぐに移動することをお勧めします。指定したディレクトリが存在しない場合、自動的に作成されます。

OracleAS Infrastructure インスタンスをバックアップする場合、次の情報も入力するように求められます。

「メタデータ・リポジトリ・データベース・バックアップの場所」

Metadata Repository ・データベースの場所のフルパスを入力します。デフォルトでは次の場所に指定されています。

```
INFRA_ORACLE_HOME\oradata\seone
```

たとえば、次のように指定します。

```
C:\product\10.1.2\OracleAS\infra\oradata\seone
```

Metadata Repository 「メタデータ・リポジトリ SID」

データベース・サービス ID (SID) を指定します。デフォルトは seone です。

バックアップおよびリカバリ設定の指定が完了したら、「OK」をクリックします。

14.2.2 バックアップの実行

「バックアップとリカバリ」 ページで、「バックアップの実行」 リンクをクリックして、「バックアップの実行」 ページ (図 14-3) を開きます。

図 14-3 バックアップの実行

バックアップの実行		インストール・タイプ	Midtier	取消	OK
構成ファイルのバックアップの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup				
ログ・ファイルの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup				

この Application Server インストールのバックアップのモードを選択します。

- 全体オンライン・バックアップ
インスタンス構成ファイルの完全なバックアップを実行します。インスタンスは停止されません。
- 増分オンライン・バックアップ
インスタンス構成ファイルの増分バックアップを実行します。インスタンスは停止されません。最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップされます。
- 全体コールド・バックアップ
インスタンス構成ファイルの完全なバックアップを実行します。インスタンスが停止されます。
- 増分コールド・バックアップ
インスタンス構成ファイルの増分バックアップを実行します。インスタンスが停止されます。最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップされます。

取消 OK

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Control バージョン情報

このページでは、実行するバックアップのタイプを次の中から指定します。

- 「全体オンライン・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの全体バックアップを実行します。このオプションを選択しても、インスタンスが停止されることはありません。

- 「増分オンライン・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの増分バックアップを実行します。つまり、最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみがバックアップされます。このオプションを選択しても、インスタンスが停止されることはありません。

- 「全体コールド・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの全体バックアップを実行します。このオプションを選択すると、インスタンスが停止されます。

- 「増分コールド・バックアップ」

この Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのすべての構成ファイルの増分バックアップを実行します。つまり、最後の全体バックアップまたは増分バックアップ以降に変更されたファイルのみがバックアップされます。このオプションを選択すると、インスタンスが停止されます。

実行するバックアップのタイプを選択したら、「OK」をクリックしてバックアップを開始します。

14.2.3 リカバリの実行

「バックアップとリカバリ」 ページで、「リカバリの実行」リンクをクリックして、「リカバリの実行」 ページ (図 14-4) を開きます。

図 14-4 リカバリの実行

リカバリの実行

インストール・タイプ	Midtier	取消	OK
構成ファイルのバックアップの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup		
ログ・ファイルの場所	D:\product\10.1.2\OracleAS\backup		

リカバリするバックアップを選択してください。バックアップのリストには、バックアップ・モードにかかわらず、すべての正常なバックアップが含まれます。

* 使用可能なバックアップ

取消 OK

ログ | トポロジ | プリファレンス | ヘルプ

Copyright (C) 1996, 2004, Oracle. All rights reserved.
Oracle Enterprise Manager 10g Application Server Controlバージョン情報

ドロップダウン・リストから使用可能ないずれかのバックアップを選択し、「OK」をクリックしてリカバリを実行します。

14.3 OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ

OracleAS Backup and Recovery Tool は、要件に応じて様々な用途で使用できます。このツールを使用すると、構成ファイルと Metadata Repository のバックアップおよびリカバリを実行したり、独自の構成ファイルと Metadata Repository のバックアップおよびリカバリのスクリプトを設定することができます。

この項では、次の項目について説明します。

- OracleAS Backup and Recovery Tool の取得
- OracleAS Backup and Recovery Tool の構成
- 使用している構成ファイル用の OracleAS Backup and Recovery Tool のカスタマイズ
- OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要

14.3.1 OracleAS Backup and Recovery Tool の取得

OracleAS Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールまたは OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD-ROM から取得できます。

Oracle Application Server Standard Edition One のインストールからの取得

Oracle Application Server Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストールの一部としてインストールされます。このツールは、`Oracle_Home\backup_restore` ディレクトリにあります。表 14-2 に、この `backup_restore` ディレクトリに格納されている可能性のあるファイルをリストします。

表 14-2 OracleAS Backup and Recovery Tool のファイル

ファイル ¹	説明
<code>bkp_restore.pl</code>	RepCA をインストール済の場合、この Perl スクリプトを実行します。
<code>bkp_restore.sh</code>	Perl スクリプトの実行に使用されるバッチ・コマンド・ファイル。
<code>bkp_restore.bat</code>	
<code>config\config.inp</code>	現在の環境にあわせてツールをカスタマイズするためのパラメータを持つ主要な構成ファイル。
<code>config\config_component_files.inp</code>	コンポーネント構成ファイル。個々のコンポーネントの構成ファイルのリストが含まれています。これらは、構成ファイルのバックアップの実行時にバックアップするファイルを指定します。
<code>*.tmpl</code>	RMAN を使用してデータベースのバックアップおよびリカバリ操作を実行するためのスクリプトのテンプレート。最初にツールを構成すると、各 <code>.tmpl</code> ファイルから、カスタマイズされた <code>.dat</code> ファイルが作成されます。
<code>*.sql</code>	リポジトリ・データベースをチェックするためにツールで使用される SQL スクリプト。

¹ パスは OracleAS Backup and Recovery Tool ディレクトリのルートに対する相対パスです。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD-ROM からの取得

既存のデータベースで RepCA を実行している場合、OracleAS Backup and Recovery Tool を手動でインストールする必要があります。OracleAS Backup and Recovery Tool をインストールする前に、次の注意事項を確認してください。

- ツールは、対応するインストールと同じホスト上にインストールする必要があります。ツールは、対応するインストールの Oracle ホーム内か、Oracle ホーム外のディレクトリにインストールできます。
- このツールは、Perl 5.6.1 以降のインタプリタを必要とする Perl スクリプトです。Perl のサイト (<http://www.perl.org>) からこのインタプリタを取得するか、Oracle Application Server Standard Edition One に付属している次の Perl インタプリタを使用できます。

`ORACLE_HOME/perl/5.6.1/bin/MSWin32-x86/perl.exe`

- このツールを使用するには、Java Runtime Environment (JRE) がインストールされている必要があります。JRE は、次のサイトから取得できます。

<http://java.sun.com/j2se/desktopjava/jre/index.jsp>.

OracleAS Backup and Recovery Tool をインストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。
2. backup.jar ファイル (CD_ROM¥stage¥Components¥oracle.iappserver.backup_restore¥10.1.2.0.0¥1¥DataFiles¥backup.jar) から backup_restore.jar ファイルを展開します。たとえば、次のように指定します。

```
C:¥> cd ORACLE_HOME
C:ORACLE_HOME¥> jar xvf CD_ROM¥stage¥Components¥oracle.iappserver.backup_restore¥10.1.2.0.0¥1¥DataFiles¥backup.jar
```

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant をインストールすると、backup_restore.jar ファイルは自動的に展開され、ORACLE_HOME¥utilities¥backup ディレクトリに配置されます。

backup_restore.jar を取得したら、その中身を RepCA インストールの Oracle ホームに展開します。たとえば、次のように指定します。

```
C:¥> cd ORACLE_HOME
C:ORACLE_HOME¥> jar xvf utilities¥backup¥backup_restore.jar
```

3. OracleAS Backup and Recovery Tool ファイルに関して理解を深める必要があります (詳細は表 14-2 を参照)。構成ファイルを編集する手順は、後続の手順で説明します。

14.3.2 OracleAS Backup and Recovery Tool の構成

この項では、OracleAS Backup and Recovery Tool の構成方法について説明します。現在の環境の各インストールに対してこれらの手順を実行する必要があります。

注意 (Windows ユーザー) : Backup and Recovery Tool のディレクトリでファイルを編集する際、ワードパッドなどのリッチ・テキスト・エディタを使用しないでください。こうしたエディタでは各行末に改行が挿入され、ツールでエラーが発生する場合があります。かわりに、メモ帳などの基本的なテキスト・フォーマッタを使用することをお勧めします。

1. このツールはログ・ファイルおよびバックアップ・ファイルを書き出すので、これらのファイルを格納する次のディレクトリを作成する必要があります。
 - a. **ログ・ファイル・ディレクトリ** (中間層およびインフラストラクチャ) : このディレクトリは、ツールが作成したログ・ファイルを格納します。このディレクトリは、数 MB の領域を必要とします。
 - b. **構成ファイル・バックアップ・ディレクトリ** (中間層およびインフラストラクチャ) : このディレクトリは、構成ファイルのバックアップを格納します。このディレクトリは、数百 MB の領域を必要とします。
 - c. **データベース・バックアップ・ディレクトリ** (インフラストラクチャのみ) : このディレクトリは、メタデータ・リポジトリのデータファイルおよび制御ファイルのバックアップ、およびアーカイブ REDO ログを格納します。このディレクトリは、数 GB の領域を必要とします。

これらのディレクトリを作成する際の推奨事項を次に示します。

- 可能な場合、バックアップ・ディレクトリは、現在の Oracle ホームとは別のディスク上のファイル・システム上および別のディスク・コントローラ上に作成します。これによって、ハードウェアの障害時に、データをリカバリできる可能性が高くなります。
- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーが、バックアップ・ディレクトリに対して書込み権限を持つようにします。

たとえば、ログ・ファイル・ディレクトリ、構成ファイル・バックアップ・ディレクトリおよびデータベース・バックアップ・ディレクトリを ¥disk1 上に作成するには、次のように指定します。

```
mkdir C:¥backups¥log_files
mkdir C:¥backups¥db_files
mkdir C:¥backups¥config_files
```

2. config.inp を編集し、パラメータを変更します (表 14-3 を参照)。インストールが中間層かインフラストラクチャかによって、手順の一部が異なることに注意してください。

表 14-3 config.inp のパラメータ

パラメータ	値
oracle_home	Oracle ホームのフルパスを指定します。
log_path	ログ・ファイル・ディレクトリのフルパスを指定します。
config_files_list	この値を挿入しないでください。 config_files_list=DO_NOT_SET のままとします。 このパラメータは、bkp_restore.pl -m configure を実行すると、現在のインストールの構成ファイルの適切なリストで更新されます。
config_backup_path	構成ファイル・バックアップ・ディレクトリのフルパスを指定します。
install_type	この値を挿入しないでください。install_type=DO_NOT_SET のままとします。 このパラメータは、bkp_restore.pl -m configure を実行すると、現在のインストールの適切な値で更新されます。
dbid	この値を挿入しないでください。dbid=DO_NOT_SET のままとします。 OracleAS Portal のインストールでは、この値は、bkp_restore.pl -m configure を実行すると更新されます。ツールは、デフォルトで、メタデータ・リポジトリから dbid を取得します。または、障害時リカバリなど、あるホストから別のホストへのメタデータ・リポジトリの移行が伴う特殊なケースでは dbid を指定できます。 J2EE and Web Services のインストールでは、この値を扱うことはありません。
pfile	J2EE and Web Services のインストール: この行は、コメント・アウトしておきます。 OracleAS Portal のインストール: 必要に応じて、データベースの起動時に使用するかわりの pfile を指定します。または、この行をコメント・アウトしておき、デフォルトの spfile が使用されるようにします。 ■ ORACLE_HOME¥database¥spfileSID.ora このファイルでは空白値が許容されないため、デフォルト値を使用する場合は、pfile エントリをコメント・アウトしてください。 デフォルトの場所に spfileorcl.ora ファイルがない場合、次のファイルが pfile として使用されます。 ORACLE_HOME¥database¥initSID.ora 異なる pfile を使用する場合、データベースの起動用のかわりの pfile 名を指定します。

表 14-3 config.inp のパラメータ (続き)

パラメータ	値
database_backup_path	<p>J2EE and Web Services のインストール:</p> <p>この値を挿入しないでください。 database_backup_path=VALUE_NOT_SET のままとします。</p> <p>OracleAS Portal のインストール:</p> <p>データベース・バックアップ・ディレクトリのフルパスを指定します。</p>

- 環境変数 ORACLE_HOME に Oracle Application Server の Oracle ホームを設定します。
- インフラストラクチャのインストールの場合は次の手順を実行します。
 - 環境変数 ORACLE_SID にメタデータ・リポジトリの SID を設定します。デフォルトは orcl です。
 - メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。
- ツールを -m configure オプションで実行して、構成します。たとえば、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m configure
```

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストールでは、perl.exe の正しいバージョンを指定した後で次のコマンドを実行します。

```
bkp_restore.pl -m configure
```

このコマンドは、config.inp のパラメータを更新し、インフラストラクチャの場合は、メタデータ・リポジトリのバックアップ、リストアおよびリカバリに使用されるカスタマイズされた .dat ファイルを作成します。

これで、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用する準備が整いました。

14.3.3 使用している構成ファイル用の OracleAS Backup and Recovery Tool のカスタマイズ

出荷時の状態では、OracleAS Backup and Recovery Tool は、Oracle Application Server のインストールを再構築するのに必要なすべての Oracle Application Server 構成ファイルをバックアップします。

ツール側で、ユーザーのインストールに含まれる構成ファイルを判別できるので、ツールをカスタマイズする必要はありません。ただし、次のようにツールをカスタマイズすることもできます。

- **バックアップへのファイルの追加**

ログ・ファイルなど、定期的にバックアップしたい独自のローカルな構成ファイルやその他のファイルを追加できます。

- **バックアップからのファイルの除外**

バックアップ対象からファイルを除外できます。

バックアップへのファイルの追加

ファイル (Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネント固有のログ・ファイルなど) をバックアップに追加するには、次のように config_misc_files.inp ファイルにエントリを追加します。

- 特定のファイルを指定するには、次のようにします。

```
${OH}¥directorypath¥file
```

- ディレクトリ全体を指定するには、次のようにします。

```
#{OH}¥directorypath¥
```

- ワイルド・カードを使用するには、次のようにします。

```
#{OH}¥directorypath¥*.html
```

追加できるエントリの数に制限はありません。config_misc_files.inp ファイルは、config.inp のパラメータの config_files_list に常に含まれます。したがって、config.inp を編集する必要はありません。

config_misc_files.inp にキー・ファイルを指定する必要はありません。

バックアップからのファイルの除外

次のいずれかの方法で、バックアップからファイルを除外できます。

- config_component.inp ファイルからファイル・エントリを単に削除します。
- config_component.inp ファイルでディレクトリ全体がバックアップされるように指定されており、そのディレクトリから特定のファイルを除外する場合は、そのファイルのエントリを config_exclude_files.inp に追加します。指定したファイルを除くディレクトリ全体が、ツールによってバックアップされます。config_exclude_files.inp ではディレクトリを指定したり、ワイルド・カードを使用することはできません。指定できるのは単一のファイル・エントリのみです。

config_exclude_files.inp にキー・ファイルを指定する必要はありません。

14.3.4 OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要

この項では、OracleAS Backup and Recovery Tool の使用方法の概要を説明します。

この項では、次の項目について説明します。

- ツールを実行するための前提条件
- 構文
- 使用例

14.3.4.1 ツールを実行するための前提条件

OracleAS Backup and Recovery Tool を実行する前に、次の事項を確認します。

- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールしたユーザーとしてログインします。
- 環境変数 ORACLE_HOME が設定されていることを確認します。
- データベース・バックアップを実行している場合、環境変数 ORACLE_SID が設定されていることを確認します。デフォルトは orcl です。

14.3.4.2 構文

OracleAS Backup and Recovery Tool の構文は次のとおりです。

```
C:¥> bkp_restore.bat [-defnsv] -m <mode> [args]
```

最初のオプションのバッチについては、表 14-4 を参照してください。

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のオプション・パラメータ

パラメータ	説明
-d	実行せずにトレースを出力します。
-e	環境ファイルを指定します (デフォルトは config.inp)。

表 14-4 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のオプション・パラメータ (続)

パラメータ	説明
-f	ログ・ファイル、データベース・バックアップおよび構成ファイルのディレクトリを作成します (現在のコマンドで必要だが存在しない場合)。
-n	プロンプトを抑制し、ツールをバッチ・モードで実行できるようにします。
-s	サイレント・モードで実行します。
-v	冗長モードで実行します。

実行するモードを指定するには、-m オプションを使用します。引数をとるモードもあります。表 14-5 に、OracleAS Backup and Recovery Tool のモードおよび引数を示します。すべてのモードおよび引数では、大/小文字が区別されます。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数

モードおよび引数	説明
backup_cold	<p>メタデータ・リポジトリの全体コールド・バックアップを実行します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp (または、-e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、log_path を取得します。 ■ データベースを停止して、マウント・モードで起動します (データベースはオープンにしない)。 ■ RMAN を使用してデータファイルおよび制御ファイルのバックアップを実行します。このコマンドは、backup_cold.dat にあります。 ■ backup_cold.dat に指定されたディレクトリにバックアップを格納します (これは、通常、config.inp の database_backup_path に設定されます)。 ■ log_path にログ・ファイルを格納します。 ■ データベースをオープンにします。 <p>DCM ファイルベースのメタデータ・リポジトリの場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「dcmsctl exportrepository」コマンドを実行して、ファイルベースのリポジトリのバックアップを行います。 ■ config.inp の「config_backup_path」パラメータに指定されたディレクトリにバックアップを格納します。 <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、backup_cold オプションでは、その両方をまとめてバックアップします。これは、ファイルベースのリポジトリがインフラストラクチャのインストールに含まれるケースで考えられます。</p> <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベースのリポジトリをホストしているのか、データベースをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>ORACLE_HOME%dcmbin%dcmsctl whichfarm</pre> <pre>Repository Type: Database (host) => Hosts a database repository</pre> <pre>Repository Type: Distributed File Based (host) => Hosts a file based repository</pre>

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
backup_cold_incr	メタデータ・リポジトリの増分バックアップを実行します。
-l incr_backup_level	次の点を除いて、backup_cold と同様に機能します。 <ul style="list-style-type: none">■ -l オプションは、増分レベルを指定します (0 ~ 4)。■ backup_cold_incrlevel.dat ファイルを使用します。

増分バックアップには、累積と差分の 2 種類のバックアップがあります。ツールでは、差分バックアップ (デフォルト) が使用されます。詳細は、Oracle Database 10g Documentation Library の『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
backup_config	<p>全体構成バックアップを実行します。バックアップには、DCM 管理コンポーネントおよび非 DCM 管理コンポーネントの構成が含まれます。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp (または -e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、config_files_list、config_backup_path および log_path を取得します。 ■ DCM 管理コンポーネントの構成のアーカイブを作成します。 <pre> dcmctl createarchive -archive <archive_name> dcmctl exportarchive -archive <archive_name> -f <unique_name_in_config_backup_path> dcmctl removearchive -archive <archive_name> </pre> ■ config_files_list の各ファイルを開こうとします。すべてのファイルを開けない場合はエラーで終了します。 ■ config_files_list の各ファイルに対して、最初のエントリ (キー・ファイル) が存在しているかどうかを確認します。キー・ファイルが存在しない場合、致命的なエラーとして処理されます。存在する場合、リスト内のすべてのファイルがバックアップされます。存在しないファイルがあった場合、エラーがログに記録され、処理が続行されます。 ■ config_exclude_files.inp にリストされたファイルを除外します。 ■ 終了すると、config_backup_path¥config_bkp_timestamp.jar および config_backup_path¥dcm_archive_timestamp.jar (DCM 管理コンポーネント) にバックアップを格納します。 ■ なんらかのエラーが発生した場合、log_path¥config_bkp_timestamp にログ・ファイルを作成します。 <p>プロセスの前提条件:</p> <p>DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド「opmnctl startproc ias-component=OID」を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ (IM および MR) または IM のインストールに存在します。OID プロセスを起動する前に、OPMN プロセスを起動する必要があります。OPMN プロセスを起動するには、コマンド「opmnctl start」を使用します。 ■ データベースを起動し、実行する必要があります。 ■ リスナー・プロセスを起動する必要があります。 <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベース・リポジトリをホストしているのか、データベース・リポジトリをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>ORACLE_HOME¥dcm¥bin¥dcmctl whichfarm</pre> <pre>Repository Type: Database (host) => Hosts a database repository</pre> <pre>Repository Type: Distributed File Based (host) => Hosts a file based repository</pre>
backup_config_incr	<p>増分構成ファイル・バックアップを実行します。</p> <p>次の点を除いて、backup_config と同様に機能します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 最後の全体または増分構成ファイル・バックアップ以降に変更されたすべての構成ファイルをバックアップします。 <p>プロセスの前提条件については、backup_config オプションを参照してください。</p>

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
<code>backup_instance_cold</code>	<p>Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの全体コールド・バックアップを実行します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを停止します。 ■ OPMN 管理プロセスを起動します。 ■ OPMN 管理対象プロセスがすべて停止していることを確認します。停止していない場合、もう一度それらのプロセスの停止を試みます。プロセスをまだ停止できない場合、致命的なエラーを発行します。 ■ リポジトリ・バックアップを実行します (データベースおよびファイルベース)。データベース・リポジトリの場合、バックアップの間、そのデータベースを停止します。 ■ データベース・リポジトリについて、OID および DCM デーモン・プロセスを起動します。 ■ 構成バックアップを実行します。 ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを起動します。 ■ すべての OPMN プロセスが実行されていることを確認します。実行されていない場合、警告メッセージを発行します。
<code>backup_instance_cold_incr -1 <level number></code>	<p>Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップを実行します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを停止します。 ■ OPMN 管理プロセスを起動します。 ■ OPMN 管理対象プロセスがすべて停止していることを確認します。停止していない場合、もう一度それらのプロセスの停止を試みます。プロセスをまだ停止できない場合、致命的なエラーを発行します。 ■ リポジトリ・バックアップを実行します (データベースまたはファイルベース)。データベース・リポジトリの場合、バックアップの間、そのデータベースを停止します。level オプションが適用されるのは、データベース・リポジトリのみです。バックアップは、指定したレベルに対して実行されます。デフォルトのレベルは 1 です。 ■ データベース・リポジトリについて、OID および DCM デーモン・プロセスを起動します。 ■ 構成バックアップを実行します。 ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを起動します。 ■ すべての OPMN プロセスが実行されていることを確認します。実行されていない場合、警告メッセージを発行します。
<code>backup_instance_online</code>	<p>Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップを実行します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リポジトリ・バックアップを実行します (データベースまたはファイルベース)。データベース・リポジトリの場合、データベースはバックアップの間、起動されたままです。 ■ 構成バックアップを実行します。
<code>backup_instance_online_incr -1 <level number></code>	<p>Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分オンライン・バックアップを実行します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 増分リポジトリ・バックアップを実行します (データベースまたはファイルベース)。データベース・リポジトリの場合、データベースはバックアップの間、起動されたままです。level オプションが適用されるのは、データベース・リポジトリのみです。バックアップは、指定したレベルに対して実行されます。デフォルトのレベルは 1 です。 ■ 増分構成バックアップを実行します。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
backup_online	<p>Metadata Repository のオンライン・バックアップを実行します。インフラストラクチャに対してこのコマンドを実行する場合、このコマンドを実行する前に、メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp (または、-e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、log_path を取得します。 ■ データベースがオープンであると想定します。 ■ RMAN を使用してデータファイルおよび制御ファイルのバックアップを実行します。このコマンドは、backup_online.dat にあります。 ■ backup_online.dat に指定されたディレクトリにバックアップを格納します (これは、通常、config.inp の database_backup_path に設定されます)。 ■ log_path にログ・ファイルを格納します。 ■ データベースをオープンのままにします。 <p>DCM ファイルベースのメタデータ・リポジトリの場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「dcmctl exportrepository」コマンドを実行して、ファイルベースのリポジトリのバックアップを行います。 ■ config.inp ファイルの「config_backup_path」パラメータに指定されたディレクトリにバックアップを格納します。 <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、backup_cold オプションでは、その両方をまとめてバックアップします。これは、ファイルベースのリポジトリがインフラストラクチャのインストールに含まれるケースで考えられます。</p> <p>特定の OracleAS インスタンスが、ファイルベースのリポジトリをホストしているのか、データベースをホストしているのかを確認するには、次のコマンドを使用します。</p> <pre>ORACLE_HOME%bin%whichfarm</pre> <p>Repository Type: Database (host) => Hosts a database repository</p> <p>Repository Type: Distributed File Based (host) => Hosts a file based repository</p>
backup_online_incr -l incr_backup_level	<p>メタデータ・リポジトリの増分オンライン・バックアップを実行します。</p> <p>次の点を除いて、backup_online と同様に機能します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ -l オプションは、増分レベルを指定します (0 ~ 4)。 ■ backup_online_incrlevel.dat ファイルを使用します。 <p>増分バックアップには、累積と差分の 2 種類のバックアップがあります。ツールでは、差分バックアップ (デフォルト) が使用されます。詳細は、Oracle Database 10g Documentation Library の『Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎』を参照してください。</p>
configure [-i dbid]	<p>ツールを構成します。</p> <p>インフラストラクチャに対してこのコマンドを実行する場合、このコマンドを実行する前に、メタデータ・リポジトリが起動していることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 現在のインストールの適切な情報を使用して、config.inp の config_files_list および install_type を更新します。 ■ インフラストラクチャに対してこのコマンドを使用する場合、データベース ID (dbid) で構成ファイルを更新し、データベース・バックアップ *.tmp1 ファイルからカスタマイズされた *.dat ファイルを作成します。デフォルトでは、メタデータ・リポジトリに dbid を問い合わせます。-i オプションを使用する場合、dbid を指定できます。
configure_nodb	「configure」と同じですが、インフラストラクチャの構成は行いません。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
help	使用状況メッセージを出力します。
list_changed_config	最後の全体または増分バックアップ以降に変更されたすべての構成ファイルをリストします。このコマンドでは、各ファイルの変更日が確認されますが、ファイルの実際の中身は確認されません。ファイルのリストがログ・ファイルに書き出され、そのログ・ファイルの名前が出力されます。
restore_config [-t config_bkp_timestamp] [-n]	<p>構成ファイルをリストアップします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp (または、-e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、config_backup_path および log_path を取得します。 ■ -t オプションを指定していて、それが全体バックアップからのタイムスタンプである場合、その全体バックアップをリストアップします。 ■ -t オプションを指定していて、それが増分バックアップからのタイムスタンプである場合、全体バックアップおよび指定した増分バックアップまでを含むすべての増分バックアップをリストアップします。 ■ -t オプションを指定しない場合、config_backup_path に構成ファイル・バックアップのリストを表示し、処理を終了します。その後で、このコマンドを再実行し、-t オプションでこれらのファイルのいずれかを指定できます。 ■ 構成ファイル・バックアップからすべてのファイルを Oracle ホームにリストアップします。所有者、グループ、権限およびタイムスタンプは保持されます。 ■ なんらかのエラーが発生した場合、log_path¥config_rst_timestamp にログ・ファイルを作成します。 ■ DCM 管理コンポーネントの構成をリストアップします。 <pre> dcmctl importarchive -f <location in config_backup_path that contains dcm archive> dcmctl applyarchiveto -archive <archive name> [-cluster <cluster_ name>] dcmctl removearchive -archive <archive name> </pre> <p>-n オプションはプロンプトを抑制するので、バッチ・モードでツールを使用できます。</p> <p>プロセスの前提条件については、backup_config オプションを参照してください。</p> <p>J2EE クラスタの複数ノードで restore_config をパラレルに実行しないでください。このように実行すると、restore_config でエラーが発生します。</p> <p>restore_config は、一度に 1 つのノードで実行してください。</p>
restore_db	このコマンドは非推奨です。かわりに、restore_repos を使用してください。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
restore_instance -t <timestamp> -c	<p>Oracle Application Server Standard Edition One のインスタンスをリストアします。タイムスタンプ引数を指定していない場合、バックアップ・タイムスタンプのリストがユーザーに表示されます。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを停止します。 ■ OPMN プロセスが停止したことを確認します。OPMN プロセスを停止できない (opmn.xml ファイルが失われている可能性がある) 場合、「bkp_restore.sh -m restore_instance -F noDCM」コマンドを使用してファイル・システムのリストアが実行されます。その後で、再度、OPMN プロセスの停止を試行します。OPMN プロセスをまだ停止できない場合、致命的なエラーを発行します。 ■ OPMN 管理プロセスを起動します。 ■ リポジトリのリストアを実行します。-c オプションは、データベース・リポジトリにのみ適用できます。-c オプションを指定すると、制御ファイルもリストアされます。 ■ OID および DCM デーモン・プロセスを起動します (データベース・リポジトリにのみ適用可能)。 ■ 構成リストアを実行します。 ■ すべての OPMN 管理対象プロセスを起動します。 ■ すべての OPMN 管理対象プロセスが起動されていることを確認します。実行されていない場合、警告メッセージを発行します。

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
restore_repos [-u timestamp] [-c] [-n]	<p>使用可能なコールド・バックアップおよびオンライン・バックアップから、メタデータ・リポジトリおよび DCM ファイルベース・リポジトリをリストアおよびリカバリします。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp (または、-e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、log_path を取得します。 ■ 制御ファイルおよびデータファイルのリストアを行い、RMAN を使用してリカバリを実行します。このコマンドは、restore_repos.dat にあります。 ■ log_path にログ・ファイルを格納します。 ■ データベースをオープンのままにします。 <p>このコマンドは、デフォルトで、最も最近の状態にデータベースをリストアおよびリカバリします。-u オプションを使用すると、時間の特定のポイントの状態にデータベースをリストアおよびリカバリできます。タイムスタンプの形式は MM/DD/YYYY_HR24:MIN:SEC です。たとえば、次のように指定します。</p> <pre>bkp_restore.bat -m restore_repos -u 07/26/2003_13:45:06</pre> <p>このコマンドは、デフォルトでは、制御ファイルのリストアを行いません。制御ファイルをリストアするには、-c オプションを使用します。</p> <p>-u または -c オプションを使用する場合、過去のすべてのバックアップが無効化されるので、全体バックアップをすぐに行ってください。</p> <p>-n オプションはプロンプトを抑制するので、バッチ・モードでツールを使用できます。</p> <p>詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』のメタデータ・リポジトリのリストアとリカバリに関する項を参照してください。</p> <p>このコマンドは次の操作を実行して、ファイルベースのリポジトリをリストアします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ タイムスタンプの入力を確認します。指定されていない場合、ファイルベースのリポジトリに対応する使用可能なバックアップ・タイムスタンプをリストします。 ■ dcmctl importrepository -file <リポジトリ・バックアップを格納する config_backup_path の場所 > を実行します。 <pre>bkp_restore.bat -m restore_repos -t 2004-05-10_18-33-12</pre> <p>メタデータ・リポジトリとファイルベース・リポジトリの両方がアプリケーション・サーバー・インスタンスに共存する場合、restore_repos オプションは、その両方をまとめてリストアします。これは、DCM がファイルベースのリポジトリをインフラストラクチャのインストールで使用するケースで考えられます。</p>

表 14-5 Oracle Application Server Backup and Recovery Tool のモードおよび引数 (続き)

モードおよび引数	説明
flashback_repos -u timestamp -b timestamp [-n]	<p>変更されたデータ・ブロックのビフォア・イメージを使用して、指定した時間にメタデータ・リポジトリを戻し、指定した時間以降にデータベースに対して行われた変更をバック・アウトします。フラッシュバックを実行するには、メタデータ・リポジトリ・データベースが起動して、オープンである必要があります。このコマンドでは、次の操作が実行されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ config.inp ファイル (または、-e オプションで指定したかわりのファイル) を開き、log_path を取得します。 ■ フラッシュバックを実行して、指定した時間またはその時間の前の状態にデータベースをリカバリします。このコマンドは、flashback_repos_to.bat および flashback_repos_before.bat にあります。 ■ log_path にログ・ファイルを格納します。 ■ データベースをオープンのままにします。 <p>フラッシュバックには、データベース・リポジトリが必要です。フラッシュバックは、ファイルベースのリポジトリに対してはサポートされていません。</p> <p>フラッシュバックを実行する前に、コールド・バックアップを実行する必要はありません。フラッシュバックでは、データベースをリカバリするために、前のバックアップをリストアする必要がありません。つまり、flashback_repos の処理は restore_repos の処理よりも高速です。フラッシュバックは、どのような論理データの破損やユーザーの誤操作 (誤って Oracle Application Server Standard Edition One スキーマを削除したり、アプリケーションをアンデプロイしたなど) も元に戻すことができます。</p> <p>フラッシュバックを実行するには、データベースが ARCHIVELOG モードの状態にあり、フラッシュバックが有効化されている必要があります。フラッシュバックを有効化するには、次の SQL 文を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ALTER DATABASE ARCHIVELOG ■ ALTER DATABASE FLASHBACK ON <p>-u または -b オプションのいずれかを指定する必要があります。-u オプションは、指定した時間の状態にデータベースを戻します。-b オプションは、指定した時間の前の状態にデータベースを戻します。タイムスタンプの形式は MM/DD/YYYY_HR24:MIN:SEC です。たとえば、次のように指定します。</p> <pre>bkp_restore.bat -m flashback_repos -u 07/26/2003_13:45:06</pre> <p>-n オプションはプロンプトを抑制し、ツールをバッチ・モードで実行できるようにします。</p> <p>フラッシュバック・テクノロジーの詳細は、『Oracle Database バックアップおよびリカバリ・アドバンスト・ユーザズ・ガイド』を参照してください。</p> <p>flashback_repos を実行したら、過去のすべてのバックアップが無効化されるので、全体バックアップをすぐに実行してください。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』のメタデータ・リポジトリのリストアとリカバリに関する項を参照してください。</p>

14.3.4.3 使用例

この項では、OracleAS Backup and Recovery Tool の使用例を示します。

- デフォルトの config.inp ファイルを使用してツールを構成するには、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m configure
```
- 構成ファイル myconfig.inp を使用してツールを構成するには、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m configure -e myconfig.inp
```

- 全体構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -v -m backup_config`
- 環境ファイル `myconfig.inp` を使用して全体構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -v -m backup_config -e myconfig.inp`
- 増分構成ファイル・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -v -m backup_config_incr`
- 構成ファイルをリストアするには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m restore_config -t 2004-09-21_06-12-45`
- メタデータ・リポジトリの全体コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_cold`
- メタデータ・リポジトリのレベル **2** の増分コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_cold_incr -l 2`
- メタデータ・リポジトリの全体オンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_online`
- メタデータ・リポジトリのレベル **0** の増分オンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_online_incr -l 0`
- メタデータ・リポジトリを最も最近の状態にリストアするには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m restore_repos`
- メタデータ・リポジトリを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m restore_repos -u 07/26/2003_13:45:06`
- メタデータ・リポジトリを時間の特定のポイントの状態にフラッシュバックするには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m flashback_repos -u 07/26/2003_13:45:06`
- ファイルベース・リポジトリを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m restore_repos -t 2004-05-10_18-33-12`
- **Oracle Application Server Standard Edition One** インスタンスのコールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_instance_cold`
- **Oracle Application Server Standard Edition One** インスタンスの増分コールド・バックアップを実行するには、次のように指定します。
`bkp_restore.bat -m backup_instance_cold_incr -l <level>`

- **Oracle Application Server Standard Edition One** インスタンスのオンライン・バックアップを実行するには、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_online
```

- **Oracle Application Server Standard Edition One** インスタンスのオンライン増分バックアップを実行するには、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_online_incr -l <level>
```

- **Oracle Application Server Standard Edition One** インスタンスを特定の時間の状態にリストアするには、次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m restore_instance -t 07/26/2003_13:45:06 -c
```

14.4 バックアップの手順

この項では、バックアップ手順の詳細を説明します。インフラストラクチャにおける **Oracle Application Server** 中間層インストール、分散管理リポジトリ、**Identity Management** メタデータおよび **Oracle Application Server Metadata Repository** の各構成ファイル間には、一定のデータ相互依存性が存在します。構成データの一貫性をメンテナンスするには、使用している **Oracle Application Server** の各インスタンス（中間層およびインフラストラクチャ）のバックアップを同時に行う必要があります。1つのインスタンスのバックアップ中に、その他のどのインスタンスにおいても構成の変更が行われないようにしてください。

この項の内容は次のとおりです。

- [ブロック変更トラッキングの有効化](#)
- [ARCHIVELOG モードの有効化](#)
- [現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成](#)
- [インスタンスのバックアップの実行](#)
- [環境全体のバックアップの実行](#)
- [構成およびメタデータのバックアップ](#)

14.4.1 ブロック変更トラッキングの有効化

増分データベース・バックアップのパフォーマンスを向上させるには、次のコマンドを使用してブロック変更トラッキングを有効化します。

```
alter database enable block change tracking using file file_name;
```

`db_create_file_dest` パラメータが、データベースの `spfile` または `init.ora` ファイルで設定されている場合、次のコマンドを使用できます。

```
alter database enable block change tracking;
```

ブロック変更トラッキングを有効化すると、増分データベース・バックアップでブロック変更トラッキングが使用されます。

ブロック変更トラッキングの詳細は、**Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) Documentation Library** の『**Oracle Database バックアップおよびリカバリ基礎**』を参照してください。

14.4.2 ARCHIVELOG モードの有効化

Metadata Repository は、デフォルトでは、ARCHIVELOG モードが有効化されていません。オンライン REDO ログのアーカイブを有効化するには、ARCHIVELOG モードを有効化する必要があります。これによって、このマニュアルで説明しているリカバリ計画を実行できます。

この項のパラメータおよびアーカイブ・ロギングの一般的な設定方法の詳細は、『**Oracle Database 管理者ガイド**』を参照してください。

ARCHIVELOG モードを有効化するには、次の手順を実行します。

1. 次の SQL 問合せを実行して、flashback_recovery_area が設定されているかどうかを確認します。

```
SQL> show parameters db_recovery
```

flashback_recovery_area が設定されていれば、問合せの戻り値は次のようになります。

Name	Type	Value
db_recovery_file_dest	string	/private2/AS1012Installs/AS1012Infra/ flash_recovery_area
db_recovery_file_dest_size	big integer	2G

flashback_recovery_area が設定されていれば、db_recovery_file_dest パラメータで指定されている宛先がアーカイブ・ログの宛先として使用されるので、次の手順でアーカイブの宛先ディレクトリを指定する必要はありません。

2. アーカイブの宛先ディレクトリを指定します。これには、初期化ファイルに初期化パラメータ LOG_ARCHIVE_DEST_n を指定します。spfile が使用されている場合、次のコマンドを発行できます。

```
alter system set log_archive_dest_n="LOCATION=<backup directory>" scope=spfile;
```

In the log_archive_dest_n parameter, n equals a number of 1-10

spfile が使用されている場合、次の初期化ファイルを編集する必要があります。

```
INFRA_ORACLE_HOME¥database¥initSID.ora
```

LOG_ARCHIVE_DEST_n パラメータを次のように変更します。

```
LOG_ARCHIVE_DEST_n = '/disk1/oraHome/archive'
```

アーカイブ・ログのデフォルトのファイル名形式は次のとおりです（オプション）。

```
ARC%S_%R.%T
```

異なる形式を使用する場合、次のように、初期化ファイルに初期化パラメータ LOG_ARCHIVE_FORMAT を指定します。

```
LOG_ARCHIVE_FORMAT = 'log%t_%r_%s.arc'
```

前述の例では、t がスレッド番号、r がリセット・ログ ID、s がログ順序番号を表します。

3. 環境変数 ORACLE_HOME および ORACLE_SID（デフォルトは orcl）が適切に設定されていることを確認します。
4. データベースを現在使用しているユーザーがいないことを確認します。
5. データベース・インスタンスの通常の正しい停止を実行します。

```
INFRA_ORACLE_HOME/bin/sqlplus /nolog
SQL> connect sys/password as sysdba
SQL> shutdown
```

6. インスタンスを起動し、データベースをマウントします（オープンにしない）。

```
SQL> startup mount;
```

7. データベースの ARCHIVELOG モードを有効化します。

```
SQL> alter database archivelog;
```

8. データベース・インスタンスを停止および再起動します。

```
SQL> shutdown
SQL> startup
```

9. データベースが現在 ARCHIVELOG モードにあることを確認します。

次のコマンドを実行して、データベースのログ・モード (Database log mode) がアーカイブ・モード (Archive Mode) で、自動アーカイブ (Automatic archival) が有効化 (Enabled) されていることを確認します。

```
SQL> archive log list;
Database log mode           Archive Mode
Automatic archival         Enabled
Archive destination        /disk1/oraHome/archive
Oldest on-line log sequence 997
Next log sequence to archive 999
Current log sequence       999
```

14.4.3 現在の Oracle Application Server Standard Edition One 構成の記録の作成

現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境をリストアおよびリカバリする必要がある場合、削除に際して必要なすべての情報を保持することが重要となります。これは、新しいディスクまたはホスト上に現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境のすべてまたは一部を再構築する必要のあるハードウェアの損失などの場合に特に重要です。

この項で示している情報を含む、現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境の最新の記録を維持する必要があります。この情報は、ハードコピーおよび電子的な形式の両方の形で保存する必要があります。電子的な形式のデータは、現在の Oracle Application Server Standard Edition One 環境とは完全に分離されたホストまたは電子メール・システム上に格納する必要があります。

Oracle Application Server Standard Edition One のハードウェアおよびソフトウェアの構成記録には、次のものを含める必要があります。

- 現在の環境の各ホストの次の情報を含めます。
 - ホスト名
 - 仮想ホスト名 (ある場合)
 - ドメイン名
 - IP アドレス
 - ハードウェア・プラットフォーム
 - オペレーティング・システムのリリース・レベルとパッチ情報
- 現在の環境の各 Oracle Application Server Standard Edition One インストールに関しては次の情報を含めます。
 - インストール・タイプ (J2EE and Web Services など)
 - インストールが存在するホスト
 - ユーザー名、ユーザー ID 番号、グループ名、グループ ID 番号および環境プロファイル (Oracle ホーム・エントリを所有するオペレーティング・システム・ユーザー)
 - ORACLE_HOME のディレクトリ構造、マウント・ポイントおよびフルパス
 - インストールで使用されたディスク領域容量
 - インストールで使用されたポート番号

注意: ORACLE_HOME¥install¥portlist.ini には、インストールの際に割り当てられたポート番号が含まれます。ただし、このファイルは、インストール後にポート番号を変更した場合は更新されないため、その変更を手動で追跡する必要があります。

- メタデータ・リポジトリの次の情報を含めます。

- データベースのバージョンおよびパッチのレベル
- ベース言語
- キャラクタ・セット
- グローバル・データベース名
- SID

14.4.4 インスタンスのバックアップの実行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの様々なバックアップ方法について説明します。インスタンス・レベルのバックアップでは、インフラストラクチャおよび中間層のリポジトリ（データベースまたはファイルベース）、構成ファイルなど、アプリケーション・サーバー・インスタンスの必要なすべてのコンポーネントがバックアップされます。

Application Server Control コンソールを使用すると、アプリケーション・サーバー・インスタンスのバックアップとリカバリを管理できます。この **Control** コンソールを使用すると、コマンドラインによるコマンドの入力かわりに、次のすべてのコマンドを実行できます。**Control** コンソールを使用してアプリケーション・サーバー・インスタンスをバックアップする方法の手順については、オンライン・ヘルプを参照してください。

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのコールド・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのコールド・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_cold
```

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分コールド・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_cold_incr -l <level>
```

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスのオンライン・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_online
```

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分オンライン・バックアップの実行

次のコマンドを使用して、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスの増分オンライン・バックアップを実行します。

```
bkp_restore.bat -m backup_instance_online_incr -l <level>
```

14.4.5 環境全体のバックアップの実行

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One 環境全体のバックアップ方法について説明します。環境全体のバックアップには、次のものが含まれます。

- Identity Management メタデータ

■ OracleAS Metadata Repository

この 2 つは、同じデータベースに含まれる場合や異なるデータベースに含まれる場合があります。

データベースのバックアップには、コールド・バックアップとオンライン・バックアップの 2 つのモードがあります。

- オープン・データベースでコールド・バックアップを実行する前に、**OracleAS Backup and Recovery Tool** は、データベースを正しく停止し、継続中のすべての変更をロールバックします。結果として、コールド・バックアップは、一貫性のある状態でのデータベースのコピーとなります。一貫性のあるバックアップは、リカバリすることなくリストアできます。
- オンライン・バックアップでは、リポジトリ・データベースを停止する必要がありません。高いレベルでの継続可用性を提供しているビジネス・アプリケーションを停止する必要がありません。オンライン・バックアップは、データベースのスナップショットまたは **Point-in-Time** イメージです。オンライン・バックアップのリストアに **OracleAS Backup and Recovery Tool** を使用する場合、オンライン・バックアップ時に発生しているデータベースに対する継続中のすべての変更は、**REDO** ログを適用することによってリカバリされます。

詳細は、『**Oracle Database バックアップおよびリカバリ・アドバンスト・ユーザーズ・ガイド**』の **RMAN** のバックアップ・タイプに関する項を参照してください。

この項では、次の手順について説明します。

- [タスク 1: Oracle Application Server Standard Edition One 環境の停止](#)
- [タスク 2: 中間層のバックアップ](#)
- [タスク 3: インフラストラクチャのバックアップ](#)
- [タスク 4: Oracle システム・ファイルのバックアップ](#)
- [タスク 5: 現在の Oracle Application Server 環境の起動](#)
- [詳細の参照](#)

タスク 1: Oracle Application Server Standard Edition One 環境の停止

Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の最初のバックアップの場合、次の手順に従って環境を停止し、**Identity Management** メタデータおよび **OracleAS Metadata Repository** が格納されているデータベースのコールド・バックアップを実行する必要があります。ローリング・ソフトウェア・アップグレードなど、大きな変更後に環境全体のバックアップを実行する場合、データベースのバックアップに、コールド・バックアップまたはオンライン・バックアップのいずれかを実行できます。ビジネス・アプリケーションを起動かつ実行された状態で保つためにオンライン・バックアップを選択する場合、このタスクをスキップして、"[タスク 2: 中間層のバックアップ](#)" および "[タスク 3: インフラストラクチャのバックアップ](#)" に進むことができます。

1. 中間層インスタンスを停止します。
手順は、[9.3 項](#)を参照してください。
2. インフラストラクチャを停止します。
手順は、[9.2 項](#)を参照してください。

タスク 2: 中間層のバックアップ

中間層をバックアップするには、次の手順を実行します。

1. 中間層の Oracle ホームをバックアップします。
tar または cpio など、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンドを使用して、中間層の Oracle ホームのすべてのファイルを全体バックアップします。
たとえば、次のように指定します。

```
C:\> cd MID_TIER_ORACLE_HOME
C:\MID_TIER_ORACLE_HOME> tar cvf full_path_of_backup_file .
```

2. Windows のレジストリ・エントリ **HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Oracle** をバックアップします。
3. 中間層の構成ファイルをバックアップします。

DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。

- OPMN プロセスを起動する必要があります。OPMN プロセスを起動するには、コマンド「`opmnctl start`」を使用します。
- OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド「`opmnctl startproc ias-component=OID`」を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ (IM および MR) または IM のインストールに存在します。
- データベースを起動し、実行する必要があります。
- リスナー・プロセスを起動する必要があります。

中間層の Oracle ホームのすべての構成ファイルをバックアップします。この手順は、**Application Server Control** コンソールまたは **OracleAS Backup and Recovery Tool** で独自の手順を使用して実行できます。次に、**OracleAS Backup and Recovery Tool** を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
C:\> bkp_restore.bat -m backup_config
```

Oracle ホーム全体のバックアップ直後に構成ファイルのバックアップを行う理由は、システムの再構成を開始して、構成ファイルを元の状態にリストアする場合に備えて、初期の構成ファイルのスナップショットを提供するためです。

構成ファイルは、**config.inp** ファイルの `config_backup_path` パラメータで指定したディレクトリにある **jar** ファイルに格納されます。**jar** ファイルは 2 つ作成されます。1 つが DCM 管理コンポーネント用で、もう 1 つがその他すべてのコンポーネント用です。**jar** ファイルは、各 **jar** ファイル名に組み込まれたタイムスタンプによって同期された状態で保持されます。次に例を示します。

```
config_bkp_2005-05-10_18-33-15.jar
dcm_archive_2005-05-10_18-33-15.jar
```

タスク 3: インフラストラクチャのバックアップ

1. メタデータ・リポジトリのコールド・データベース・バックアップを実行します。

この手順は、**Application Server Control** コンソールまたは **OracleAS Backup and Recovery Tool** で独自の手順を使用して実行できます。次に、**OracleAS Backup and Recovery Tool** を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.bat -m backup_cold
```

または次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_online
```

OracleAS Backup and Recovery Tool では、終了時にデータベースが実行されたままの状態となることに注意してください。残りの手順を続行する前に、データベースを停止してください。

2. インフラストラクチャの Oracle ホームをバックアップします。

`tar` または `cpio` など、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンドを使用して、インフラストラクチャの Oracle ホームのすべてのファイルを全体バックアップします。

たとえば、次のように指定します。

```
C:\> cd INFRA_ORACLE_HOME
```

```
C:\¥INFRA_ORACLE_HOME> tar cvf full_path_of_backup_file .
```

3. Windows のレジストリ・エントリ **HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Oracle** をバックアップします。
4. インフラストラクチャの構成ファイルをバックアップします。

DCM リポジトリ・タイプがデータベースの場合、次のプロセスを起動する必要があります。

- OPMN プロセスを起動する必要があります。OPMN プロセスを起動するには、コマンド「`opmnctl start`」を使用します。
- OID プロセスを起動する必要があります。このプロセスを起動するには、コマンド「`opmnctl startproc ias-component=OID`」を使用します。OID プロセスは、インフラストラクチャ (IM および MR) または IM のインストールに存在します。
- データベースを起動し、実行する必要があります。
- リスナー・プロセスを起動する必要があります。

インフラストラクチャの Oracle ホームのすべての構成ファイルをバックアップします。この手順は、**Application Server Control** コンソールまたは **OracleAS Backup and Recovery Tool** で独自の手順を使用して実行できます。次に、**OracleAS Backup and Recovery Tool** を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.bat -m backup_config
```

Oracle ホーム全体のバックアップ直後に構成ファイルのバックアップを行う理由は、初期の構成ファイルのスナップショットを提供するためです。システムの再構成を開始して、構成ファイルを元の状態にリストアする場合は、この手順を使用します。

タスク 4: Oracle システム・ファイルのバックアップ

Oracle システム・ファイルをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. 使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンド (zip など) を使用して、Oracle システム・ファイルのバックアップを行います。

Oracle システム・ファイルがどのディレクトリに含まれているかについては、使用しているオペレーティング・システム固有のマニュアルを参照してください。

2. `oraInventory` ディレクトリが現在の Oracle ホームの外にある場合、使用しているオペレーティング・システムの適切なコマンド (zip など) を使用して、バックアップを行います。

タスク 5: 現在の Oracle Application Server 環境の起動

1. インフラストラクチャを起動します。

手順は、[9.3 項](#)を参照してください。

2. 中間層インスタンスを起動します。

手順は、[9.2 項](#)を参照してください。

詳細の参照

前述の各タスクの詳細は、次の箇所を参照してください。

- [14.2 項「Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- [14.3 項「OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」

14.4.6 構成およびメタデータのバックアップ

Oracle Application Server Standard Edition One の環境全体のバックアップを実行した後は、管理上の変更がある度に、構成およびメタデータのバックアップを引き続き実行する必要があります。これが困難な場合、定期的なバックアップを行う必要があります。

管理上の変更の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の付録 G 「管理上の変更の例」を参照してください。

これらのバックアップは、オンライン（Oracle Application Server Standard Edition One が起動および実行している状態でのバックアップ）で実行でき、次のものを含める必要があります。

- 構成ファイル
- Identity Management メタデータ
- OracleAS Metadata Repository

この項では、Oracle Application Server Standard Edition One 環境の構成およびメタデータのバックアップ方法について説明します。この項では次の手順を示します。

- [タスク 1: インフラストラクチャのバックアップ](#)
- [タスク 2: 中間層のバックアップ](#)
- [詳細の参照](#)

タスク 1: インフラストラクチャのバックアップ

1. 構成ファイルの全体バックアップまたは増分バックアップを実行します。

この手順は、Application Server Control コンソールまたは OracleAS Backup and Recovery Tool で独自の手順を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.bat -m backup_config
```

または次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_config_incr
```

2. OracleAS Metadata Repository の全体または増分のオンライン・データベース・バックアップを実行します。

この手順は、Application Server Control コンソールまたは OracleAS Backup and Recovery Tool で独自の手順を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.bat -m backup_online
```

または次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_online_incr -l 2
```

タスク 2: 中間層のバックアップ

中間層の構成ファイルの全体バックアップまたは増分バックアップを実行します。

この手順は、Application Server Control コンソールまたは OracleAS Backup and Recovery Tool で独自の手順を使用して実行できます。次に、OracleAS Backup and Recovery Tool を使用してこの手順を実行する方法の例を示します。

```
bkp_restore.sh -m backup_config
```

または次のように指定します。

```
bkp_restore.bat -m backup_config_incr
```

詳細の参照

前述のタスクの詳細は、次の箇所を参照してください。

- [14.2 項「Application Server Control を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- [14.3 項「OracleAS Backup and Recovery Tool を使用したバックアップとリカバリ」](#)
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』の第 18 章「Oracle Application Server Backup and Recovery Tool」

第III部

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール

第 III 部では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストールについて説明します。内容は次のとおりです。

- [第 15 章「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要および要件」](#)
- [第 16 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード」](#)
- [第 17 章「OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録」](#)

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要および要件

インストーラで OracleAS Metadata Repository 用の新しいデータベースを作成するかわりに、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この章では、OracleAS Metadata Repository のインストール実行ツールである Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の使用方法について説明します。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録および登録解除にも使用できます。

注意：

- このマニュアルでは、既存の OracleAS Metadata Repository のアップグレード方法は説明していません。アップグレード手順については、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください。
- OracleAS Metadata Repository を登録できるのは、サポートされているバージョンの Oracle Internet Directory に限られます。詳細は、[15.6 項「Oracle Internet Directory の要件」](#)を参照してください。
- Oracle E-Business Suite インスタンスを格納しているデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードすることはできません。現在のバージョンではサポートされていません。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要](#)
- [Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行手順](#)
- [Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件](#)
- [Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール](#)
- [データベースの要件](#)
- [Oracle Internet Directory の要件](#)
- [Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動](#)
- [次に読む必要がある項](#)

15.1 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant 概要

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、次の操作を実行できます。

- OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録
- OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域のデータベースからの削除
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory からの登録解除

15.1.1 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の入手先

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、製品に付属する別の CD-ROM に収録されています。

OracleAS Metadata Repository 内の既存のデータベースを変換する場合は、この CD-ROM に収録されている Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ツールを使用する必要があります。

15.1.2 各種データベース記憶域のサポート

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant では、次の記憶域管理オプションを備えた記憶域上の単一ノード・データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。

- オペレーティング・システム上の通常のファイルとして作成されたデータファイル
- Oracle Managed Files
- RAW デバイス

15.1.3 ローカルおよびリモート・データベースのサポート

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する際は、ターゲット・データベースを指定する必要があります。ターゲット・データベースは、操作（OracleAS Metadata Repository のロード、登録、削除、登録解除など）の実行対象となるデータベースです。このデータベースは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant と同じコンピュータで実行されているデータベース（「ローカル・データベース」）でも、それとは別のコンピュータで実行されているデータベース（「リモート・データベース」）でもかまいません。

リモート・データベースの場合、そのデータベースを実行しているコンピュータのオペレーティング・システムは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータのオペレーティング・システムと異なっていてもかまいません。たとえば、Windows コンピュータで Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行し、Linux コンピュータで実行されているデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。

15.2 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行手順

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するには、まずインストールする必要があります。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant をインストールします。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant CD-ROM からインストーラを実行します。Oracle Application Server DVD-ROM の場合、インストーラは repca ディレクトリに格納されています。

インストールの実行中に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール先となるディレクトリを指定します。

2. インストール先のディレクトリから、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行します。

15.3 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータは、次の要件を満たしている必要があります。

表 15-1 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行するコンピュータの要件

項目	要件
オペレーティング・システム	Windows 2000 Windows 2003 Windows XP Solaris 8 Solaris 9 HP-UX 11i (11.11) PA-RISC HP-UX 11i (11.23) PA-RISC Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0 SUSE Linux Enterprise Server 8 SUSE Linux Enterprise Server 9 サポートされるオペレーティング・システムの最新のリストは、Oracle MetaLink のサイト (http://metalink.oracle.com) を参照してください。
ディスク領域	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant をインストールするには、600 MB 以上のディスク領域が必要です。 注意 : Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行してロード操作を行うたびに、ログ・ファイルの格納用に約 10 MB のディスク領域が必要になります。 データベース用に必要なディスク領域については、15.5.5 項「SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域」および 15.5.6 項「OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域」を参照してください。
メモリー	512 MB
仮想メモリー	1535 MB
ディスプレイ	256 色

15.4 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant をインストールするには、次の手順を実行します。

表 15-2 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール

画面	操作
1 なし	<p>OracleAS Metadata Repository Creation Assistant CD-ROM または Oracle Application Server DVD-ROM をドライブに挿入し、Oracle Universal Installer を起動します。</p> <p>CD-ROM の場合: <code>setup.exe</code> を実行してインストーラを起動します。</p> <p>DVD-ROM の場合: <code>repca</code> ディレクトリに移動し、<code>setup.exe</code> を実行してインストーラを起動します。</p>
2 ようこそ	なし。「次へ」をクリックします。
3 ファイルの場所の指定	<p>「名前」フィールドに、ここでインストールする Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の名前を入力します。Oracle ホームの名前は最大 128 文字、使用できる文字は英数字とアンダースコア記号のみです。たとえば、次のようになります。</p> <p><code>repca10_1_2</code></p> <p>Oracle ホームの名前は、「スタート」メニューに次のように表示されます。</p> <p>「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - OracleHomeName」</p> <p>パスフィールドに、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール先となるディレクトリへのフルパスを入力します。このマニュアルでは、このディレクトリを「Oracle home for Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant」と呼びます。</p>
4 Repository Creation Assistant の起動	<p>インストール終了後ただちに Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する場合は「はい」を選択します。実行しない場合は「いいえ」を選択します。いずれを選択した場合も、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant はインストール終了後いつでも実行できます。</p>
5 サマリー	画面に表示されたインストール・パラメータが正しいことを確認したら、「インストール」をクリックしてインストールを開始します。
6 インストール	なし。この画面には、インストールの進捗状況が表示されません。
7 Configuration Assistant	なし。ただし、特定の Configuration Assistant のインストールまたは構成を停止する場合を除きます。
8 インストールの終了	なし。この画面には、インストールが正常に完了したかどうかと、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行方法に関する情報が表示されます。

注意： Repository Creation Assistant の起動画面で「はい」を選択した場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は Configuration Assistant として起動します。「Configuration Assistant」画面の「OracleAS Repository Creation Assistant」の行のステータスは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が実行中の間「処理中です」のままとなります。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了すると、インストーラのインストールの終了画面に進みます。

インストーラは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が終了するまで実行状態のままとなります。

15.5 データベースの要件

OracleAS Metadata Repository のインストール先となるデータベースは、表 15-3 に示す各分野の要件を満たしている必要があります。

ヒント： Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、前提条件チェック・ツール (15.5.1 項を参照) を実行してください。このツールは、データベース要件の多くをチェックします。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant も要件チェックを行います。前提条件チェック・ツールの場合、満たされていない要件が検出されてもそこで停止せず、チェックを続行します。このため、満たされていない要件を後でまとめて解決することが可能です。一方の Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant では、満たされていない要件を 1 つ解決するたびに Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に戻り、次の要件を解決する、というサイクルを繰り返す必要があります。

要件を満たすために、データベースの再起動が必要になる場合もあります。

事前に前提条件チェック・ツールを実行することで、同じく要件チェックを行う Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行時に OracleAS Metadata Repository のインストールが失敗する可能性を低くすることができます。

表 15-3 に、前提条件チェック・ツールによってチェックされる項目を示します。

表 15-3 データベース要件

項目	ツールによるチェックの有無
15.5.2 項「サポートされるデータベースのバージョン」	あり
15.5.3 項「Standard Edition のデータベースに関する注意」	なし
15.5.4 項「スワップ領域の要件」	なし
15.5.5 項「SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域」	これらの表領域が自動拡張に設定されていない場合はあり
15.5.6 項「OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域」	なし
15.5.8 項「Windows XP 上の OracleAS Metadata Repository はサポート対象外」	なし
15.5.9 項「初期化パラメータ」	一部なし
15.5.10 項「データベース・オプション」	あり
15.5.11 項「PL/SQL パッケージ」	あり

表 15-3 データベース要件 (続き)

項目	ツールによるチェックの有無
15.5.12 項「DBMS_LDAP パッケージ」	あり
15.5.13 項「必須のナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ)」	あり
15.5.14 項「パスワード・ファイル認証」	なし
15.5.15 項「スキーマおよび表領域」	あり
15.5.16 項「Oracle Internet Directory への登録」	なし

15.5.1 前提条件チェック・ツールの実行

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant には、前提条件チェック・ツールが付属しています。このツールは、`ORACLE_HOME\repca\prereq` ディレクトリに置かれています。`ORACLE_HOME` は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール先です。このツールは、データベース要件のほとんどをチェックします。このツールによってチェックされる項目は、表 15-3 に示しています。

このツールは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行前に実行する必要があります。

ヒント: このツールは、データベースがすべての要件を満たすまで何度でも実行できます。

使用方法は次のとおりです。

```
DBPrereqChecker.bat -DBHOST dbhost -DBPORT dbport -DBNAME dbname
-SYSPWD syspassword [-LOGDIR logdir] [-HELP]
```

表 15-4 DBPrereqChecker のパラメータ

パラメータ	説明
-DBHOST <i>dbhost</i>	データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。
-DBPORT <i>dbport</i>	データベース・リスナーがリスニングしているポートを指定します。
-DBNAME <i>dbname</i>	データベースのサービス名を指定します。
-SYSPWD <i>syspassword</i>	SYS ユーザーのパスワードを指定します。
-LOGDIR <i>logdir</i>	ログ・ファイルの書き込み先ディレクトリを指定します。書き込み権限のあるディレクトリを指定してください。 ログ・ファイルの名前は <code>RepcaPrerequisiteCheck.log</code> です。ログ・ファイルには、どの要件が満たされ、どの要件が満たされていないかについての情報が書き込まれます。 このパラメータを指定しない場合、ログはコンソールに出力されます。
-HELP	このツールのヘルプ情報を表示します。

次に例を示します。

```
C:\> DBPrereqChecker.bat -DBHOST mydb.mydomain.com -DBPORT 1521
-DBNAME orcl1.mydomain.com -SYSPWD topsecret -LOGDIR C:\%temp
```

15.5.2 サポートされるデータベースのバージョン

OracleAS Metadata Repository 用としてサポートされるデータベースのバージョンの最新のリストは、Oracle MetaLink のサイト (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

使用しているデータベースのリリース番号を調べるには、次のようにして PRODUCT_COMPONENT_VERSION ビューを問い合わせます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select version from product_component_version where product like 'Oracle%9i%'
      or product like 'Oracle%Database%';
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

15.5.3 Standard Edition のデータベースに関する注意

サポートされるデータベースの Standard Edition を使用している場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、データベースのインストール後の手順の一環として `sdopatch.sql` スクリプトを実行する必要があります。

15.5.4 スワップ領域の要件

データベースを実行するコンピュータには、使用可能なスワップ領域が 512 MB 以上必要です。

15.5.5 SYSTEM および UNDO 表領域に必要なディスク領域

SYSTEM および UNDO 表領域には、次の大きさの空き領域が必要です。

表 15-5 SYSTEM および UNDO 表領域に必要な空き領域

表領域	必要な空き領域
SYSTEM	367,001,600 バイト
UNDO	367,001,600 バイト

これらの表領域が自動拡張に設定されている場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant で空き領域をチェックすることはできません。これは、表領域がファイル・システム上の使用可能な領域を使い切る可能性があり、また Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant でファイル・システム上の空き領域をチェックすることはできないためです。この場合、手動でチェックを行う必要があります。

これらの表領域が自動拡張に設定されていない場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant で空き領域をチェックできます。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が、表領域にどれだけの空き領域があるかをデータベースに問い合わせることができるためです。

15.5.6 OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域

OracleAS Metadata Repository の表領域用に、1.15 GB 以上のディスク領域があることを確認してください。これは、SYSTEM および UNDO 表領域用のディスク領域（前項を参照）とは別に必要です。

15.5.7 SSL モードでの Oracle Internet Directory への登録に必要なパッチ

OracleAS Metadata Repository を SSL モードで Oracle Internet Directory に登録する場合は、登録の前にパッチ 3143899 をデータベースに適用する必要があります。このパッチは Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) からダウンロードできます。

このパッチが必要なのは、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.4) のデータベースのみです。このパッチは、Oracle9i リリース 2 (9.2.0.5) のデータベースにはすでに含まれており、また Oracle9i リリース 1 (9.0.1.5) のデータベースや Oracle Database 10g には必要ありません。

15.5.8 Windows XP 上の OracleAS Metadata Repository はサポート対象外

OracleAS Metadata Repository は、Windows XP 上で実行されている既存のデータベースにロードできません。ただしこれは、ほとんどのケースでの Windows XP への Oracle Application Server のインストールと同様、サポート対象外です。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ツールは、Windows XP 上で実行できます。これはサポート対象です。

最新の認定リストは、Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>) を参照してください。

15.5.9 初期化パラメータ

インストールの間、データベースの初期化パラメータの値は、表 15-6 および表 15-7 のとおりに設定されている必要があります。

- 表 15-6 は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によってチェックされないパラメータのリストです。これらのパラメータは、手動でチェックする必要があります。
- 表 15-7 は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によってチェックされるパラメータのリストです。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって、要件を満たしていないパラメータが検出された場合は、警告が表示されます。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の処理を続行するには、これらのパラメータの値を変更する必要があります。

ほとんどのパラメータの値は、インストール終了後、パフォーマンスが最適化されるように必要に応じて変更してかまいません。

注意： db_block_size パラメータの値は、8192 以上でなければなりません。このパラメータはデータベースの作成時に設定され、後から変更することはできません。つまり、このパラメータの値がこれよりも小さい場合は、そのデータベースをメタデータ・リポジトリ用に使用することはできません。

表 15-6 手動でチェックする必要がある初期化パラメータ

パラメータ	必須の値	パラメータ・クラス	注意
nls_length_semantics	BYTE	動的	注意： このパラメータは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ではチェックされません。手動でチェックする必要があります。 このパラメータに値 CHAR を指定することはサポートされていません。
compatible	9.2.0.0.0 以上	静的	注意： このパラメータは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ではチェックされません。手動でチェックする必要があります。 このパラメータの値を 9.2.0.0.0 未満に設定しないでください。

表 15-7 初期化パラメータ：必須の値 (Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によるチェックあり)

パラメータ	必須の値	パラメータ・クラス	注意
db_block_size	8192 以上	変更不可。「注意」列を参照	データベースの作成後にこのパラメータの値を変更することはできません。
aq_tm_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
open_cursors	300 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
job_queue_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
db_cache_size	144 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
shared_pool_size	175 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
java_pool_size	120 MB より大きい値	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
pga_aggregate_target	96 MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
query_rewrite_enabled	TRUE	動的	このパラメータの値はインストール終了後も変更しないでください。Oracle Application Server Wireless でこの値が必要です。
query_rewrite_integrity	trusted または enforced	動的	このパラメータの値はインストール終了後も変更しないでください。Oracle Application Server Wireless でこの値が必要です。
sessions	400 以上	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
undo_management	AUTO	静的	このパラメータの値はインストール終了後に変更できます。
_system_trig_enabled	true	動的	これは Oracle の内部パラメータです。システム・トリガーを有効にするために true に設定してください。
db_create_file_dest	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリ	動的	この初期化パラメータは、Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合のみ必要です。

パラメータ値のチェック

初期化パラメータの値のチェックに SQL*Plus を使用する場合は、次のように show parameters コマンドを使用します。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters parameter_name
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

または、次のように V\$PARAMETER ビューを問い合わせることもできます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name,value from v$parameter;
```

パラメータ値の変更

パラメータ値の変更方法は、そのパラメータが静的か動的か、データベースで使用しているのがパラメータ・ファイルかサーバー・パラメータ・ファイルかによって異なります。

パラメータ・ファイル、サーバー・パラメータ・ファイルおよびパラメータ値の変更方法の詳細は、使用しているデータベース用の『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

データベースでパラメータ・ファイルを使用している場合は、次の2つの方法でパラメータ値を変更できます。

- パラメータ・ファイルを編集し、データベースを再起動します。この方法は、静的パラメータと動的パラメータの両方に有効です。
- 動的パラメータの値を変更する場合は、`alter system` コマンドを使用できます。ただし、新しい値が有効なのはデータベースをシャットダウンするまでの間だけです。次に例を示します。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9;
```

データベースでサーバー・パラメータ・ファイルを使用している場合は、`alter system` コマンドを使用してパラメータ値を変更します。静的パラメータの場合は、`scope` を `spfile` に設定します。新しい値を有効にするには、データベースを再起動する必要があります。動的パラメータの場合は、`scope` を `spfile`、`memory` または `both` に設定します。新しい値を永続的に有効にするには、`scope` を `spfile` または `both` に設定します。次に例を示します。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9 scope=both;
```

内部パラメータの値の変更

`_system_trig_enabled` などの Oracle の内部パラメータの値を変更するには、パラメータ名を二重引用符で囲む必要があります。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set "_system_trig_enabled"=true;
```

パラメータ名を二重引用符で囲まないと、次のようにエラーが発生します。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set _system_trig_enabled=true;
*
ERROR at line 1: ORA-00911: invalid character
```

15.5.10 データベース・オプション

データベースでは、次のデータベース・オプションが有効になっている必要があります。

表 15-8 必須のデータベース・オプション

必須のオプション	オプションがデータベースにインストール済かどうかのチェック方法
Java	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_objects where object_type like 'JAVA%' and owner = 'SYS' and status = 'VALID';</pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>
interMedia	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(name) from sys.props\$ where name = 'EXPORT_VIEWS_VERSION';</pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>
Oracle Text	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_views where owner = 'CTXSYS' and view_name = 'CTX_VERSION';</pre> <p>戻り値が 0 より大きい値である必要があります。</p>

15.5.11 PL/SQL パッケージ

データベースには、次の PL/SQL パッケージがインストールされている必要があります。

DBMS_DDL
 DBMS_LOCK
 DBMS_OUTPUT
 DBMS_REPUTIL
 DBMS_SQL
 DBMS_STATS
 DBMS_UTILITY
 UTL_FILE
 UTL_RAW

パッケージがデータベースにインストールされているかどうかをチェックするには、ALL_OBJECTS ビューを問い合わせます。次の例は、DBMS_DDL パッケージがインストールされているかどうかをチェックします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select count(object_name) from all_objects
      where object_name like 'DBMS_DDL%' and
      status = 'VALID';
```

DBMS_DDL を対応するパッケージの名前に置き換えて、パッケージごとにこの問合せを実行します。戻り値が 0 より大きい値である必要があります。

15.5.12 DBMS_LDAP パッケージ

データベースに DBMS_LDAP パッケージがインストールされているかどうか、およびこのパッケージが有効かどうかをチェックします。有効なものではない場合、パッケージを再インストールする必要があります。

1. DBMS_LDAP パッケージのバージョンが 2 であることを確認します。次の SQL コマンドで 0 が戻されなければなりません。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select dbms_ldap_utl.check_interface_version('2') from dual;

DBMS_LDAP_UTL.CHECK_INTERFACE_VERSION('2')
-----
0
```

このコマンドで、それ以外の値または次のようなエラーが戻される場合もあります。

```
The DBMS_LDAP package supplied with this database doesn't support the
version 2 interface used by 904 components.
```

その場合は、パッケージを再ロードする必要があります。この項末尾の「[DBMS_LDAP パッケージの再ロード](#)」を参照してください。

2. DBMS_LDAP パッケージが有効なものであることを確認します。次の SQL コマンドで 9 が戻されなければなりません。
 - a. 次のコマンド行を記述したファイルを作成します。ファイル名は任意の名前でかまいません (test_ldap.sql など)。

```
select count(*) from dba_objects where
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
  object_type = 'PACKAGE' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
  object_type = 'PACKAGE BODY' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
  object_type = 'PACKAGE' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
  object_type = 'PACKAGE BODY' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
  object_type = 'SYNONYM' and
  status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
  object_type = 'SYNONYM' and
  status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
  object_type = 'PACKAGE' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
  object_type = 'PACKAGE BODY' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_LIB' and
  object_type = 'LIBRARY' and
```

```
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
);
```

- b. このファイルを **SQL*Plus** で実行します。ファイル名を `test_ldap.sql` とした場合、コマンドは次のようになります。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @test_ldap.sql
```

```
COUNT(*)
-----
          9
```

このコマンドで **9** 以外の値が戻された場合は、パッケージを再ロードする必要があります。

DBMS_LDAP パッケージの再ロード

1. 次のファイルが `ORACLE_HOME¥rdbms¥admin` ディレクトリにあることを確認します。

- `catldap.sql`
- `dbmsldap.sql`
- `prvtldap.plb`
- `prvtldh.plb`

2. **SQL*Plus** を使用し、`catldap.sql` を **SYS** ユーザーとして実行します。

```
C:¥> cd ORACLE_HOME¥rdbms¥admin
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @catldap.sql
```

15.5.13 必須のナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ)

OracleAS Metadata Repository を **Oracle Database 10g** にインストールし、**OracleAS Portal** を使用する場合は、**Oracle Text** が提供するナレッジ・ベースがデータベースに必要になります。ナレッジ・ベースは、テーマの索引付けおよび **ABOUT** 問合せの実行に使用される、概念の階層ツリーです。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、データベースにナレッジ・ベースがあるかどうかをチェックします。データベースにナレッジ・ベースが存在しない場合、**Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant** に次の警告が表示されます。

```
"Knowledge base not found.
```

```
OracleAS RepCA was not able to find the Oracle Text Supplied Knowledge
Base in the database specified.
```

```
If you are planning to use this repository for installing OracleAS
Portal, you have to install Oracle Text Supplied Knowledge Base. Oracle
Text Supplied Knowledge Base can be installed in the database using
Oracle Database 10g Companion CD.
```

```
If you are not planning to use this repository for installing OracleAS
Portal, you may continue further.
```

```
Do you want to continue?"
```

OracleAS Portal を使用しない場合は、**Y** を入力して続行します。使用する場合は **N** を入力します。

ナレッジ・ベースがデータベースにインストールされているかどうかを手動でチェックする場合は、次の問合せを実行します。

```

create or replace procedure Check_KB (l_return_value OUT varchar) is
    ORA20000_TEXT_EXCEPTION exception;
pragma exception_init (ORA20000_TEXT_EXCEPTION, -20000);
l_test_table constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST';
l_test_table_index constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST_INDEX';

procedure drop_test_table ( p_test_table in varchar2 ) is
begin
    for c1 in ( select table_name from user_tables
                where table_name = p_test_table )
    loop
        execute immediate 'drop table '||c1.table_name;
    end loop;
end drop_test_table;

begin
    l_return_value := 'TRUE';
    drop_test_table(l_test_table);
    execute immediate 'create table '||l_test_table||'( id number, content blob,
        query_id number, theme varchar2(2000), weight number,
        CONSTRAINT wwsrc_inso_test_pk PRIMARY KEY(id) )';
    execute immediate 'insert into '||l_test_table||'(id, content)
        values(1, empty_blob())';
    begin
        execute immediate 'create index '||l_test_table_index||' on '||
            l_test_table||'(content) indextype is ctxsys.context
            PARAMETERS(''filter CTXSYS.INSO_FILTER'')';
        ctx_doc.themes( index_name => l_test_table_index, textkey => '1',
            restab => l_test_table );
        exception when ORA20000_TEXT_EXCEPTION then
            if (instr(sqlerrm,'DRG-11446') > 0) then
                l_return_value := 'FALSE';
            else
                l_return_value := 'FALSE';
            end if;
        end;

        drop_test_table(l_test_table);
        exception when others then
            drop_test_table(l_test_table);
            l_return_value := 'FALSE';
    end;
end;
/

```

ナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、**Oracle Text** の「テーマと要旨を使用可能にする」オプションが選択された **OracleAS Portal** で検索を行う際に、次のエラーが表示されます。

```
Error: The Oracle Text Installation is not complete. Knowledge base file or files
are missing. (WWWS-32026)
```

データベースにナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、**Oracle Database 10g** の **Companion CD-ROM** からインストールできます。詳細は、『**Oracle Database Companion CD インストール・ガイド**』を参照してください。

15.5.14 パスワード・ファイル認証

データベースは、パスワード・ファイル認証を使用するように設定する必要があります。パスワード・ファイル認証の詳細は、『**Oracle Database 管理者ガイド**』を参照してください。

パスワード・ファイル認証は、**Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant** を実行するためのみ必要となります。メタデータ・リポジトリのインストール後は、使用しなくてもかまいません。

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースが設定されているかどうかは、次の 2 つのいずれかの方法でチェックできます。

- **SQL*Plus** で次のコマンドを実行し、`remote_login_passwordfile` 初期化パラメータの値を調べます。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters remote_login_passwordfile
NAME                                TYPE                                VALUE
-----
remote_login_passwordfile           string                              EXCLUSIVE
```

`remote_login_passwordfile` 初期化パラメータの値は、`EXCLUSIVE` または `SHARED` のいずれかに設定されている必要があります。これ以外の値に設定されていたり、値が定義されていない場合、データベースはパスワード・ファイル認証を使用するように設定されていません。

- **SQL*Net** 接続を介して、`sysdba` としてデータベースへの接続を試みます。

```
C:¥> sqlplus "sys/password@sqlnet_dbname as sysdba"
```

`sqlnet_dbname` は、`tnsnames.ora` ファイルに記述されている、接続先データベースのエントリです。パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースが設定されていない場合、接続はできません。

データベースが、間違いなくパスワード・ファイル認証を使用するように設定されているにもかかわらず、**ORA-01017** エラー「ユーザー名 / パスワードが無効です。ログオンは拒否されました。」が発生する場合は、原因の 1 つとして、パスワード・ファイルの設定時に **SYS** パスワードを変更してしまっているということが考えられます (`password` パラメータに指定された値が、**SYS** ユーザーのパスワードの値に設定されます)。この場合は、覚えておけるようなパスワードに **SYS** パスワードを変更します。

このエラーが発生する場合でも、`sysdba` オペレーティング・システム権限がある場合は、**SYS** としてログインできます。パスワードには任意のものを使用できます。`sysdba` オペレーティング・システム権限は、パスワードに優先します。

```
C:¥> sqlplus "sys/badPassword as sysdba"
SQL> alter user sys identified by newPassword;
SQL> exit
```

ここで「`sys/newPassword@sqlnet_dbname as sysdba`」でデータベースに接続すると、接続は成功するはずですが。

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースを設定するには、次の手順を実行します。

1. `orapwd` コマンドを使用して、パスワード・ファイルを作成します (すべての項目を 1 行で記述します)。

```
C:¥> cd ORACLE_HOME¥bin
C:¥> orapwd file=fullpath_to_pwfile password=password entries=maxUsers
```

指定する必要のある値は次のとおりです。

`fullpath_to_pwfile`: パスワード情報が書き込まれるファイルへのフルパスを指定します。ファイル名は `PWDsid.ora` とする必要があります。通常、パスワード・ファイルは `ORACLE_HOME¥database` ディレクトリに格納します。

`password`: **SYS** ユーザーのパスワードを指定します。

注意: `password` パラメータに指定した値によって、**SYS** ユーザーのパスワードが設定されます。現在の **SYS** パスワードとは異なる値を指定した場合、**SYS** パスワードを変更することになります。

`maxUsers`: このファイルに記述する最大ユーザー数を指定します。

次の例では、「mydb」というデータベースのパスワード・ファイルを設定しています。

```
C:\> cd oracle\ora92\bin
C:\oracle\ora92\bin> orapwd
      file=C:\oracle\ora92\database\PWDmydb.ora
      password=topsecret entries=9
```

- remote_login_passwordfile 初期化パラメータを EXCLUSIVE に設定します。複数のデータベースで同じパスワード・ファイルを使用する場合は、SHARED に設定します。**Real Application Clusters** データベースを使用している場合、このパラメータは EXCLUSIVE に設定する必要があります。
- データベースを再起動します。

15.5.15 スキーマおよび表領域

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、表 15-9 のスキーマおよび表領域を既存のデータベースにインストールします。同じ名前のスキーマおよび表領域がデータベースに存在しないことを確認してください。

15.5.15.1 スキーマおよび表領域のリスト

表 15-9 に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によってデータベース内に作成される OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域を示します。

表 15-9 スキーマおよび表領域

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルトのデータベース・ファイル
OracleAS Certificate Authority	OCA	OCATS	oca.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discopl1tm1.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discopl1tc1.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_RT	b2b_rt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_DT	b2b_dt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_IDX	b2b_idx.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_LOB	b2b_lob.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOG	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf

表 15-9 スキーマおよび表領域 (続き)

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルトのデータベース・ファイル
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrsl_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battrsl_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcatsl_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefaultl_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_SVRMGSTORE	svrmgl_oid.dbf
Oracle Ultra Search	WKSYS	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WKPROXY	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
メタデータ・リポジトリのバージョン	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf

15.5.15.2 すでに使用されているスキーマ名

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、既存のデータベース内に同じ名前のスキーマを 1 つでも見つけると、そのスキーマを削除して新しいデータでスキーマを再作成してもよいかどうか、ユーザーに確認を求めています。

そのスキーマ内のデータを保存する場合は、処理を続行せず、必要なデータをバックアップし、別のスキーマにリストアしてから、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に戻ります。ここで、スキーマを削除して再作成するように指定します。

データベース内にすでに存在しているスキーマ名のリストを取得するには、次のように ALL_USERS ビューを問い合わせます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select username from all_users;
```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して、OracleAS Metadata Repository によって使用されているスキーマおよび表領域を削除する方法については、[付録 B](#) を参照してください。

15.5.15.3 すでに使用されている表領域名

既存のデータベース内に同じ名前の表領域を 1 つでも見つけた場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は処理を続行できなくなります。この場合、エラーのダイアログ・ボックスが表示されます。次の手順を実行します。

1. エラーのダイアログ・ボックスを閉じ、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
2. 必要に応じて、その表領域のデータをバックアップします。
3. 表領域を削除します。
4. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に戻ります。

データベース内にすでに存在している表領域名のリストを取得するには、次のように V\$TABLESPACE ビューを問い合わせます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name from v$tablespace;
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

注意： Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行し、途中で処理を取り消した場合、表 15-9 に示した表領域のいくつかはデータベースに作成されている可能性があります。これらの表領域は、再度 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に削除する必要があります。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して、OracleAS Metadata Repository によって使用されているスキーマおよび表領域を削除する方法については、付録 B を参照してください。

表領域は、手動で SQL 文を実行して削除できます。また、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマを削除することもできます。詳細は、付録 B を参照してください。

手動で SQL 文を実行する場合は、次の手順に従います。必ずこの順序を守ってください。先にデータファイルを削除すると、表領域を削除できなくなります。表領域が存在している場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再実行できません。

1. SQL*Plus を使用し、データベースに SYS ユーザーとしてログインします。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

2. 表領域内のスキーマを削除します。

```
SQL> drop user schema_name cascade;
```

3. 表領域を削除します。

```
SQL> drop tablespace tablespace_name including contents cascade constraints;
SQL> exit;
```

4. その表領域に関連付けられているデータファイル (.dbf ファイル) を削除します。

15.5.15.4 表領域のサイズ

表領域に RAW デバイスではなくファイルを使用している場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって作成される各表領域のサイズを選択します。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant では、表領域ごとに 3 つのサイズ・オプションが用意されています (表 15-10 を参照)。各サイズは、コンポーネント使用率の低、中、高に対応しています。アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合、そのコンポーネントの表領域には最大サイズを選択します。そのリポジトリで使用する予定のないコンポーネントには、最小サイズを選択します。

表領域のサイズは初期サイズです。これらの表領域は AUTOEXTEND に設定されるため、そのサイズはコンポーネント使用率が高くなるのに伴って拡張される場合があります。

表 15-10 表領域の初期サイズ

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Certificate Authority	OCA	15	35	55
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_META	5	10	15

表 15-10 表領域の初期サイズ (続き)

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Discoverer	DISCO_PTM5_CACHE	5	10	15
OracleAS PartnerConnect	B2B_RT	50	75	90
OracleAS PartnerConnect	B2B_DT	60	75	90
OracleAS PartnerConnect	B2B_IDX	20	40	60
OracleAS PartnerConnect	B2B_LOB	20	40	60
OracleAS Portal	PORTAL	75	100	150
OracleAS Portal	PORTAL_DOC	25	40	50
OracleAS Portal	PORTAL_IDX	30	50	60
OracleAS Portal	PORTAL_LOG	30	50	60
OracleAS Single Sign-On	IAS_META	200	300	500
Oracle Ultra Search				
Oracle Workflow				
INTERNET_APPSERVER_REGISTRY (OracleAS Metadata Repository のバージョンに関する情報を格納するスキーマ)				
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY_TAB	25	35	45
OracleAS UDDI	UDDISYS_TS	35	50	65
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS_TS	35	45	55
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	50	100	200
Oracle Internet Directory	OLTS_ATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_BATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_CT_STORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_DEFAULT	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_SVRMGSTORE	10	15	20

既存のデータベースで ASM、Oracle Managed Files または RAW デバイスを使用している場合、表領域のサイズを選択する必要はありません。ただし、そのストレージ・デバイスのサイズがコンポーネントに対して十分なものであることを確認する必要があります (表 15-11 および表 15-12 を参照)。特に、コンポーネントの使用率が高いことが予想される場合には、その表領域のストレージ・デバイスに十分な領域を確保するようにしてください。

表 15-11 システムの表領域の最小サイズ

表領域	最小サイズ
DRSYS 表領域	64 MB
SYSTEM 表領域	1024 MB
TEMP 表領域	128 MB
UNDOTBS1 表領域	256 MB

表 15-11 システムの表領域の最小サイズ (続き)

表領域	最小サイズ
UNDOTBS2 表領域	256 MB

表 15-12 OracleAS Metadata Repository の論理ドライブ

論理ドライブ	最小サイズ	推奨されるシンボリック・リンク名
B2B_RT 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_b2brt_256m</i>
B2B_DT 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_b2bdt_256m</i>
B2B_IDX 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_b2bidx_256m</i>
B2B_LOB 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_b2blob_256m</i>
DCM 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_dcm_256m</i>
DISCO_PTM5_CACHE 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_discoptm5cache_64m</i>
DISCO_PTM5_META 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_discoptm5meta_64m</i>
IAS_META 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_iasmeta1_256m</i>
OCATS 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_ocats_64m</i>
OLTS_ATTRSTORE 表領域	128 MB	<i>dbname_raw_oltsattrstore_128m</i>
OLTS_BTTRSTORE 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_oltsbttrstore_64m</i>
OLTS_CT_STORE 表領域	256 MB	<i>dbname_raw_oltsctstore_256m</i>
OLTS_DEFAULT 表領域	128 MB	<i>dbname_raw_oltsdefault_128m</i>
OLTS_SVRMGSTORE 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_oltssvrmgstore_64m</i>
DSGATEWAY_TAB 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_dsgatewaytab_64m</i>
PORTAL 表領域	128 MB	<i>dbname_raw_portal_128m</i>
PORTAL_DOC 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_portaldoc_64m</i>
PORTAL_IDX 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_portalidx_64m</i>
PORTAL_LOG 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_portallog_64m</i>
UDDISYS_TS 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_uddisysys_64m</i>
WCRSYS_TS 表領域	64 MB	<i>dbname_raw_wcrsysys_64m</i>

RAW デバイスの使用方法については、データベースのマニュアルを参照してください。

15.5.16 Oracle Internet Directory への登録

登録を正常に行うためには、次の項目をチェックします。

- 既存のデータベースが Oracle Internet Directory に登録されていないことを確認します。すでに Oracle Internet Directory に登録されているデータベースを登録することはできません。
- 同じ SID を持つ別のデータベースが Oracle Internet Directory に登録されていないことを確認します。

データベースがすでに Oracle Internet Directory に登録されているかどうかをチェックするには、次のようにして Oracle Internet Directory を調べる必要があります。

1. Oracle Directory Manager を使用して Oracle Internet Directory に接続します。

- a. Oracle Directory Manager を起動します。
「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - OracleHomeName」 → 「Integrated Management Tools」 → 「Oracle Directory Manager」 を選択します。
 - b. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. データベースが Oracle Internet Directory に登録されているかどうかをチェックします。「エン트리管理」 → 「cn=OracleContext」の順にエントリを開きます。
データベースが Oracle Internet Directory に登録されている場合は、「cn=your_database_name」というエントリが表示されます。
登録を解除する方法については、[H.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す」](#)の手順 2 を参照してください。
 3. Oracle Internet Directory に登録されているメタデータ・リポジトリがデータベースに含まれているかどうかをチェックします。次のエントリを展開します。
「エン트리管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Infrastructure Databases」
Oracle Internet Directory に登録されているメタデータ・リポジトリがデータベースに含まれている場合は、「orclReferenceName=your_database_name」というエントリが表示されます。
登録を解除する方法については、[H.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す」](#)の手順 3 を参照してください。

15.6 Oracle Internet Directory の要件

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するには、Oracle Internet Directory のバージョンが 9.0.4 以上でなければなりません。Oracle Internet Directory バージョン 9.2.x はサポートされていません。

Oracle9i Database リリース 2 (9.2.x) および Oracle Internet Directory 9.2.0.x を使用している場合

既存の Oracle9i Database リリース 2 (9.2) および Oracle Internet Directory 9.2.0.x を Oracle Application Server とともに使用する場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. データベースが要件を満たしていることを確認します。[15.5 項「データベースの要件」](#)を参照してください。
2. OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードし、データベースを Oracle Internet Directory に登録します。[第 16 章「OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード」](#)を参照してください。
3. Oracle Internet Directory をバージョン 9.0.4 にアップグレードします。『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』の第 5 章、Oracle Internet Directory v. 9.2.0.x の 10g (9.0.4) へのアップグレードに関する項を参照してください。
4. Oracle Application Server の各コンポーネントを OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory にインストールします。

Oracle Internet Directory 9.0.2.x を使用している場合

Oracle Internet Directory 9.0.2 を使用する場合は、9.0.2 のメタデータ・リポジトリが必要です。可能な構成については、『Oracle Application Server インストール・ガイド』の第 3 章「以前のリリースとの互換性」を参照してください。

Oracle Internet Directory のバージョンのチェック方法

Oracle Internet Directory のバージョンをチェックするには、次のコマンドを実行します。

```
C:\> oidldapd -version
```

oidldapd コマンドは、`ORACLE_HOME\bin` ディレクトリに置かれています。`ORACLE_HOME` は、Oracle Internet Directory のインストール先ディレクトリです。

15.7 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がインストール済であることを確認します。詳細は、[15.4 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール」](#)を参照してください。
2. 既存のデータベース用のリスナーおよびそのデータベース自体が起動して実行中であることを確認します。
3. `NLS_LANG` 環境変数が英語以外のロケールに設定されている場合は、設定を解除するか、または `american_america.us7ascii` に設定します。

環境変数は、「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで設定できます。

`NLS_LANG` が英語以外のロケールに設定されていると、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は Workflow スキーマのロードに失敗します。

`NLS_LANG` は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行終了後、元の値に戻るかまいません。

4. 次のようにして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホーム（Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール先ディレクトリ）から Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。

```
prompt> cd ORACLE_HOME_RepCA
prompt> runRepca.bat
```

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、次のようにして「スタート」メニューから起動することもできます。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「OracleAS Infrastructure - OracleHomeName」 → 「Repository Creation Assistant」

共有ドライブからの実行

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を共有ドライブから実行する場合は、事前にそのドライブをマップしておく必要があります。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant は、汎用命名規則（UNC）のパスを使用して実行することはできません。これは、UNC ディレクトリからのバッチ・ファイルの実行に関する Microsoft Windows の制限によるものです。

たとえば、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を `\\myserver\repca` にインストールした場合、次のコマンドで Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行することはできません。

```
C:> \\myserver\repca\runRepca -- UNC format: Will not work.
```

この共有ドライブをマップしてから、そのドライブ文字を使用して Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する必要があります。次の例では、共有ドライブを `F:` にマップしています。

```
C:> net use F: \\myserver\repca -- Map the shared drive to F:
C:> F:\runRepca.bat [parameters] -- Run Oracle Application Server Metadata
Repository Creation Assistant.
```

15.8 次に読む必要のある項

この章の残りの項では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の使用手順について説明しています。

ロード操作

ロード操作については、Oracle Internet Directory への登録を行うかどうかに関係なく、使用しているデータベースの種類および記憶域オプションに応じて、次のうちの適切な項を参照してください。

表 15-13 次に読む必要のある項

データベース記憶域の種類	読む必要のある項
オペレーティング・システム上の通常のファイルとして作成されたデータファイル	16.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
RAW デバイス	16.2 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
Oracle Managed Files	16.3 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」

登録操作のみ

OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録のみを行う場合は、[第 17 章](#)を参照してください。

削除操作または登録解除操作

OracleAS Metadata Repository の削除および登録解除については、[付録 B](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の既存のデータベースへのロード

この章では、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにインストール（ロード）する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール](#)
- [RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール](#)
- [Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール](#)
- [ログ・ファイル内の無視できるエラー](#)
- [インストール後の手順](#)
- [ロードに失敗した場合の対処方法](#)
- [OracleAS Metadata Repository の同一データベースへの再インストール](#)

16.1 ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール

データファイルの格納にファイル・システムを使用する既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが、[15.5 項「データベースの要件」](#) に示した要件を満たしていることを確認します。
2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#) を参照してください。
3. 各画面の指示に従います。

表 16-1 通常のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を入力します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「標準のファイル・システムまたは Cluster File System」を選択します。

表 16-1 通常のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続)

画面	操作
6. 表領域情報の指定	<p>Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が表領域用のファイルを作成するディレクトリ、および表領域のサイズを指定します。指定するディレクトリは、次の条件を満たしている必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データベースを実行しているコンピュータ上にすでに存在している (このコンピュータは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータと同じであるとはかぎらないことに注意してください)。 ■ 書込み可能である。 ■ 十分な空き領域がある。 ■ ディレクトリへのパスが正しく、データベースを実行しているオペレーティング・システムの規則に従っている。 <p>すべての表領域に同じディレクトリを使用: すべての表領域用のすべてのファイルを同じディレクトリに格納する場合は、このオプションを選択します。このオプションの下にあるフィールドにそのディレクトリを指定します。</p> <p>表領域ごとに別個のディレクトリを使用: 各表領域用のファイルを異なるディレクトリに格納する場合は、このオプションを選択します。</p> <p>表領域: ツリーを開き、各コンポーネント用の表領域を表示します。表領域を選択し、関連付けられているデータファイルおよびサイズを表示または編集します。</p> <p>サイズ: アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合は、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合は、最小サイズを選択します。</p> <p>ファイル名: データベース・ファイルのファイル名を入力します。例: portal.dbf</p> <p>ディレクトリ: 表領域のデータベース・ファイルを格納するディレクトリを指定します。ディレクトリへのパスが正しく、データベースを実行しているオペレーティング・システムの規則に従っていることを確認してください。</p> <p>例: C:\¥oracle¥dbfiles¥</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. 警告: ディスク領域のチェック	<p>この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に表示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。</p>
8. リポジトリをロードします	<p>Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

4. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

16.2 RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール

この項では、RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

1. データベースが、15.5 項「データベースの要件」に示した要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS Metadata Repository 用の論理ドライブを作成し、各論理ドライブにシンボリック・リンク名を割り当てます。Windows では、RAW ファイル・システムを表すのに論理ドライブを使用します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域、およびそれらの最小サイズのリストは、表 15-12 を参照してください。

論理ドライブの作成方法およびシンボリック・リンク名の割当て方法については、Oracle Database のインストレーション・ガイドを参照してください。

3. (オプション) 論理ドライブを表すシンボリック・リンク名に表領域をマップするためのファイルを作成し、そのファイルを指すように DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を設定します。

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がこのファイルを読み込み、「表領域情報の指定」画面の各フィールドにデータを自動的に表示します。この場合、画面のデータを確認するだけで済みます。

このファイルを作成しない場合でも、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行して、論理ドライブを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この場合、「表領域情報の指定」画面の各フィールドは空のままになるので、手動でデータを入力する必要があります。

詳細な手順は次のとおりです。

- a. 論理ドライブを表すシンボリック・リンク名に表領域をマップするためのファイルを作成します。

ファイル内の各行は次の書式で記述します。

```
tablespace_name=symbolic_link_name
```

次の内容をサンプルとして使用できます。シンボリック・リンク名は実際の値に置き換えてください。ここで示されているように、表領域名の末尾には「1」を付け加えます。

```
PORTAL1=%%.%%mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=%%.%%mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=%%.%%mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=%%.%%mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=%%.%%mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PTM5_META1=%%.%%mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PTM5_CACHE1=%%.%%mydb_raw_disco_cache_64m
DCM1=%%.%%mydb_raw_dcm_256m
WCRSYS_TS1=%%.%%mydb_raw_clip_64m
OCATS1=%%.%%mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=%%.%%mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=%%.%%mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=%%.%%mydb_raw_olts_battr_64m
OLTS_CT_STORE1=%%.%%mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=%%.%%mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=%%.%%mydb_raw_olts_svrmgstore_64m
DSGATEWAY_TAB1=%%.%%mydb_raw_synd_64m
b2b_dt1=%%.%%mydb_raw_b2b_dt_256m
b2b_rt1=%%.%%mydb_raw_b2b_rt_256m
b2b_lob1=%%.%%mydb_raw_b2b_lob_256m
b2b_idx1=%%.%%mydb_raw_b2b_idx_256m
```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストは、[15.5.15 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

- b. DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を、このファイルへのフルパスに設定します。
環境変数は、「システムのプロパティ」の「環境変数」ダイアログ・ボックスで設定できます。
4. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
5. 各画面の指示に従います。

表 16-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を入力します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「RAW デバイス」を選択します。
6. 表領域情報の指定	<p>マッピング・ファイルを作成し、そのファイルを指すように DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を設定した場合は、そのファイルから読み込まれた値がこの画面に表示されます。詳細は、16-4 ページの手順 3 を参照してください。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。</p> <p>マッピング・ファイルを作成していない場合、または DBCA_RAW_CONFIG 環境変数を設定していない場合、この画面では手動で情報を入力する必要があります。「次へ」をクリックします。</p>
7. 警告: ディスク領域のチェック	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に表示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。
8. リポジトリをロードします	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。
9. 成功	「OK」をクリックして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

16.3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール

Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが、[15.5 項「データベースの要件」](#) に示した要件を満たしていることを確認します。

特に、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリが `db_create_file_dest` 初期化パラメータに指定されていることを確認してください。これは、次のようにして設定できます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set db_create_file_dest ='C:\oracle\oradata';
```

この初期化パラメータが設定されていない場合は、エラーが発生します。

2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#) を参照してください。
3. 各画面の指示に従います。

表 16-3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>Oracle ホーム : データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p>ログ・ファイル・ディレクトリ : Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になっています。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「ロード」を選択して、Oracle Internet Directory への登録は行わずに OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードします。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>SYS パスワード : SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>シングル・ノード・インスタンス : このオプションを選択し、その下にある次の各フィールドに必要な情報を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名 : データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。 ■ ポート : データベースのポート番号を入力します。 ■ サービス名 : データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
5. 記憶域オプションを指定	「Oracle-Managed Files」を選択します。

表 16-3 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	操作
6. Oracle Managed Files 用のディレクトリ	この画面には、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が OracleAS Metadata Repository 用のデータファイルを作成するディレクトリが表示されます。この値は、db_create_file_dest 初期化パラメータから読み取られます。このパラメータが設定されていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がデータファイルを作成する場所を別のディレクトリに変更する場合は、まず (SQL*Plus などのデータベース管理ツールを使用して) そのディレクトリを指すように db_create_file_dest 初期化パラメータを編集します。そして、1 つ前の画面に戻り、「次へ」をクリックして再度この画面を表示します。すると、新たにパラメータに指定した値が画面に表示されます。 「次へ」をクリックします。
7. 表領域情報の指定	この画面には、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が作成する必要のある表領域が表示されます。 「サイズ」列で、各表領域に適切なサイズを選択します。アプリケーションによるコンポーネント使用率が高い場合は、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合は、最小サイズを選択します。 「次へ」をクリックします。
8. 警告: ディスク領域のチェック	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM および UNDO 表領域が自動拡張に設定されている場合に表示されます。SYSTEM および UNDO 表領域が格納されているファイル・システムに、警告ダイアログ・ボックスに示されているように十分なサイズのディスク領域があるかどうかをチェックしてください。
9. リポジトリをロードします	Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が表領域およびスキーマを作成し、それらにデータを移入します。
10. 成功	「OK」をクリックして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。16.5 項「インストール後の手順」を参照してください。

16.4 ログ・ファイル内の無視できるエラー

ログ・ファイルに次のエラーが記録されていても、特に問題はありません。これらのエラーは無視してかまいません。

- 16.4.1 項「SP2-0332 エラー」
- 16.4.2 項「SP2-0606 エラー」

16.4.1 SP2-0332 エラー

SP2-0332 エラーが次の文脈でログ・ファイルに記録されている場合は、無視してかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0332: Cannot create spool file.
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

16.4.2 SP2-0606 エラー

SP2-0606 エラーが次の文脈でログ・ファイルに記録されている場合は、無視してかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0606: Cannot create SPOOL file "LOGS/oidimeta.log"
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

16.5 インストール後の手順

OracleAS Metadata Repository をデータベースにインストールした後、次の手順を実行する必要があります。

- [sqlnet.ora ファイルの更新](#)
- データベースの Oracle ホームへの [ldap.ora ファイルのコピー](#)
- [DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定](#)
- [Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成](#)

16.5.1 sqlnet.ora ファイルの更新

OracleAS Metadata Repository の ORASSO_PS スキーマに接続できるように、SQL*Net 設定を構成します。そのためには、`ORACLE_HOME%\network\admin\sqlnet.ora` ファイル (`ORACLE_HOME` は OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホーム) の `NAMES.DIRECTORY_PATH` エントリに LDAP を追加します。次に例を示します。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

この構成を行わないと、OracleAS Single Sign-On の管理ポータルを使用する際、OracleAS Portal にエラーが表示されます。このエラーは、外部アプリケーションの機能を利用する場合に OracleAS Portal が ORASSO_PS スキーマに接続するために使用する DB リンクが原因で発生します。DB リンクは、OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホームで構成されている SQL*Net 設定を使用して解決されます。

16.5.2 データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー

この手順を実行する必要があるのは、OracleAS Metadata Repository をロードして Oracle Internet Directory に登録した場合のみです。OracleAS Metadata Repository をロードしただけで Oracle Internet Directory に登録していない場合、この手順を実行する必要はありません。

- データベースのバージョンが 9.2.0.6 (または 9.2.x シリーズのそれ以降) である場合は、`Repository_Creation_Assistant_OH%\network\admin\ldap.ora` ファイルを `Database_OH%\network\admin\ldap.ora` にコピーします。
`Repository_Creation_Assistant_OH` は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホームです。
`Database_OH` は、データベースの Oracle ホームです。
- データベースのバージョンが 10.1.0.4 (または 10.1.x シリーズのそれ以降) である場合は、`Repository_Creation_Assistant_OH%\network\admin\ldap.ora` ファイルを `Database_OH%\ldap\admin\ldap.ora` にコピーします。
`Repository_Creation_Assistant_OH` は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の Oracle ホームです。

`Database_OH` は、データベースの Oracle ホームです。

16.5.3 DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定

DCM スキーマのロックを解除し、パスワードを設定します。この手順を実行する必要があるのは、(1) **J2EE and Web Services** インスタンスをクラスタリングしているデータベース専用としてメタデータ・リポジトリを使用する予定で、なおかつ (2) メタデータ・リポジトリを **Oracle Internet Directory** に登録していない場合のみです。

1. データベースがインストールされているディレクトリへのフルパスを指すように、`ORACLE_HOME` 環境変数を設定します。
2. `ORACLE_SID` 環境変数をデータベースの `SID` に設定します。
3. **SQL*Plus** を使用し、DCM スキーマのロックを解除してパスワードを設定します。

次の `alter user` コマンドではパスワードを「welcome1」に設定していますが、パスワードは任意の値に設定できます。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\bin\sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user dcm identified by welcome1 account unlock;
```

16.5.4 Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成

Oracle Application Server は、データベースに付属する Oracle Ultra Search を使用します。バージョン 9.2.0.6 のデータベースに付属する Oracle Ultra Search には、デフォルトのインスタンスは含まれていません。したがって、このバージョンのデータベースに **OracleAS Metadata Repository** をロードした場合は、Oracle Ultra Search インスタンスを作成する必要があります。インスタンスの作成方法の詳細は、『Oracle Ultra Search 管理者ガイド』の「Oracle Ultra Search の管理ツールの理解」、インスタンスの作成に関する項を参照してください。

Oracle Ultra Search インスタンスを作成しない場合、次の操作を行ったときにエラーが発生します。

1. OracleAS Portal へのログイン。
2. Oracle Ultra Search の管理ページへの移動。この場合、次のエラーが発生します。

```
"Error: No Ultra Search instances have been assigned to user
"ORCLADMIN" for administration. Contact the Ultra Search
administrator for your organization."
```

16.6 ロードに失敗した場合の対処方法

ロードに失敗した場合は、失敗前にロードされた **OracleAS Metadata Repository** オブジェクトを削除する必要があります。オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. **Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant** を実行し、削除オプションを選択します。ウィザードまたはスクリプトを使用して、オブジェクトを削除できます。詳細は、[付録 B](#) を参照してください。
2. この手順は、データベース内の **Oracle Internet Directory** スキーマが **OracleAS Metadata Repository** によってロードされたものである場合にのみ実行します。**Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant** の実行時点で、すでに **Oracle Internet Directory** スキーマがデータベースに格納されていた場合、この手順を実行する必要はありません。

Oracle Internet Directory オブジェクトをデータベースから削除します。この作業は、**Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant** での削除操作とは別に実行する必要があります。この削除操作では、**Oracle Internet Directory** オブジェクトはデータベースから削除されないためです。

Oracle Internet Directory オブジェクトの削除の詳細は、[B.7 項](#) を参照してください。

16.7 OracleAS Metadata Repository の同一データベースへの再インストール

この項は、9.2.0.6 のデータベースにのみ適用されます。10g のデータベースには適用されません。

9.2.0.6 のデータベースにインストールされた OracleAS Metadata Repository を削除して再インストールするには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、データベースから OracleAS Metadata Repository を削除します。
2. この手順は、データベース内の Oracle Internet Directory スキーマが OracleAS Metadata Repository によってロードされたものである場合にのみ実行します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行時点で、すでに Oracle Internet Directory スキーマがデータベースに格納されていた場合、この手順を実行する必要はありません。

Oracle Internet Directory オブジェクトをデータベースから削除します。この作業は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant での削除操作とは別に実行する必要があります。この削除操作では、Oracle Internet Directory オブジェクトはデータベースから削除されないためです。

Oracle Internet Directory オブジェクトの削除の詳細は、B.7 項を参照してください。

3. OracleAS Metadata Repository をデータベースに再インストールします。

再インストールした OracleAS Metadata Repository の使用

再インストールした OracleAS Metadata Repository を使用する前に、次の点に注意してください。

- この OracleAS Metadata Repository に対して、Oracle Internet Directory をインストールすることはできません。インストーラによって、「Oracle Internet Directory はすでにデータベースに構成されています。Oracle Internet Directory をインストールできるのは、データベースごとに 1 回のみです」というメッセージが表示されます。
- この OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory を使用する中間層をインストールできます。

OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

この章では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、一度登録解除した OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- [Oracle Internet Directory への登録](#)
- [登録後の手順](#)
- [登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法](#)

17.1 Oracle Internet Directory への登録

注意：

- OracleAS Metadata Repository を登録できるのは、サポートされているバージョンの Oracle Internet Directory に限られます。詳細は、[15.6 項](#)を参照してください。
 - Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して、リリース 2 (9.0.2) のメタデータ・リポジトリを 10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録することはできません。
 - Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって、同じサービス名がすでに Oracle Internet Directory に登録されていることが検出された場合、そのサービス名はすでに Oracle Internet Directory に登録されているというエラー・メッセージが表示されます。処理を続行するには、その登録を解除する必要があります。
-
-

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。[15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
2. 各画面の指示に従います。

表 17-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを入力します。データベースを実行しているコンピュータの表記規則に従う必要があります (適切なスラッシュを使用するなど)。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant がログ・ファイルを書き込むディレクトリへのフルパスを入力します。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行しているコンピュータ上のパスを入力します。</p> <p>いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動した後で、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻ってきても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読み取り専用になっています。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が別のディレクトリにログ・ファイルを書き込むのを防止するためです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「登録」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. データベース接続情報を指定	<p>データベースの接続情報を入力します。</p> <p>DBA ユーザー名およびパスワード: データベースにログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。</p> <p>データベースの種類に応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を入力します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。次のように、<i>host:port</i> の形式で入力し、各 <i>host:port</i> はカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ... <p>中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ サービス名: データベースのサービス名を入力します。サービス名には、データベースのドメイン名を含める必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 17-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録 (続き)

画面	操作
5. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p>「Internet Directory ホスト名」: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインに属している場合は、そのドメイン名をホスト名の後に付け加える必要があります。</p> <p>「Internet Directory ポート」: Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p>「登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用」: 登録の際、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単なユーザー名 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p>注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) はどのレルムにも属さないため、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。</p> <p>「ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext)」: OracleAS Metadata Repository をルート Oracle コンテキストに登録する場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「カスタム Oracle コンテキスト」: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
8. 成功	<p>「OK」をクリックして、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

17.2 登録後の手順

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録した後、ldap.ora ファイルを Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ホームからデータベース・ホームにコピーする必要があります。詳細は、[16.5.2 項](#)を参照してください。

17.3 登録完了前に終了した場合、または登録に失敗した場合の対処方法

登録が完了する前に Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了した場合、または登録に失敗した場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再度実行して登録をやり直す前に、次の手順を手動で実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory からリポジトリのエントリを削除します。詳細は、[B.3 項](#)を参照してください。
2. すべてのスキーマ・パスワードをデフォルト値にリセットします。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name identified by schema_password;
```

3. すべてのスキーマ・パスワードをロックします。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> alter user schema_name account lock password expire;
```

これらの手順の実行後、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再度起動してデータベースを登録できます。

第IV部

付録

第IV部には、次の付録が含まれます。

- 付録 A 「削除と再インストール」
- 付録 B 「OracleAS Metadata Repository の登録取り消しと削除」
- 付録 C 「デフォルトのポート番号」
- 付録 D 「開放が必要なファイアウォールのポート」
- 付録 E 「OracleAS Metadata Repository スキーマ」
- 付録 F 「Java Access Bridge のインストール」
- 付録 G 「Configuration Assistant」
- 付録 H 「トラブルシューティング」

削除と再インストール

この付録では、Oracle Application Server Standard Edition One の削除および再インストールのプロセスについて説明します。

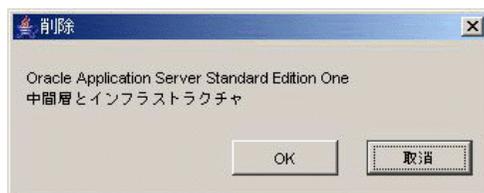
- Oracle Application Server Standard Edition One の削除
- Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の削除
- 構成解除ツール
- ログ・ファイル内の無視できるエラー
- 手動による全 Oracle 製品の削除
- 再インストール
- トラブルシューティング

A.1 Oracle Application Server Standard Edition One の削除

Oracle Application Server Standard Edition One の削除は次の手順に従って行います。

1. 「スタート」を選択して「スタート」メニューを開き、「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「Advanced Administration」→「Deinstall」の順に選択します。
図 A-1 に示す画面が表示されます。

図 A-1 削除を実行するかどうかの確認



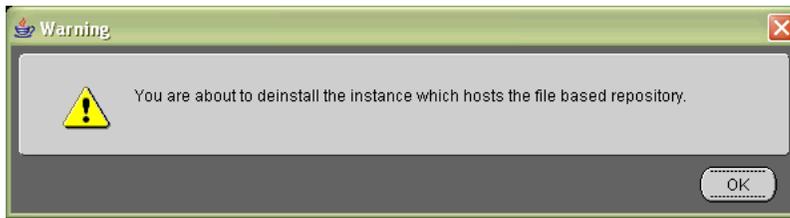
「OK」をクリックして、次の手順に進みます。

J2EE and Web Services のみを削除する場合は、手順 3 に進んでください。

OracleAS Portal を削除する場合は、このまま手順 2 に進んでください。

2. すぐに削除処理が開始され、図 A-2 の画面上に「ファイルベースのリポジトリをホストしているインスタンスが削除される」という内容の警告が表示されます。

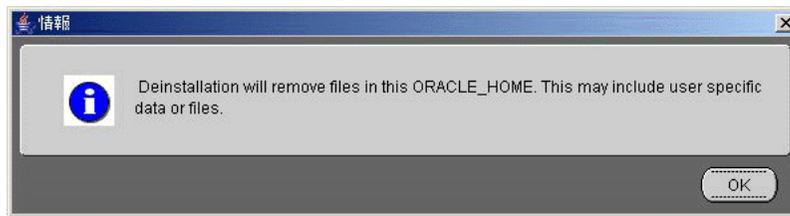
図 A-2 「インスタンスを削除しようとしています」という内容の削除警告メッセージ



「OK」をクリックして、次の手順に進みます。

- 削除処理がしばらく続行された後、図 A-3 の画面に「この Oracle ホーム内のファイルおよびデータが削除される」という内容の警告が表示されます。

図 A-3 「Oracle ホーム内のファイルを削除しようとしています」という内容の削除警告メッセージ



J2EE and Web Services のみを削除する場合は、「OK」をクリックして手順 4 に進んでください。

OracleAS Portal を削除する場合は、この画面が 2 度表示されます。これは、OracleAS Portal をインストールした際、OracleAS Portal 用と OracleAS Infrastructure 用の 2 つの Oracle ホームが作成されるためです（詳細は、1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照）。いずれの場合も「OK」をクリックして、次の手順に進みます。

- 削除処理が最後まで実行されます。削除処理のログが次の場所に作成されます。
C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\silentInstall<date><time>.log
- 削除したインスタンスのエントリを Windows レジストリから削除します。
詳細は、A.5 項を参照してください。
- 残りのファイルを手動でクリーン・アップします。
詳細は、表 A-1 を参照してください。

表 A-1 手動で削除するもの

クリーン・アップの対象	場所
Oracle ホーム・ディレクトリにあるファイル	インストール時に指定した Oracle ホーム・ディレクトリ。詳細は、1.4.2 項「Oracle ホーム・ディレクトリ」を参照してください。
削除したインスタンスに対応するインベントリ・ディレクトリ内のエントリ	C:\Program Files\Oracle\Inventory

このインストーラでは、個々のコンポーネントのカスタム削除を実行することはできません。

A.2 Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の削除

この項では、必要がなくなった Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を削除する手順を説明します。

ただし、OracleAS Metadata Repository の削除または登録取消しを行うには、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が必要です。

1. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant をインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. Oracle Universal Installer を起動します。
「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer」の順に選択します。
3. 次に示すインストーラの手順に従います。
 - a. 「ようこそ」画面：「製品の削除」をクリックします。
 - b. 「インベントリ」画面：削除する Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を選択し、「削除」をクリックします。
 - c. 「確認」画面：削除対象として目的のコンポーネントが正しく選択されていることを確認します。「はい」をクリックして、次の手順に進みます。
 - d. 「削除の進捗状況」画面：削除の進捗状況が表示されます。
 - e. 削除が完了したらインストーラを終了します。
4. Oracle ホーム・ディレクトリにある残りのファイルを削除します。

```
C:\> rd /S /Q %ORACLE_HOME%
```

A.3 構成解除ツール

構成解除ツールは、Oracle Application Server Standard Edition One の OracleAS Portal を削除する手続きを始める際に使用します。このツールを使用すると、削除する Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスに対応するエントリを OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory から削除できます。

インストールされているのが J2EE and Web Services のみの場合は、中間層が Oracle Internet Directory に関連付けられていない限り、このツールを使用する必要はありません。

注意： 構成解除ツールが使用できるのは、既存の Metadata Repository とともに OracleAS Portal をインストールした場合のみです。それ以外の形でインストールした場合（J2EE and Web Services 単独でインストールした場合または新しい Metadata Repository とともに OracleAS Portal をインストールした場合）は、「スタート」メニューから次の順に選択して、Oracle Application Server Standard Edition One を削除する必要があります。

「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「Advanced Administration」 → 「Deinstall」

詳細は、[A.1 項](#)を参照してください。

構成解除ツールを実行すると、そのログ・ファイルの内容が `ORACLE_HOME\cfgtoollogs` にある `DeconfigureWrapper.log` ファイルに書き込まれます。

A.3.1 構成解除ツールの実行

構成解除ツールを実行するには、Perl インタプリタで `ORACLE_HOME`bin にある `deconfig.pl` スクリプトを実行します。Perl インタプリタは、Oracle Application Server Standard Edition One に付属しています。

```
C:> cd ORACLE_HOME\bin
C:> ORACLE_HOME\perl\5.6.1\bin\MSWin32-x86\perl.exe deconfig.pl
[-u <oid_user>] [-w <password>] [-r <realm>] [-dbp <sys_db_password>]
[-h | -help]
```

パラメータを使用せずに `deconfig.pl` を実行すると、必要な情報の入力を求めるメッセージが表示されます。

表 A-2 deconfig.pl に使用できるオプションのパラメータ

パラメータ	説明
<code>-u <oid_user></code>	<p>Oracle Internet Directory ユーザーを指定します。</p> <p>簡単なユーザー名またはユーザーの識別名 (DN) を使用して、Oracle Internet Directory ユーザーを指定することも可能です。たとえば、簡単なユーザー名を <code>jdoe@mycompany.com</code> とすれば、それに対応する DN は <code>cn=jdoe, l=us, dc=mycompany, dc=com</code> となります。</p> <p>Oracle Internet Directory ユーザーには、削除対象の Oracle Application Server インスタンスで構成が行われているコンポーネントを削除する権限が必要です。これらの権限は、コンポーネントのインストールおよび構成を行うための権限と同じものです。</p> <p>たとえば、Oracle Delegated Administration Services および Oracle Application Server Single Sign-On を実行している OracleAS Infrastructure インスタンスを削除する場合は、これらのコンポーネントの構成を行う権限がそのユーザーにあることを確認してください。</p> <p>このツールを Oracle Internet Directory スーパーユーザーとして実行する場合は必ず、<code>orcladmin</code> ではなく <code>cn=orcladmin</code> を使用してください。両者はそれぞれ異なるユーザーを表します。</p>
<code>-w <password></code>	Oracle Internet Directory ユーザーのパスワードを指定します。
<code>-r <realm></code>	ユーザー認証の対象となるレルムを指定します。この値が必要となるのは、Oracle Internet Directory に複数のレルムが存在する場合のみです。
<code>-dbp <sys_db_password></code>	<p>データベースの SYS ユーザー用のパスワードを指定します。これは、Oracle Internet Directory で使用される OracleAS Metadata Repository データベースです。</p> <p>この値が必要となるのは、Oracle Internet Directory の構成を行う Identity Management 専用のインスタンスを削除する場合のみです。</p> <p>このパラメータを指定した場合でも、必要がなければパスワードの値は使用されません。</p>
<code>-h</code> または <code>-help</code>	構成解除ツールのヘルプ情報を表示します。

A.3.2 構成解除ツールによる中間層の構成解除

この項では、構成解除ツールを使用して中間層インスタンスの構成を解除する方法について説明します。次に示すのは、OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory から中間層エンティティを削除する手順です。

1. 構成を解除する中間層インスタンスをインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。

2. 中間層インスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。
プロセス停止の詳細は、[第 9 章](#)または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
3. 中間層の Oracle ホームに移動し、構成解除ツールを実行します。

```
C:¥> cd MIDTIER_ORACLE_HOME¥bin
C:¥MIDTIER_ORACLE_HOME> MIDTIER_ORACLE_HOME¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86¥perl.exe
deconfig.pl [<parameters>]
```

パラメータの詳細は、[A.3 項](#)を参照してください。

A.3.3 構成解除ツールによる OracleAS Infrastructure の構成解除

この項では、構成解除ツールを使用して OracleAS Infrastructure インスタンスの構成を解除する方法について説明します。次に示すのは、OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory から OracleAS Infrastructure エンティティを削除する手順です。

1. 構成を解除する OracleAS Infrastructure をインストールしたときと同じオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
2. OracleAS Infrastructure インスタンスに関連付けられているプロセスをすべて停止します。
プロセス停止の詳細は、[第 9 章](#)または『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
3. OracleAS Infrastructure の Oracle ホームに移動し、構成解除ツールを実行します。

```
C:¥> cd INFRA_ORACLE_HOME¥bin
C:¥INFRA_ORACLE_HOME> INFRA_ORACLE_HOME¥perl¥5.6.1¥bin¥MSWin32-x86¥perl.exe
deconfig.pl [<parameters>]
```

パラメータの詳細は、[A.3 項](#)を参照してください。

注意： 削除するインスタンスに Oracle Internet Directory コンポーネントまたは Oracle Application Server Single Sign-On コンポーネントが含まれている場合は、スーパーユーザー (cn=orcladmin) として構成解除ツールを実行する必要があります。削除するインスタンスに Oracle Internet Directory や Oracle Application Server Single Sign-On が含まれていない場合でも、適切な権限を持つユーザーとしてツールを実行する必要があります。

A.4 ログ・ファイル内の無視できるエラー

J2EE and Web Services インスタンスや OracleAS Portal インスタンスの削除後、oraInstalltimestamp.err ファイル内に次のような「Unable to delete file」や「Unable to find make file」というエラーが表示されることがありますが、これらは問題のないエラー・メッセージです。

```
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException:
An error occurred during runtime. oracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException:
An error occurred during runtime.
...
Ignoring Exception during de-install oracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException:
Unable to delete file
¥home¥j2ee¥sysman¥emd¥targets.xml
oracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException: Unable to delete file
/home/j2ee/sysman/emd/targets.xml
at instantiateFileEx.deinstallAction(instantiateFileEx.java:935)
...
Ignoring Exception during de-installoracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException:
Unable to find make file:
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk
oracle.sysman.oii.oii1.OiilDeinstallException: Unable to find make file:
```

```
/home/j2ee/network/lib/ins_net_client.mk  
at ssmakeux.deinstallAction(ssmakeux.java:246)  
...
```

A.5 手動による全 Oracle 製品の削除

次に示すのは、コンピュータ上からすべての Oracle 製品を削除する手順です。

注意： この手順により、コンピュータ上から Oracle のコンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリが**すべて**削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は特に注意が必要です。削除するエントリが不適切な場合、コンピュータが動作不能になることもあります。

1. レジストリ・キーを削除します。フォルダを削除する場合は、そのフォルダを選択し「**編集**」メニューから「**削除**」を選択します。

注意： 次に示すエントリにおいて、<OracleHomeName> は Oracle ホームの名前、<Number> は Oracle ホーム名に追加された乱数（たとえば「001」）、<Component> はコンポーネントの名前（たとえば「ProcessManager」）をそれぞれ表します。

- a. 「スタート」→「ファイル名を指定して実行」を選択し、**regedit** と入力して「OK」をクリックします。レジストリ・エディタが表示されます。
 - b. **HKEY_LOCAL_MACHINE / SOFTWARE / Oracle** フォルダを削除します。
 - c. **HKEY_LOCAL_MACHINE / SYSTEM / CurrentControlSet / Services** フォルダから次のフォルダを削除します。
 - * **OracleDBConsole<Database_SID>**
 - * **Oracle<OracleHomeName><Database_SID>**
 - * **OracleService<Database_SID>**
 - d. **HKEY_LOCAL_MACHINE / SYSTEM / ControlSet<Number> / Services** フォルダから次のフォルダを削除します。
 - * **OracleDBConsole<Database_SID>**
 - * **Oracle<OracleHomeName><Database_SID>**
 - * **OracleService<Database_SID>**
 - e. **HKEY_CLASSES_ROOT** フォルダから次のフォルダを削除します。
 - * 名前が「**OracleConfig**」で始まるすべてのフォルダ
 - * 名前が「**OracleDatabase**」で始まるすべてのフォルダ
 - * 名前が「**OracleHome**」で始まるすべてのフォルダ
 - * 名前が「**OracleProcess**」で始まるすべてのフォルダ
 - f. レジストリ・エディタを終了します。
2. 環境変数を編集 / 削除します。

次の手順に従って環境変数を表示します。

 - デスクトップの「**マイ コンピュータ**」（Windows 2003 の場合は、コンピュータ名の付いたアイコン）を右クリックし「**プロパティ**」を選択します。「**詳細設定**」タブを選択し、「**環境変数**」をクリックします。
 - a. システム変数 **PATH** から、Oracle ホームを参照していたパスをすべて削除します。

システム変数 PATH を選択します。「編集」ボタンをクリックし、「変数値」フィールドに表示されているパスを修正します。

次に示すのは、Oracle 関連のパスが追加されているシステム変数 PATH です。

```
C:¥ORACLE_HOME¥jdk¥jre¥bin¥classic;C:¥ORACLE_HOME¥jdk¥jre¥bin;
C:¥ORACLE_HOME¥bin;C:¥ORACLE_HOME¥jlib;C:¥ORACLE_HOME¥jre¥1.1.8¥bin;
C:¥WINNT¥system32;C:¥WINNT;C:¥WINNT¥System32¥Wbem
```

次は、Oracle ホームへの参照を削除した後のシステム変数 PATH です。

```
C:¥WINNT¥system32;C:¥WINNT;C:¥WINNT¥System32¥Wbem
```

3. 「OK」をクリックします。
4. Oracle プログラム・フォルダを削除します。

Windows 2000 の場合は「スタート」→「プログラム」、Windows 2003 または Windows XP の場合は「スタート」→「すべてのプログラム」をクリックします。削除する Oracle フォルダを右クリックし「削除」を選択します。

5. コンピュータを再起動します。
6. ハード・ドライブから残りの Oracle ホーム・ディレクトリを削除します。

例を示します。

```
C:¥Oracle¥*, C:¥Program Files¥Oracle¥*
```

7. コンピュータを再起動します。

A.6 再インストール

Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスがすでに存在するディレクトリに、Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスを再インストールすることはできません。Oracle Application Server Standard Edition One を同じディレクトリに再インストールする場合は、その前に既存の Oracle Application Server Standard Edition One をいったん削除する必要があります。

A.7 トラブルシューティング

削除に関連してよく発生する問題の解決方法については、[H.4 項](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取り消しと削除

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除したり、Oracle Internet Directory への登録を取り消したりする場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用することも可能です。

この付録の内容は次のとおりです。

- Oracle Internet Directory データベースの登録取り消し
- 中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認
- ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取り消しおよび削除
- OracleAS Metadata Repository の削除
- OracleAS Metadata Repository の登録取り消し
- cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除
- OracleAS Metadata Repository オブジェクトの削除
- 登録取り消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ

ウィザードとスクリプトの違い

OracleAS Metadata Repository の登録取り消しおよび削除には、ウィザードまたは cleanMR スクリプトを使用できます。ただしスクリプトを実行した場合は、削除のみ実行され、OracleAS Metadata Repository の登録取り消しは行われません。

B.1 Oracle Internet Directory データベースの登録取り消し

Oracle Internet Directory データベースを使用している場合は、登録を取り消すことはできません。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant にはエラーが表示され、登録取り消しは取り消されます。

Oracle Internet Directory データベースとは、Oracle Internet Directory で使用されているデータベースのことです。例をあげます。

- OracleAS Portal を新しい Metadata Repository にインストールした場合、このデータベースが Oracle Internet Directory データベースになります。
- Oracle Internet Directory を（インストーラまたは Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用して作成された）Metadata Repository に登録した場合、このデータベースが Metadata Repository データベースになります。

B.2 中間層に OracleAS Metadata Repository が使用されているかどうかの確認

データベースが Oracle Internet Directory データベースでない場合、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant では、削除または登録取消しの対象となる OracleAS Metadata Repository データベースを使用している中間層があるかどうかの確認が行われます。

OracleAS Metadata Repository を使用している中間層が検出された場合は、警告が表示されません。ここで登録取消しまたは削除の処理を続行すると、その中間層の機能は失われます。

B.3 ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う方法について説明します。

Oracle Internet Directory に対する OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、[B.5 項「OracleAS Metadata Repository の登録取消し」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[B.4 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除を行う手順は次のとおりです。

1. 削除または登録取消しの対象となる OracleAS Metadata Repository を使用中の Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"  
SQL> select schemaname from v$session;
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「schemaname」に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、[表 15-9](#)に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、[15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」](#)を参照してください。
3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。

表 B-1 OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>「Oracle ホーム」: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: 上書きする Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用となります。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 削除オプションを選択	<p>「登録解除して削除」: OracleAS Metadata Repository の表領域とスキーマを削除する場合および Oracle Internet Directory への登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-1 OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除 (続き)

画面	操作
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名」: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。 ■ 「ポート」: データベースのポート番号を入力します。 ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名およびポート」: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト:ポートの形式で入力し、各ホスト:ポートはカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ... <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスに対して同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。</p> <p>「Internet Directory ホスト名」: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>「Internet Directory ポート」: Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p>登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録取消しの際、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Internet Directory にログインします。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単なユーザー名 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin) を使用することも可能です。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p>注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) はどのレルムにも属さないため、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-1 OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除 (続き)

画面	操作
8. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の場所を入力します。</p> <p>「ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext)」: ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「カスタム Oracle コンテキスト」: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p>注意: この画面の「次へ」をいったんクリックすると、指定した入力内容を 取り消すことはできません。入力内容を確定する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。取り消した場合、この先の操作を行うには、いくつかの手順に従って手動でデータベースをクリーン・アップする必要があります。B.8 項「登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ」を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックし、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

B.4 OracleAS Metadata Repository の削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository を削除する方法について説明します。

Oracle Internet Directory に対する OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、**B.5 項「OracleAS Metadata Repository の登録取消し」**を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除を行う場合は、**B.3 項「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」**を参照してください。

OracleAS Metadata Repository を削除する手順は次のとおりです。

1. 削除する OracleAS Metadata Repository を使用している Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「schemaname」に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、**表 15-9**に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、**15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」**を参照してください。
3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。

表 B-2 OracleAS Metadata Repository の削除

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>「Oracle ホーム」: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: 上書きする Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用となります。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 削除オプションを選択	<p>「削除」: OracleAS Metadata Repository の表領域とスキーマをデータベースから削除する場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-2 OracleAS Metadata Repository の削除（続き）

画面	操作
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>「SYS パスワード」: SYS ユーザーのパスワードを入力します。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名」: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。 ■ 「ポート」: データベースのポート番号を入力します。 ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名およびポート」: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト:ポートの形式で入力し、各ホスト:ポートはカンマで区切ります。 <p>hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ...</p> <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスに対して同じである必要があります。 <p>例: asdb.mydomain.com</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. 成功	<p>「OK」をクリックし、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

B.5 OracleAS Metadata Repository の登録取消し

この項では、ウィザードを使用して Oracle Internet Directory から OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す方法について説明します。OracleAS Metadata Repository オブジェクトは、データベースから削除されません。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[B.4 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録取消しと削除を行う場合は、[B.3 項「ウィザードによる OracleAS Metadata Repository の登録取消しおよび削除」](#)を参照してください。

1. 登録を取り消す OracleAS Metadata Repository を使用中の Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「*schemaname*」に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、表 15-9 に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しない場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant で、Oracle Application Server インスタンスにアクティブなセッションがあることが検出され、警告が表示されます。

2. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を起動します。詳細は、15.7 項「Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の起動」を参照してください。
3. 次の各画面に表示される指示に従って必要な操作を行います。

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し

画面	操作
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームの指定	<p>「Oracle ホーム」: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリのフルパスを入力します。ただしパスは、データベースを実行しているコンピュータでの記法（スラッシュなど）に従って入力してください。</p> <p>「ログ・ファイル・ディレクトリ」: 上書きする Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のログ・ファイルが保存されているディレクトリのフルパスを入力します。このパスは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行中のコンピュータ上のパスです。</p> <p>ただし、いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、このログ・ファイル・ディレクトリは変更できません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用となります。これは、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によって別のディレクトリにあるログ・ファイルが上書きされないようにするためのものです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
3. 操作を選択	<p>「削除」を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
4. 削除オプションを選択	<p>登録解除を選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し (続き)

画面	操作
5. データベース接続情報を指定	<p>既存のデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>「DBA ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名とパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。</p> <p>データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、該当するフィールドに必要な情報をすべて入力します。</p> <p>「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名」: データベースを実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。 ■ 「ポート」: データベースのポート番号を入力します。 ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。ただしサービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「Real Application Clusters データベース」のフィールドは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「ホスト名およびポート」: Real Application Clusters データベースを実行しているすべてのコンピュータ名およびリスナーで使用されているポート番号を入力します。ホスト: ポートの形式で入力し、各ホスト: ポートはカンマで区切ります。 hostname1:port1, hostname2:port2, hostname3:port3, ... <p>中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>例 1 (ドメインが同じ場合): myhost:1521, myhost2:1521</p> <p>例 2 (ドメインが異なる場合): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 「サービス名」: データベースのサービス名を入力します。サービス名の中には、データベースのドメイン名が含まれている必要があります。またサービス名は、クラスタ内のすべてのインスタンスに対して同じである必要があります。 例: asdb.mydomain.com <p>「次へ」をクリックします。</p>
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	<p>「Internet Directory ホスト名」: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を入力します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、そのドメイン名をホスト名に追加する必要があります。</p> <p>「Internet Directory ポート」: Oracle Internet Directory のポート番号を入力します。</p> <p>登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録取消しの際、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant から Oracle Internet Directory への接続に SSL を使用する場合はこのオプションを選択します。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	<p>ユーザー名とパスワードを入力して、Oracle Internet Directory にログインします。ユーザーは、iAS Admins グループに属している必要があります。簡単なユーザー名 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin) を使用することも可能です。</p> <p>Oracle Internet Directory 内に複数のレルムが存在する場合は、指定したユーザーが属しているレルムを入力する必要があります。</p> <p>注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) はどのレルムにも属さないため、スーパーユーザーとしてログインする場合はレルムの値は不要です。レルムの値が使用されるのは、簡単なユーザー名を使用してログインした場合のみです。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>

表 B-3 OracleAS Metadata Repository の登録取消し (続き)

画面	操作
8. Oracle コンテキストを指定	<p>OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す Oracle Internet Directory の場所を入力します。</p> <p>「ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext)」: ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。</p> <p>「カスタム Oracle コンテキスト」: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す場合は、このオプションを選択します。用意されたフィールドにレルムの DN を入力します。</p> <p>注意: この画面の「次へ」をいったんクリックすると、指定した入力内容を 取り消すことはできません。入力内容を確定する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。取り消した場合、この先の操作を行うには、いくつかの手順に従って手動でデータベースをクリーン・アップする必要があります。B.8 項「登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ」を参照してください。</p> <p>「次へ」をクリックします。</p>
9. 成功	<p>「OK」をクリックし、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。</p>

登録取消し後のスキーマのロックとパスワードの無効化

(OracleAS Metadata Repository オブジェクトを削除せず) OracleAS Metadata Repository の登録取消しのみを行う場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant によりスキーマがロックされ、そのスキーマのパスワードは無効になります。このため、そのスキーマを再度使用するには、次の操作が必要になります。

- スキーマのロックを解除します。これには、「alter user」SQL 文を使用します。次に示すのはその例です。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL account unlock;
```

- スキーマのパスワードを変更します。この場合も、「alter user」SQL 文を使用します。次に示すのはその例です。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL identified by new_password;
```

スキーマのリストは、表 15-9 を参照してください。

B.6 cleanMR スクリプトによる OracleAS Metadata Repository の削除

注意: スクリプトを使用する場合は、OracleAS Metadata Repository の削除のみ実行されます。OracleAS Metadata Repository の登録取消しは行われません。OracleAS Metadata Repository の登録を取り消すには、ウィザードを使用する必要があります。

cleanMR.bat スクリプトは ORACLE_HOME\repca\clean ディレクトリに格納されています。ただし ORACLE_HOME は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール・ディレクトリを表します。

データベースを実行しているコンピュータ上で cleanMR.bat を実行します。

スクリプトを実行する前に Oracle Application Server インスタンスをすべて停止する

スクリプトを実行する前に、削除する OracleAS Metadata Repository を使用している Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止した後も、一部 OracleAS Metadata Repository スキーマの表示がアクティブのまま変わらないことがあります。この場合、データベースに対して次の問合せを実行すれば、実際の状態を確認できます。

```
C:\> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「`schemaname`」に表示される OracleAS Metadata Repository スキーマがあれば、そのスキーマは依然アクティブです。OracleAS Metadata Repository スキーマは、表 15-9 に列挙されています。

インスタンスが停止したことを確認できた場合は、データベースを再起動してセッション情報を消去します。

セッション情報を消去しないと、「現在データベースに接続しているユーザーを削除しようとしています」という内容のエラーが表示されることがあります。

cleanMR.bat の構文

```
prompt> cleanMR.bat -HOST db_host -PORT db_port -SERVICE_NAME service_name
[-DBUSER dbuser] -DBPASSWD password [-DBROLE dbrole]
```

表 B-4 cleanMR のパラメータ

パラメータ	オプションまたは必須	説明
-HOST <code>db_host</code>	必須	データベースを実行しているコンピュータの名前。
-PORT <code>db_port</code>	必須	データベース・リスナーがリスニングしているポートの番号。
-SERVICE_NAME <code>service_name</code>	必須	データベースのサービス名。
-DBUSER <code>dbuser</code>	オプション	スクリプトでデータベースへ接続する際に必要となるデータベース・ユーザー。指定しない場合のデフォルト・ユーザーは「SYS」。
-DBPASSWD <code>password</code>	必須	DBUSER のパスワード
-DBROLE <code>dbrole</code>	オプション	データベース・ユーザー・ロール。指定しない場合のデフォルト・ロールは「SYSDBA」。

例：

```
cleanMR -HOST myhost -PORT 1521 -SERVICE_NAME asdb -DBPASSWD topsecret
```

注意

- このスクリプトを実行しても、ODS スキーマおよび OLTS_ATTRSTORE、OLTS_BATTRSTORE、OLTS_CT_STORE、OLTS_DEFAULT、OLTS_SVRMGSTORE という 5 つの表領域は削除されません。これらのオブジェクトは Oracle Internet Directory に保持されます。
これらのオブジェクトを削除する必要がある場合は、B.7 項「OracleAS Metadata Repository オブジェクトの削除」を参照してください。
- スクリプトを使用する場合、データ・ファイルは削除されません。

エラー ORA-2000 およびエラー ORU-10027 が表示された場合

cleanMR スクリプトを実行中に次のようなエラーが表示された場合、

```
ORA-20000: ORU-10027: buffer overflow, limit of 2000 bytes
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 35
```

```
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 198
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 139
ORA-06512: at line 201
```

スクリプトを再度実行して、まだ削除されていないオブジェクトを削除する必要があります。

B.7 OracleAS Metadata Repository オブジェクトの削除

`repca_cleanOID.sql` スクリプトを実行する場合は、Oracle Internet Directory オブジェクトを削除する必要があるかどうかを再度確認してください。OracleAS Metadata Repository をロードする以前、データベースに Oracle Internet Directory オブジェクトが含まれていた場合は、必要とする Oracle Internet Directory でこれらのオブジェクトを今後使用しないことを再確認されるようお勧めします。

Oracle Internet Directory オブジェクトは次のとおりです。

- スキーマ: ODS
- 表領域: OLTS_ATTRSTORE
- 表領域: OLTS_BATTRSTORE
- 表領域: OLTS_CT_STORE
- 表領域: OLTS_DEFAULT
- 表領域: OLTS_SVRMGSTORE

次のようなスクリプトを実行できます (`ORACLE_HOME` は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant のインストール・ディレクトリを表します)。

```
C:¥> cd ORACLE_HOME¥repca¥clean
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @repca_cleanOID.sql
```

B.8 登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ

登録取消しの処理を、完了する前に取り消すと、データベースの登録または登録取消しができなくなります。その場合はまず、次の手順に従ってクリーン・アップを実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory のデータベース登録エントリを手動で削除します。詳細は、[H.8.3 項「手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す」](#)を参照してください。
2. SQL*Plus で次の文を実行して、データベース内の登録エントリを編集します。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_loading (
      component_id=>'MRC',
      component_name=>'Oracle Application Server Metadata Repository Version',
      schema_name=>'SYS' );
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_valid( component_id=>'MRC' );
```

登録取消しを取り消した場合に実行するデータベースのクリーン・アップ

デフォルトのポート番号

デフォルトでは、インストーラによってデフォルトのポート番号が各コンポーネントに割り当てられます。この付録では、これらデフォルトのポート番号をリストにまとめてあります。

デフォルト以外のポート番号を使用する場合は、`staticports.ini` というファイルを作成し、使用するポート番号をその中に指定する必要があります。詳細は、[1.4.7.5 項](#)を参照してください。

C.1 デフォルトのポート番号の割当て方

インストーラでは次の要領で、各コンポーネントにデフォルトのポート番号が割り当てられます。

1. インストーラではまず、目的となるデフォルトのポート番号が現在使用されているかどうかを確認されます。もし使用されていない場合は、そのポート番号が目的のコンポーネントに割り当てられます。
2. 目的となるデフォルトのポート番号がすでに **Oracle** 製品や実行中のアプリケーションにより使用されている場合は、まずポート番号全体の中で最も小さい番号の割当てを試みます。使用可能なポート番号が見つかるまで、昇順にポート番号の割当てを試みていきます。

C.2 デフォルトのポート番号

表 C-1 は、各コンポーネントとそれに対応するデフォルトのポート番号をまとめたものです。右端の「`staticports.ini` における表記名」列にあるのは、`staticports.ini` ファイル内で使用されている表記に基づいたコンポーネント名です。デフォルトのポート番号をオーバーライドする際は、このファイルを使用します。`staticports.ini` ファイルの詳細は、[1.4.7.5 項](#)を参照してください。

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	<code>staticports.ini</code> での表記名
Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN)			
Oracle Notification Server のリクエスト・ポート	6003	6003 ~ 6099	Oracle Notification Server Request port
Oracle Notification Server のローカル・ポート	6100	6100 ~ 6199	Oracle Notification Server Local port
Oracle Notification Server のリモート・ポート	6200	6200 ~ 6299	Oracle Notification Server Remote port
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)			
OC4J AJP	3301	3301 ~ 3400	<code>staticports.ini</code> では設定不可

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）（続き）

コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での表記名
OC4J RMI	3201	3201 ~ 3300	staticports.ini では設定不可
JMS	3701	3701 ~ 3800	staticports.ini では設定不可
IIOPI	3401	3401 ~ 3500	staticports.ini では設定不可
IIOPI1	3501	3501 ~ 3600	staticports.ini では設定不可
IIOPI2	3601	3601 ~ 3700	staticports.ini では設定不可
Oracle HTTP Server			
Oracle HTTP Server リスナー (OracleAS Web Cache 未構成)	中間層 : 80 インフラストラク チャ : 7777	7777 ~ 7877	Oracle HTTP Server Listen port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL)	中間層 : 443 インフラストラク チャ : 4443	4443 ~ 4543	Oracle HTTP Server Listen (SSL) port
Oracle HTTP Server リスナー (非 SSL、 OracleAS Web Cache 構成済)	中間層 : 80 インフラストラク チャ : 7777	7777 ~ 7877	Oracle HTTP Server port
Oracle HTTP Server リスナー (SSL、 OracleAS Web Cache 構成済)	中間層 : 443 インフラストラク チャ : 4443	4443 ~ 4543	Oracle HTTP Server SSL port
Java Object Cache	7000	7000 ~ 7099	Java Object Cache port
DCM Java Object Cache	7100	7100 ~ 7199	DCM Java Object Cache port
SOAP サーバー	9998	9998 ~ 9999	staticports.ini では設定不可
ポート・トンネリング	7501	7501 ~ 7599	staticports.ini では設定不可
Oracle HTTP Server 診断ポート	7200	7200 ~ 7299	Oracle HTTP Server Diagnostic port
OracleAS Portal			
OracleAS Portal	--	--	Oracle HTTP Server と同じポート を使用
OracleAS Single Sign-On			
Oracle Application Server Single Sign-On	--	--	Oracle HTTP Server と同じポート を使用
OracleAS Web Cache			
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー	80	7777 ~ 7877	Web Cache HTTP Listen port
OracleAS Web Cache - HTTP リスナー (SSL)	443	4443 ~ 4543	Web Cache HTTP Listen (SSL) port
OracleAS Web Cache の管理ポート	4000	4000 ~ 4300	Web Cache Administration port
OracleAS Web Cache の不正ポート	4001	4000 ~ 4300	Web Cache Invalidation port
OracleAS Web Cache の統計ポート	4002	4000 ~ 4300	Web Cache Statistics port
Oracle Enterprise Manager Application Server Control			
Application Server Control	1810	1810 ~ 1829	Application Server Control port

表 C-1 デフォルトのポート番号とポート番号の範囲（コンポーネント別）（続き）

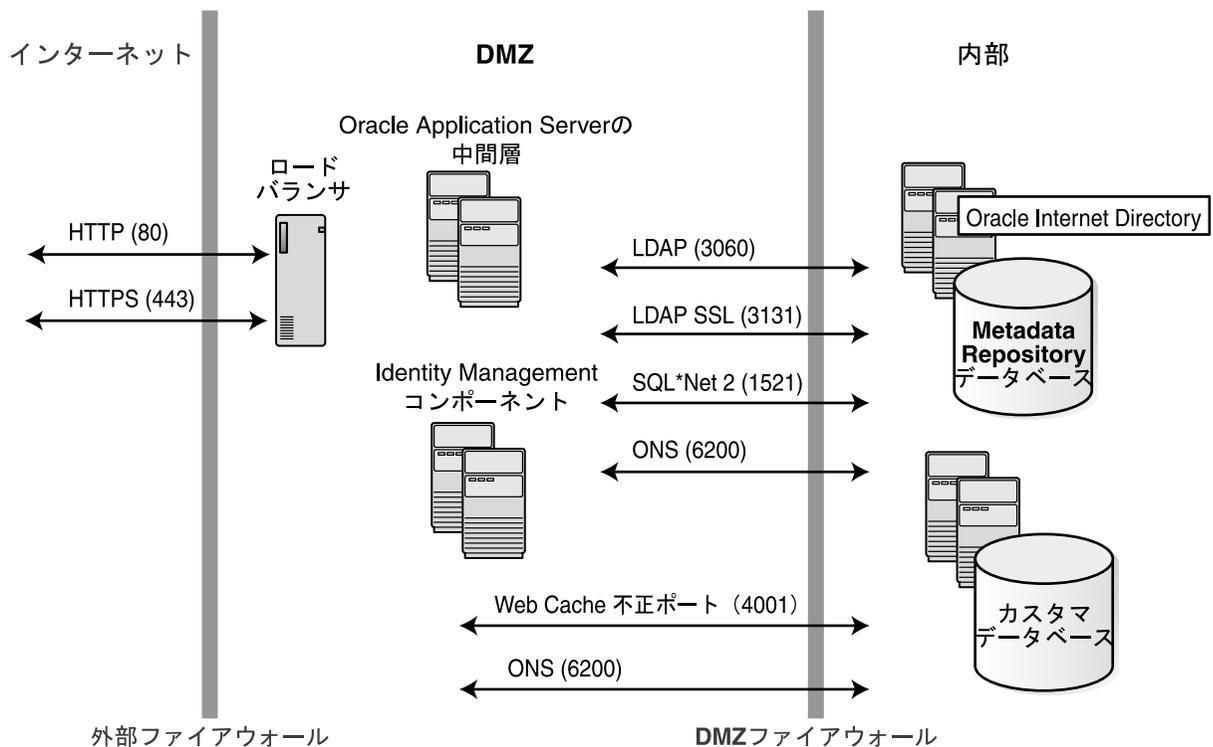
コンポーネント	デフォルトのポート	ポート番号の範囲	staticports.ini での表記名
Oracle 管理エージェント	1830	1830 ~ 1849	Oracle Management Agent port
Application Server Control - RMI	1850	1850 ~ 1869	Application Server Control RMI port
Application Server Control - SSL	1810	1810 ~ 1829	Application Server Control を SSL に対応するように構成する場合、このポート番号はインストール後に割り当てられます。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
Application Server Control コンソール HTTP ポート (orcl)	5500		staticports.ini では設定不可
Application Server Control エージェント・ポート (orcl)	1831		staticports.ini では設定不可
Log Loader	44000	44000 ~ 44099	Log Loader port
Oracle Internet Directory			
Oracle Internet Directory	389	3060 ~ 3129	Oracle Internet Directory port
Oracle Internet Directory (SSL)	636	3130 ~ 3199	Oracle Internet Directory (SSL) port

デフォルトのポート番号

開放が必要なファイアウォールのポート

ファイアウォールの内側にあるマシンに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする場合、[図 D-1](#) に示すとおり、インストール作業中および実行中は、ファイアウォールのポートを一部開放する必要があります。

図 D-1 ファイアウォールの内側にあるマシンに Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする際、開放することが必要なポート



これらのポートを開放する手順は次のとおりです。

1. インストールを開始する前に、次のようにして `staticports.ini` ファイルの各コンポーネントにポートを指定します。
 - LDAP: port 3060
 - LDAP SSL: port 3131
 - SQL*Net2: port 1521
 - Oracle Notification Server: port 6200

- Web Cache Invalidation: port 4001

注意： ここに示した各ポート番号は、それぞれのコンポーネントに対するデフォルト・ポートを表します。実際の環境では、これらとは別のポートを使用することも可能です。

2. 拡張インストールを実行し、ポート構成オプション画面で `staticports.ini` ファイルの絶対パスを指定します。

ポート構成オプション画面の詳細は、[5.5 項](#)を参照してください。

注意： カスタム・ポートを指定するには、拡張インストールを実行する必要があります。基本インストールでは、ポートをカスタマイズすることはできません。

OracleAS Metadata Repository スキーマ

OracleAS Metadata Repository は Oracle データベースの 1 つで、Oracle Application Server Standard Edition One をサポートするための追加スキーマがあらかじめ用意されています。この付録では、これらのスキーマについて説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- [OracleAS Metadata Repository スキーマの説明](#)
- [OracleAS Metadata Repository のスキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル](#)

E.1 OracleAS Metadata Repository スキーマの説明

この項では、OracleAS Metadata Repository スキーマを列挙し、それらの内容について説明します。

スキーマは、次の 3 つのカテゴリに分類されます。

- [Oracle Identity Management スキーマ](#)
このカテゴリに属するスキーマは、OracleAS Single Sign-On や Oracle Internet Directory などの Oracle Identity Management コンポーネントで使用されます。
- [製品メタデータ・スキーマ](#)
このカテゴリに属するスキーマは、OracleAS Portal などの中間層アプリケーション・コンポーネントで使用されます。
- [管理スキーマ](#)
このスキーマは Distributed Configuration Management (DCM) で使用される単一のスキーマです。

また、INTERNET_APPSERVER_REGISTRY というスキーマも使用されます。これは、前述のどのカテゴリにも属さない付加的なスキーマです。このスキーマには、OracleAS Metadata Repository スキーマのリリース番号が格納されています。

E.1.1 Oracle Identity Management スキーマ

表 E-1 は、Oracle Identity Management の各コンポーネントで使用されるスキーマを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

表 E-1 Identity Management スキーマ

コンポーネント	スキーマ	説明
Oracle Internet Directory	ODS	内部使用
OracleAS Certificate Authority	OCA	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	内部使用

表 E-1 Identity Management スキーマ (続き)

コンポーネント	スキーマ	説明
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	内部使用
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	内部使用

E.1.2 製品メタデータ・スキーマ

表 E-2 は、中間層アプリケーションの各コンポーネントで使用されるスキーマを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

表 E-2 製品メタデータ・スキーマ

コンポーネント	スキーマ	説明
Oracle Ultra Search	WK_TEST	Oracle Ultra Search のデフォルトのインスタンス・スキーマ — デフォルトの Oracle Ultra Search インスタンスのドキュメント情報およびドキュメント索引が格納される
Oracle Ultra Search	WKPROXY	Oracle Ultra Search プロキシ・データベース・ユーザー — データは一切格納されない
Oracle Ultra Search	WKSYS	Oracle Ultra Search メタデータ・リポジトリ — データソース、クローラ構成、クローラのスケジュール、トレース・ログ、属性の割当て、ユーザー権限など、Oracle Ultra Search インスタンスに関するメタ情報が格納される
OracleAS Web Clipping	WCRSYS_TS	Wireless がサポートする Web クリップング・リポジトリ — リッピング定義、ユーザー・カスタマイズ・データおよびそれらにアクセスするための PL/SQL パッケージが格納される
OracleAS Wireless	WIRELESS	ユーザー・コンテンツ (フォルダ、サービス、リンク、通知、プリセット)、ユーザー・カスタマイズ・データ、グループ、ロール、一時ユーザー情報、スタイルシート、論理デバイス定義、(シリアライズ化された) Java 変換プログラム、アダプタ、ロケーション・データ、構成データ、プロセスの実行時状態およびアプリケーション・メトリックが格納される
Oracle Workflow	OWF_MGR	設計時および実行時の各ワークフロー表、キュー、PL/SQL コード、ディレクトリ・サービス・データベースのビューおよびローカル表、ワークフロー・プロセスおよびビジネス・イベントに関するメタデータが格納される
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	Discoverer Portlet Provider のメタデータ、ユーザー・ポートレットのポートレット定義、およびスケジュールされた Discoverer の問合せを実行することにより取得される キャッシュ・データが格納される。RESOURCE 権限と CONNECT 権限がある
OracleAS Portal	PORTAL	Portal データベースのオブジェクトおよびコードが格納される。またこのスキーマは、プロキシ・ユーザー・アカウントを表します。mod_plsql はこのアカウントを使用して、対応する DAD で指定された資格証明に基づいたデータベースへの接続を行います。
OracleAS Portal	PORTAL_APP	外部 JSP アプリケーションの認証に使用する
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	デモ・コード

表 E-2 製品メタデータ・スキーマ (続き)

コンポーネント	スキーマ	説明
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	利用頻度の低いユーザーはすべて、このスキーマにデフォルトで割り当てられる。Web を介してパブリックにアクセスできるプロシージャについては、その実行権限が PUBLIC に対しても付与されるため、このスキーマからでもアクセスが可能です。
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	ビジネス・エンティティ、ビジネス・サービス、バインディング・テンプレート、tModel、パブリッシャ・アサーションなど様々な UDDI エンティティ、North American Industry Classification System (NAICS)、Universal Standard Products and Services Codes (UNSPSC)、ISO 3166 Geographic Taxonomy (ISO 3166) といった様々な分類構造、UDDI レプリケーション/サブスクリプション関連の内部表、および管理に関するビューや表などが格納される。
N/A	DSGATEWAY ¹	N/A

¹ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、DSGATEWAY スキーマは使用しません。このスキーマは、下位互換性を確保するためのものです。

E.1.3 管理スキーマ

表 E-3 は、Distributed Configuration Management (DCM) で使用されるスキーマをまとめたものです。

表 E-3 管理スキーマ

コンポーネント	スキーマ	説明
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	OC4J および Oracle HTTP Server の各インスタンス、アプリケーション・サーバー・インスタンス、OracleAS クラスタおよびファームに関する構成情報が格納される
Application Server Control	OEM_REPOSITORY	Database Control のリポジトリ

E.2 OracleAS Metadata Repository のスキーマ、表領域およびデフォルト・データファイル

表 E-4 は、各 OracleAS Metadata Repository スキーマで使用する表領域およびデフォルト・データファイルを、コンポーネント名のアルファベット順にまとめたものです。

表 E-4 Metadata Repository の表領域およびデフォルト・データファイル

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データファイル
Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
Metadata Repository Version	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcats1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefault1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_SVRMGSTORE	svrmg1_oid.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	SYSAUX	sysaux01.dbf

表 E-4 Metadata Repository の表領域およびデフォルト・データファイル (続き)

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データファイル
Oracle Ultra Search	WKPROXY	SYSAUX	sysaux01.dbf
Oracle Ultra Search	WKSYS	SYSAUX	sysaux01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discoplmt1.dbf
OracleAS Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discoplctc1.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_RT	b2b_rt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_DT	b2b_dt.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_IDX	b2b_idx.dbf
OracleAS PartnerConnect	B2B	B2B_LOB	b2b_lob.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOC	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS UDDI Registry	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Syndication Server	DSGATEWAY ¹	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf

¹ Oracle Application Server 10g リリース 2 (10.1.2) では、DSGATEWAY スキーマは使用しません。このスキーマは、下位互換性を確保するためのものです。

Java Access Bridge のインストール

この付録では、Java Access Bridge をインストールする方法について説明します。Java Access Bridge により、Oracle コンポーネントでスクリーン・リーダーを使用できるようになります。

この付録の内容は次のとおりです。

- 概要
- [JRE 1.4.2 用のセットアップ](#)
- [インストールされている Oracle コンポーネント用のセットアップ](#)

F.1 概要

Java Access Bridge を使用すると、たとえば Windows プラットフォーム上で実行中の Java アプリケーションを読み上げる JAWS スクリーン・リーダーなど、様々な支援テクノロジーを活用できます。Oracle Universal Installer や Oracle Enterprise Manager Application Server Control などの Java ベースのインタフェースは、支援テクノロジーを使用して読上げ可能です。

Oracle Universal Installer でインストール作業を行う際に必要となる Java Runtime Environment (JRE) 1.4.2 は、Oracle Application Server Standard Edition One のインストール・メディアに収められています。JRE があれば、インストール作業中も Java Access Bridge が使用できます。Oracle コンポーネントをインストールした後で行う Java Access Bridge のインストールおよび構成の方法は、[F.3 項「インストールされている Oracle コンポーネント用のセットアップ」](#) F-1 ページを参照してください。

F.2 JRE 1.4.2 用のセットアップ

JRE 1.4.2 と連動するように Java Access Bridge をセットアップするには、Oracle のインストール・メディアから次のバッチ・ファイルを実行します。

```
DRIVE_LETTER:¥install¥access_setup.bat
```

バッチ・ファイルの実行が完了したら、支援テクノロジー・プログラムを再起動します。

F.3 インストールされている Oracle コンポーネント用のセットアップ

この項では、Oracle コンポーネントをインストールした後で行う Java Access Bridge for Windows のインストールおよび構成の方法について説明します。この項では、次の項目について説明します。

- [Java Access Bridge のインストール](#)
- [Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成](#)

F.3.1 Java Access Bridge のインストール

Java Access Bridge のインストールは、次の手順に従って行います。

1. Oracle のインストール・メディアを開き、AccessBridge ディレクトリに移動します。
2. accessbridge-1_0_4.zip ファイルを選択し、Access Bridge をインストールするシステム上でそのファイルを解凍します。たとえば、次のようになります。

```
C:¥AccessBridge-1.0.4
```

3. 表 F-1 に示す Java Access Bridge ファイルを、Oracle コンポーネントで使用される JRE 1.4.2 のインストール・ディレクトリにコピーします。Oracle コンポーネントで使用される JRE は、デフォルトでは次のディレクトリにインストールされます。

```
ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2
```

表 F-1 は、ハード・ドライブ上の Java Access Bridge ディレクトリから、Oracle コンポーネントで使用される JRE のインストール・ディレクトリへコピーするファイルをまとめたものです。

表 F-1 JRE ディレクトリへコピーするファイル

コピーするファイル	コピー先ディレクトリ
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥jaccess-1_4.jar	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥access-bridge.jar	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JavaAccessBridge.dll	windows_directory¥system32
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥WindowsAccessBridge.dll	windows_directory¥system32
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥JAWTAccessBridge.dll	windows_directory¥system32
AccessBridge-1_0_4¥installer¥installerFiles¥accessibility.properties	ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib

4. jaccess-1_4.jar (ORACLE_BASE¥ORACLE_HOME¥jre¥1.4.2¥lib¥ext に格納されている) のファイル名を jaccess.jar に変更します。
5. インストール完了後、Java Access Bridge のドキュメントを参照する場合は、次のディレクトリにアクセスしてください。

```
C:¥AccessBridge-1.0.4¥doc
```

F.3.2 Java Access Bridge を使用するための Oracle コンポーネントの構成

インストールが完了したら、Java Access Bridge が使用できるように Oracle コンポーネントの構成を行うことができます。それには、インストールした Java Access Bridge ファイルのパスをシステム変数に設定する必要があります。

F.3.2.1 Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 での構成方法

Windows 2000、Windows XP または Windows Server 2003 上で、Access Bridge を使用できるように Oracle コンポーネントの構成を行う手順は次のとおりです。

1. 「スタート」→「設定」→「コントロールパネル」→「システム」を選択して、「システムのプロパティ」コントロール・パネルを表示します。
2. 「詳細設定」タブを選択します。
3. 「環境変数」ボタンをクリックします。

4. 「システム環境変数」リストの下にある「**新規**」ボタンをクリックします。「新しいシステム変数」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「**変数名**」フィールドに、ORACLE_OEM_CLASSPATH と入力します。
6. 「**変数値**」フィールドに、jaccess.jar および access-bridge.jar のフルパスを入力します。

2つのパスはセミコロンで区切ります。引用符やスペースは使用しないでください。たとえば、**JRE 1.4.2** がデフォルトのディレクトリにインストールされている場合は、次のように設定します。

```
C:\oracle\product\10.1.0\Db_1\jre\1.4.2\lib\ext\jaccess.jar;C:\oracle\product\10.1.0\Db_1\jre\1.4.2\lib\ext\access-bridge.jar
```

7. 「**OK**」をクリックします。

インストールされている Oracle コンポーネント用のセットアップ

Configuration Assistant

この付録では、Configuration Assistant およびそれぞれのログ・ファイルの格納場所がリストにまとめられています。

この付録の内容は次のとおりです。

- [Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant](#)
- [Configuration Assistant](#) に関するトラブルシューティング

G.1 Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant

表 G-1 は、Oracle Application Server Standard Edition One Configuration Assistant をアルファベット順にまとめたリストです。インストールのタイプおよび選択した構成オプションに応じて、各インストールで使用される Configuration Assistant は異なります。

表 G-1 Oracle Application Server Configuration Assistant

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
ADF Configuration Assistant	Oracle Application Development Framework ランタイム・ライブラリを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に組み込みます。 この Configuration Assistant には、 <code>ORACLE_HOME¥jlib</code> にある <code>emConfigInstall.jar</code> ファイルが必要です。	<code>ORACLE_HOME¥oraInventory¥logs¥installActionstimestamp.log</code>
Application Server Control Configuration Assistant	Oracle Management Agent および Application Server Control を起動し、Oracle Enterprise Manager Application Server Control を介してアプリケーションをデプロイします。	<code>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log</code>
Database Configuration Assistant	OracleAS Infrastructure にあわせて、OracleAS Metadata Repository の構成を行います。	<code>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log</code>
Database Migration Assistant	9.0.2 のインフラストラクチャ・データベースを 10g リリース 2 (10.1.2) のインフラストラクチャ・データベースに移植します。 この Migration Assistant を実行する場合は、その前に必ずデータベースが起動され、実行されていることを確認してください。	<code>ORACLE_HOME¥assistants¥dbma¥logs</code>
Database-managed OracleAS Cluster Assistant	選択したデータベースに対してクラスタ構成を有効にします。	<code>ORACLE_HOME¥config¥infratool_dcm_repository.log</code> <code>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥infratool_dcm_repository.log</code>

表 G-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
DCM Repository Backup Assistant	DCM リポジトリのバック・アップが可能になります。	<code>ORACLE_HOME%\dcm\logs</code>
Delegated Administration Service Configuration Assistant	Oracle Internet Directory に Oracle Delegated Administration Services の URL を設定し、必要なアクセス制御権限を DAS エンティティに追加します。 この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Infrastructure Instance Configuration Assistant が正しく実行されたことを確認してください。	<code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\dasca.log</code>
Directory Integration Platform Configuration Assistant	Oracle Internet Directory で構成された場合の Directory Integration Server の登録および起動を行います。 この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Oracle Internet Directory の構成が正しく行われていることを確認してください。	<code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\dipca.log</code>
File-Based Farm Repository Configuration Assistant	ファイルベースのリポジトリを Oracle Application Server Standard Edition One コンポーネント用に構成します。	<code>ORACLE_HOME%\config\infratool_filebased_repository.log</code> <code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\infratool_filebased_repository.log</code>
HTTP Server Configuration Assistant	Oracle HTTP Server の構成を行ってそれを Oracle Enterprise Manager Application Server Control に登録し、 <code>ORACLE_HOME%\sysman\emd</code> にある <code>targets.xml</code> ファイルにエントリを追加します。	<code>ORACLE_HOME%\Apache\Apache\logs</code> <code>ORACLE_HOME%\Apache\Apache\httpd.log</code> <code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\configtoolstimestamp.log</code>
Infrastructure Database Registration Assistant	OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録します。	<code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\infratool_ldaporacfg.log</code>
Infrastructure Instance Configuration Assistant	<code>ORACLE_HOME%\config</code> にある <code>ias.properties</code> ファイルを更新してインスタンスを Oracle Internet Directory に登録し、Oracle Internet Directory の資格証明に基づいて <code>ORACLE_HOME%\network\admin</code> ディレクトリに <code>ldap.ora</code> ファイルを作成します。 この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に <code>ORACLE_HOME%\lib</code> ディレクトリが環境変数 <code>PATH</code> に設定されていることを確認してください。	<code>ORACLE_HOME%\config\infratool_instance_jazn.log</code> <code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\infratool_instance_jazn.log</code>
Infrastructure mod_osso Configuration Assistant	<code>mod_osso</code> を登録して Oracle HTTP Server に接続し、ユーザーの認証を行えるように Oracle Application Server Single Sign-On と統合します。 <code>mod_osso</code> を登録することにより、OracleAS Infrastructure とともにインストールした Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server Single Sign-On のパートナー・アプリケーションとして使用できるようになります。Oracle HTTP Server がインストールされた環境では、そこで実行されるアプリケーションの URL が <code>mod_osso</code> に登録、保護されます。登録された URL が要求されると、 <code>mod_osso</code> ではアクセス許可の前に Oracle Application Server Single Sign-On と連携してそのユーザーの認証が行われます。	<code>ORACLE_HOME%\config\infratool\ol_mod_osso.log</code> <code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\infratool_mod_osso.log</code>

表 G-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Infrastructure Schema Configuration Assistant	<p>Infrastructure スキーマを Oracle Internet Directory に登録します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、事前に次の事柄を確認してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 環境変数 PATH に ORACLE_HOME¥lib ディレクトリが設定されていること ■ Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant が正常に実行されたこと 	<p>ORACLE_HOME¥config¥schemaload.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥schemaload.log</p>
Infrastructure Upgrade Instance Configuration Assistant	<p>SSO スキーマの ACL エントリを削除します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に ORACLE_HOME¥lib ディレクトリが環境変数 PATH に設定されていることを確認してください。</p>	ORACLE_HOME¥config¥infratool_infrapgrade.log
Internet Directory Configuration Assistant	<p>Oracle Internet Directory を起動し、LDAP スキーマをロードして、Identity Management レalmを設定します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前にデータベースが正しく作成されていること、リスナーが起動され実行中であること、および tnsnames.ora ファイルが構成済であることを確認してください。</p>	ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥oidca.log
Java Security Configuration Assistant	デフォルトのパスワードのかわりに、JAAS セキュリティ用のパスワードを設定します。	ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥jaznca.log
OC4J Configuration Assistant	<p>OC4J を Application Server Control と統合します。統合は次の手順に従って行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ targets.xml ファイルにエントリを追加します。 ■ iasadmin.properties ファイルにエントリを追加します。 <p>この Configuration Assistant には、deploy.ini ファイルが必要になります。</p>	ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log
OC4J Instance Configuration Assistant	デプロイされた Oracle Application Server アプリケーション用に OC4J インスタンスを構成します。	ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log
OPMN Configuration Assistant	OPMN および OPMN が管理するプロセスを起動します。	<p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥ipm.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥ons.log</p>
OPMN Configuration Assistant - start DAS instance	OPMN を介して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを起動します。	<p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥ipm.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥ons.log</p>
OPMN Configuration Assistant - start Oracle HTTP Server	OPMN を介して Oracle HTTP Server を起動します。	<p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥configtoolstimestamp.log</p> <p>ORACLE_HOME¥cfgtoollogs¥HTTP_Server~1</p>

表 G-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
OracleAS File-Based Farm Repository Configuration Assistant	ファイルベースのファーム・リポジトリの構成を行います。	ORACLE_HOME%\config\infratool_filebased_repository.log ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\infratool_filebased_repository.log
OracleAS Instance Configuration Assistant	インスタンスのエントリを ORACLE_HOME%\config にある target2add.xml ファイルに追加します。	ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\configtoolstimestamp.log
OracleAS Randomize Password Configuration Assistant	全スキーマのデフォルトのパスワードを変更します。	なし
Oracle mod_osso Configuration Assistant	mod_osso を、インストール時に登録して Oracle HTTP Server に接続し、ユーザーの認証を行えるように Oracle Application Server Single Sign-On と統合します。mod_osso を登録することにより、Oracle Application Server 中間層とともにインストールした Oracle HTTP Server を、Oracle Application Server Single Sign-On のパートナ・アプリケーションとして使用できるようになります。 Oracle HTTP Server がインストールされた環境では、そこで実行されるアプリケーションの URL が mod_osso に登録、保護されます。登録された URL が要求されると、mod_osso ではアクセス許可の前に Oracle Application Server Single Sign-On と連携してそのユーザーの認証が行われます。	ORACLE_HOME%\config\j2ee_mod_osso.log ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\j2ee_mod_osso.log
Oracle Net Configuration Assistant	LDAP ネーミングをデフォルトで使用できるように データベース・リスナーおよび中間層の構成を行います。	ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\installActionstimestamp.log
Portal Configuration Assistant	OracleAS Portal の構成を行います。 この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず OracleAS Infrastructure が起動され実行中であることを確認してください。	ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\install.log
Register DCM Plug-Ins With Oracle Enterprise Manager Configuration Assistant	DCM プラグインを Oracle Enterprise Manager に登録します。	ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\configtoolstimestamp.log ORACLE_HOME%\dcm\logs\dcctl_logs
Single Sign-On Configuration Assistant	Oracle Application Server Single Sign-On の構成を行います。 この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に必ず Oracle Internet Directory、OracleAS Metadata Repository および Repository API が構成済みであることを確認してください。	ORACLE_HOME%\sso\log\ssoca.log ORACLE_HOME%\sso\log\ssoreg.log

表 G-1 Oracle Application Server Configuration Assistant (続き)

Configuration Assistant	説明	ログ・ファイルの場所
Ultra Search Configuration Assistant	<p>次の処理を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle Application Server 中間層における Oracle Ultra Search のデプロイおよび構成 ■ Oracle Ultra Search バックエンド・アプリケーション・エンティティおよび Oracle Ultra Search 管理権限グループの作成 ■ Oracle Ultra Search 中間層のアプリケーション・エンティティの作成 ■ OracleAS Metadata Repository 内の Oracle Ultra Search メタデータの更新およびクリーン・アップ 	<code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\ultrasearch_config.log</code>
Unlock Metadata Repository Schemas Configuration Assistant	OracleAS Metadata Repository にあるスキーマのロックを解除します。この Configuration Assistant は、Identity Management のインストール時に実行されません。	<code>ORACLE_HOME%\config\infratool_unlock_schema.log</code>
Use Infrastructure Configuration Assistant	<p><code>ORACLE_HOME%\config</code> にある <code>ias.properties</code> ファイルを更新してインスタンスを Oracle Internet Directory に登録し、Oracle Internet Directory の資格証明に基づいて <code>ORACLE_HOME%\network\admin</code> ディレクトリに <code>ldap.ora</code> ファイルを作成します。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に <code>ORACLE_HOME%\lib</code> ディレクトリおよび <code>ORACLE_HOME</code> ディレクトリが環境変数 <code>PATH</code> に設定されていることを確認してください。</p>	<p><code>ORACLE_HOME%\config\j2ee_instance_jazn.log</code></p> <p><code>ORACLE_HOME%\cfgtoollogs\j2ee_instance_jazn.log</code></p>
Use Metadata Repository Configuration Assistant	<p>Oracle Application Server 中間層に対応するように OracleAS Metadata Repository の構成を行います。</p> <p>この Configuration Assistant を実行する場合は、その前に <code>ORACLE_HOME%\lib</code> ディレクトリが環境変数 <code>PATH</code> に設定されていることを確認してください。</p>	<code>ORACLE_HOME%\config\infratool_midtier_upgrade.log</code>

G.2 Configuration Assistant に関するトラブルシューティング

Configuration Assistant についてなんらかの問題が発生した場合は、[H.6 項](#)のトラブルシューティング情報を参照してください。

トラブルシューティング

この付録では、Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする際に発生する可能性がある一般的な問題とその解決策について説明します。この付録の内容は次のとおりです。

- ログ・ファイル
- トラブルシューティング全般についてのヒント
- インストールに関する問題とその解決策
- 削除に関する問題とその解決策
- バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策
- OracleAS Portal に関する問題とその解決策
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant に関する問題とその解決策
- データベースに関する問題とその解決策
- その他の情報が必要な場合

H.1 ログ・ファイル

インストーラにより記録されるログ・ファイルは次のとおりです。

- `inventory_location¥logs¥installActionstimestamp.log`
- `inventory_location¥logs¥oraInstalltimestamp.err`
- `inventory_location¥logs¥oraInstalltimestamp.out`

`inventory_location` は、デフォルトでは次の場所に存在します。

`C:¥Program Files¥Oracle¥Inventory`

H.2 トラブルシューティング全般についてのヒント

次に示すのは、インストール時にエラーが発生した場合の一般的な対処方法です。

- 最新情報を『Oracle Application Server Standard Edition One リリース・ノート』で確認します。プラットフォーム別のドキュメントとあわせてリリース・ノートも提供されています。最新のリリース・ノートは、Oracle Technology Network のサイト (<http://www.oracle.com/technology/documentation>) から入手できます。
- ご使用のコンピュータが、第 2 章「システムおよびインストール要件」に示した要件を満たしているかどうかを確認します。
- いずれかのインストール画面で誤った情報を入力した場合は、「戻る」を何度かクリックしてその画面に戻ります。

- **Configuration Assistant** が失敗した場合は、そのログ・ファイルを確認します。[付録 G](#) のリストに、**Configuration Assistant** およびそれぞれのログ・ファイルの格納場所がまとめてあります。一部の **Configuration Assistant** について、ログ・ファイルが `ORACLE_HOME\cfgtoollogs` ディレクトリ内に見当たらない場合は、インストーラを終了してください。インストーラを終了すると、このディレクトリにログ・ファイルがコピーされます。
- ファイルのコピーまたはリンク中にエラーが発生した場合は、次のように対処してください。
 1. エラーをメモし、インストール・ログ・ファイルを確認します。
 2. [付録 A](#) の手順に従って、不完全なインストール内容を削除します。
 3. エラーの原因となった問題を修正します。
 4. 再度インストールを開始します。

H.3 インストールに関する問題とその解決策

この項では、インストールに関連してよく発生する問題とその解決策について説明します。

- ログ・ファイルの場所
- 「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される
- インストーラが表示されない
- 失敗したインストールをクリーン・アップできない
- `cn=orcladmin` アカウントのパスワードを失念した
- `cn=orcladmin` アカウントがロックされた
- ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない
- ネットワークに接続した状態および接続していない状態で **Oracle Application Server Standard Edition One** を実行できない
- **Configuration Assistant** の失敗（全般）
- **OracleAS Randomize Password Configuration Assistant** が失敗した
- **Database Configuration Assistant (DBCA)** が失敗した
- **Database Configuration Assistant (DBCA)** の無視できるエラー・メッセージ
- **Application Server Control Configuration Assistant** が失敗した
- **OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server** が失敗した
- **OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance** が失敗した

H.3.1 ログ・ファイルの場所

ログ・ファイルには、大きく分けて 2 つの種類があります。

- インストーラにより記録されるログ・ファイル。
 - `inventory_location\logs\installActiontimestamp.log`
 - `inventory_location\logs\oraInstalltimestamp.err`
 - `inventory_location\logs\oraInstalltimestamp.out``inventory_location` は、デフォルトでは次の場所に存在します。
`C:\Program Files\Oracle\Inventory`

- Configuration Assistant により記録される `ORACLE_HOME\cfgtoollogs` ディレクトリ内のログ・ファイル。

ただし、Configuration Assistant により作成されたログ・ファイルにアクセスする場合は、その前にインストーラを終了する必要があります。インストーラを使用している間は、これらのログ・ファイルにアクセスすることはできません。

H.3.2 「空でないディレクトリにインストールしようとしている」という内容のメッセージが表示される

問題

空でないディレクトリにインストールしようとしているという内容のメッセージがインストーラに表示される。

解決策

インストール開始後「ようこそ」画面より先の画面に進むと (5.2 項を参照)、インストールが完了しなかった場合でも、指定した Oracle ホーム・ディレクトリは作成されています。同じディレクトリにあらためてインストールしようとすると、そのディレクトリ内にはインストーラによって作成されたファイルが存在するため、ディレクトリが空ではないという内容の警告が表示されます。

対処方法

1. 警告ダイアログ・ボックスで「いいえ」をクリックし、「ようこそ」画面に戻ります。
2. Oracle ホーム・ディレクトリをあらたに指定するか、既存の Oracle ホームを削除します。削除に関する詳細は、付録 A を参照してください。

H.3.3 インストーラが表示されない

問題

`setup.exe` を実行してもインストーラが表示されない。

解決策

Oracle Database 10g がすでに実行されているコンピュータ上に Oracle Application Server Standard Edition One をインストールする場合は、インストーラを起動する際、次のオプションを指定する必要があります。

```
E:\> setup.exe -J-Dsun.java2d.noddraw=true
```

H.3.4 失敗したインストールをクリーン・アップできない

Oracle Application Server Standard Edition One のインストールが正常に完了しなかった場合、再度インストールするには、失敗したインストールをいったん削除しておく必要があります。削除に関する手順および詳細は、付録 A を参照してください。

H.3.5 cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した

問題

cn=orcladmin アカウントのパスワードを失念した。

解決策

データベースのパスワードは再設定できます。ルート DSE の属性名は `orclsupassword` です。

ただし接続に何度か失敗すると `cn=orcladmin` アカウントはロックされます。この場合は、アカウントのロックを解除する必要があります。アカウントのロックを解除する手順については、[H.3.6 項](#)を参照してください。

H.3.6 `cn=orcladmin` アカウントがロックされた

問題

接続に 10 回失敗すると `cn=orcladmin` アカウントはロックされる。この管理は、パスワード・ポリシーに基づいて行われる。10 回というのはデフォルトの値。

解決策

`cn=orcladmin` のパスワードを知っている場合は、次のコマンドを実行することによりアカウントのロックを解除できます。

```
C:\> ORACLE_HOME\bin\oidpasswd connect=dbsid unlock_su_acct=true
```

ただし `dbsid` は、データベースの SID を表します。例を示します。

```
C:\> ORACLE_HOME\bin\oidpasswd connect=asdb unlock_su_acct=true
OID DB user password: enter_ODS_password
OID superuser account unlocked successfully.
```

コマンドを実行すると、ODS スキーマのパスワードを入力するよう求められます。ODS パスワードは、デフォルトでは `cn=orcladmin` アカウントおよび `ias_admin` アカウントのパスワードと同じです。このパスワードはインストール作業時に指定します。

パスワード・ポリシーを変更する場合は、『*Oracle Internet Directory 管理者ガイド*』を参照してください。

H.3.7 ユーザー・インタフェースが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない

問題

メッセージが目的の言語で表示されない、もしくは正しく表示されない。

解決策

英語以外の言語を表示する場合は、必要な言語をすべて、インストール時に追加してください。インストール時に言語を追加するには、言語の選択画面で目的の言語を選択します。詳細は、[5.4 項「言語の選択」](#)または [1.4.6 項「言語およびロケールの設定」](#)を参照してください。

H.3.8 ネットワークに接続した状態および接続していない状態で Oracle Application Server Standard Edition One を実行できない

問題

ネットワークに接続されたコンピュータにインストールした Oracle Application Server Standard Edition One を、ネットワークに接続されていない状態で実行したい。

解決策

ネットワークに接続された状態だけでなく接続されていない状態でも Oracle Application Server Standard Edition One を実行するには、ループバック・アダプタをインストールする必要があります。静的 IP アドレスを持つコンピュータでは、ネットワークへの接続を切断すると、イーサネット・アダプタが停止し (`ipconfig` によりケーブルが未接続であると表示される)、`ipconfig` による IP アドレスの解決ができなくなります。

ループバック・アダプタの詳細は、[2.6.6 項「ループバック・アダプタのインストール」](#)を参照してください。

H.3.9 Configuration Assistant の失敗（全般）

この項で説明するのは、Configuration Assistant の失敗に関するトラブルシューティング全般についてのヒントです。Configuration Assistant の失敗に関する個々のヒントは、次項以降を参照してください。また、付録 G「Configuration Assistant」も参照してください。

問題

Configuration Assistant の実行に失敗した。

解決策

Configuration Assistant の実行に失敗する原因は様々です。次のような点を確認します。

- OracleAS Infrastructure に関連付けられているリスナー、データベースおよび Oracle Internet Directory が起動され実行中であることを確認します。そうでない場合はそれらを起動し、「再試行」ボタンをクリックして、失敗した Configuration Assistant を再度実行します。
- 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを確認し、問題を特定します。ログ・ファイルは `ORACLE_HOME%\cfgtoollogs` ディレクトリにあります。
ログ・ファイルに記録されていた問題を解決し、「再試行」ボタンをクリックして、失敗した Configuration Assistant を再度実行します。

H.3.10 OracleAS Randomize Password Configuration Assistant が失敗した

OracleASRandomize Password Configuration Assistant を実行する場合は、その前に次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Directory Manager を起動します。
2. Oracle Internet Directory ホスト名、ポート、ユーザー名およびパスワードを入力します。
3. 「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Infrastructure Databases」の順に選択します。
4. `orclreferencename=your_globaldb_name` を選択します。
5. `your_globaldb_name` ツリーの中にあるスキーマごとに、`orclreferencename` エントリが含まれます。`orclreferencename` エントリに対して、次の操作を行います。
 - `orclpassword` 属性の値をスキーマ名に変更します。たとえば、スキーマ名が `HTTP_Server` であれば、`orclpassword` 属性の値を `HTTP_Server` に変更します。
 - `orclflexattribute1` の値を `false` に変更します。

「適用」をクリックします。

ODS と OEM_REPOSITORY を除くすべてのスキーマに対して、これらの操作を行います。

6. SQL*Plus を使用して、OracleAS Randomize Password Configuration Assistant の失敗があったデータベースにログインし、次のスクリプトを実行します。

```
C:¥> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @ORACLE_HOME%\assistants\%dbca%\admin\%unlock.sql
```

`password` には、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

7. OracleAS Randomize Password Configuration Assistant を再実行します。

H.3.11 Database Configuration Assistant (DBCA) が失敗した

問題

DBCA が失敗し、次のようなエラーが発生した。

```
Open wallet failedoracle.net.config.ServiceAliasException
at oracle.net.config.ServiceAlias.<init>(Compiled Code)
```

```
at oracle.net.config.Service.<init>(Compiled Code)
at oracle.net.config.DatabaseService.<init>(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.util.NetworkUtils.registerDBWithDirSrvc(NetworkUtils.java:1137)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.DirServiceStep.executePreReqImpl(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PrerequisiteStep.executeImpl(PrerequisiteStep.java:149)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.PostDBCcreationStep.executeImpl(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Step.execute(Compiled Code)
at oracle.sysman.assistants.dbca.backend.Host$ModeRunner.run(Compiled Code)
at java.lang.Thread.run(Thread.java:466)
ERROR :oracle.sysman.assistants.util.NetAPIException
```

解決策

このエラーは、環境変数 `TNS_ADMIN` が設定された場合に発生します。環境変数 `TNS_ADMIN` は設定しないでください (2.4.4 項「環境変数 `TNS_ADMIN`」を参照)。設定されている場合は、設定を解除し、「Configuration Assistant」画面の「再試行」ボタンをクリックして DBCA を再度実行します。

H.3.12 Database Configuration Assistant (DBCA) の無視できるエラー・メッセージ

ログ・ファイル内に次の「error copying OC4J config files」メッセージが表示されることがありますが、これは特に問題のあるメッセージではないため無視してもかまいません。

```
Nov 25, 2004 9:07:30 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateReposVars
INFO: Updating file
/AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/emdrep/config/repository.variables ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig addPortEntries
INFO: Updating file /AS1012Installs/AS1012Infra/install/portlist.ini ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmdProps
INFO: Updating file /AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/config/emd.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: targets.xml file is updated successfully
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateEmomsProps
INFO: Updating file
/AS1012Installs/AS1012Infra/sysman/config/emoms.properties ...
Nov 25, 2004 9:07:35 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig updateConfigFiles
INFO: emoms.properties file is updated successfully
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig copyOC4JDir
WARNING: Error copying OC4J config files from
/AS1012Installs/AS1012Infra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole to
/AS1012Installs/AS1012Infra/oc4j/j2ee/OC4J_DBConsole_hostname.domain_portal.db
Nov 25, 2004 9:07:40 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig startOMS
INFO: Starting the DBConsole ...
Nov 25, 2004 9:08:26 PM oracle.sysman.emcp.EMConfig perform
INFO: DBConsole is started successfully
```

H.3.13 Application Server Control Configuration Assistant が失敗した

問題

Application Server Control Configuration Assistant が失敗し、次のエラー・メッセージが表示された。

```
Launched configuration assistant 'Application Server Control Configuration Assistant'
-----
Tool type is: Recommended.
```

```

The command being spawned is:
'C:\Product\OracleAS\Infra\bin\emctlins.bat'
Oracle 10g Application Server Control 10.1.2.0.0
Copyright (c) 1996, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.
http://mypc.mydomain.com:1810/emd/console/aboutApplication
Starting Oracle 10g Application Server Control ...The OracleOH_INFRA_1012ASControl
service is starting
.....
.....
.....
The OracleOH_INFRA_1012ASControl service could not be started.
A service specific error occurred: 1.
More help is available by typing NET HELPMSG 3547.
Invalid Exit Code. The following result code will be used for configuration assistants:
1
Configuration assistant "Application Server Control Configuration Assistant" failed

```

解決策

このエラー・メッセージが表示されるのは、別のプロセスですでに使用されているポートを使用して **Application Server Control** コンポーネントの構成を行おうとしたことが原因で、**Application Server Control Configuration Assistant** が失敗した場合です。

これに対処するには、**Configuration Assistant** で使用しようとしたポートを特定し、すでに使用されているポートを確認した上で、別のポートを使用するように **Application Server Control** の構成を再度行います。詳細な手順は次のとおりです。

1. %ORACLE_HOME%\sysman\config にある emd.properties ファイルで、EMD_URL 行に指定されているポート番号を調べます。これは、**emagent** プロセスで使用されるポート番号です。
2. %ORACLE_HOME%\sysman\j2ee\config にある emd-web-site.xml ファイルで、web-site 要素に含まれるポート番号を調べます。これは、**Application Server Control** の HTTP 接続用ポートです。
3. %ORACLE_HOME%\sysman\j2ee\config にある rmi.xml ファイルで、rmi-server 要素に含まれるポート番号を調べます。これは、**Application Server ControlOC4J** インスタンスとの RMI 通信に使用されるポート番号です。

4. 「netstat -a」を実行して、前述の手順により特定されたポートの中ですでに使用されているものを確認します。

たとえば、ポート **1851** が既存のプロセスですでに使用されているかどうかを確認するには、コマンドを次のように入力して実行します。

```
C:\> netstat -a | find "1851"
```

5. 特定したポートがすでに使用されている場合は、現在使用されていない別のポートを使用するように **Application Server Control** の構成を行います。

emagent プロセス・ポートがすでに使用されている場合は、次のコマンドを実行して再度構成を行います。

```
C:\> emctl config agent port new_emagent_port
```

HTTP 接続ポートがすでに使用されている場合は、次のコマンドを実行して再度構成を行います。

```
C:\> emctl config iasconsole port new_AS_Control_HTTP_port
```

RMI ポートがすでに使用されている場合は、次のコマンドを実行して再度構成を行います。

```
C:\> emctl config iasconsole rmiport new_RMI_port
```

6. 「Configuration Assistant」画面の「再試行」をクリックして、Application Server Control Configuration Assistant を再実行するか、「サービス」コントロール・パネルから Application Server Control を起動します。サービス名は Oracle<OracleHomeName>ASControl です。

H.3.14 OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server が失敗した

問題

OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server の再実行に失敗した。

解決策

問題は、Oracle HTTP Server がすでに実行されていることにあります。この Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを使用して Oracle HTTP Server を停止します。

```
C:> ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=HTTP_Server
```

次に OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server を再実行します。

H.3.15 OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance が失敗した

問題

OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance の再実行に失敗した。

解決策

問題は、Oracle Delegated Administration Services インスタンスがすでに実行されていることにあります。この Configuration Assistant を再実行する前に、次のコマンドを使用して Oracle Delegated Administration Services インスタンスを停止します。

```
C:> ORACLE_HOME\opmn\bin\opmnctl stopproc ias-component=OC4J
```

次に OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance を再実行します。

H.4 削除に関する問題とその解決策

この項では、削除に関連してよく発生する問題について説明します。

- 現在使用されていないパートナ・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている
- 削除したインスタンスの名前を再使用できない
- データベース名を再使用できない
- 削除を行う際、無視できるエラー・メッセージ
- 削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス

H.4.1 現在使用されていないパートナ・アプリケーションの URL が Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている

問題

削除したパートナ・アプリケーションのエントリが Oracle Application Server Single Sign-On の管理画面上に残っている。

解決策

コマンドを実行して、使用されなくなったパートナ・アプリケーションのエントリの登録を取り消します。このコマンドは、`-update_mode` パラメータが `DELETE` に設定されていることを除けば、登録を行うためのコマンドとまったく同じです。

環境変数 `PATH` に `ORACLE_HOME%lib` が設定されていることを確認してください。次のコマンド（全体で1行）を実行します。

```
C:\> %ORACLE_HOME%\jdk\bin\java
-jar %ORACLE_HOME%\sso\lib\ossoreg.jar
-oracle_home_path %ORACLE_HOME%
-site_name hostname.domain
-config_mod_osso TRUE
-mod_osso_url http://hostname.domain:port
-u userid
-update_mode DELETE
```

`-site_name hostname.domain` には、中間層がインストールされているコンピュータを指定します。ドメイン名も含めて指定してください。

`-mod_osso_url http://hostname.domain:port` には、中間層がインストールされているコンピュータ、および Oracle HTTP Server がリスニングしているポート番号を指定します。

`-u userid` には、中間層のプロセスを起動できるオペレーティング・システム・ユーザーを指定します。

パラメータに関する詳細な説明は、『Oracle Application Server Single Sign-On 管理者ガイド』の第4章を参照してください。

H.4.2 削除したインスタンスの名前を再使用できない**問題**

新しい Oracle Application Server Standard Edition One インスタンスに、すでに削除したインスタンスの名前を付けようとするとエラーが発生する。

解決策

削除したインスタンスの名前は、Oracle Internet Directory から削除しないかぎり、別のインスタンスに使用することはできません。削除したインスタンスのエントリを Oracle Internet Directory から削除するには、次の手順を実行します。

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームとは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームを表します。
「スタート」 → 「プログラム」 → 「Oracle - InstanceName」 → 「拡張管理」 → 「インフラストラクチャ」 → 「Oracle Directory Manager」の順に選択します。
2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）としてログインします。
3. 「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Instances」の順に選択します。
4. 「cn=IAS Instances」から、削除するインスタンスを選択します。
5. 「編集」メニューから「削除」を選択します。
6. 「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Groups」の順に選択します。
7. 「cn=IASAdmins」を選択します。
8. 「プロパティ」タブの「uniquemember」フィールドから目的のインスタンスを直接削除します。「編集」メニューの「削除」コマンドは使用しないでください。
9. 「適用」をクリックします。

H.4.3 データベース名を再使用できない

問題

すでに削除したデータベースと同じ名前を、グローバル・データベース名または SID として使用しようとするエラーが発生する。

解決策

この問題が発生すると考えられるのは、Oracle Internet Directory は削除しないでそのまま使用する一方、OracleAS Metadata Repository のみをいったん削除し、あらためて OracleAS Metadata Repository をインストールしたときに以前と同じデータベース名または SID を付けるというケースです。Oracle Internet Directory に、削除した OracleAS Metadata Repository の名前が残っているためです。この名前を再使用する場合は、その前にいったん削除する必要があります。

注意： 中間層を削除する場合は、次の手順は使用しないでください。

1. Oracle Directory Manager を起動します。Oracle ホームとは、Oracle Internet Directory をインストールしたホームを表します。
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「インフラストラクチャ」→「Oracle Directory Manager」の順に選択します。
2. 「接続」画面で、Oracle Internet Directory の接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=Portal」→「cn=UltraSearch」→「cn=Database Instances」→「orclApplicationCommonName=infrastructure_database_name」の順に選択します。
4. orclApplicationCommonName=infrastructure_database_name に含まれる子エントリを最下位層にある子エントリから順にすべて削除します。エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。
5. orclApplicationCommonName=infrastructure_database_name に含まれる子エントリをすべて削除したら、このエントリを右クリックして同様に削除します。
6. 「エントリ管理」を開きます。
Default Subscriber エントリを開きます。各項目は 1 つずつ開く必要があります。たとえば、Default Subscriber エントリが「dc=us,dc=oracle,dc=com」であれば、「dc=com」、「dc=oracle」、「dc=us」の順に 1 つずつ開きます。
「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=Portal」→「cn=UltraSearch」→「cn=Database Instances」→「cn=infrastructure_database_name」の順に項目を開きます。
7. cn=infrastructure_database_name に含まれる子エントリを最下位層にある子エントリから順にすべて削除します。エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。確認ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。
8. cn=infrastructure_database_name に含まれる子エントリをすべて削除したら、このエントリを右クリックして同様に削除します。
9. 「適用」をクリックします。

H.4.4 削除を行う際、無視できるエラー・メッセージ

次に示すのは、削除中に表示される可能性があるエラー・メッセージです。

```
oraconfig.exe - Unable to locate DLL
The dynamic link library oraclient10.dll could not be found in the specified path.
```

これは特に問題のあるエラー・メッセージではないため無視してもかまいません。

H.4.5 削除を行う際の無視できる警告ダイアログ・ボックス

OracleAS Portal の削除中、次のメッセージを含む警告ダイアログ・ボックスが表示されることがあります。

main クラスが見つかりませんでした。プログラムを終了します。

これは特に問題のあるメッセージではないため無視してもかまいません。「OK」をクリックしてウィンドウを閉じ、削除の処理を続行します。

H.5 バックアップおよびリカバリに関する問題とその解決策

この項では、バックアップおよびリカバリに関連してよく発生する問題について説明します。

- [リストアに一度失敗した後のリストア](#)

H.5.1 リストアに一度失敗した後のリストア

問題

「第二段階」（構成ファイルのリストアを実行中）でのリストアに失敗すると、それ以降のリストアもすべて失敗する。

解決策

OracleAS Backup and Recovery Tool で次のコマンドを実行します。

```
ORACLE_HOME¥backup_restore¥bkp_restore.bat -m restore_config -t <timestamp_of_failed_recovery>
```

OracleAS Backup and Recovery Tool の詳細は、[第 14 章](#)を参照してください。

H.6 Configuration Assistant に関する問題とその解決策

この項では、Configuration Assistant に関する問題の対処方法について説明します。

この項の内容は次のとおりです。

- [全般についてのヒント](#)
- [Configuration Assistant の結果コード](#)

Configuration Assistant の詳細は、[付録 G](#)を参照してください。

H.6.1 全般についてのヒント

Configuration Assistant が失敗した場合は、次の手順に従って問題点を修正します。

1. [H.1 項「ログ・ファイル」](#)に列挙されているインストール・ログ・ファイルを確認します。
2. 失敗した Configuration Assistant のログ・ファイルを確認します。Configuration Assistant のログ・ファイルは、[付録 G](#)に列挙してあります。エラーの原因となった問題の修正を試みます。

3. 失敗した Configuration Assistant に依存関係がある場合は、その依存関係を再度実行します。正常に実行された依存関係であっても、再度実行してください。
4. 失敗した Configuration Assistant を再度実行します。それにはインストーラでその Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックします。

「再試行」をクリックしてもなお失敗する場合は、C:\temp にある EM_CONFIG_INSTALL.lk ファイルを削除した上で、その Configuration Assistant を再度実行します。

「再試行」をクリックしてもなお失敗する場合は、ORACLE_HOME\sysman\emd にある targets.xml ファイルからコンポーネント・エントリを削除します。たとえば次に示すのは、targets.xml ファイルにある OracleAS Web Cache のエントリです。

```
<Target TYPE="oracle_webcache" NAME="instance2.domain.com_Web Cache" DISPLAY_NAME="Web Cache">
  <Property NAME="HTTPPort" VALUE="7777" />
  <Property NAME="logFileName" VALUE="webcache.log" />
  <Property NAME="authrealm" VALUE="Oracle Web Cache Administrator" />
  <Property NAME="AdminPort" VALUE="4000" />
  <Property NAME="HTTPProtocol" VALUE="http" />
  <Property NAME="logFileDir" VALUE="/sysman/log" />
  <Property NAME="HTTPMachine" VALUE="domain.com" />
  <Property NAME="HTTPQuery" VALUE="" />
  <Property NAME="controlFile" VALUE="//webcache/bin/webcachectl" />
  <Property NAME="MonitorPort" VALUE="4002" />
  <Property NAME="HTTPPath" VALUE="/" />
  <Property NAME="authpwd" VALUE="administrator" />
  <Property NAME="authuser" VALUE="administrator" />
  <CompositeMembership>
    <MemberOf TYPE="oracle_ias" NAME="domain.com" ASSOCIATION="null" />
  </CompositeMembership>
</Target>
```

5. オプションの Configuration Assistant が失敗した場合、それが依存関係を持たなければ、残りの Configuration Assistant を実行します。取り消されたオプションの Configuration Assistant の選択を解除し、その次にある Configuration Assistant を選択し、「再試行」をクリックします。
6. コマンド・ラインから Configuration Assistant 実行コマンドを実行してもなお失敗した場合は、その Configuration Assistant 実行コマンドをもう一度実行します。

失敗した Configuration Assistant を再度実行する場合、ORACLE_HOME\bin ディレクトリの中に生成された configtoolcmds.pl という名前のスクリプト・ファイルを使用できます。この configtoolcmds.pl スクリプトは、インストーラ終了後に生成されます。また、サイレント・インストールまたは非対話型インストールを実行した場合は、Configuration Assistant が失敗した直後に生成されます。

7. 「致命的エラー。再インストールしてください」というメッセージが表示された場合は、ログ・ファイルを解析して問題の原因を特定します。ただし、問題点を修正して操作を続けるだけでは、致命的エラーからリカバリすることはできません。現在のインストール内容を削除し、Oracle Application Server を再インストールする必要があります。次に示すのはリカバリの手順です。
 - a. 付録 A の手順に従って、失敗したインストールの内容を削除します。
 - b. 致命的エラーの原因となった問題点を修正します。
 - c. Oracle Application Server Standard Edition One を再インストールします。
 - d. 致命的エラーが再び発生した場合は、A.5 項「手動による全 Oracle 製品の削除」の手順に従って、コンピュータ上にインストールされているすべての Oracle 製品を削除する必要があります。

H.6.2 Configuration Assistant の結果コード

Configuration Assistant が失敗すると、インストール画面の下半部にエラー・メッセージが表示され、次のログ・ファイルにその結果コード (表 H-1) が記録されます。

C:\Program Files\Oracle\Inventory\logs\installActionstimestamp.log

表 H-1 Configuration Assistant の結果コード

結果コード	説明
0	Configuration Assistant は成功
1	Configuration Assistant は失敗
-1	Configuration Assistant は取消し

H.7 OracleAS Portal に関する問題とその解決策

この項では、OracleAS Portal に関連してよく発生する問題について説明します。

- OracleAS Portal のパスワードの取得
- SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない

H.7.1 OracleAS Portal のパスワードの取得

問題

OracleAS Portal のログイン・パスワードを消失または失念した。

解決策

パスワードは、消失または失念しても、次の手順に従って Oracle Directory Manager から取得できます。

1. 「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「インフラストラクチャ」→「Oracle Directory Manager」の順に選択します。
2. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
3. 次のノードに移動します。
 - 「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」→「orclReferenceName=<your_database_name」→「orclResourceName=PORTAL」

H.7.2 SSL を有効にした Internet Explorer から OracleAS Portal にログインできない

問題

Internet Explorer バージョン 6 から SSL を有効にして OracleAS Portal にログインしようとすると、エラー・メッセージが表示される。この問題は、インフラストラクチャと中間層が同一のマシン上に存在する場合に発生する。

解決策

ご使用のマシンのエイリアスを作成した上で、実際のマシン名のかわりにそのエイリアスを使用できるよう OracleAS Single Sign-On の構成を行います。

1. ご使用のマシンの新しいホスト名を追加します。例を示します。

```
123.45.67.89 devhost2-sso.us.oracle.com mgueury-sso
```

2. emctl コマンドを使用して、Application Server Control コンソールを起動します。

```
C:¥> emctl start iasconsole
```
3. Application Server Control コンソールで「仮想ホスト」ページに移動し（「インフラストラクチャ」→「HTTP_Server」→「仮想ホスト」）、仮想ホスト名を目的の名前に変更します（たとえば、devhost1-ss0.us.oracle.com から devhost2-ss0.us.oracle.com に変更）。
4. この変更が反映されるように SSO サーバーの構成を行います。

```
C:¥> cd INFRA_ORACLE_HOME¥sso¥bin
C:¥INFRA_ORACLE_HOME¥sso¥bin> ssocfg https devhost2-ss0.us.oracle.com 4459
```
5. この変更が SSO で認識されるように OracleAS Portal の構成を行います。

```
C:¥> cd MIDTIER_ORACLE_HOME¥portal¥conf
C:¥MIDTIER_ORACLE_HOME¥portal¥conf> ptlconfig -dad portal
```
6. Portal のキャッシュを消去します。

```
C:¥> cd MIDTIER_ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥cache
C:¥MIDTIER_ORACLE_HOME¥Apache¥modplsql¥cache> rm -rf *
```

H.8 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant に関する問題とその解決策

この項では、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant に関連してよく発生する問題について説明します。

- データベースに接続できない
- SYS ユーザーとして接続できない
- 手動による手順: 失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す
- ORA-01403: データが見つかりません

H.8.1 データベースに接続できない

問題

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant からデータベースに接続できない。

解決策

次の事柄を確認します。

- 使用しているサービス名 (SID または SID.domainname) が正しいか。
- データベースは起動しているか。
- リスナーは起動しているか。
- データベースへのネットワーク接続が可能か。
- ORACLE_HOME¥sqlplus¥admin にある glogin.sql ファイルまたは login.sql ファイルに、次のようなプロンプト行が含まれているかどうか。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user ||' on ' || name "db_name" from v$databases ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

どちらか一方のファイルにプロンプト行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイル名を変更します。
- b. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
- c. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再起動します。
- d. 再度接続を試みます。
- e. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が正常に実行されたら、ファイル名を元に戻します。

H.8.2 SYS ユーザーとして接続できない

問題

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行中に次のようなメッセージが表示される。

```
RepCA unable to connect as sys. Error message:
*** Specify Database Connect ***
ERROR -SQLException on getting SID and SYSTEMNAME
informationjava.sql.SQLException:
@ ORA-01017 : invalid username/password; logon denied
```

解決策

次の操作を試みます。

- SYS ユーザーのパスワードが正しく入力されているか確認します。
- SYS ユーザーのパスワードを設定しなおし、再度接続を試みます。パスワードの再設定を行うには、`ORACLE_HOME¥bin¥orapwd` コマンドを使用します。詳細は、[15.5.14 項「パスワード・ファイル認証」](#)を参照してください。
- `ORACLE_HOME¥sqlplus¥admin` にある `glogin.sql` ファイルまたは `login.sql` ファイルに、次のようなプロンプト行が含まれているかどうかを確認します。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user ||' on ' || name "db_name" from v$database ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

どちらか一方のファイルにこれらの行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイル名を変更します。
- b. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を終了します。
- c. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を再起動します。
- d. 再度接続を試みます。
- e. Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant が正常に実行されたら、ファイル名を元に戻します。

H.8.3 手動による手順：失敗した登録のクリーン・アップまたは OracleAS Metadata Repository の登録を取り消す

この項では、Oracle Internet Directory に登録されているエントリーを、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を使用しないでクリーン・アップする方法について説明します。

1. Oracle Directory Manager を使用して Oracle Internet Directory に接続します。
 - a. Oracle Directory Manager を起動します。

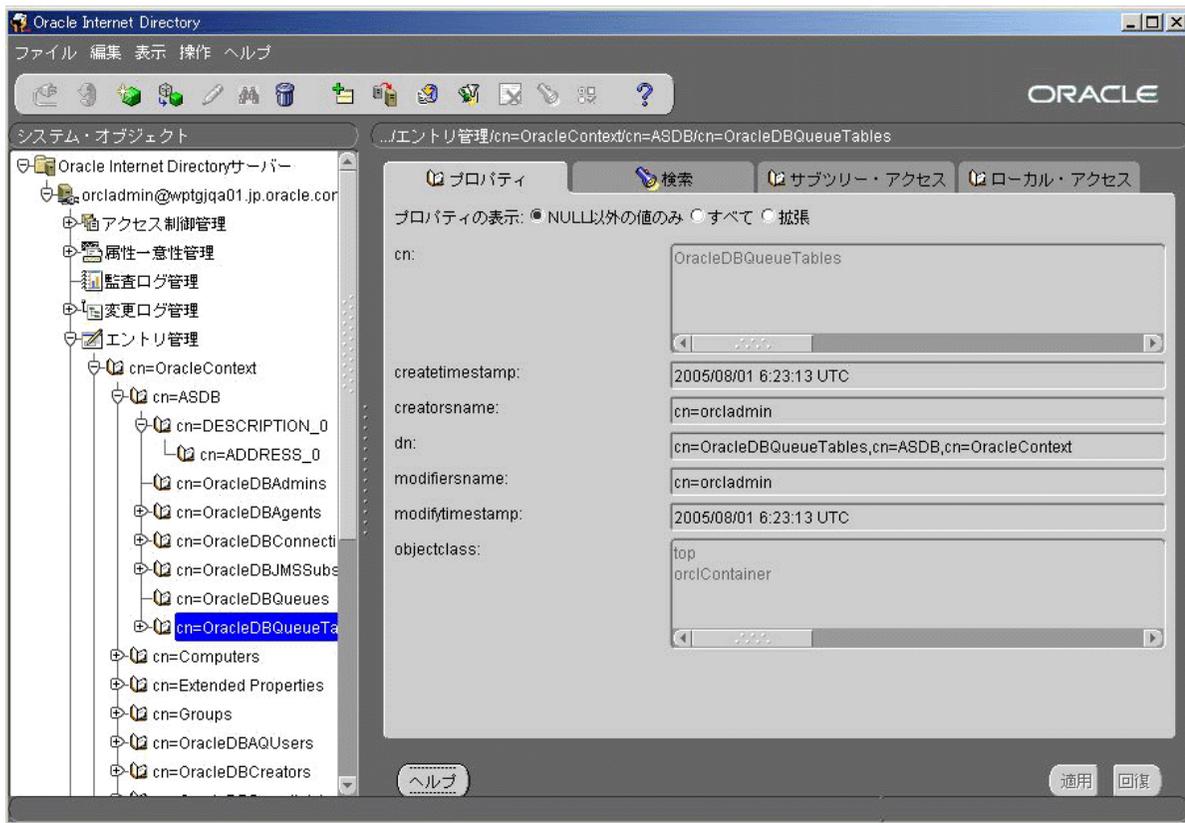
「スタート」→「プログラム」→「Oracle - InstanceName」→「拡張管理」→「インフラストラクチャ」→「Oracle Directory Manager」の順に選択します。

- b. 「接続」画面で接続情報を入力します。Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. Oracle Internet Directory 内のデータベースの登録エントリをクリーン・アップします。
 - a. 次のエントリ (図 H-1 にも表示) を開きます。
「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=<your_database_name>」
 - b. cn=<your_database_name> に含まれる子エントリを最下位層の子エントリから順にすべて削除します。

cn=DESCRIPTION_0 エントリを削除する前に、エントリの最下位層に到達するまで子エントリをすべて開きます。最下位層から順に各子エントリを削除します。

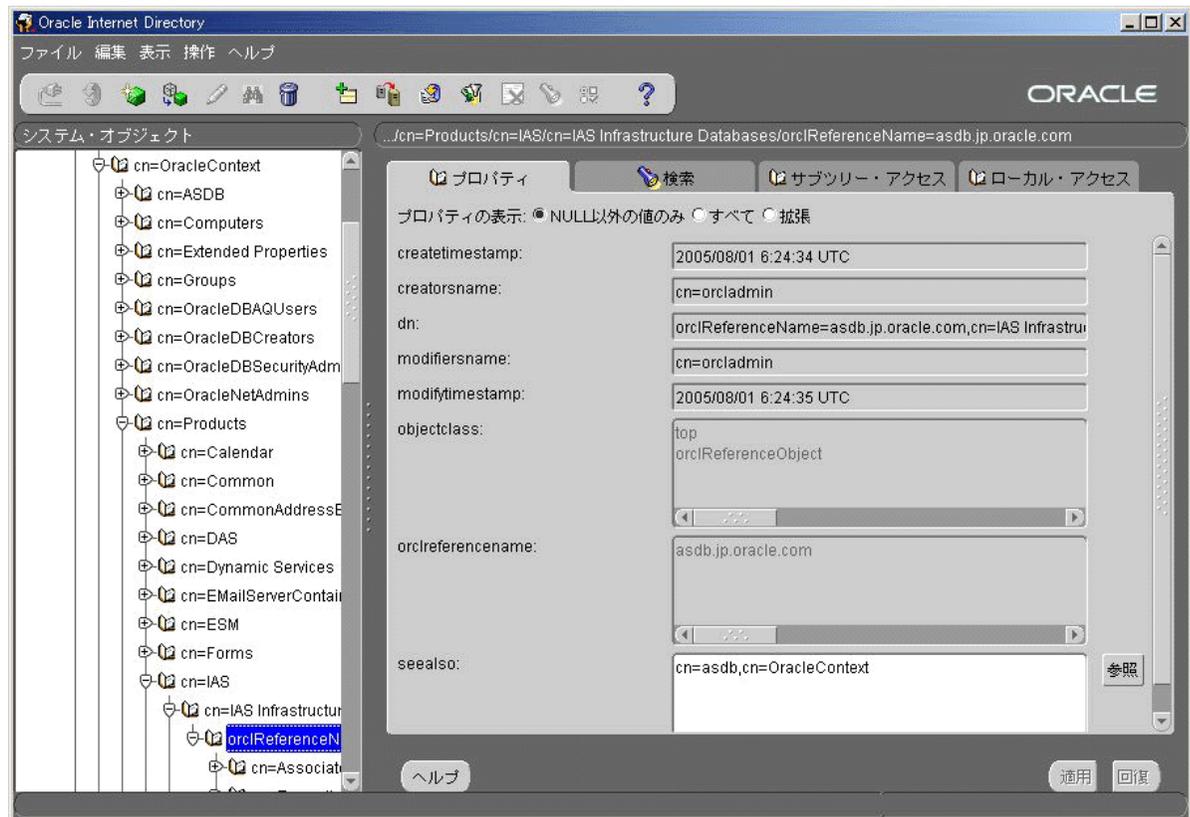
エントリを削除するには、各子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログ・ボックスで「はい」をクリックします。子エントリを削除すると、エラー・メッセージが表示されることがあります。これらのエラー・メッセージは無視してもかまいません。
 - c. 右クリック操作を使用して cn=<your_database_name> を削除します。

図 H-1 データベース登録エントリのクリーン・アップ



3. Oracle Internet Directory 内のメタデータ・リポジトリの登録エントリをクリーン・アップします。
 - a. 次のエントリ (図 H-2 にも表示) を開きます。
「エントリ管理」 → 「cn=OracleContext」 → 「cn=Products」 → 「cn=IAS」 → 「cn=IAS Infrastructure Databases」 → 「orclReferenceName=<your_database_name>」
 - b. orclReferenceName=<your_database_name> に含まれる各子エントリを削除します。
 - c. orclReferenceName=<your_database_name> エントリを削除します。

図 H-2 メタデータ・リポジトリ登録エントリのクリーン・アップ



H.8.4 ORA-01403: データが見つかりません

問題

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant により Workflow スキーマがロードされる際、ORA-01403: 「データが見つかりません」という PL/SQL エラーが発生する。

解決策

環境変数 NLS_LANG が英語以外のロケールに設定されています。Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、環境変数 NLS_LANG が設定されていないか、または american_america.us7ascii に設定されていることを確認する必要があります。

環境変数は、「システムのプロパティ」ダイアログ・ボックスで設定できます。

NLS_LANG は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant の実行終了後、元の値に戻してかまいません。

H.9 データベースに関する問題とその解決策

OracleAS Portal を実行して新たに Metadata Repository のインストール（基本インストールまたは高度なインストール）を行うと、その間 Database Control Service は停止します。また、マシンが再起動された際サービスが自動的に起動しないようサービスの起動モードが「手動」に変更されます。これは、emagent の余分なインスタンスが起動しないようにすることで、少しでもシステム・リソースの消費を抑えられるようにするためです。

Database Control Service を手動で起動するには、次の手順を実行します。

その他の情報が必要な場合

1. 「スタート」メニューから「プログラム」→「アクセサリ」→「システム ツール」→「システム情報」の順に選択します。
2. 「ソフトウェア環境」フォルダをクリックして展開します。
3. 「サービス」をクリックします。

Database Control Service の名前は、OracleDBConsole<Database_SID> (たとえば、OracleDBConsoleasdb) です。

H.10 その他の情報が必要な場合

この付録に記載されている情報を基にしても問題が解決しない場合は、次のサイトも参照してください。

- Oracle Technology Network の Oracle Application Server Standard Edition One リリース・ノート (<http://www.oracle.com/technology/documentation>)
- OracleMetaLink (<http://metalink.oracle.com>)

問題の解決策が見つからない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問合せください。

記号

%WINDIR%\system32\drivers\etc\hosts ファイル, 2-7

数字

256 色の要件, 2-4

A

Administrators グループ, 2-5
AL32UTF8 キャラクタ・セット, 1-10
alter user コマンド, 16-9
Application Server Control Configuration Assistant のエラー, H-6
Application Server ホーム・ページ, 8-2, 8-3
ARCHIVELOG モード, 14-20

B

bkp_restore.pl スクリプト, 14-5

C

CD-ROM
ハード・ドライブへのコピー, 2-18
CD-ROM/DVD からハード・ドライブへのコピー, 2-18
chgiphost コマンド, 12-4
エラー, 12-9
ログ・レベルの設定, 12-7
cleanMR スクリプト, B-10
エラー, B-11
config_misc_files.inp ファイル, 14-8
Configuration Assistant, G-1
依存関係, H-12
致命的エラー, H-12
トラブルシューティング, H-11
リスト, G-1
「Configuration Assistant」画面, 5-15
Configuration Assistant のエラー
Application Server Control Configuration Assistant, H-6
Database Configuration Assistant, H-5
OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance, H-8
OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server, H-8

OracleAS Randomize Password Configuration Assistant, H-5
CPU の要件, 2-2

D

DAS
「Oracle Delegated Administration Services」を参照
Database Configuration Assistant
エラー, H-5
無視できるエラー・メッセージ, H-6
Database Control
パスワード, 8-9
db_create_file_dest 初期化パラメータ, 16-6
DBCA_RAW_CONFIG 環境変数, 16-4
DBMS_LDAP パッケージ, 15-12
DBPrereqChecker ツール, 15-6
DCM
「Distributed Configuration Management (DCM)」を参照
dcmctl restoreInstance コマンド, 7-5
dcmctl saveInstance コマンド, 7-5
dcmctl コマンド, 8-8
DCM スキーマ, 7-4, E-3
インストール後のロック解除, 16-9
パスワードの設定, 16-9
DCM 表領域, E-3
deconfig.pl スクリプト, A-4
DHCP
DHCP 接続のコンピュータへのインストール, 2-9
DHCP アドレス
移行, 12-10
ネットワークに接続されていない状態への移行, 12-10
変更, 12-10
Discoverer
「OracleAS Discoverer」を参照
DISCOVERER5 スキーマ, E-2
Distributed Configuration Management (DCM), 7-4, 8-8
スキーマ, E-3
データファイル, E-3
表領域, E-3
DSGATEWAY_TAB 表領域, E-4
DSGATEWAY スキーマ, E-3
DVD
ハード・ドライブへのコピー, 2-18
Dynamic Monitoring Service (DMS), 8-8

E

emagent プロセス・ポート
再構成, H-7
emagent プロセス・ポートの再構成, H-7
emctl コマンド
Application Server Control コンソールの再起動, 7-6
Application Server Control コンソールの停止, 9-4
emagent プロセス・ポートの再構成, H-7
HTTP 接続ポートの再構成, H-7
ias_admin パスワードの変更, 7-5
RMI ポートの再構成, H-7
Enterprise Manager ホーム・ページ, 8-1
EXTPROC キー, 1-17

H

hosts ファイル, 2-8
HTTP 接続ポート
再構成, H-7
HTTP 接続ポートの再構成, H-7

I

ias_admin パスワード, 1-8
変更, 7-5
ias_admin パスワードの変更, 7-5
ias_admin ユーザー, 1-8
IAS_META 表領域, E-3, E-4
iaspt デーモン, 13-1
Identity Management
スキーマ, E-1
「Internet Directory のネームスペースの指定」画面,
2-7, 5-8
INTERNET_APPSERVER_REGISTRY スキーマ, E-1
IP
複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインス
トール, 2-10
要件, 2-2
IPC プロトコル, 1-17
IP アドレス
静的アドレスへの移行, 12-10
ネットワークに接続されていない状態への移行,
12-10
変更, 12-1, 12-10
IP アドレスの変更, 12-10

J

J2EE
ドメイン名の変更, 12-3
ホスト名の変更, 12-3
J2EE and Web Services
インストール, 3-2
J2EE and Web Services のインストール, 3-2
J2EE アプリケーション, 8-7
Java Access Bridge
JRE 1.4.2, F-1
インストール, F-2
概要, F-1
構成, F-2
JAWS スクリーン・リーダー, F-1

L

ldap.ora ファイル、インストール後にコピー, 16-8

M

Metadata Repository
「OracleAS Metadata Repository」を参照
mod_osso の再登録, 10-5
mod_osso の構成, 6-2

N

NLS_LANG パラメータ, 6-2

O

OC4J
「Oracle Application Server Containers for J2EE
(OC4J)」を参照
OCA
「OracleAS Certificate Authority」を参照
OCA スキーマ, E-1
ODL
「Oracle Diagnostic Logging (ODL)」を参照
ODS スキーマ, E-1
OEM_REPOSITORY スキーマ, E-3
OID
「Oracle Internet Directory」を参照
OLTS_ATTRSTORE 表領域, E-3
OLTS_BATTRSTORE 表領域, E-3
OLTS_CT_STORE 表領域, E-3
OLTS_DEFAULT 表領域, E-3
OLTS_SVRMGSTORE 表領域, E-3
OPMN, 7-4
OPMN Configuration Assistant - Start DAS Instance、再
実行, H-8
OPMN Configuration Assistant - Start HTTP Server、再
実行, H-8
opmnctl コマンド, 8-8, 9-7
Oracle Application Server Containers for J2EE, 7-5
Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)
各インストール・タイプでインストールされる OC4J
インスタンス, 7-5
Oracle Application Server Log Loader, 11-5
Oracle Application Server Standard Edition One
Configuration Assistant, G-1
ias_admin パスワードの指定, 1-8
J2EE and Web Services のインストール, 1-3
OracleAS Portal のインストール, 1-3
Oracle ホーム・ディレクトリ, 1-6
Oracle ホームの名前, 1-6
インスタンスとインスタンス名, 1-7
インストール画面, 5-1
インストールの概要, 1-2
インストールの場所, 1-6
空ではない Oracle ホームへのインストール, 1-7
基本インストールと拡張インストールの比較, 1-4
基本 (ワンクリック・) インストール, 1-4
グローバル・データベース名とパスワードの指定,
1-9
言語およびロケールの設定, 1-10
システム要件, 2-1

- 新機能, 1-1
- 製品の概要, 1-1
- Oracle Application Server Standard Edition One およびそのコンポーネントの起動と停止, 9-1
- Oracle Application Server Standard Edition One 環境起動と停止, 9-8
- Oracle Application Server Standard Edition One をインストールできる場所, 1-6
- Oracle Application Server 環境全体のバックアップ, 14-23
- Oracle Delegated Administration Services
 - mod_osso, 6-2
 - Oracle Internet Directory の更新, 10-6
- Oracle Diagnostic Logging (ODL), 11-1
- Oracle Enterprise Manager
 - スキーマ, E-3
- Oracle Enterprise Manager Application Server Control
 - Application Server ホーム・ページ, 8-3
 - OracleAS Farm ホーム・ページ, 8-3, 8-4
 - OracleAS コンポーネント・ホーム・ページ, 8-5
 - URL, 6-1
- Oracle Enterprise Manager Application Server Control コンソール, 8-1
- Oracle Enterprise Manager Application Server ホーム・ページ, 8-3
- Oracle HTTP Server
 - 停止, H-8
- Oracle HTTP Server のリスニング・ポートの変更, 10-4
- Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更するための Infrastructure インスタンスの準備, 10-4
- Oracle HTTP Server のリスニング・ポートを変更するための中間層インスタンスの準備, 10-4
- Oracle Identity Management, 9-3
- Oracle Instant Portal, 1-1
- Oracle Internet Directory
 - OracleAS Metadata Repository の登録, 17-1
 - OracleAS Metadata Repository の登録取消し, H-15
 - オブジェクトの削除, B-12
 - サポートされるバージョン, 15-21
 - スキーマ, E-1
 - データファイル, E-3
 - 登録をチェック, 15-20
 - ドメイン名の変更, 12-2
 - ネームスペース, 5-8
 - 表領域, E-3
 - ホスト名の変更, 12-2
- Oracle Internet Directory オブジェクトの削除, B-12
- Oracle Internet Directory の DAS URL エントリの更新, 10-6
- Oracle Internet Directory のネームスペース, 5-8
- Oracle Managed Files
 - OracleAS Metadata Repository 用に使用, 16-6
- Oracle Management Watchdog Process, 8-8
- Oracle Process Manager and Notification Server (OPMN), 8-8
- Oracle Technology Network (OTN), 1-5, 5-11, 5-17, H-18
- Oracle Ultra Search
 - スキーマ, E-2
 - データファイル, E-3
 - 表領域, E-3
- Oracle Ultra Search、インスタンスの作成, 16-9
- Oracle Universal Installer
 - 起動, 5-1
 - 前提条件チェック, 2-22
 - ログ・ファイル, H-1
- Oracle Workflow
 - スキーマ, E-2
 - データファイル, E-4
 - 表領域, E-4
- OracleAS Backup and Recovery Tool, 14-4
 - 構成, 14-6
 - 構文, 14-9
 - 取得, 14-5
 - 使用している構成ファイル用のカスタマイズ, 14-8
 - 使用例, 14-18
- OracleAS Certificate Authority
 - スキーマ, E-1
- OracleAS Discoverer
 - スキーマ, E-2
- OracleAS Farm ホーム・ページ, 8-2, 8-3, 8-4
- OracleAS Infrastructure, 4-1
 - コンポーネント, 4-1
- OracleAS Infrastructure の起動, 9-8
- OracleAS Metadata Repository, 9-3
 - Oracle Enterprise Manager の Java ベースのコンソールによる管理, 8-9
 - Oracle Internet Directory への登録, 17-1
 - Oracle Managed Files にインストール, 16-6
 - RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール, 16-3
 - アーカイブ・ロギングの有効化, 14-20
 - 既存のデータベースへのインストール, 4-1
 - 既存のデータベースへのロード, 16-1
 - 再インストール, 16-10
 - 削除, B-1, B-10
 - スキーマ, 15-16, E-1
 - 登録取消し, B-1, B-7, H-15
 - 表領域, 15-16
 - ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール, 16-1
 - ポート 1521, 1-16
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant
 - インストール, 15-4
 - 概要, 15-2
 - 起動, 15-22
 - 実行の要件, 15-3
 - トラブルシューティング, H-14
- OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のインストール, 15-4
- OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録, 17-1
 - Oracle Internet Directory に関するチェック, 15-20
 - SSL モードでの登録に必要なパッチ, 15-7
 - 完了前に終了, 17-3
 - 失敗した登録のクリーン・アップ, H-15
 - 登録後の手順, 17-3
 - 登録取消し, B-1, H-15
 - 登録の失敗, 17-3
- OracleAS Metadata Repository の削除, B-1
 - cleanMR スクリプトを使用した, B-10
 - ウィザードを使用した, B-5
- OracleAS Metadata Repository の登録取消し, B-1, B-7, H-15
 - ウィザードを使用した, B-2
 - 取消し, B-13

OracleAS Portal
インストール, 4-2
スキーマ, E-2
データファイル, E-4
トラブルシューティング, H-13
表領域, E-4

OracleAS Portal のインストール, 4-2

OracleAS Randomize Password Configuration Assistant、再実行, H-5

OracleAS Single Sign-On
管理画面上に表示された現在使用されていない URL, H-8
コマンドラインでのホスト名の指定, 2-8
スキーマ, E-1
データファイル, E-4
表領域, E-4

OracleAS UDDI Registry
スキーマ, E-3
データファイル, E-4
表領域, E-4

OracleAS Web Cache
ドメイン名の変更, 12-3
ホスト名の変更, 12-3

OracleAS Web Clipping
スキーマ, E-2

OracleAS Wireless
スキーマ, E-2

OracleAS コンポーネント・ホーム・ページ, 8-5

OracleMetaLink, H-18

Oracle 管理エージェント, 8-8

Oracle データベース
ポート 1521 の問題, 1-17

Oracle ホーム・ディレクトリ, 1-6

Oracle ホーム・ディレクトリ名の指定, 1-6

Oracle ホームの名前, 1-6

ORASSO_DS スキーマ, E-1
ORASSO_PA スキーマ, E-2
ORASSO_PS スキーマ, E-2
ORASSO_PUBLIC スキーマ, E-2
ORASSO スキーマ, E-1

OTN
「Oracle Technology Network」を参照
OUI_HOSTNAME パラメータ, 2-8
OWF_MGR スキーマ, E-2

P

pcAnywhere, 2-21

PL/SQL パッケージ、必須, 15-11

Portal
「OracleAS Portal」を参照
PORTAL_APP スキーマ, E-2
PORTAL_DEMO スキーマ, E-2
PORTAL_DOC 表領域, E-4
PORTAL_IDX 表領域, E-4
PORTAL_LOG 表領域, E-4
PORTAL_PUBLIC スキーマ, E-3
PORTAL スキーマ, E-2
PORTAL 表領域, E-4
portlist.ini ファイル, 1-16, 7-3, 7-5
staticports.ini ファイルとしての使用, 1-16
PRODUCT_COMPONENT_VERSION データベース・ビュー, 15-7

ptlang コマンド, 1-10

R

RAM の要件, 2-2

RAW デバイス
既存のデータベース用の最小サイズ, 15-19

repca_cleanOID.sql スクリプト, B-12

RMI ポート
再構成, H-7

RMI ポートの再構成, H-7

runRepca コマンド, 15-22

S

setup.exe コマンド
CD-ROM, 5-2
DVD-ROM, 5-2
-executeSysPrereqs パラメータ, 2-1
OUI_HOSTNAME パラメータ, 2-10

setupinfo.txt, 8-2

Single Sign-On
「OracleAS Single Sign-On」を参照

sqlnet.ora ファイル、インストール後の更新, 16-8

SSL
インストール後の構成, 6-2

ssl.conf ファイル, 10-5

SSL モード、Oracle Internet Directory への登録
必要なパッチ, 15-7

SSO
「OracleAS Single Sign-On」を参照

Standard Edition のデータベース, 15-7

staticports.ini ファイル, 1-14, D-1
作成, 1-16
書式, 1-14

staticports.ini ファイルとしての portlist.ini
ファイルの使用, 1-16

SYSAUX 表領域, E-3, E-4

SYSTEM 表領域
ディスク領域の要件, 15-7

T

targets.xml ファイル, 10-5

TEMP ディレクトリ, 1-20, 2-7
必要な領域, 2-3

U

UDDI Registry
「OracleAS UDDI Registry」を参照

UDDISYS_TS 表領域, E-4

Ultra Search
「Oracle Ultra Search」を参照

UNDO 表領域
ディスク領域の要件, 15-7

V

VNC, 2-21

W

WCRSYS_TS スキーマ, E-2

Web Clipping

「OracleAS Web Clipping」を参照

Windows XP

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant,
15-8

Windows システム・ファイル (wsf.exe), 2-5

Windows レジストリ

全 Oracle 製品の削除, A-6

Wireless

「OracleAS Wireless」を参照

WIRELESS スキーマ, E-2

WK_TEST スキーマ, E-2

WKPROXY スキーマ, E-2

WKSYS スキーマ, E-2

Workflow

「Oracle Workflow」を参照

wsf.exe Windows システム・ファイル, 2-5

あ

アーカイブ・ロギング, 14-20

アクセシビリティ・ソフトウェア、Java Access Bridge,
F-1

アダプタ

ループバック, 2-10

後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコン
ピュータへのインストール, 2-11

い

インスタンス名

再使用, H-9

使用できる文字, 1-7

どのように使用されるか, 1-7

「インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定」画面
(J2EE and Web Services のインストールの場合),
5-7

「インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定」画面
(OracleAS Portal のインストールの場合), 5-12

インストール

トラブルシューティング, H-2

別名

複数の別名を持つコンピュータへのインストール,
2-10

インストール画面, 5-1

Configuration Assistant, 5-15

Internet Directory のネームスペースの指定, 5-8

Oracle Application Server インストールへようこそ,
5-2

インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定
(J2EE and Web Services のインストールの場合),
5-7

インスタンス名と `ias_admin` パスワードの指定
(OracleAS Portal のインストールの場合), 5-12

インストール (進捗状況), 5-15

インストールする製品の選択, 5-4

インストールの終了, 5-17

言語の選択, 5-5

サマリー, 5-14

データベース構成オプションの指定, 5-9

データベース・スキーマのパスワードの指定, 5-11

ポート構成オプションの指定, 5-6

リポジトリの指定, 5-13

「インストール」画面 (進捗状況), 5-15

インストール後の作業, 7-1

インストール後の手順, 6-1, 16-8

`ldap.ora` ファイルのコピー, 16-8

`sqlnet.ora` ファイルの更新, 16-8

「インストールする製品の選択」画面, 5-4

インストール手順、概要, 1-1

インストール手順の概要, 1-1

インストールの完了画面, 5-17

「インストールの終了」画面, 5-17

インフラストラクチャ

「OracleAS Infrastructure」を参照

インベントリ・ディレクトリ, 1-20

え

エフェメラル・ポート, 1-11

エラー ORA-10027, B-11

エラー ORA-2000, B-11

お

オペレーティング・システム、OracleAS Metadata
Repository Creation Assistant の実行, 15-3

オペレーティング・システム・グループ

Administrators グループ, 2-5

オペレーティング・システムのバージョン, 2-2

オペレーティング・システム・ユーザー, 2-5

Administrators グループ, 2-5

か

カスタムのポート

「静的ポート」を参照

仮想メモリの要件、OracleAS Metadata Repository
Creation Assistant の実行, 15-3

仮想メモリ (ページング・ファイル・サイズ) の要
件, 2-4

空でないディレクトリへのインストール, H-3

空ではない Oracle ホームへのインストール, 1-7

環境変数, 2-6, 7-1

DBCA_RAW_CONFIG, 16-4

ORACLE_HOME, 2-7

ORACLE_SID, 2-7

PATH, 2-7

TEMP, 2-7

TNS_ADMIN, 2-7

設定, 2-6

環境変数 ORACLE_HOME, 2-7, 7-1

環境変数 ORACLE_SID, 2-7, 7-1

環境変数 PATH, 2-7

環境変数 TEMP, 2-7, 7-1

環境変数 TMP, 7-1

環境変数 TNS_ADMIN, 2-7, H-6

監視, 11-1

Application Server Control の使用, 8-5

J2EE アプリケーション, 8-7

アプリケーション・サーバー・コンポーネント, 8-7

管理スキーマ, E-1

管理ツール, 8-1

き

記憶域の種類、サポート対象, 15-2
既存のデータベース、OracleAS Metadata Repository のロード, 16-1
既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール, 4-1
起動、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant, 15-22
基本インストール, 1-4
基本インストールと拡張インストールの比較, 1-4

く

グローバル・データベース名とパスワード, 1-9

け

言語およびロケールの設定, 1-10
Oracle Application Server Standard Edition One のインストール後の追加の言語のインストー, 1-10
Oracle Unicode フォントのインストール要件, 1-11
Portal ユーザー・インタフェース・メッセージのインストール, 1-10
ptlang コマンド, 1-10
追加の言語のインストール, 5-5
「言語の選択」画面, 5-5

こ

構成解除ツール, A-3
Infrastructure インスタンスの構成解除, A-5
コマンド・ライン・パラメータ, A-4
使用可能条件, A-3
中間層インスタンスの構成解除, A-4
無視できるエラー・メッセージ, A-5
ログ・ファイルの場所, A-3
構成解除ツールによる Infrastructure インスタンスの構成解除, A-5
構成解除ツールによる中間層インスタンスの構成解除, A-4
コンポーネント
カスタムのポート番号の割当て方法, 1-14
起動と停止, 9-6
コンポーネントで使用されるポート, 1-11
ステータスの取得, 9-6
中間層コンポーネント, 3-1
デフォルトのポート番号, C-1
無効化, 9-7
有効化, 9-7
コンポーネント・トポロジ, 8-6
コンポーネントの無効化, 9-7
コンポーネントの有効化, 9-7

か

「サービス」ダイアログ・ボックス、表示, 6-1
再インストール、OracleAS Metadata Repository, 16-10
削除, A-1
構成解除ツール, A-3
全 Oracle 製品の削除, A-6
トラブルシューティング, H-8
「サマリー」画面, 5-14

し

システム変数 ORACLE_OEM_CLASSPATH, F-2
システム要件, 2-1
実行、Oracle Managed Files を使用するデータベースを対象, 16-6
失敗した登録、クリーン・アップ, H-15
初期化パラメータ、必須, 15-8
初期構成のコピーの作成, 7-5
初期構成のリストア, 7-5
診断, 11-1
シンボリック・リンク名, 16-3

す

スーパーユーザー cn=orcladmin
ロック解除, H-4
スーパーユーザー cn=orcladmin のロック解除, H-4
スキーマ, 15-16
cleanMR を使用した削除, B-10
OracleAS Metadata Repository, 15-16
スワップ領域の要件、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行, 15-7

せ

静的 IP アドレス
移行, 12-10
ネットワークに接続されていない状態への移行, 12-10
静的ポート, 1-14
製品の選択画面, 5-4
製品メタデータ・スキーマ, E-1
前提条件チェック, 2-22
前提条件チェック・ツール, 15-6

ち

チェック、Oracle Internet Directory への登録, 15-20
致命的エラー, H-12
中間層
拡張, 3-1
コンポーネント, 3-1
中間層インスタンスの起動, 9-8
中間層の拡張, 3-1

つ

追加の言語のインストール, 5-5
追加の言語の選択画面, 5-5

て

ディスク領域の要件, 2-3
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行, 15-3
SYSTEM および UNDO 表領域, 15-7
表領域, 15-7
ディスプレイの要件、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行, 15-3
ディレクトリ、サード・パーティとの統合, 5-8
データベース
Oracle Managed Files, 16-6

RAW デバイス・ベースのデータベースを使用, 16-3
Standard Edition, 15-7
SYS として接続不能, H-15
記憶域の種類、サポート対象, 15-2
既存のデータベースを使用, 15-5
サポートされるバージョン, 15-7
接続不能, H-14
必須のオプション, 15-11
ファイル・システム・ベースのデータベースを使用,
16-1
要件, 15-5
リリース番号のチェック, 15-7
ローカルおよびリモートのサポート, 15-2
「データベース構成オプションの指定」画面, 5-9
「データベース・スキーマのパスワードの指定」画面,
5-11
データベース名、再使用, H-10
データベース名の再使用, H-10
デフォルトの ID 管理レールの場所, 2-7
デフォルトのポート番号, 1-13, C-1

と

登録後の手順, 17-3
ドメイン名
変更, 12-1
中間層, 12-2
トラブルシューティング, H-1
Configuration Assistant, H-11
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant,
H-14
OracleAS Portal, H-13
インストール, H-2
削除, H-8
全般についてのヒント, H-1
バックアップおよびリカバリ, H-11
ロードの失敗, 16-9

な

ナレッジ・ベースの要件, 15-13

ね

ネットワーク関連項目, 2-8
DHCP 接続のコンピュータへのインストール, 2-9
ネットワークに接続されていないコンピュータへのイ
ンストール, 2-11
ハード・ドライブからのインストール, 2-18
複数の IP アドレスを持つコンピュータへのインス
トール, 2-10
複数の別名を持つコンピュータへのインストール,
2-10
リモート・インストール, 2-21
リモート・コンピュータの CD-ROM/DVD ドライブ
からのインストール, 2-20
ネットワーク構成, 12-1
ネットワークに接続されていないコンピュータ
インストール, 2-11
ネットワークに接続されていないコンピュータへのイン
ストール, 2-11
ネットワークに接続されていない状態, 12-9
ネットワークに接続されている状態への移行

DHCP アドレス, 12-10
静的 IP アドレス, 12-10
ネットワークに接続されていない場合の問題, H-4
ネットワークに接続されている状態, 12-9
ネットワークに接続されていない状態への移行
DHCP アドレス, 12-10
IP アドレス, 12-10
ネットワークの構成, 12-1
ネットワークの要件, 2-2

は

ハード・ドライブからのインストール, 2-18
パスワード
Database Control, 8-9
ias_admin パスワードの変更, 7-5
ias_admin ユーザー, 1-8
パスワードの設定、DCM スキーマ, 16-9
パスワード・ファイル認証, 15-14
バックアップおよびリカバリ, 6-2
サービスの比較, 14-1
使用可能なサービス, 14-1
トラブルシューティング, H-11
バックアップとリカバリ
Application Server Control の使用, 14-2
OracleAS Backup and Recovery Tool の使用, 14-4
インスタンスのバックアップの実行, 14-23
環境の記録の作成, 14-22
バックアップ対象ファイルの除外, 14-9
バックアップ対象ファイルの追加, 14-8
ブロック変更トラッキング, 14-20

ひ

表領域, 15-16
AUTOEXTEND, 15-18
cleanMR を使用した削除, B-10
OracleAS Metadata Repository, 15-16
サイズ, 15-18

ふ

ファーム
ホーム・ページ, 8-3
ファイアウォールとポート, D-1
ファイル・システム・タイプの要件, 2-3
ファイルベースのリポジトリ
ドメイン名の変更, 12-3
ホスト名の変更, 12-3
フォントの問題, H-4
複数の IP アドレスを持つコンピュータ
インストール, 2-10
複数の別名を持つコンピュータへのインストール, 2-10
ブラウザの要件, 2-4
プロセッサ速度, 2-2

へ

ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー) の要
件, 2-4

ほ

ポート

- エフェメラル, 1-11
- コンポーネントに割り当てられた, 1-11
- 静的ポート, 1-14
- デフォルトのポート番号の使用, 1-13
- デフォルトのポート番号のリスト, C-1
- ファイアウォールで開放が必要な, D-1
- 変更, 10-1
- ポートが使用中かどうかを確認する方法, 1-13
- ポートの構成方法の選択, 5-6
- ポート番号のリストを取得する方法, 1-13

ポート 1521, 1-16, 1-19

- 使用中の場合, 1-17

「ポート構成オプションの指定」画面, 5-6

ポートの構成画面, 5-6

ポートの変更, 10-1

ホスト名

- 変更, 12-1

Windows 2000 のアップグレード後, 12-8

参照, 12-5

中間層, 12-2

ホスト名の要件, 2-2

む

無視できるエラー・メッセージ

Database Configuration Assistant (DBCA), H-6

OracleAS Metadata Repository の既存のデータベース
へのロード中にログ・ファイルに記録されたエ
ラー, 16-7

構成解除ツールのログ・ファイル, A-5

削除中, H-11

め

メモリーの要件、OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の実行, 15-3

メモリー要件, 2-2

- 削減, 2-4

も

モニターの要件, 2-4

ゆ

ユーザー・インタフェースの問題, H-4

ユーザー (オペレーティング・システム)

「オペレーティング・システム・ユーザー」を参照

よ

要件

DHCP 接続のコンピュータ, 2-9

IP, 2-2

TEMP ディレクトリ内の領域, 2-3

後でネットワークから切断する、静的 IP を持つコン
ピュータ, 2-11

オペレーティング・システムのバージョン, 2-2

環境変数, 2-6

ディスク領域, 2-3

ネットワーク, 2-2

ネットワークに接続されていないコンピュータ, 2-11

ファイル・システム・タイプ, 2-3

複数の IP アドレスを持つコンピュータ, 2-10

複数の別名を持つコンピュータ, 2-10

ブラウザ, 2-4

プロセッサ速度, 2-2

ページング・ファイル・サイズ (仮想メモリー), 2-4

ホスト名, 2-2

メモリー, 2-2

モニター, 2-4

要件 (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant
の実行), 15-3

オペレーティング・システム, 15-3

仮想メモリー, 15-3

ディスク領域, 15-3

ディスプレイ, 15-3

メモリー, 15-3

要件 (データベース), 15-5

DBMS_LDAP パッケージ, 15-12

PL/SQL パッケージ, 15-11

初期化パラメータ, 15-8

スキーマ, 15-16

スワップ領域, 15-7

前提条件チェック・ツールの実行, 15-6

ディスク領域, 15-7

データベース・オプション, 15-11

データベースのバージョン, 15-7

ナレッジ・ベース, 15-13

パスワード・ファイル認証, 15-14

表領域, 15-16

「ようこそ」画面

インストールの「ようこそ」画面, 5-2

「ようこそ」ページ、URL, 6-1

り

リソース使用状況, 8-7

「リポジトリの指定」画面, 5-13

リモート・インストール, 2-20, 2-21

リモート制御ソフトウェア, 2-21

リモート・データベースのサポート, 15-2

る

ループバック・アダプタ, 2-10

インストール, 2-12

削除 (Windows 2000/Windows 2003/Windows
XP), 2-18

ループバック・アダプタのインストール, 2-12

ろ

ローカル・データベースのサポート, 15-2

ロードの失敗, 16-9

ロギング, 11-1

ログ・ファイル, 11-1, H-1

検索, 11-5

場所, H-2

表示, 11-5

リスト, 11-3

ログ・メッセージの形式, 11-1

ログ・リポジトリ, 11-2

ログ・ローダー
 起動と停止, 11-6
 プロパティの設定, 11-6
 有効化, 11-6
論理ドライブ, 16-3

わ

ワンクリック・インストール, 1-4

